

特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 X

第51・52次調査

2010

福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館

口絵1 第51・52次調査遺構(1)



第51・52次調査区全景(北から)



第51次調査 「医師の家」主要部(西から)

口絵2 第51・52次調査遺構(2)



第51次調査 小区画群(東から)



第52次調査 区画52-1(北から)

口絵3 第51次調査出土遺物



区画51-15出土の中国陶磁



第51次調査出土の匙



第51次調査出土の櫛

口絵4 第52次調査出土遺物



区画52-1 出土の柱



柱の墨書



区画52-2 出土の杓子と神像

序

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の調査は、昭和42年(1967)の諏訪館跡庭園の発掘整備以来、43年の長きにわたって実施されてきました。その概要については、各年度の「発掘調査整備事業概報」や「朝倉氏遺跡資料館紀要」で報告してきました。しかし、報告書の刊行については、2年に1冊刊行予定であることや膨大な出土遺物の整理、検出遺構の検討、それに調査担当者の交代等々もあって、誠に遺憾ながら遅れがちであることは否めません。この度『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告X 第51・52次調査』を刊行いたします。

一乗谷川西岸の赤淵、奥間野、吉野本地籍の約2万㎡の発掘調査は、この昭和60年度に実施した第51・52次調査ではほぼ終了しました。高さ約1.5m(9面)に嵩上げされた道路遺構の検出をはじめ、東西道路が105m(約350尺)等間で縄張りされていること、寺院や武家屋敷、町屋などが計画的に配置、建設されていることなど戦国時代城下町の様相が明らかになりました。

さて、今回報告する第51・52次調査の最大の成果は、日本で初めて「医師の屋敷」を明らかにすることができたことです。土塁と溝で区画された中規模屋敷(面積約480㎡)の礎石建物(SB3060)南側に位置する越前焼の甕穴(SX3115)付近で、炭化した医学書(中国金・元代の『湯液本草』)の断簡が出土しました。青磁片口鉢や乳鉢、銅匙、竿秤に使用した銅製の錘なども出土しました。さらに、この屋敷では土塁を背にして幅1.5mの枯山水の平庭が検出され、12~14世紀の口禿の白磁皿や腰折れタイプの皿、青白磁梅瓶、青磁刻花文盤、ひび割れを銚留めで修理した青磁壺などの優品が出土しました。この屋敷の医者は、威信財とも言える高価な骨董品を集め、庭を眺め、茶を嗜む風流人でもあったようです。文献等では、谷野一栢、三崎安指、半井明重、大月景秀、印牧庵、上池庵、融国正孝など医術で朝倉氏に仕えた人物の名前は分っていますが、その日常生活を復元することは難しいといえるでしょう。今後、一乗谷の城下町に暮らした人々の暮らしぶりが発掘調査によって徐々に明らかになることを期待したいものです。

なお、事業の実施にあたりましては、文化庁をはじめ県、市の関係各位、ならびに城戸ノ内をはじめとする地元の皆様のひとかたならぬご指導、ご協力をいただき、感謝にたえないところです。今後ともなお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長 水野和雄

目 次

口 絵	
序	
目 次	7
図版目次	8
I 事業概要	
1. 調査の目的	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の体制	5
4. 本報告書について	7
II 第51次調査	
1. 調査の経過と概要	9
2. 遺 構	12
3. 遺 物	20
III 第52次調査	
1. 調査の経過と概要	33
2. 遺 構	36
3. 遺 物	43
IV 小 結	57

図 版 目 次

口 絵(カラー)

- | | | | |
|------|----------------|------|------------|
| 口絵 1 | 第51・52次調査遺構(1) | 口絵 3 | 第51次調査出土遺物 |
| 口絵 2 | 第51・52次調査遺構(2) | 口絵 4 | 第52次調査出土遺物 |

図 面

第51次調査

- | | | | |
|-------|----------------|------|----------------|
| 第 1 図 | 第51次調査遺構詳細図(1) | 第17図 | 第51次調査出土遺物(11) |
| 第 2 図 | 第51次調査遺構詳細図(2) | 第18図 | 第51次調査出土遺物(12) |
| 第 3 図 | 第51次調査遺構詳細図(3) | 第19図 | 第51次調査出土遺物(13) |
| 第 4 図 | 第51次調査遺構詳細図(4) | 第20図 | 第51次調査出土遺物(14) |
| 第 5 図 | 第51次調査遺構詳細図(5) | 第21図 | 第51次調査出土遺物(15) |
| 第 6 図 | 第51次調査遺構詳細図(6) | 第22図 | 第51次調査出土遺物(16) |
| 第 7 図 | 第51次調査出土遺物(1) | 第23図 | 第51次調査出土遺物(17) |
| 第 8 図 | 第51次調査出土遺物(2) | 第24図 | 第51次調査出土遺物(18) |
| 第 9 図 | 第51次調査出土遺物(3) | 第25図 | 第51次調査出土遺物(19) |
| 第10図 | 第51次調査出土遺物(4) | 第26図 | 第51次調査出土遺物(20) |
| 第11図 | 第51次調査出土遺物(5) | 第27図 | 第51次調査出土遺物(21) |
| 第12図 | 第51次調査出土遺物(6) | 第28図 | 第51次調査出土遺物(22) |
| 第13図 | 第51次調査出土遺物(7) | 第29図 | 第51次調査出土遺物(23) |
| 第14図 | 第51次調査出土遺物(8) | 第30図 | 第51次調査出土遺物(24) |
| 第15図 | 第51次調査出土遺物(9) | 第31図 | 第51次調査出土遺物(25) |
| 第16図 | 第51次調査出土遺物(10) | 第32図 | 第51次調査出土遺物(26) |

第52次調査

- | | | | |
|------|----------------|------|----------------|
| 第33図 | 第52次調査遺構詳細図(1) | 第46図 | 第52次調査出土遺物(8) |
| 第34図 | 第52次調査遺構詳細図(2) | 第47図 | 第52次調査出土遺物(9) |
| 第35図 | 第52次調査遺構詳細図(3) | 第48図 | 第52次調査出土遺物(10) |
| 第36図 | 第52次調査遺構詳細図(4) | 第49図 | 第52次調査出土遺物(11) |
| 第37図 | 第52次調査遺構詳細図(5) | 第50図 | 第52次調査出土遺物(12) |
| 第38図 | 第52次調査遺構詳細図(6) | 第51図 | 第52次調査出土遺物(13) |
| 第39図 | 第52次調査出土遺物(1) | 第52図 | 第52次調査出土遺物(14) |
| 第40図 | 第52次調査出土遺物(2) | 第53図 | 第52次調査出土遺物(15) |
| 第41図 | 第52次調査出土遺物(3) | 第54図 | 第52次調査出土遺物(16) |
| 第42図 | 第52次調査出土遺物(4) | 第55図 | 第52次調査出土遺物(17) |
| 第43図 | 第52次調査出土遺物(5) | 第56図 | 第52次調査出土遺物(18) |
| 第44図 | 第52次調査出土遺物(6) | 第57図 | 第52次調査出土遺物(19) |
| 第45図 | 第52次調査出土遺物(7) | 第58図 | 第52次調査出土遺物(20) |

写真図版

第51次調査

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|----------------|
| PL. 1 | 第51次調査区全景 | PL.21 | 第51次調査出土遺物(7) |
| PL. 2 | 第51次調査 区画51-1 | PL.22 | 第51次調査出土遺物(8) |
| PL. 3 | 第51次調査 区画51-4 | PL.23 | 第51次調査出土遺物(9) |
| PL. 4 | 第51次調査 区画51-4 | PL.24 | 第51次調査出土遺物(10) |
| PL. 5 | 第51次調査 区画51-4 | PL.25 | 第51次調査出土遺物(11) |
| PL. 6 | 第51次調査 区画51-5～14 | PL.26 | 第51次調査出土遺物(12) |
| PL. 7 | 第51次調査 区画51-5、9、11、12 | PL.27 | 第51次調査出土遺物(13) |
| PL. 8 | 第51次調査 区画51-11、14 | PL.28 | 第51次調査出土遺物(14) |
| PL. 9 | 第51次調査 石敷遺構・石積遺構・井戸 | PL.29 | 第51次調査出土遺物(15) |
| PL.10 | 第51次調査 区画51-15 | PL.30 | 第51次調査出土遺物(16) |
| PL.11 | 第51次調査 区画51-15 | PL.31 | 第51次調査出土遺物(17) |
| PL.12 | 第51次調査 区画51-15 | PL.32 | 第51次調査出土遺物(18) |
| PL.13 | 第51次調査 区画51-15 各遺構 | PL.33 | 第51次調査出土遺物(19) |
| PL.14 | 第51次調査 溝 | PL.34 | 第51次調査出土遺物(20) |
| PL.15 | 第51次調査出土遺物(1) | PL.35 | 第51次調査出土遺物(21) |
| PL.16 | 第51次調査出土遺物(2) | PL.36 | 第51次調査出土遺物(22) |
| PL.17 | 第51次調査出土遺物(3) | PL.37 | 第51次調査出土遺物(23) |
| PL.18 | 第51次調査出土遺物(4) | PL.38 | 第51次調査出土遺物(24) |
| PL.19 | 第51次調査出土遺物(5) | PL.39 | 第51次調査出土遺物(25) |
| PL.20 | 第51次調査出土遺物(6) | PL.40 | 第51次調査出土遺物(26) |

第52次調査

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|----------------|
| PL.41 | 第52次調査区全景 | PL.56 | 第52次調査出土遺物(6) |
| PL.42 | 第52次調査 区画52-1～3 | PL.57 | 第52次調査出土遺物(7) |
| PL.43 | 第52次調査 区画52-3、4 | PL.58 | 第52次調査出土遺物(8) |
| PL.44 | 第52次調査 区画52-5、6 | PL.59 | 第52次調査出土遺物(9) |
| PL.45 | 第52次調査 区画52-6 | PL.60 | 第52次調査出土遺物(10) |
| PL.46 | 第52次調査 区画52-7 | PL.61 | 第52次調査出土遺物(11) |
| PL.47 | 第52次調査 区画52-7、8 | PL.62 | 第52次調査出土遺物(12) |
| PL.48 | 第52次調査 区画52-8 | PL.63 | 第52次調査出土遺物(13) |
| PL.49 | 第52次調査 区画52-8、道路・溝 | PL.64 | 第52次調査出土遺物(14) |
| PL.50 | 第52次調査 溝 | PL.65 | 第52次調査出土遺物(15) |
| PL.51 | 第52次調査出土遺物(1) | PL.66 | 第52次調査出土遺物(16) |
| PL.52 | 第52次調査出土遺物(2) | PL.67 | 第52次調査出土遺物(17) |
| PL.53 | 第52次調査出土遺物(3) | PL.68 | 第52次調査出土遺物(18) |
| PL.54 | 第52次調査出土遺物(4) | PL.69 | 第52次調査出土遺物(19) |
| PL.55 | 第52次調査出土遺物(5) | PL.70 | 第52次調査出土遺物(20) |

挿 図

- | | | | |
|------|-------------------|------|------------------|
| 挿図 1 | 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査地略図 | 挿図 8 | 第52次調査区グリッド設定図 |
| 挿図 2 | 第51次調査区周辺地形図 | 挿図 9 | 第52次調査区略図 |
| 挿図 3 | 第51次調査区グリッド設定図 | 挿図10 | 銅銭出土状況 |
| 挿図 4 | 第51次調査区略図 | 挿図11 | 土塀基礎石垣SA3184 |
| 挿図 5 | 第51次調査区略図 | 挿図12 | 土塀基礎石垣SA3184 |
| 挿図 6 | 『湯液本草』断簡 | 挿図13 | 52-1区画出土柱の拓影と実測図 |
| 挿図 7 | 第52次調査区周辺地形図 | 挿図14 | 赤淵・奥間野・吉野本地区概念図 |

表

- | | | | |
|-----|--------------------|-----|-----------------|
| 表 1 | 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査次数一覧 | 表 5 | SX3229出土銭貨構成 |
| 表 2 | 第51次出土遺物一覧表 | 表 6 | SX3229出土銭貨唐銭の構成 |
| 表 3 | 第52次出土遺物一覧表 | 表 7 | SX3229出土銭貨明銭の構成 |
| 表 4 | SX3229出土銭貨一覧表 | | |

附 図

- | | | | |
|------|-----------------|------|----------------|
| 附図 1 | 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡地形図 | 附図 2 | 第51・52次調査遺構全測図 |
|------|-----------------|------|----------------|

I 事業概要

I 事業概要

1. 調査の目的

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は戦国大名越前朝倉氏が領国支配の拠点とした所であり、当主の館を中心として山城、城戸、一族・家臣の屋敷、町屋、寺院等の遺構が一体となって残されている。こうした遺跡を国民の文化遺産として永久に保存するため特別史跡に指定し、公有化を進めている。遺跡保護の目的はたんに遺構を保存するだけにとどまらず、遺跡を調査してその成果を広く公表し、一般の歴史認識に役立てて活用することにある。その方策として遺跡の中に身を置いて「自ら歴史と生きた対話」のできる史跡公園の完成を目指している。こうした理念のもとに一乗谷朝倉氏遺跡の調査と整備が進められているが、発掘調査は当時の一乗谷の規模や構造、人々の暮らしぶりの実態等を直接的に明らかにする最も有力な方法と位置付けられる。計画的にかつ連続的になされた発掘調査の成果に基づいて着実な環境整備が施され、かつ適切な維持管理のもと遺跡を公開する、その前提条件のひとつとしてこれまで調査が続けられてきた。

本報告書は、一乗谷朝倉氏遺跡に対する計画的な発掘調査の結果を報告したものであり、その第10冊に当たる。その他、道路・河川の整備事業や中山間事業などの現状変更に伴う発掘調査の報告は別途なされている。また各年次の発掘調査・整備事業の概要はすべて当該年次の概報として公刊されているが、本書で正式に調査所見を報告し、内容については本報告書が優先する。

2. 調査の経過

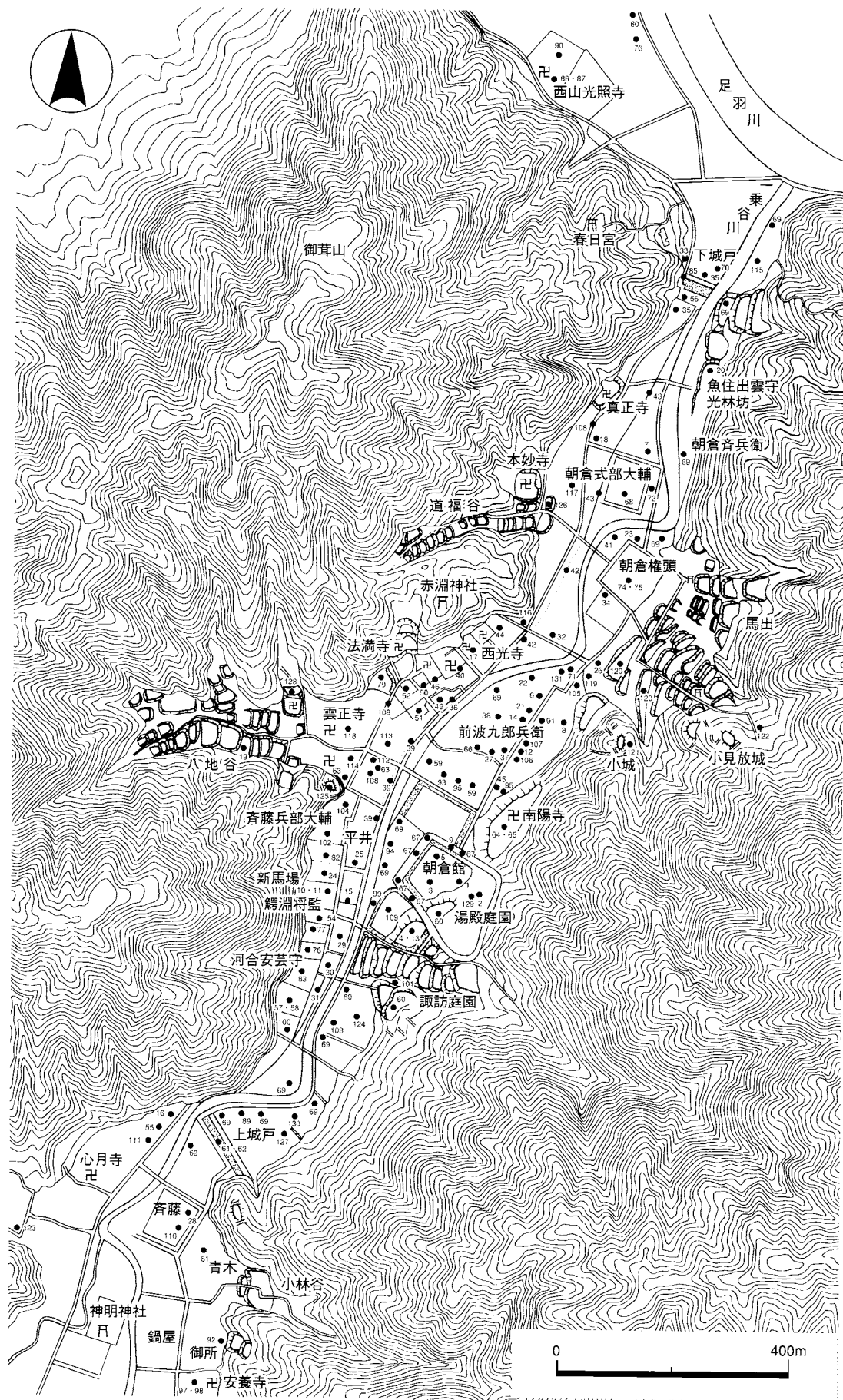
一乗谷朝倉氏遺跡に対する計画的な調査は昭和42年度から足羽町教育委員会を事業主体として始められた。昭和46年度から福井県教育委員会がそれを引き継いで、発掘調査と環境整備事業を実施し、福井市が用地取得と遺跡の管理を担当するという機能分担で事業を進めている。同年7月278haという広大な地域が国の特別史跡に格上げ指定され、福井県は昭和47年3月に策定された「朝倉氏史跡公園基本構想」のもと、同年4月に福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所を設置し、以後5ヵ年計画により継続して発掘調査と環境整備を実施した。これ以前の足羽町と福井県教育委員会による調査を第1次5ヵ年計画とし、以後昭和61年度まで4次にわたって5ヵ年計画が進められた。第1次5ヵ年計画では、朝倉氏の最後の当主である朝倉義景の館跡を中心として調査を行い、第2次5ヵ年計画ではそれに引き続き平井地系の武家屋敷や朝倉義景館跡に隣接する中の御殿跡、赤淵地係に所在するサイゴ寺跡、指定地の北部に位置する瓢町地係や出雲谷地係など、武家屋敷、寺院、町屋などとみられるいくつかの地点を選択して一乗谷の概況を把握する試みがなされた。第3次5ヵ年計画では、一乗谷川の西側に敷設されることになった県道鯖江・美山線の改良工事に関連して、その両側の平地部分を計画的に調査した。引き続き第4次5ヵ年計画ではその最初の4年で指定地の中央に位置する一乗谷川より西側の赤淵・奥間野・吉野本地係を集中的に発掘調査し、この地区の道路、武家屋敷、寺院、町屋等の極めて良好な遺構を検出し、大量の遺物が出土して大きな成果をあげた。本報告書は、この第4次5ヵ年計画の4年目に

年度	西暦	調査計画	主要調査成果	調査回数	調査場所・住所	概報	報告書	面積 (㎡)
昭和42年	1967	第1次5ヵ年	一乗谷の発掘調査が庭園の整備に伴う事前調査から始まる。朝倉義景館での調査は日本中世考古学の確立に貴重な役割を果たす。	庭園	諏訪館跡・湯殿跡・南陽寺跡の庭園	I	I	1,800
昭和43年	1968			朝倉館	城戸ノ内町字新御殿(朝倉義景館東南部)	I	I	2,065
昭和44年	1969			朝倉館	城戸ノ内町字新御殿(朝倉義景館東北部)	I	I	1,953
昭和45年	1970			御所・安養寺	東新町字御所・安如寺	II		769
昭和46年	1971			第1次	城戸ノ内町字新御殿	III	I	676
				第2次	城戸ノ内町字新御殿	III	I	34
				第3次	城戸ノ内町字新御殿	III	I	1,992
昭和47年	1972	第2次5ヵ年	朝倉義景館の調査が終了し、武家屋敷や寺院・町屋の調査を開始する。町屋で職人の工房跡が確認される。	第4次	城戸ノ内町字水谷(中ノ御殿南半分)	IV		1,340
				第5次	城戸ノ内町字新御殿(朝倉義景館西北部)	IV	I	1,305
				第6次	城戸ノ内町字庄角14-7-1	V		172
昭和48年	1973			第7次	城戸ノ内町5-32-1、33、36-1	V		246
				第8次	城戸ノ内町字瓜割流13-25-26	V		50
				第9次	城戸ノ内町字新御殿(朝倉義景館北辺隣)	V	I	170
				第10次	城戸ノ内町字平井	VI	II	2,425
				第11次	城戸ノ内町字平井	VI	II	1,240
昭和49年	1976			第12次	福井市城戸ノ内町字瓜割流	VI		108
				第13次	城戸ノ内町字水谷(中ノ御殿北半分)	VI	III	2,250
				第14次	城戸ノ内町庄角23-1 浄覚寺			42
				第15次	城戸ノ内町字平井・川合・平井・斎藤	VII	IV	2,400
				第16次	西新町1-4(心月寺地係)	VII	一乗小学校	350
				第17次	城戸ノ内町字赤淵	VII	VII	2,050
		第18次	城戸ノ内町字瓢町	VIII		2,500		
昭和51年	1976	第19次	城戸ノ内町字八地谷43-1	VIII		396		
		第20次	城戸ノ内町字出雲谷2~4	VIII	III	2,200		
		第21次	城戸ノ内町字庄角	IX		100		
		第22次	城戸ノ内町字庄角14-8	IX		100		
		第23次	城戸ノ内町字権殿8-8-1	IX		20		
昭和52年	1977	第3次5ヵ年	平井、川合、赤淵、奥間野地係を中心に面的に調査を実施。武家屋敷や町屋の様子が明らかとなってくる。道路の普請状況が明確になり、約30m=100尺を基準とした町割り状況が判明する。	第24次	城戸ノ内町字平井	IX	IV	2,200
				第25次	城戸ノ内町字平井・斎藤	IX	IV	2,400
				第26次	城戸ノ内町字兵庫9-11-1	IX		36
				第27次	城戸ノ内町庄角14-56、59	X		33
				第28次	東新町字斎藤 小学校プール	X		800
				第29次	城戸ノ内町字川合殿・平井	X	V・VI	3,200
				第30次	城戸ノ内町字川合殿	X	VI	1,220
				第31次	城戸ノ内町藤兵川原・川合殿		鯖江・美山線	1,700
				第32次	城戸ノ内町川久保 福井市公園センター			114
				第33次	安波賀町15字宮下9 ほたるの里資料館	X I		30
		第34次	城戸ノ内町8-39	X I		120		
		第35次	城戸ノ内町字下城戸	X I	VII	1,630		
		第36次	城戸ノ内町字赤淵・奥間野		鯖江・美山線	2,800		
		第37次	城戸ノ内町庄角14-57、58	X II		100		
		第38次	城戸ノ内町庄角14-26・1	X II		100		
		第39次	城戸ノ内町字斎藤・木蔵		鯖江・美山線	800		
		第40次	城戸ノ内町字奥間野			3,000		
昭和56年	1981			第41次	城戸ノ内町字 権殿集落センター			18
				第42次	城戸ノ内町字川久保・赤淵	X III		4,800
昭和57年	1982	第4次5ヵ年	赤淵、奥間野、吉野本地係を中心に調査。市中寺院や武家屋敷、町屋群を確認した。炭化した医学書や匙が出土した区画は医師の屋敷と判明。また、下城戸の外に位置する武者野遺跡では火葬場が検出された。	第43次	城戸ノ内町字中惣・瓢町・下城戸		鯖江・美山線	4,750
				第44次	城戸ノ内町字赤淵	X IV	VII	2,600
				第45次	城戸ノ内町瓜割流13-46 消防器具置場	X V		63
昭和58年	1983			第46次	城戸ノ内町字奥間野	X V		3,000
				第47次	安波賀町字上武者野		武者野遺跡	100
				第48次	安波賀町字上武者野		武者野遺跡	270
				第49次	城戸ノ内町奥間野	X VI	IX	1,300
				第50次	城戸ノ内町奥間野	X VI	IX	1,300
				第51次	城戸ノ内町字吉野本	X VII	X(本書)	1,720
昭和60年	1985			第52次	城戸ノ内町字吉野本	X VII	X(本書)	1,930
				第53次	安波賀町字武者野		武者野遺跡	200
				第54次	城戸ノ内町字平井	X VII	II	1,800
昭和61年	1986			第55次	西新町字心月寺		一乗小学校	580
				第56次	城戸ノ内町字下城戸	X VII	VII	1,200
				第57次		X IX		2,560
昭和62年	1987	中期 第1次10ヵ年前半	諏訪館跡、湯殿跡庭園の導水路を調査。4庭園が特別名勝に指定される。川合殿地係では上級武家屋敷、中惣地係では朝倉式部大輔景鏡の館と考えられる館を確認。権殿では武家屋敷と町屋を確認。南陽寺跡を調査し、梵鐘の鋳型出土。	第58次	城戸ノ内町字川合殿	X IX	VI	1,300
				第59次	城戸ノ内町字上川原		連絡道路	1,200
				第60次	諏訪館跡・湯殿跡庭園 導水路確認調査	X IX		70
				第61次	東新町字上城戸・城戸ノ内町字上城戸	X X		
昭和63年	1988			第62次	東新町字上城戸・城戸ノ内町字上城戸	X X	VII	4,000
				第63次	城戸ノ内町字木蔵	X X		200
				第64次	城戸ノ内町21字難陽寺	1989		1,600
		第65次	城戸ノ内町21字難陽寺	1989		1,600		
		第66次	城戸ノ内町14-16			180		
平成元年	1989			第67次	城戸ノ内町22字新御殿	1989		330

年度	西暦	調査計画	主要調査成果	調査回数	調査場所・住所	概帳	報告書	面積(m ²)
平成2年	1990	水辺空間事業では一乗谷川の 流路移動や氾濫範囲を確 認した。		第68次	城戸ノ内町6字中惣	1990		3,800
				第69次	城戸ノ内町・安波賀町・西新町(旧河川敷)		水辺空間	775
				第70次	安波賀町14土居ノ本11-1	1990		100
				第71次	城戸ノ内町14字庄角2-1、2	1990		300
平成3年	1991			第72次	城戸ノ内町6字中惣	1991		210
				第73次	城戸ノ内町9字兵庫	1991		70
				第74次	城戸ノ内町8字権殿	1991		2,600
				第75次	城戸ノ内町8字権殿	1991		
				第76次	安波賀町水窪		篠尾・勝山線	500
				平成4年	1992	中期 第1次10ヵ年 後半	斉藤、川合殿地係の調査で は、武家屋敷や町屋群を確 認。また、上城戸・下城戸 の外にある寺院を中心に調 査。 環境整備事業では町並立体 復原。	第77次
第78次		1992						
第79次	城戸ノ内町字吉野本	1992						120
第80次	安波賀町字水窪	1992	篠尾・勝山線					495
第81次	東新町字小林谷	1992						330
第82次	城戸ノ内町字斉藤	1993						1,920
第83次	城戸ノ内町字川合殿	1993	VI					1,300
第84次	東新町字青木、御所安養寺							500
第85次	城戸ノ内町字下城戸	1994	VII					400
平成6年	1994	第86次						1994
		第87次	安波賀中島町字西山光照寺	1994				
		第88次	東新町	1994		500		
		第89次	城戸ノ内町字上城戸	1994		100		
		第90次	安波賀中島町字西山光照寺	1995		800		
		第91次	城戸ノ内町字瓜割流	1995		100		
		第92次	東新町字安養寺(御所、安如寺地係)	1995		2,600		
		第93次	城戸ノ内町字上川原	1995		200		
		第94次	城戸ノ内町字新御殿	1995		1,400		
		第95次	城戸ノ内町字瓜割流			400		
平成8年	1996	第96次	城戸ノ内町字上川原	1996		630		
		第97次		1996		2,400		
		第98次	東新町字安如寺	1996				
		第99次	城戸ノ内町字新御殿			1,000		
		第100次	城戸ノ内町字川合殿、藤兵衛川原	1997		2,600		
平成9年	1997	中期 第2次10ヵ年 前半	斉藤、川合殿地係を中心に 調査を実施。上級武家屋敷 を多数確認。 中山間事業では城戸ノ内全 域で道路遺構を検出。	第101次	城戸ノ内町字蛇谷			400
平成10年	1998			第102次	城戸ノ内町字斉藤	1998		2,300
平成11年	1999			第103次	城戸ノ内町字米津	1999		100
				第104次	城戸ノ内町字斉藤	1999		2,000
				第105次	城戸ノ内町字兵庫9-18	1999		120
平成12年	2000			第106次	城戸ノ内町字瓜割流	1999		225
				第107次	城戸ノ内町字瓜割流	32		98
				第108次	城戸ノ内町字木蔵、吉野本、瓢町	32	中山間	1,400
				第109次	城戸ノ内町字新御殿	32		2,000
平成13年	2001			第110次	東新町字斉藤			中山間
		第111次	西新町字心月寺			中山間	150	
平成14年	2002	中期 第2次10ヵ年 後半	遊歩道周辺での調査を実施。 雲正寺地係周辺を調査。南 北道路の両側に大型の区画 を検出。 中山間事業では道路遺構を 確認。	第112次	城戸ノ内町字雲正寺	33		2,000
平成15年	2003			第113次	城戸ノ内町字木蔵、雲正寺	34		1,700
				第114次	城戸ノ内町字雲正寺	35		1,700
平成16年	2004			第115次	安波賀町字向山			540
				第116次	城戸ノ内町字久保		中山間	318
		第117次	城戸ノ内町中惣	35		26		
平成17年	2005	第118次	城戸ノ内町字兵庫			114		
		城戸ノ内町字雲正寺	36		3,000			
平成18年	2006	第120次	城戸ノ内町字雲正寺	36			500	
		第121次	城戸ノ内町(大岩谷川)			100		
		第122次	城戸ノ内町(城戸内川)			650		
		第123次	西新町字大門(西新川)			250		
		第124次	城戸ノ内町字米津	38		2,500		
平成19年	2007	第125次	城戸ノ内町字八地谷・雲正寺・斉藤	38		137		
		第126次	城戸ノ内町字中惣	39		44		
平成20年	2008	第127次	城戸ノ内町字門ノ内	39		2,000		
		第128次	城戸ノ内町字八地	39		120		
		第129次	城戸ノ内町朝倉館跡庭園			39		
平成21年	2009	第130次	城戸ノ内町字門ノ内			2,500		
		第131次	城戸ノ内町14字庄角			42		

註 報告書略称 一乗小学校→『一乗谷朝倉氏遺跡 一乗小学校校舎改築に伴う事前調査報告書1986』、鯖江・美山線→『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 県道鯖江・美山線
改良工事に伴う発掘調査報告書1983.3』、武者野遺跡→『武者野遺跡 国道158号線改良工事に伴う事前調査報告1986・3』、連絡道路→『一乗谷朝倉氏遺跡 朝倉館前連
絡道路敷設に伴う発掘調査報告書1987』、水辺空間→『一乗谷朝倉氏遺跡 一乗谷川水辺空間整備計画に伴う事前調査報告1991.3』、篠尾・勝山線→『一乗谷朝倉氏遺跡
県道篠尾・勝山線改良工事に伴う事前調査報告1992』、中山間→『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 中山間地域総合整備事業施設間連絡道路整備事業に伴
う発掘調査～第108次 第110・111次 第116次調査2005』

表1 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査回数一覧



挿図1 特別史跡—乗谷朝倉氏遺跡調査地略図

なされた吉野本地系の調査区の発掘結果を報告したものである。最後の5年目は再び平井地系の武家屋敷を調査し、さらに一乗谷の内外を区切る下城戸本体の調査に入った。

翌昭和62年度から中期第1次10ヵ年計画として巨大な土塁を持つ上城戸や南陽寺・西山光照寺・御所安養寺などの大規模な寺院、そして中惣・権殿・河合殿などの武家屋敷・町屋跡を計画的に調査し、遺跡内の各地に所在する大規模で特徴的な遺構を究明した。

平成9年度から中期第2次10ヵ年計画に入り、町並立体復原地区に隣接する一乗谷川より西側部分の八地谷川兩岸の地が連続的に発掘調査され、この地区の街路や武家屋敷の構造を明らかにした。ところが平成16年7月18日雲正寺地系の発掘中に福井豪雨によって一乗谷川・八地谷川・足羽川が氾濫し、遺跡の各地と資料館も被災した。この年度の発掘調査は中断し、災害復旧に全力を注いだ。翌17年度から改めて中期第3次10ヵ年計画を施行し、中断した調査を再開し、平成19年度から遺跡の南北を縦走する遊歩道際の調査地を連続的に発掘して現在に至っている。

3. 調査の体制

一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査と環境整備は国の補助金を受けて福井県が実施している。昭和47年度から福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所があたり、同56年8月福井県立朝倉氏遺跡資料館が開館して、組織的にもこれに引き継がれた。また当初から「朝倉氏史跡公園基本構想」に基づき朝倉氏遺跡調査研究協議会が設置され、その指導と助言を受けている。本報告書で扱う第51次調査、第52次調査は、ともに昭和60年度に福井県立朝倉氏遺跡資料館によって実施され、朝倉氏遺跡調査研究協議会の指導・助言を得た。また本報告書の作成・刊行は平成21年度に福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が行った。なお発掘調査の予算は25,000(単位千円)である。

以下に本報告書に関する組織体制ならびに従事した職員を記す。

昭和60年度

福井県朝倉氏遺跡調査研究協議会

会長 青園謙三郎(福井テレビ社長・郷土史)

委員 石井進(東京大学教授・歴史学)

委員 岸谷孝一(東京大学教授・建築学)

委員 木原啓吉(千葉大学教授・都市環境学)

委員 近藤公夫(奈良女子大学教授・造園学)

委員 重松明久(福山女子短期大学学長・歴史学)

委員 田畑貞寿(千葉大学教授・造園学)

委員 坪井清足(奈良国立文化財研究所所長・考古学)

委員 戸塚文子(評論家)

委員 水上勉(作家)

委員 木村竹次郎(保存協会会長)

委員 細田堅(城戸ノ内区長)

福井県立朝倉氏遺跡資料館

館長 藤原武二(造園学)

次長 西嶋泰隆

文化財調査員 水野和雄(考古学)

文化財調査員 小野正敏*(考古学)

文化財調査員 清田善樹(歴史学)

文化財調査員 岩田隆(考古学)

文化財調査員 吉岡泰英(建築学)

文化財調査員 南洋一郎(考古学)

文化財調査員 月輪泰*(考古学)

(*小野・月輪調査員はそれぞれ昭和61年2月に転出、採用)

非常勤嘱託 山田武男

非常勤嘱託 久保昭三

(調査補助員 川村俊彦 発掘調査作業員 小林秀男、田中文右衛門、堀田深、吉川京一、吉村正雄、石田はまを、上坂和子、奥田末子、奥田美恵子、岸田あや子、小林ヒサヲ、三崎チエ子、山下喜美子
遺物整理員 朝倉八重子、石田隆代、辻岡幸子、長谷川和子)

平成21年度

福井県朝倉氏遺跡研究協議会

会長 河原純之(元川村学園女子大学教授・考古学)

副会長 池上裕子(成蹊大学教授・歴史学)

委員 高橋康夫(京都大学大学院教授・建築学)

委員 高瀬要一(和歌山県立紀伊風土記の丘館長・造園学)

委員 本田光子(九州国立博物館学芸部博物館科学課長・保存科学)

委員 神吉紀世子(京都大学大学院助教授・建築学)

委員 岸田清(保存協会長)

委員 青山幹男*(公募)

委員 松山直子*(公募)

委員 石川太*(公募)

委員 川口義雄*(公募)

(*青山・松山委員の任期は平成22年1月24日まで、石川・川口委員の任期は同1月25日から)

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長(嘱託) 水野和雄(考古学)

副館長 岩田隆(考古学)

次長 山崎俊枝

総括文化財調査員 佐藤圭(歴史学)

主任	櫛部正典(考古学)
主査	川越光洋(考古学・保存科学)
文化財調査員	千木良礼子(建築学)
文化財調査員	藤田若菜(造園学)
特別顧問(嘱託)	青木豊昭(考古学)
非常勤嘱託	奈良一信
非常勤嘱託	池田千鳥
非常勤嘱託	眞保弘恵

(遺物整理員 朝倉久美子、海道登美江、川野貴子、川畑美佐紀、川村亜悠美、清光昭代、齋藤真裕美、齊藤美保、酒井智恵、辻岡幸子、松村貴子、山岡靖代)

4. 本報告書について

内 容

本報告書は、国庫補助事業として福井県立朝倉氏遺跡資料館が昭和60年度に実施した第51次調査、第52次調査の発掘調査報告書である。

執 筆

本報告書は、昭和60年度の調査記録をもとに、以下の分担により執筆し、全体の編集は佐藤圭が担当した。Ⅰ 佐藤圭 Ⅱ-1・2 岩田隆 Ⅱ-3 櫛部正典・佐藤圭 Ⅲ-1・2 岩田隆 Ⅲ-3 川越光洋・千木良礼子 Ⅳ 岩田隆

図 面

遺構平面図はアジア航測(株)に委託し、空中写真測量により作成したものをを用いた。実測図・遺構図等については当時の職員と各担当者で作成し、遺物整理員がこれを助けた。附図や挿図として使用した地形図は、昭和44年に足羽町がパシフィック航業(株)に委託して作成した基本図(1/1,000)及びこの集成図による。

その他

本報告書の遺構図に用いた座標は、国土座標系「第Ⅵ系」である。また、遺構番号の頭に付した記号は以下の分類による。

SA:土塁・塀・柵、SB:建物、SD:溝・濠、SE:井戸、SF:石積施設、SG:池、SI:門、SK:土壙、SS:道路、SV:石垣、SZ:暗渠、SX:その他の遺構

出土遺物、ならびに図面、写真等は福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館で保管している。

Ⅱ 第 51 次 調 査

Ⅱ 第51次調査

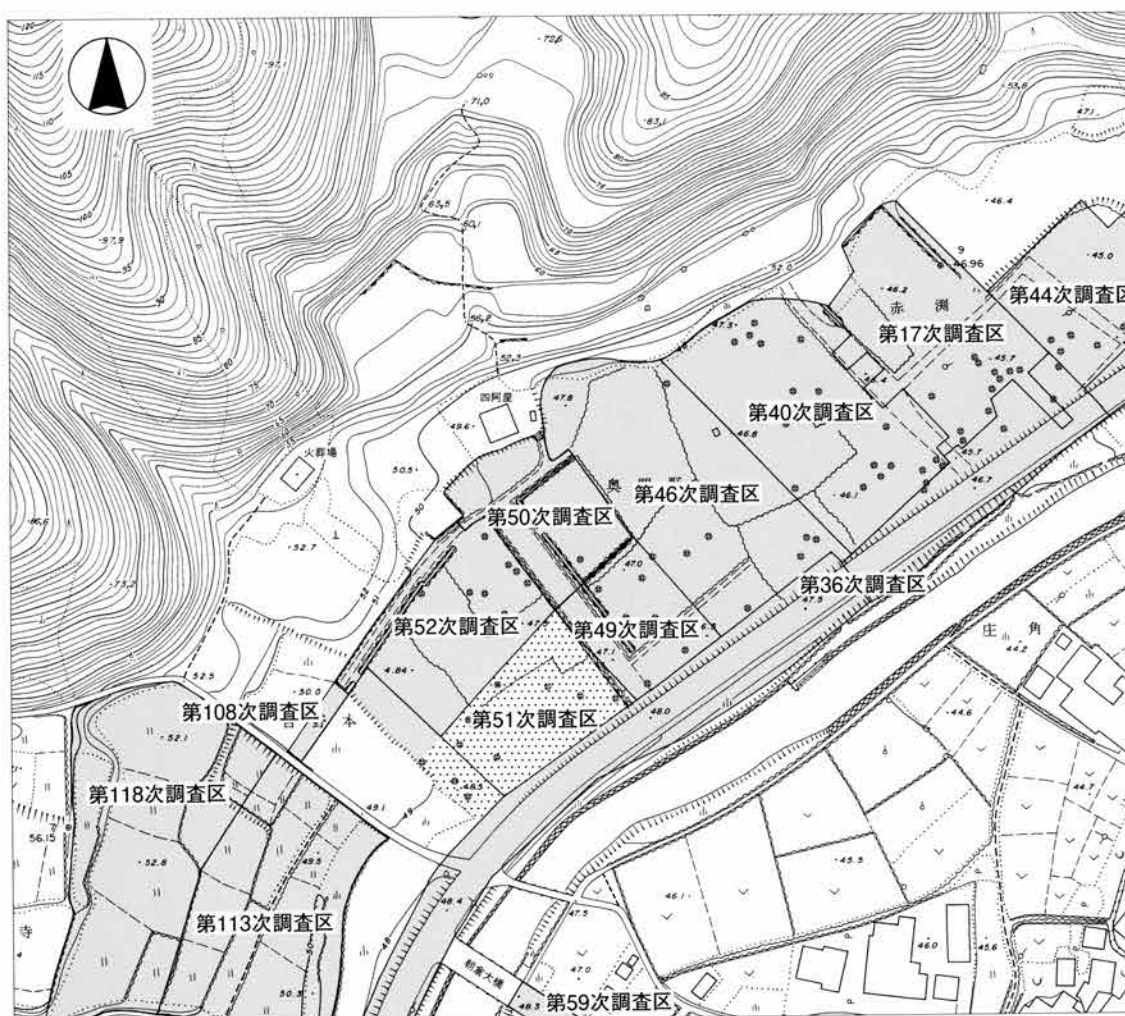
1. 調査の経過と概要

今回報告する第51次調査区は、福井市城戸ノ内町吉野本地係に所在する。城戸ノ内のほぼ中央、一乗谷川の西岸に位置し、この地区の南を流れる八地谷川が形成する小扇状地の北裾にあたる。朝倉館からは一乗谷川を挟んで北へ約500mの位置にある。

第51次調査区のある吉野本地係から奥間野地係・赤淵地係にかけては、第17次調査(サイゴ寺跡)を皮切りに、県道鯖江・美山線改良工事に伴う第36次調査、第40次調査、第42次調査、第44次調査、第46次調査、第49・50次調査と合わせて約6,000m²発掘され、幅8mの南北道路に面した町屋が軒を連ね、山裾には寺院が並び、中間には中級の武家屋敷が存在していたことが判明している。

今回の第51次・52次調査は、この地区の発掘調査面積を面的に拡大することによって、戦国城下町一乗谷の全体像をより明らかにする目的を持って実施した。

第51次調査は、昭和61年4月1日から8月3日まで行い、ひきつづき第52次調査を実施した。11月7

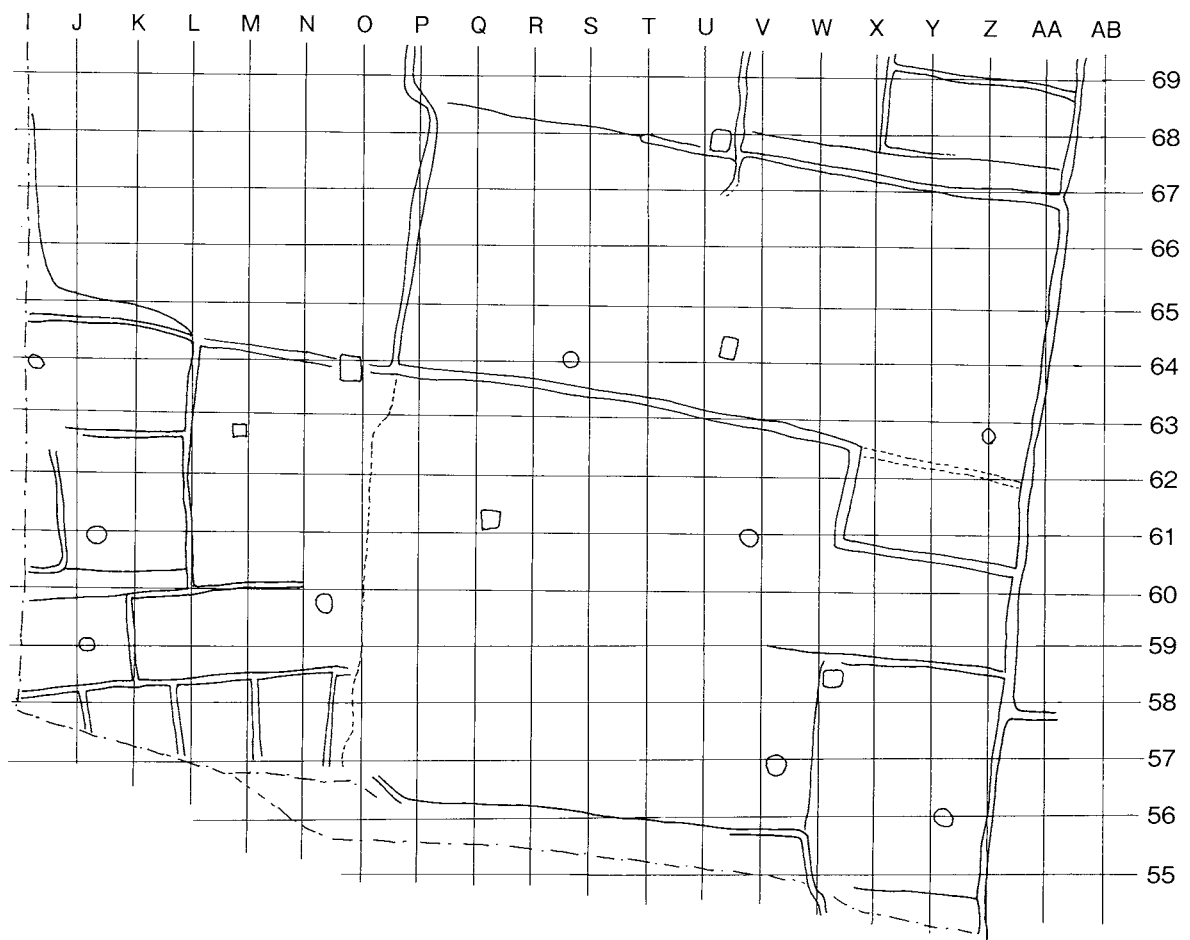


挿図2 第51次調査区周辺地形図(1/2,000)

日には第51次調査区、第52次調査区合わせてヘリコプターによる写真測量を行い、12月6日まで補足調査を実施して終了した。

今回報告する第51次調査区は、実際には、昭和60年度の第49次調査区の一部、昭和61年度の52次調査区の一部を含むが、屋敷割りの関係から挿図4のように医者の家と推定された区画51-15以東の屋敷群について報告する。第51次発掘調査時の面積は、約1,720m²であるが、今回報告する面積は約1,820m²である。

遺物取上げのためのグリッド設定は、第49次・50次調査地区のグリッドをそのまま延長した。そのため、この地区の町割り基準となる東西道路SS2001から10度北に振れている。



挿図3 第51次調査区グリッド設定図

第51次調査日誌抄

昭和60年4月1日～8月1日

4. 1～28 耕土取り
4. 30 地区杭打ち
5. 9 発掘開始。調査地区の北東部から掘り始める。
5. 10 溝SD3041、井戸SE3082、SE3085、溜桝3092などを検出。これらは床土の直下から出土した。
5. 13 調査地区北東部で溝SD3031を検出。床土下の焼土下から礎石がのぞく。
5. 16 調査地区南半分の遺構検出に移る。
5. 22 Nライン以南で東西南北に走る溝を検出。
この地区は溝で区画された小区画の屋敷地区であることを確認。
5. 23 小区画で路地や井戸、建物跡を検出。
5. 27 調査地区北西部の遺構検出にもどる。焼土の下から礎石建物SB3059を検出。この建物は礎石が良く残っており、礎石は整地された青灰色の粘土層に据えられていた。
5. 28 調査地区中央部の遺構検出。
SB3065を検出。この建物の西半分は焼土や炭で蓋われ板材も多く出土した。
5. 29 南西隅の町屋で、礎石建物と井戸、洗い場を検出。
5. 30 これらの板材等の出土状況を実測。SE3083付近を調査。蹲と兼ねていることを確認。
5. 31 区画51-1でトレンチを入れて下層を調査。砂利敷や石列を検出。
6. 4 36次調査地区との境界付近の遺構検出を行う。ガラ石の下から溝を検出。
6. 5 畦畔の段となるOラインを調査。この付近が屋敷境界と考えられるが、畔の石と遺構の石との見分けが困難。
6. 7 調査地区南部の遺構検出をする。
区画51-9町屋で、礎石建物、井戸を検出。
その西にある溝SD3036は新旧2時期あることを確認。
6. 10 62ライン以東でも小区画内で井戸や路地などを検出。下層から越前焼甕の破片を敷きつめた遺構を3ヶ所発見。
6. 13 北東部の下層の調査に入る。東西方向の石列や砂利敷を検出したが、遺構にまとまりがない。
6. 14 南西部の遺構を調査。東西方向の溝SD3035を確認。この溝石は畦畔にも使われていた。
6. 21 後に医師の家とされた南半分で甕ピットと礎石建物を検出。
7. 15 梅雨のためしばらく、発掘調査を中断していたが再開。排水の後、表面を清掃して下層の溝を調査する。
7. 16 医師の家の溜桝SF3093を調査。2段に石が積まれ、いわゆる便所ではなく貯蔵施設的なものと思われる。
7. 22 写真撮影のため遺構清掃
7. 24 遺構の写真撮影
7. 29 補足調査
8. 3 調査終了。

2. 遺構 (第1図～6図、PL1～PL14)

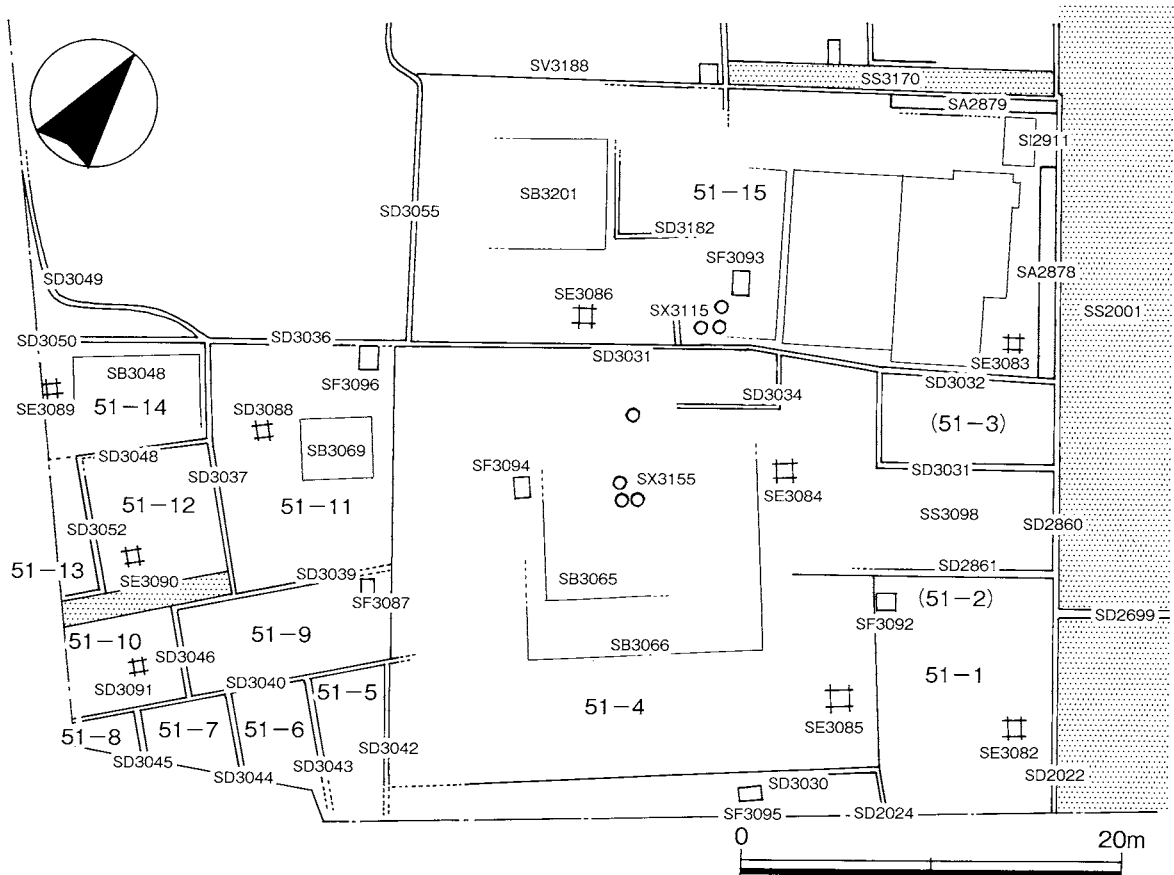
第51次調査区は、屋敷群の性格によって挿図4のように大きく2区画群に分けられる。第1区画群はSS2001に面した区画群で、小区画51-1と武家屋敷51-4、医師の家と想定した区画51-15からなり、第2区画群は51-5～51-14で、約410m²の中に10区画が存在する。こうした区画は溝や段差で区画されているが、時期によって区画が変わっているところがある。たとえば「医師の家」と推定している区画51-15は最終時期に東に5mほど拡幅している。また、第2区画群はもと一つの屋敷だったが、最終時期に分割されて10軒の小区画群になったと推定している。

区画番号については、『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XVII』を踏襲した。しかし、後に述べるように区画51-1と51-2は同じ区画と考えられる。また51-3は下層の段階では区画51-4に含まれ、最終段階では区画51-15に含まれるので欠番とし、挿図4では(51-2)、(51-3)と表示した。

まず区画を分ける溝や道路について述べて、その後区画ごとに主要な遺構を述べていくことにする。なお方位については、磁石の方位とは45度近くずれているが、東西道路SS2001側を北として記述する。

町割りに関する遺構

SS2001 この東西道路は第49・50次調査の際に見つかっており、すでに報告済みである。幅は、51-15付近で8mあり、道路の南に側溝SD2860が、北側に測溝SD2800がつく。道路は叩き締めた小砂利で



挿図4 第51次調査区略図

舗装されており、舗装面は何度も補修され、西寄りのSS2952との交差点近くでは10面近く確認された。

SS3097 この道路は51-9・10と51-13・12の間を通る幅約1.3mの路地で、袋小路となっている。道路面は小砂利で舗装され、道路の南2m分はこぶし大の石が敷かれていた。小区画51-9、51-11、51-12へはこの袋小路がなければ入ることができない。この道路の側溝にあたるSD3046は側石を2石程積み、深さも0.2mと浅い。

SD2860 東西道路SS2001の南側石組溝で、第52次調査地区の南北道路SS2952との交差点から東へ流れる。幅は場所によって異なるが51-15付近では約0.4m、SD2861との交点近くでは約0.5mと広くなる。深さについては、東に流れているため52次調査地区のSS2952付近では深さ0.3m、51-1付近では深さは0.6mとだんだん深くなっている。このSD2860は大きく上層と下層に分かれ、下層では51-2付近で屈折して北に流れ、道路SS2001を横切っていた。したがって下層の時期には、これより東はこの側溝がなかったと推定される。このSD2860にたいして、南からSD2862とSD3031、SD2861が流れ込んでいる。

SD2862 区画51-15の西を限る南北溝で、SD2860に流れ込む。幅は約0.4mで、SD2860から南へ21m続く。その先は溝がなくなり区画51-15と52次調査の区画52-7とは石垣SV3188によって区画されている。この溝と西からの溝SD3176との合流点近くにある石積み遺構SF3196はこのSD2862を壊して作られている。したがって、SF3196が作られた以降はそれより南の溝は埋められていたと考えられる。またこのSD2862は何度か作り変えられており、流路が少しずれてSD2860との交点付近では、下層の溝が区画51-15の土塀基礎SA2879の下にもぐり込んでいる。

SD3031 この溝は区画51-4と51-15を区画する石組溝で、幅は約0.5mある。深さはSD2860との合流点近くで約0.5m、SD3035との合流点付近で0.4mある。52次調査区の溝SD3035やSD3036を合流しているためやや広く、石組はしっかりしている。本来は北にまっすぐ流れてSD2860と繋がっていたが、最終段階で区画51-15が東に拡張されたとき東に大きく屈折させて、さらに北に屈折させてSD2860に合流している。まっすぐ流れていた下層溝はSD3032とした。この屈折させた部分の溝には、古い時期の石より大きい人頭大の石が使われている。この溝はSD3035との合流点から南に1.5mの所で、石積遺構SF3096によって壊されている。このためこれより南側をSD3036としたが、本来この2本の溝は続いていた。

SD3032 この溝はSD3031がまっすぐ北に流れていた時期の古い溝である。しかし、西側の側石が上層まで延びていること、SD2860との合流点でSD3032の出口を石で塞いでいることから、SD3031を東に屈折させたのは、一乗谷が減んだ時期に近い頃であろう。

SD2861 区画51-1と区画51-4の入口を区画する溝である。幅は0.2前後と狭く、長さは12mで、これより南は石列となる。東側の溝石はよく残っているが、西側の溝石はやや小振りで失われている石が多い。

SD3030 区画51-4の東を区画する溝である。深さは0.3m、幅については、SD2024との接合付近では0.3mを測るが、東側の側石がほとんど壊れているので不明である。この溝はSD2024、SD3041と一連の溝であるがSD2024は東に折れ曲がっているために遺構番号を変えた。同じくSD3041も西に振れるため遺構番号を変えた。石列SX3129はこの溝の西側の溝石であろう。

SD3035 この溝は、52次調査区から東に流れて区画51-15の南を限り、SD3031に繋がる。区画51-15付近は後世の水田の用水路と重複しており、現在見える北側の溝石は水田の用水路の石で、SD3035

の溝石を転用したものであろう。溝幅は0.5m、深さは0.7mほどである。この溝は52調査地区のSS2952の側溝から土塀SA3185を暗渠SZ3264をくぐり東に流れる。SV3188に接する所で北に1mほど屈曲する。SD3036 この溝は区画51-11、51-14と52次調査の区画52-8とを区画する石組溝である。この溝は本来SD3031に繋がっていたが、SD3035と合流地点の西側は最終時期には埋められていた可能性がある。というのは、溝の上に石組施設SF3096が存在し、これによって溝が壊されていることによる。

以下区画ごとに記述する。

区画51-1・(51-2)

道路SS2001に面し、南は石列SX3105、西は溝SD2861によって区画され、東は隣り屋敷の建物と考えられるSB3053までの東西12m、南北9mの小区画である。なお、石列SX3105は下層の遺構であるが、溝SD2024と石積遺構SF3092と同じ直線状にあることから、南の境界を石列SX3105とした。「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XⅦ」ではこの区画をSX3054で東西に分けて2区画と報告しているが、ここで2区画に分割するには根拠が弱く、少なくとも最上層の段階では、SB3057の礎石列が下層のSX3054の石列より東に延びていることから、ひとつの区画と判断した。

この区画は大きく3時期からなる。上層の遺構は礎石建物SB3057、石積施設SF3092、井戸SE3082などで遺構面Ⅰとする。これは一乗谷が減んだ時期の遺構群と考える。

SB3057 屋敷地西よりの位置する礎石建物で、東西方向に礎石が1列4石4.5m分並ぶだけで規模等は不明である。

SE3082 区画中央よりやや北東に位置する石組井戸である。直径は0.8m程で、深さは底まで調査していないので不明。やや残存状況が悪く天端石などが壊されていた。

SF3092 屋敷地の南西隅に位置する石積施設で、東西0.7m、南北0.7m、深さ、0.6mである。小児頭大の石を5石～6石積み上げ、屋敷の隅にあることから便所と考えられる。

Ⅰ遺構面から約0.2m下層から検出したのが、石列SX3054、掘立柱建物SB3056、石列SX3101、SX3103、SX3105を中心とするⅡ遺構面である。西側に面をそろえた南北方向の石列SX3054と東西方向の石列SX3103、東隣の屋敷の建物と考えられるSB3053の間に建物があったと想定できるが、礎石が失われているため規模等詳しいことは不明である。また溝SD2861に沿って柱穴と思われる穴が2カ所、SB3053の西にも柱穴らしき穴が2カ所見つけたが、建物としてはまとまらなかった。

さらに下層から石列SX3106や石敷状の遺構SX3104が見つかった。

区画51-4・(51-3)

最終時期には東西道SS2001とは直接面せず通路SS3098を介して繋がる武家屋敷で、西は溝SD3031、東は溝SD3041・SX3129・SD3030、南はSX3135付近で区画される。規模は、通路部分を除いて、北辺の東西方向が21.5m、南辺の東西方向が22m、南北方向は西辺で25m、東辺はやや不明であるが、約25mと見てよいだろう。したがって面積は約550m²と推定される。武家屋敷と推定したが土塀基礎などは存在しなかったところから、武家屋敷ではない可能性も捨てきれない。

この屋敷の上層は礎石建物SB3065を中心に、礎石建物SB3066、礎石建物SB3064があり、井戸SE3085、井戸SE3084、埋甕遺構SX3154、SX3155、石積遺構SF3094などがある。

SB3065 屋敷地のほぼ中央に位置する礎石建物で、規模は東西9.86m(5.25間)、北側の礎石列が不

明確であるが、南北7.51m(4間)と推定される。柱間は6尺2寸(1.8786m)となる。建物内部は石列SX3186で東西に2分でき、東半分は床面が固く締まっていたのに対して、西半分は薄い焼け土の下は黒く炭混じりの土の中に板材が多数埋まっていた。また建物の西側中央部付近に大甕設置遺構SX3155がある。3個体の越前焼大甕を肩近くまで埋設した遺構である。3個体のうち2個体が抜き取られ1個体は底部から腰部が原位置に残っていた。この建物の北西隅付近にも大甕設置遺構SX3154がある。この甕は底部が原位置に残っていた。

SB3066 SB3065の南東に位置する礎石建物で、東西方向に2.3m、南北方向に3.7m分礎石列が残存する。礎石と礎石の間にはやや小振りの石が並び、布基礎のようになっている。SB3655とは南へ1.3m、東へ3.15mずれるが、建物方向が一致するところから、SB3066の部分を増築したと推定される。ただ礎石のレベルはSB3066の方が10cmほど高く、ずれる寸法も尺貫法で割り切れる数値とならない。

SB3064 SB3065の北側に位置する礎石建物で、北辺礎石列が東西方向に9.6m、東辺の礎石列とその並びに石列が5.5m分並ぶが、礎石がとんでいるなど規模は不明であり、はたして1軒の建物かどうかもはっきりしない。

これらの建物群は、方向はそろっているが、礎石列が必ずしも通るわけではない。したがって、増築など建てられた時期が異なっているとも考えられる。建物の向きは道路SS2001とは一致せず、屋敷の東側の石列SX3129と一致する。

SF3094 礎石建物SB3065の南に位置し、東西0.7m×南北1.0m×深さ0.6mを測る。内部は焼土混じりの土で埋められていた。便所と推定される。

SX3154 越前焼大甕埋設遺構でSX3155から5m西に単独で埋設されていたが、調査時には甕は抜き取られていた。

SX3155 礎石建物SB3065内に設置された越前焼大甕埋設遺構で、3個体甕の肩近くまで埋設されていた。周辺は焼け残った板が多数ある炭混じり土が広がっていた。

SE3084 東西道路SD2001からの通路SD3098の西に位置する石組井戸で、天端石までよく残っていた。直径は約1.0mである。

SE3085 屋敷地の北東隅に位置する石組井戸で、天端石までよく残っていた。直径は約1.0mである。なお両井戸とも安全を考慮して底まで調査しなかったため深さは不明である。

SD3034 屋敷地の北西に位置する石組溝である。越前焼埋設遺構SX3154付近から北流し、井戸SE3084付近から西に折れて、この屋敷51-2西側を区画する溝SD3031に注ぐ。幅は0.4m、全長は8.5mある。溝の東に笏谷石製の四角い鉢SX3118と石敷SX3118がある。

下層

下層の時期には、区画51-4の西を限る溝SD3031がまっすぐに流れていた(SD3032)。その時のこの屋敷の地口はSS2001に面して約10mあった。全体に下層遺構の残存状況はあまりよくない。礎石らしき石や砂利敷状の遺構が存在し、下層面の存在は確実であるが、まとまった遺構としては北西隅付近の礎石建物SB3058だけである。

SB3058 区画51-4北西隅近くに位置し、上層遺構から0.3m下に存在する。規模については、現在残っている礎石からは東西2.7m(2間)×南北4.8m(2.5間)である。この礎石建物は東に延びていると考えられたが、溝SD3031を越えて東側では礎石等は確認できなかった。西側の礎石の間にはやや乱れた石列がある。

SX3110 SE3084の北側に位置する石列で、東西方向に5mのびる。南向きの面がそろっている。

SX3122 通路SS3098の南に位置する石列で、3.2m確認できた。西に面をそろえている。

調査地区の南東部に位置する51-5~14までの区画群は、それぞれを区画する溝が浅く、これらの区画全体が一つの屋敷だったが、後に路地=通路SS3097を入れるとともに、溝によって小区画に分割したと推定される。その時期は定かではないが、それぞれの区画に2時期遺構面が認められること、下層遺構面に敷き詰めてあった越前焼甕の口縁が16世紀前葉と推定されるⅢ群bと一乗谷最終時期にあたるⅢ群Cの中間的な形をしていることから、ほぼ16世紀中葉の時期ではないかと推定される。これらの小区画群は、SD3040以東の51-5~8までと、SD3040を挟んで背中合わせになる51-9・51-10の2区画、通路SS3097の奥にある51-11、通路SS3097より西にある51-11・12・13・14に分けられる。

SS3097 南北方向の砂利敷の袋小路で、区画51-11に突当る。幅は1.3m、現存する長さは8.5mである。南よりの2m分は拳大の石を敷き詰め、その北は小砂利敷となっている。

SD3037 溝SD3036から東に流れて区画51-12・51-14と51-11を分ける溝である。東に流れてSD3039、SD3046とつながる。幅は0.3m内外で深さは約0.3mある。溝石は2~3石積んでいる。

SD3040 区画51-5から51-8までの小区画群の背後を南北に流れる石組溝で、調査した長さは約16m、幅は0.25m前後である。深さは0.3m程である。このSD3040に石組溝SD3043、SD3044、SD3045が直角につながり、51-5から51-8までを区画している。

区画51-5~8

これらの小区画群は敷地の幅が5m前後で、奥行きは一乗谷川に挟られて不明であるが、現存する最も深い奥行きを有するのは51-5で、4.8mを測る。51-7には上層に1.2m×1.0mの平らな河原石を敷き詰め、周囲を石で囲った石敷遺構SX3153があり、51-3には縁を石で囲った0.5m×1.1mの炉SX3152がある。51-6の下層には2~3石の礎石が認められるが、建物規模は不明である。これらの4軒の小区画群は東側に入口があったと推定される。

なお、区画の番号は付さなかったが、51-5の北側にもう1区画あった可能性がある。

区画51-9

51-5・6の西に位置する小区画屋敷で、敷地幅は5.0m、奥行きははっきりしないが、12m前後と推定される。上層では礎石など建物跡は失われていたが、石敷SX3075と石積遺構SF3087がある。

石敷SX3156は51-6の石敷3148と同じく平らな河原石を敷いてまわりを厚みのある河原石で囲んである。形は長径1.1m、短径0.9mの楕円形である。石積施設SF3087も長径1.1m、短径0.8mの楕円形で、石を3石ないし4石積み、深さは0.4mを測る。

入口ははっきりしないが路地SS3097から入るとすると石敷遺構SX3156の北側付近と推定される。

上層遺構面から0.15m下に下層の遺構面があり、石列SX3149、SX3150の他、不整形ながら径0.8mほどに越前焼甕の破片と平らな石を敷き詰めた遺構SX3076が3ヵ所ある。何らかの作業用の遺構と考えられるが、具体的な用途は不明。土壇SX3151は長径2m、短径1mあり、内部は焼土で埋まっていた。

明確であるが、南北7.51m(4間)と推定される。柱間は6尺2寸(1.8786m)となる。建物内部は石列SX3186で東西に2分でき、東半分は床面が固く締まっていたのに対して、西半分は薄い焼け土の下は黒く炭混じりの土の中に板材が多数埋まっていた。また建物の西側中央部付近に大甕設置遺構SX3155がある。3個体の越前焼大甕を肩近くまで埋設した遺構である。3個体のうち2個体が抜き取られ1個体は底部から腰部が原位置に残っていた。この建物の北西隅付近にも大甕設置遺構SX3154がある。この甕は底部が原位置に残っていた。

SB3066 SB3065の南東に位置する礎石建物で、東西方向に2.3m、南北方向に3.7m分礎石列が残存する。礎石と礎石の間にはやや小振りの石が並び、布基礎のようにになっている。SB3655とは南へ1.3m、東へ3.15mずれるが、建物方向が一致するところから、SB3066の部分を増築したと推定される。ただ礎石のレベルはSB3066の方が10cmほど高く、ずれる寸法も尺貫法で割り切れる数値とならない。

SB3064 SB3065の北側に位置する礎石建物で、北辺礎石列が東西方向に9.6m、東辺の礎石列とその並びに石列が5.5m分並ぶが、礎石がとんでいるなど規模は不明であり、はたして1軒の建物かどうかもはっきりしない。

これらの建物群は、方向はそろっているが、礎石列が必ずしも通るわけではない。したがって、増築など建てられた時期が異なっているとも考えられる。建物の向きは道路SS2001とは一致せず、屋敷の東側の石列SX3129と一致する。

SF3094 礎石建物SB3065の南に位置し、東西0.7m×南北1.0m×深さ0.6mを測る。内部は焼土混じりの土で埋められていた。便所と推定される。

SX3154 越前焼大甕埋設遺構でSX3155から5m西に単独で埋設されていたが、調査時には甕は抜き取られていた。

SX3155 礎石建物SB3065内に設置された越前焼大甕埋設遺構で、3個体甕の肩近くまで埋設されていた。周辺は焼け残った板が多数ある炭混じり土が広がっていた。

SE3084 東西道路SD2001からの通路SD3098の西に位置する石組井戸で、天端石までよく残っていた。直径は約1.0mである。

SE3085 屋敷地の北東隅に位置する石組井戸で、天端石までよく残っていた。直径は約1.0mである。なお両井戸とも安全を考慮して底まで調査しなかったため深さは不明である。

SD3034 屋敷地の北西に位置する石組溝である。越前焼埋設遺構SX3154付近から北流し、井戸SE3084付近から西に折れて、この屋敷51-2西側を区画する溝SD3031に注ぐ。幅は0.4m、全長は8.5mある。溝の東に笏谷石製の四角い鉢SX3118と石敷SX3118がある。

下層

下層の時期には、区画51-4の西を限る溝SD3031がまっすぐに流れていた(SD3032)。その時のこの屋敷の地口はSS2001に面して約10mあった。全体に下層遺構の残存状況はあまりよくない。礎石らしき石や砂利敷状の遺構が存在し、下層面の存在は確実であるが、まとまった遺構としては北西隅付近の礎石建物SB3058だけである。

SB3058 区画51-4北西隅近くに位置し、上層遺構から0.3m下に存在する。規模については、現在残っている礎石からは東西2.7m(2間)×南北4.8m(2.5間)である。この礎石建物は東に延びていると考えられたが、溝SD3031を越えて東側では礎石等は確認できなかった。西側の礎石の間にはやや乱れた石列がある。

SX3110 SE3084の北側に位置する石列で、東西方向に5mのびる。南向きの面がそろっている。

SX3122 通路SS3098の南に位置する石列で、3.2m確認できた。西に面をそろえている。

調査地区の南東部に位置する51-5～14までの区画群は、それぞれを区画する溝が浅く、これらの区画全体が一つの屋敷だったが、後に路地＝通路SS3097を入れるとともに、溝によって小区画に分割したと推定される。その時期は定かではないが、それぞれの区画に2時期遺構面が認められること、下層遺構面に敷き詰めであった越前焼甕の口縁が16世紀前葉と推定されるⅢ群bと一乗谷最終時期にあたるⅢ群Cの中間的な形をしていることから、ほぼ16世紀中葉の時期ではないかと推定される。これらの小区画群は、SD3040以东の51-5～8までと、SD3040を挟んで背中合わせになる51-9・51-10の2区画、通路SS3097の奥にある51-11、通路SS3097より西にある51-11・12・13・14に分けられる。

SS3097 南北方向の砂利敷の袋小路で、区画51-11に突当る。幅は1.3m、現存する長さは8.5mである。南よりの2m分は拳大の石を敷き詰め、その北は小砂利敷となっている。

SD3037 溝SD3036から東に流れて区画51-12・51-14と51-11を分ける溝である。東に流れてSD3039、SD3046とつながる。幅は0.3m内外で深さは約0.3mある。溝石は2～3石積んでいる。

SD3040 区画51-5から51-8までの小区画群の背後を南北に流れる石組溝で、調査した長さは約16m、幅は0.25m前後である。深さは0.3m程である。このSD3040に石組溝SD3043、SD3044、SD3045が直角につながり、51-5から51-8までを区画している。

区画51-5～8

これらの小区画群は敷地の幅が5m前後で、奥行きは一乗谷川に挟られて不明であるが、現存する最も深い奥行きを有するのは51-5で、4.8mを測る。51-7には上層に1.2m×1.0mの平らな河原石を敷き詰め、周囲を石で囲った石敷遺構SX3153があり、51-3には縁を石で囲った0.5m×1.1mの炉SX3152がある。51-6の下層には2～3石の礎石が認められるが、建物規模は不明である。これらの4軒の小区画群は東側に入口があったと推定される。

なお、区画の番号は付さなかったが、51-5の北側にもう1区画あった可能性がある。

区画51-9

51-5・6の西に位置する小区画屋敷で、敷地幅は5.0m、奥行きははっきりしないが、12m前後と推定される。上層では礎石など建物跡は失われていたが、石敷SX3075と石積遺構SF3087がある。

石敷SX3156は51-6の石敷3148と同じく平らな河原石を敷いてまわりを厚みのある河原石で囲んである。形は長径1.1m、短径0.9mの楕円形である。石積施設SF3087も長径1.1m、短径0.8mの楕円形で、石を3石ないし4石積み、深さは0.4mを測る。

入口ははっきりしないが路地SS3097から入るとすると石敷遺構SX3156の北側付近と推定される。

上層遺構面から0.15m下に下層の遺構面があり、石列SX3149、SX3150の他、不整形ながら径0.8mほどに越前焼甕の破片と平らな石を敷き詰めた遺構SX3076が3ヵ所ある。何らかの作業用の遺構と考えられるが、具体的な用途は不明。土壙SX3151は長径2m、短径1mあり、内部は焼土で埋まっていた。

区画51-10

東は石組溝SD3040、西は路地SS3097、北はSD3046で区画される。敷地幅は5m、奥行きは6m分調査したがまだ南に延びる。上層には直径0.7mの井戸SE3091と石敷遺構SX3148がある。敷地を区画する溝(SX3040、SD3046)のすぐ内側に礎石が3石残っているが、建物の規模は不明である。

石組井戸SE3091は直径0.7m程で天端石が残っていた。石磁敷SX3148は0.3mから0.2m程の石を不整形に敷いてある。

上層の0.15m下に下層の遺構面があり、南北方向の石列SX3147が見つかった。この石列は西に面を持ちその西側は砂利敷となっていた。

区画51-11

51-9の西にある区画で、東はSD3039、西はSD3036、南はSD3037で区画される。なお北側は水田の段となつてため区画は明瞭ではないが、石列SX3160やSX3137が境界と推定される。規模は東西10m、南北12.5mとこの小区画群の中では最も広い。

南側の区画溝SD3037は、溝SD3039と接合し、南に流れ、東に折れ曲がって溝SD3046となり、SD3040につながる。

区画の北西寄りに礎石建物SB3068がある。規模は東西3.2m×南北3.8m(2間)である。建物の規模の割に礎石が大きいことから西に広がっていた可能性がある。西から半間の所の礎石列は2間の間に7石ある。この建物の東には溝SD3038があり、この溝で区画51-11は東西に2分される。南に石組井戸SE3088があり、直径は約1mである。

敷地の北西隅に石積遺構SF3096がある。東西1.4m、南北1.6m、深さ0.8mである。このSF3096は明らかに溝SD3036を壊している。このときSD3036はSD3037との合流点まで埋められていて、南から流れてきた水はSD3037の方へながれていったと推定される。

下層は、0.15m下に遺構面が認められたが、はっきりした遺構はあまり多くない。南東隅付近から東西方向の石列SX3158が見つかったほかには、北東隅付近の石敷き遺構SX3159が見られるだけである。

区画51-12・13

区画51-12は通路SS3097の西に位置する区画で、規模は東西7m、南北7mのほぼ正方形をしている。南、西、北はそれぞれ溝SD3052、SD3048、SD3037で区画される。

建物については、路地SS3097との境界石列と井戸SE3090の北と西の石列に礎石らしき石が並ぶところがあり、これをこの屋敷の礎石建物BS3074とした。規模は3.8m四方である。区画の中央付近に東西方向に石組溝SD3047がある。残存していた長さは2mで、溝SD3048には繋がらない。

51-12の南側にもSD3052を挟んで小区画屋敷があり、これを51-13とする。調査範囲が狭く遺構はない。

区画51-14

51-10の西側の区画で、東西は約5m、南北は調査地区外に広がっているので8m以上ある。礎石建物SB3072が確認でき、南北方向に棟通りの礎石列が7石6.2m並ぶ。建物の幅は、礎石がうまく拾えないうが4m前後と推定される。この礎石建物の南側に接して井戸SE3089がある。この井戸の周辺は石敷

SX3050となっていて洗い場と推定される。この洗い場の北側に溝SD3051があって、井戸周りの排水溝となっている。

区画51-15

51次調査地区の北西に位置する医師の家である。医師の家と推定したのは『湯液本草』という医学書や匙、乳鉢等がこの区画から出土したことによる。

北はSD2860、西はSD2862、SV3188、南はSD3035、東はSD3031によって区画され、規模は東西14.5m×南北33.5mを測る。なお地口は後に4m分東に広がっている。面積は後に広がった分も含めて約522m²である。大通SS2001に面した北側は土塀があり、北西隅に門SI2911が開く。西側は門のところから9m分だけに幅0.7mの土塀基礎がある。

この屋敷地は、石列SX3232と溝SD3182によって3つに分けられる。石列SX3233の北側は礎石建物SB3059を中心とした空間で、この建物と土塀SA2878の間に庭園SG2914がある。このことから表向きの空間であろう。SX3233とSD3182に挟まれた空間は溜桧や井戸、越前焼大甕設置遺構があるところから、日常の生活を支える機能を持った空間であろう。SD3182より南は、礎石建物SB3201を中心とした日常生活を中心とした空間であろう。

SA2878 この屋敷の北を区画する土塀基礎で、西端には門SI2991が建つ。土塀基礎の幅は0.8m、長さは13mを測る。基礎の両側に大きさ40cm×50cmほどの石を外に面を揃えて並べ、内側に小石や砂利を詰めている。残存している土塀基礎の高さは0.5m内外である。土塀基礎の西端には門の石と庭園の石を兼ねた高さ0.7m石が立っている。なお、屋敷の地口は東へ4m拡幅されているが、この拡幅された部分には土塀基礎がない。

SA2879 この屋敷の西側を画する土塀の基礎で、幅0.7m、長さは6.5mである。これより南はもともと土塀が築かれなかったようである。残存している高さは敷地内から測って0.5mほどである。土塀の外側には人頭大の石を用いているが、内側はそれよりやや小さい石を用いている、この土塀の東側には溝SD3183がある。幅0.3m、長さ3.5mある。北端は門SA2878の所まで延びてきていて、ここから暗渠SZ2915をとって溝SD2862に排水される。

SI2911 門は屋敷地の北西隅に位置し、北辺の土塀基礎と西辺の土塀基礎の間にある。両土塀基礎の端には高さ0.7m程の大きさの石が立っている。門の建物は溝SD2860から1.1m入った位置にある。前後2列に並ぶ石列があり、その両端の石が礎石となっている。このことから薬医門と想定される。門柱の間隔は心々で2.27m(7尺5寸)あり、石列の間隔は1.45mある。

SB3059 門SI2911を入ってすぐ左手に位置する礎石建物である。建物の北半分の東西方向が縁も含めて東西9.3m、南半分が東西8.8mを測り、南北方向は10.3mである。縁は北と西に幅4尺の縁が付き、東側にも北半分に3尺の縁が付く。さらに北西隅の西側に幅3尺×1間半の落縁が付く。この縁の先には直径0.8m程の沓脱石据えられている。また北西隅の北側にも半間×1間規模の庭に降りるための縁が付く。この縁の東にも沓脱石が据えられている。南北方向には東西の両端の礎石列だけが一直線に並ぶが、内部の礎石列は、北から2間半のところから半間ずれるところから建物の内部空間は南北に大きくわかれ、柱の方向も微妙にずれることから、南北のいずれかを改築したのではないと推定される。

SG2914 礎石建物SB3059と土塀SA2878の間にある枯れ泉水の平庭である。規模は幅11m×奥行1.7mで、高さ0.7m程の立石の両脇に平らな石と高さ40cm程の石を据えた三尊石風の石組と、自然石で蹲の

ように組まれた内径0.5m×0.9mの井戸がある。井戸の脇にも長さ1.3mの沓脱石が据えられている。庭には白い小砂利が化粧敷され、井戸の西側には拳大の石が庭を2分するように一列に並ぶ。ここに簡易な塀があった可能性がある。

SX3230 土塀基礎SA3183の南端から東方向に延びる石列で、この石列より南が0.1mほど高くなっている。この石列の南に石列SX3231があり、この間には拳2個ほどの石が多く見られた。石列SX3231と直角に、拳大の石を一直線に並べた石列SX3232がある。両端は礎石のような石があり、その間隔は1.8mである。

SX3233 この石列は屋敷地の西を限るSD2682から南を限るSD3031まで屋敷を横切って、長さ12mある。この石列を境にSB3059のある北側の空間が0.2m程低くなっている。石列SX3233から南へ溝SD3182までが、越前焼大甕設置遺構や溜枿、井戸などがある日常雑舎群となっている。

SB3062 敷地の中央に位置し、北側の礎石建物SB3059と接するように建つ礎石建物である。規模は南北方向4.2m、東西方向は5mまで礎石が残っているが、さらに西側の伸びていたと推定される。建物の中には越前焼大甕3個体を設置した土塀SX3115や石積遺構SF3093などがあり、この屋敷の日常雑舎的な建物と考えられる。

SX3115 礎石建物SB3062の南東隅に位置する越前焼大甕設置遺構である。長さ2m、幅1.2mの土塀を掘り、この土構内2個体、土塀の北西隅にはみ出すように1個体、計3個体の越前焼大甕が肩近くまで埋まるように設置されていた跡があった。越前焼大甕は掘り出されていて、底部も残っていなかった。土塀内は他の越前焼大甕設置遺構同様焼け土で埋まっていた。

SF3093 同じく礎石建物SB3062内部にあった石積施設である。内部は3段の階段状に石が積み、それぞれの石段の下には直径10cm程の木材が敷かれていた。SF3093の外側の大きさは1.5m×1.0mあり、深さは0.6mある。底には越前焼播鉢が設置されていた。これまで便所としてきた石積施設とは形状や内部の構造が異なっている。

SX3112 SF3093の北西に接して1.5m×2.5mの範囲にレンズ状に窪んだ炭混じりの層があり、この層を0.1mほど掘り下げると厚さ3cm、幅30cm、長さ1.2m程の板が数枚重なって出土した。

SX3113 SX3112の南に位置する石敷遺構で、1.2m×0.8mの方形に拳大よりやや大きい河原石が敷き詰められている。

SD3178 礎石建物SB3062の西側にある石組溝である。西側はSD2862に繋がるが、東は溝石が失われていて、残存長は1.8mである。東側に溝に半分石が失われているが石囲いの遺構SX3225が付属する。

SB3201 医師の家の屋敷地の南端近くに位置する礎石建物である。南半分は削平されて礎石が失われていて2.8m(1間半)分しか礎石が残っていない。東西方向は6.4m(3間半)である。北側に1.8m(1間)長さ4.4mの庇が付く。

SE3086 直径約1mの石組井戸である。深さは底まで掘っていないので不明。天端石と西側の上から2～3段石が失われていた。この井戸に接するように石敷SX3116がある。なおこの屋敷の井戸は庭園SGにある蹲風の井戸SE3083とこのSE3086の2本のみである。

下層

この医師の屋敷は上層の遺構の残存状況が良かったので、下層はあまり調査していない。SB3201の南側で下層まで掘り下げたが、まとまった遺構はなかった。

3. 遺物(第7~32図、PL15~40、表2、挿図5・6、口絵3)

本報告書で取り扱う遺物は第51次調査出土遺物である。出土遺物の総点数は44,450点を数える。その内容は中国産陶磁器や金属製品、木製品を中心に多彩であるが、なかでも区画51-15の屋敷より出土した焼紙断片は特筆される。その内容から医学書『湯液本草』の写本断簡であると判明し、この屋敷の主が医師で屋敷は「医者の家」が有力になったことである。この資料については本節末尾にて詳述する。

その他遺物の掲載は、各屋敷の区画と区画溝ごとに行うこととする。

遺物の分類については既刊報告書を踏襲した。越前焼甕・播鉢の分類は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983年、土師質土器皿の分類は『朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』1979年による。

器種	点数	%	器種	点数	%	器種	点数	%	器種	点数	%	
越前焼	甕	6,356		青磁	碗	377		金	バンドコ	18		
	壺	2,739			皿	732			風炉	1		
	鉢	659			鉢	50			臼	4		
	播鉢	1,996			盤	124			硯	45		
	火桶	2			壺・瓶	52			盤	148		
	角坏	1			香炉	24			砥石	46		
	卸皿	10			その他	3			火打石	2		
	皿	3			計	1,362	3.06		鉢	8		
	その他	5			白磁	碗	31			玉石	93	
	計	11,771	26.48			皿	2,381			火炉	221	
土師質	皿	22,986		坏		146		その他	85			
	耳皿	4		壺		3		計	671	1.51		
	土釜	104		その他		10		木製品	漆椀	3		
	土鈴	24		計		2,571	5.78		漆皿	10		
	その他	20		磁器		碗	492			漆器	11	
計	23,138	52.05	皿			890			漆蓋	1		
本製陶	碗	381				坏	55			曲物	44	
	皿	23				その他	6			折敷	42	
	茶入	21			計	1,443	3.25		桶	45		
	壺	129			青白磁	183			下駄	10		
	鉢	40			黒釉陶器	15			鞆	1		
	水滴	6			華南彩釉	3			鐙	2		
	香炉	7			その他	26		箸	25			
	德利	2			計	198	0.45	柱	7			
	花生	2		朝鮮製陶磁器	272	0.61	杭	16				
	計	611	1.37	小計	5,846	13.15	角材	13				
灰釉	碗	95		金属	銅銭	386		丸太材	10			
	皿	348			釘	505		建築材	1			
	壺	19			扇止	8		加工木	15			
	鉢	8			錘	1		篋	2			
	卸皿	6			火箸	13		櫛	6			
	水滴	3			鍋	8		櫛	6			
	坏	5			鉄	2		糸巻棒	3			
	蓋	1			鍔	7		杓子	2			
	計	485	1.09		キセル	9		陽物	1			
	瓦質	火鉢	11			その他	59		その他	249		
風炉		7		計	1,151	2.59	計	519	1.17			
香炉		21		その他	兜鍬形台	1		駒石	2			
不明		11			環付金具	1		鹿角製品	7			
計		50	0.11		貴金具	4		ガラス玉	2			
その他	46		責鞆		2		壁土	15				
近世	92		鍔		4		種子	26				
計	138	0.31	鎌		7		骨	29				
小計	36,193	81.42	その他		9		麻布	2				
							紙	1				
							計	70	0.16			
							陶器他小計	2,411	5.42			
						合計	44,450	100.00				

表2 第51次調査出土遺物一覧表

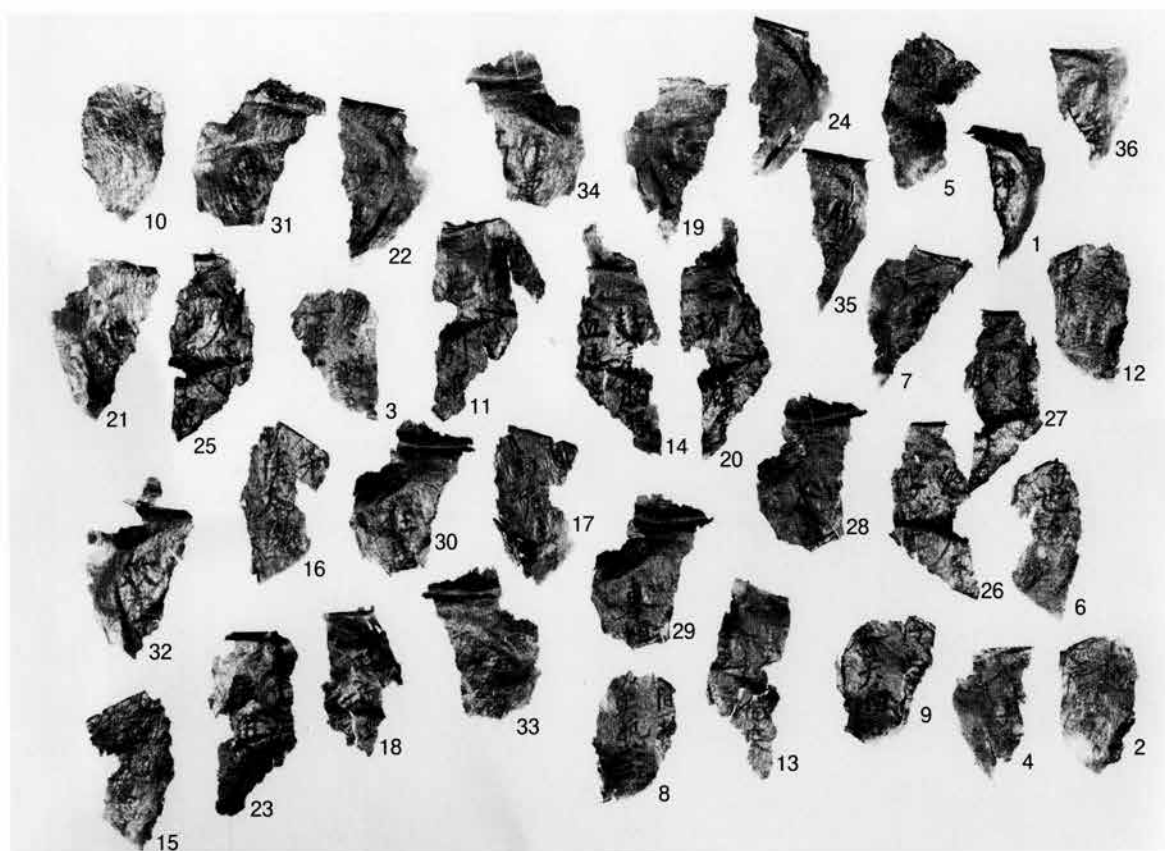
ま報告する。墨書の漢字は次のとおりである（漢字の字体は現代通用のものに統一した。字画が部分的で全体が読めない字は□で示した。一行の頭の部分にあったとみられる漢字には（行頭）と注記し、行が変わる部分は」で示した。番号は概報XⅦに載せられているものはそれに従った）。

1（行頭）神□ 2□□□不止有 3陽々明□□ 4（行頭）其□ 5散」□胸中鬱 6□也於 7（行頭）液□ 8間□□□実熱 9□心□□□矣而□ 10]足「□□□」□「 11（行頭）傷食□」（行頭）芫□別有 12大陽経」陽明□ 13本草」微寒 14（行頭）鼓□胸脇」（行頭）血脈□ 15□□□□□益気療 16□□□陰太□ 17眠」□為君王 18（行頭）吐血□」（行頭）□□□ 19（行頭）余 20（行頭）補不□」（行頭）珍□補胃 21（行頭）泄辟 22（行頭）黄□ 23（行頭）□□□」（行頭）不用酒 24（行頭）象 25（行頭）病下」之」（行頭）□□□胎 26（行頭）液□入手」（行頭）渴心□ 27（行頭）本草」（行頭）腹痛下痢 28□「」（行頭）本草 29（行頭）□」東垣 30（行頭）□」（行頭）狂惑 31（行頭）湯「 32（行頭）効者因 33（行頭）療傷 34（行頭）汗骨 35（行頭）腸益 36（行頭）□□ 37□血□ 38気 39（行頭）□□ 40□足□ 41（行頭）褐酒

これらの断簡の内容は、中国元代の王好古が著した医薬書『湯液本草』の一部であることが知られており、また文字配列の比較から明の正徳戊辰年（1508）に刊行された熊氏梅隠堂本『湯液本草』巻下第36丁裏から第53丁表の部分から写されたものである可能性が高いことが指摘されている⁽¹⁾。

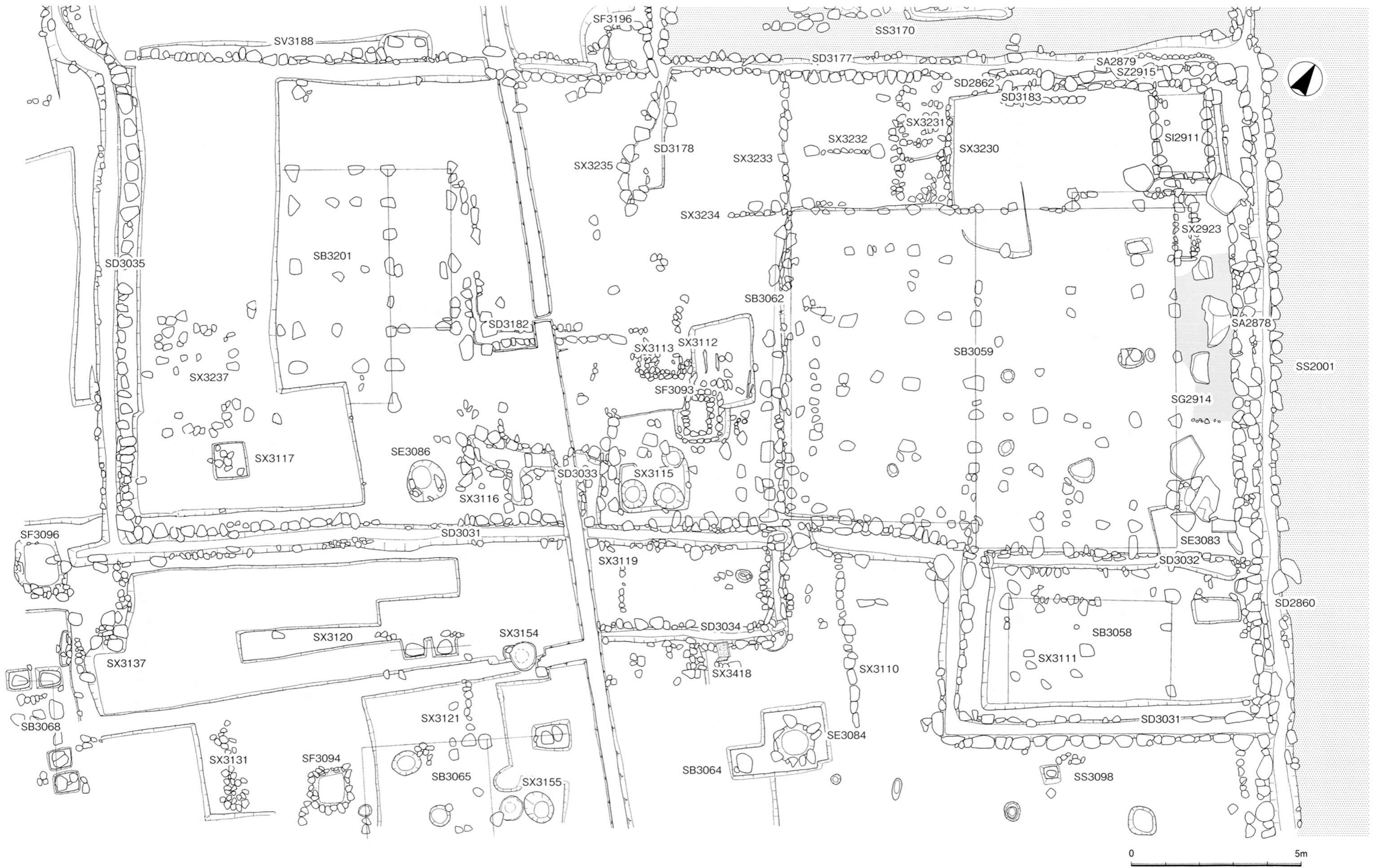
註

- (1) 清田善樹「朝倉氏遺跡出土の『湯液本草』断簡」『朝倉氏遺跡資料館紀要1987』1988年3月発行
真柳誠「朝倉氏遺跡出土の『湯液本草』」『日本医史学雑誌』第39巻第4号1993年12月発行

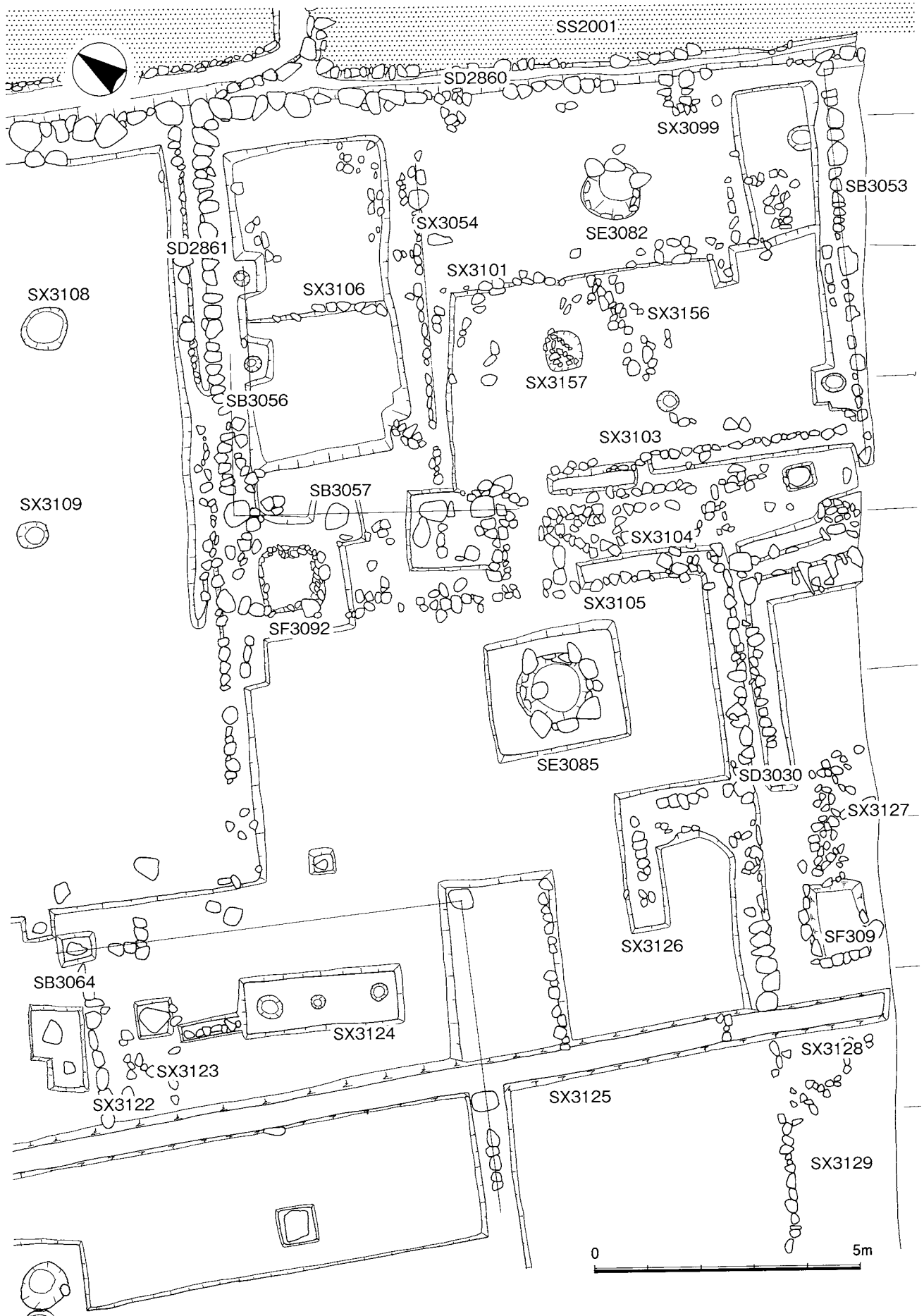


挿図6 『湯液本草』断簡

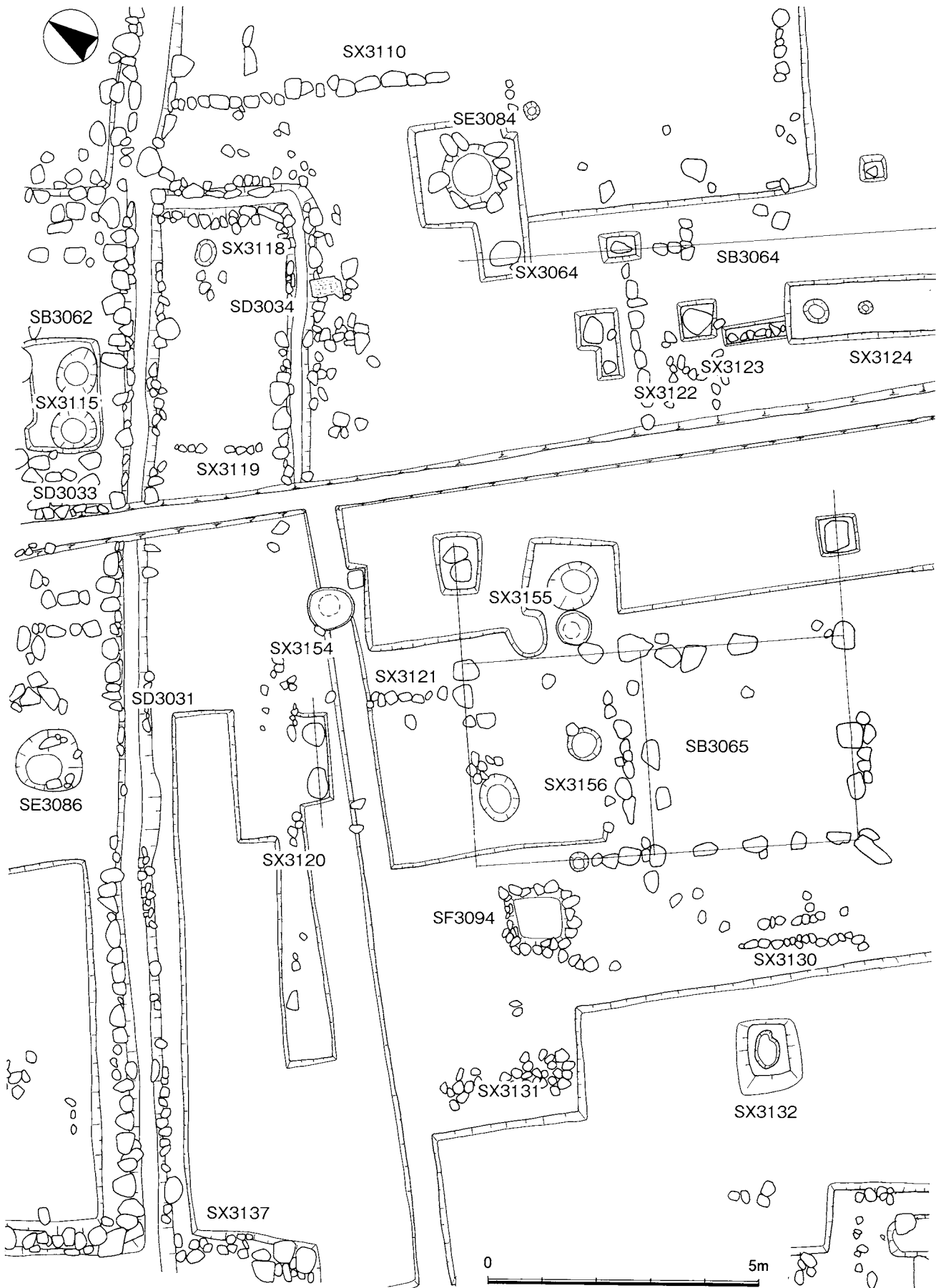
第1図 第51次調査遺構詳細図(1)



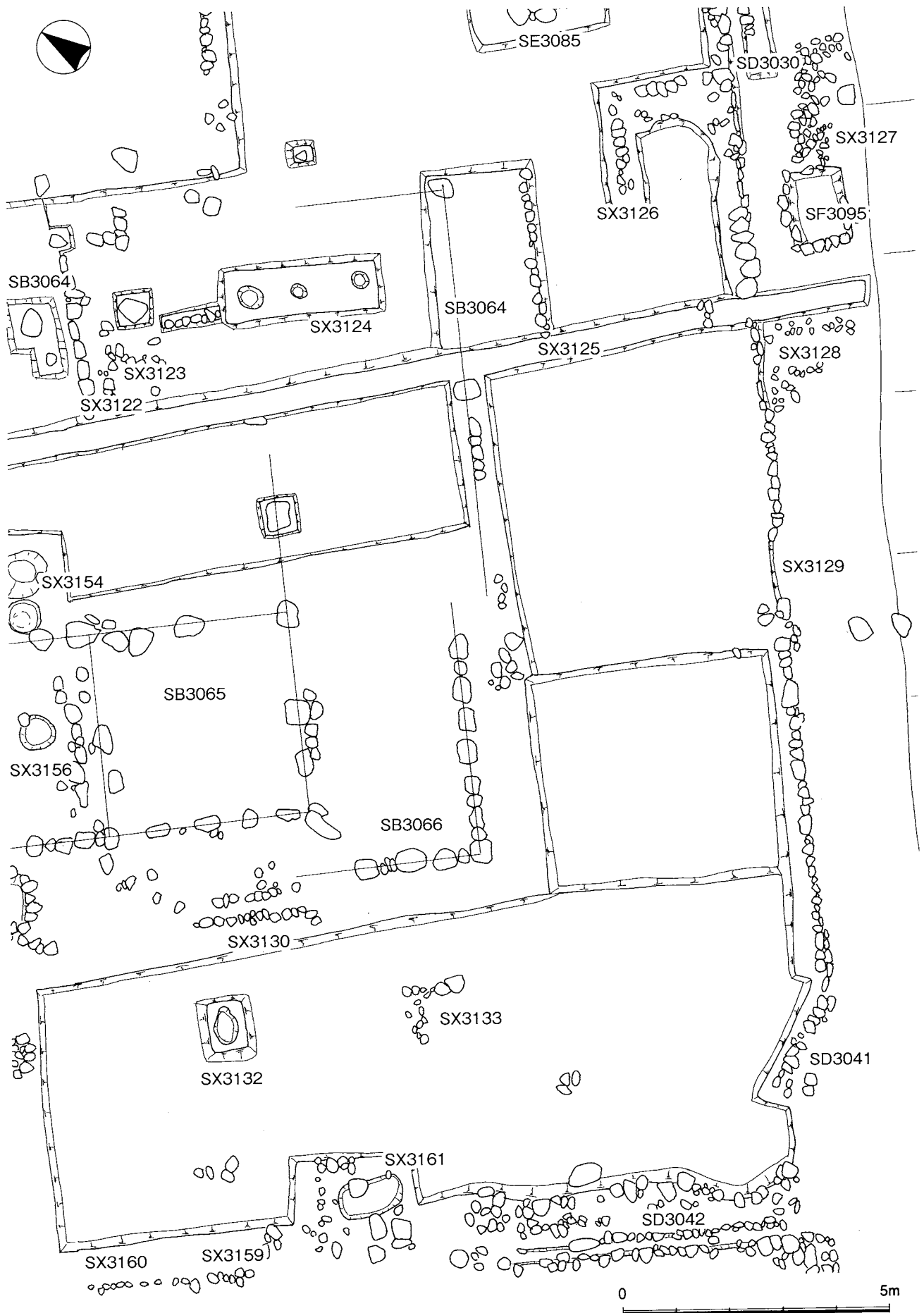
第2図 第51次調査遺構詳細図(2)



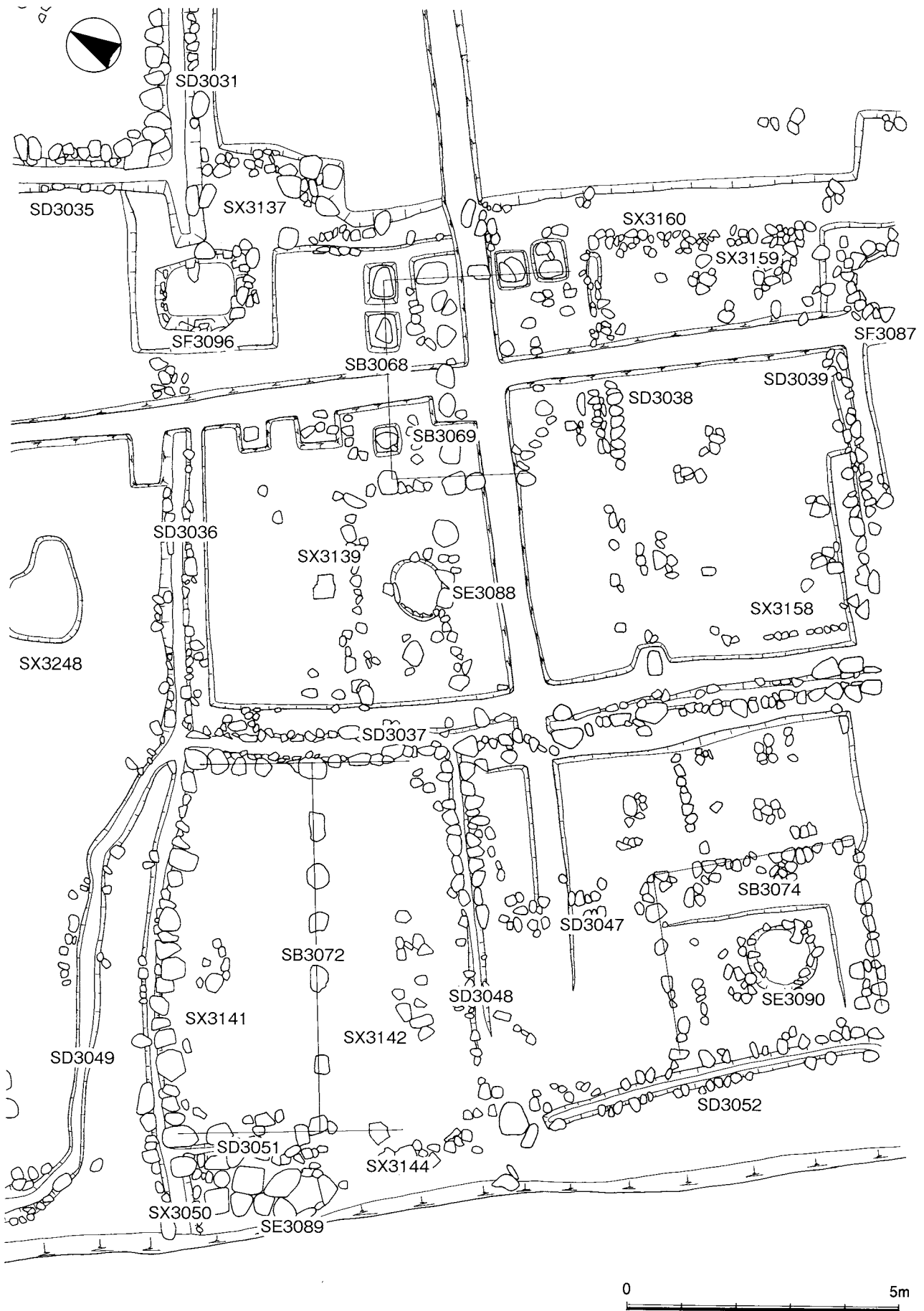
第3図 第51次調査遺構詳細図(3)



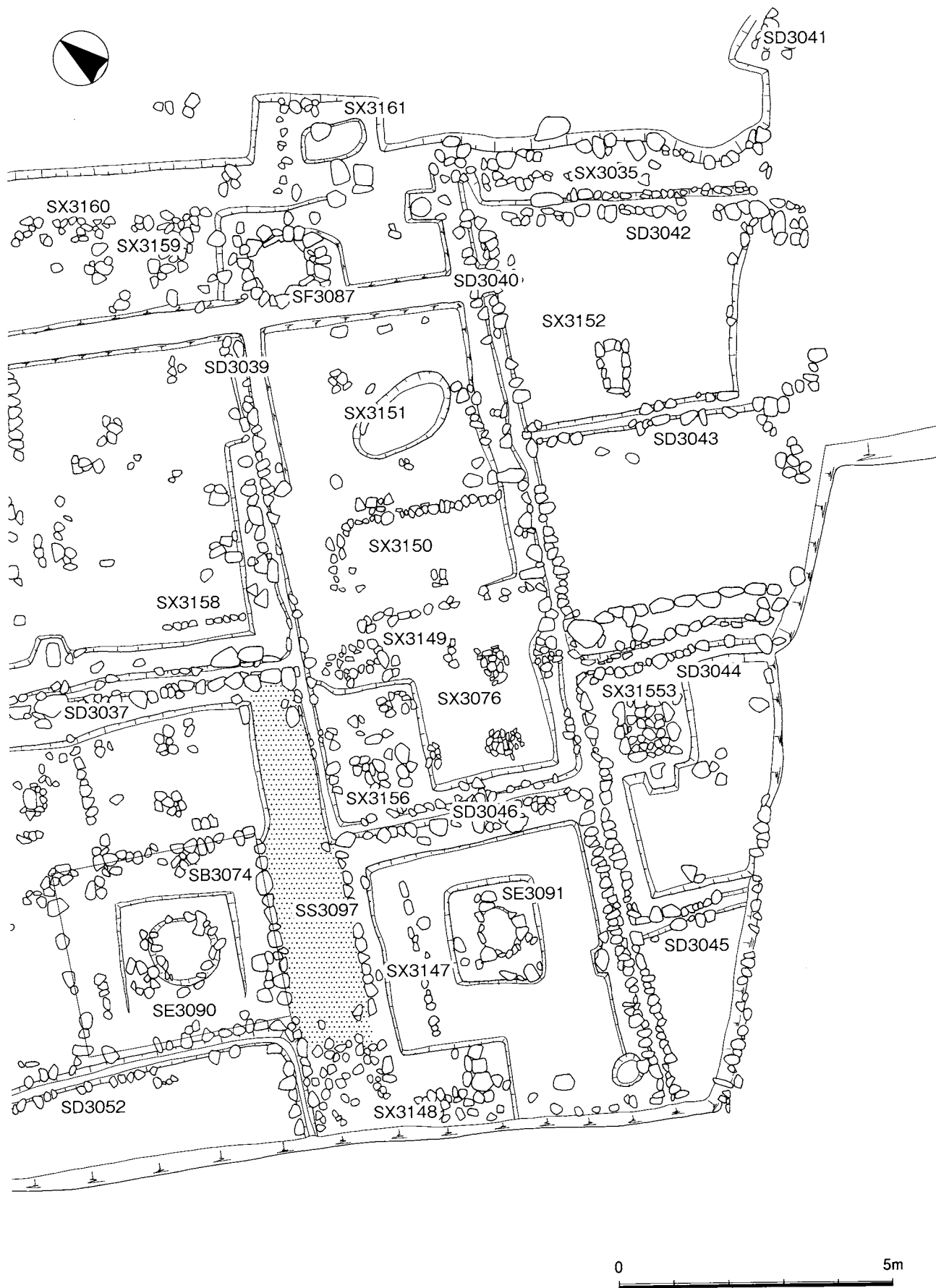
第4図 第51次調査遺構詳細図(4)



第5図 第51次調査遺構詳細図(5)

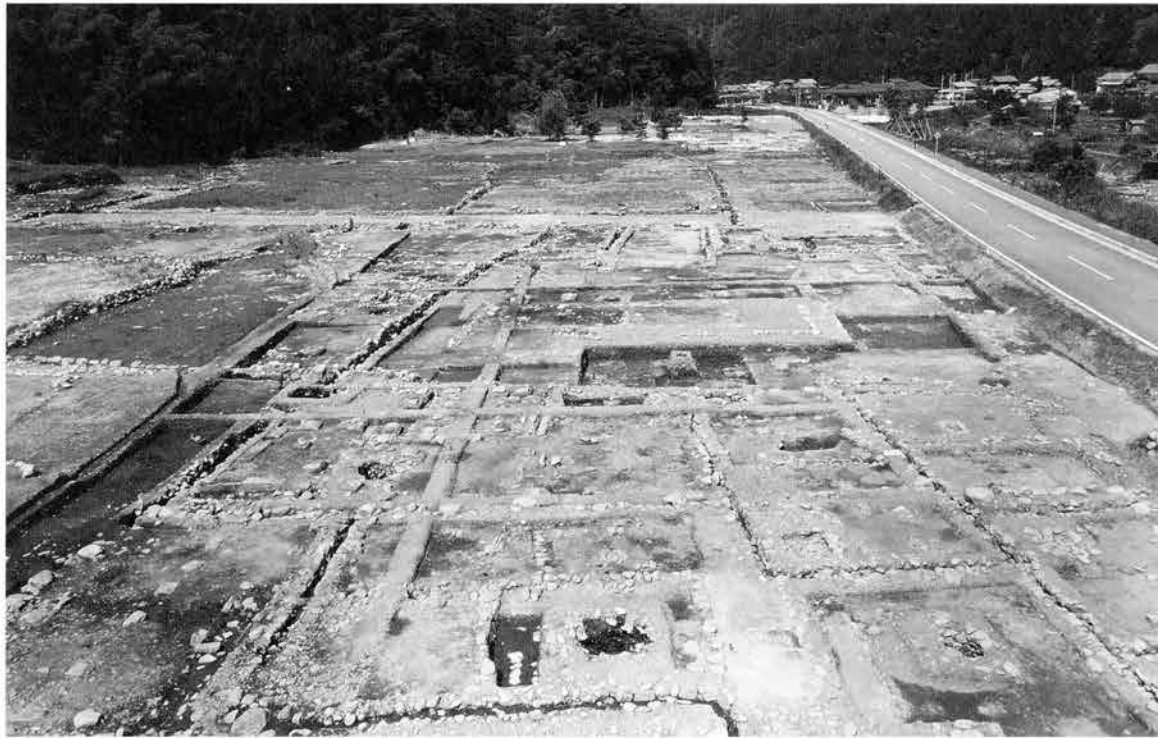


第6図 第51次調査遺構詳細図(6)

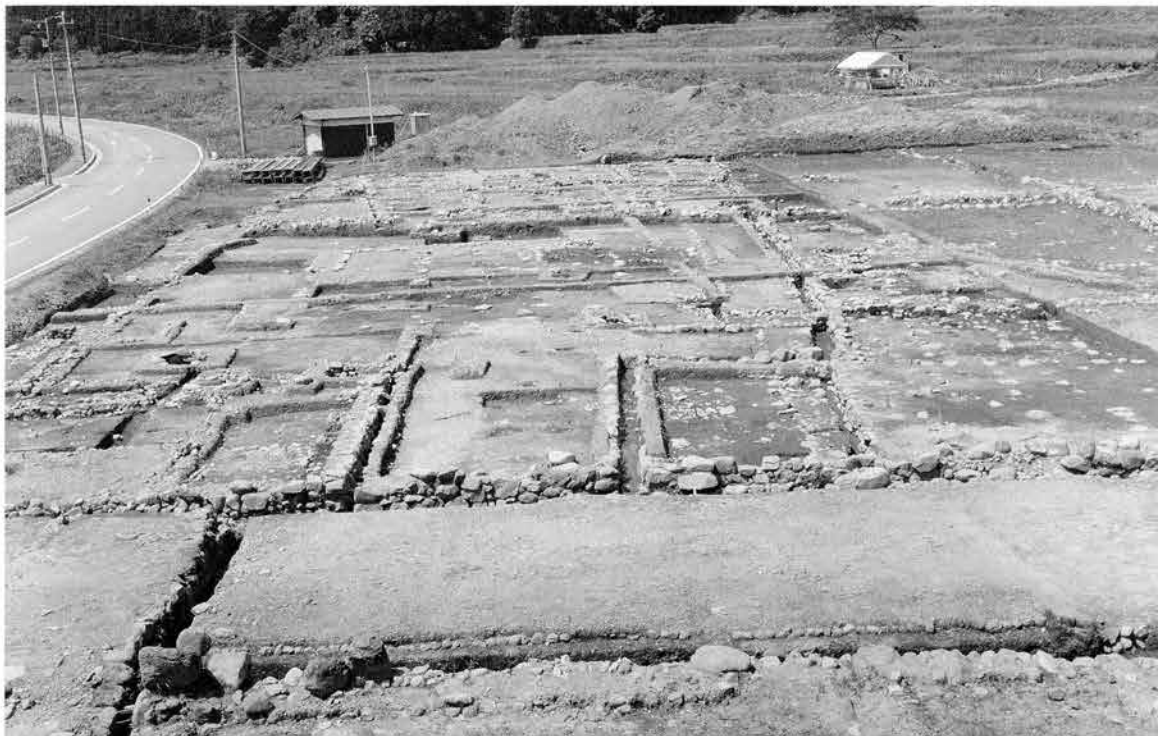




全景
(北東から)



全景
(南から)



全景
(北から)



区画51-1
(北から)

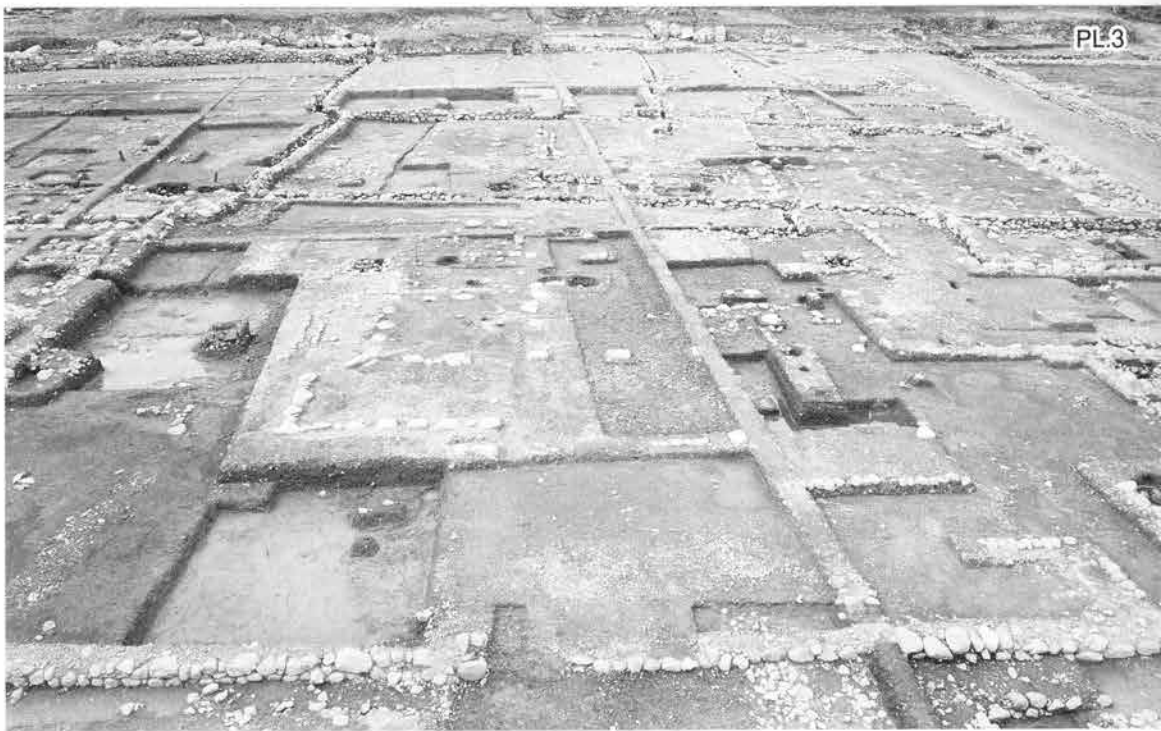


区画51-1
(東から)



区画51-1
石積施設SF3092
井戸SE3082

第51次調査



区画51-4
主要部(東から)



区画51-4
礎石建物SB3065
SB3066
(東から)



区画51-4
礎石建物SB3065
SB3066
(西から)



区画51-4
通路SS3098
(北から)



区画51-4
礎石建物SB3065
板材出土状況
(東から)



区画51-4
越前焼大甕設置遺構
SX3155
越前焼大甕設置遺構
SX3154

第51次調査

区画51-4
SX3142
板材出土状況
(東から)



区画51-4
溝SX3034
(東から)



区画51-4 井戸SE3084・井戸SE3085

石積施設SF3094





区画51-5~14
(南東から)



区画51-5~14
(東から)



区画51-5・6・9・11
(東から)

区画51-5
(東から)



区画51-9
(南から)



区画51-11・12
(南から)





第51次調査

区画51-14
(西から)



区画51-11
(西から)



通路SS3097
(南から)

第51次調査



区画51-9
石敷遺構SX3156・SX3076
(北から)



区画51-7
石敷遺構SX3153
区画51-5
炉SX3152



区画51-9
石積遺構SF3087
区画51-11
石積遺構SF3096



区画51-10
井戸SE3091
区画51-12
井戸SE3090



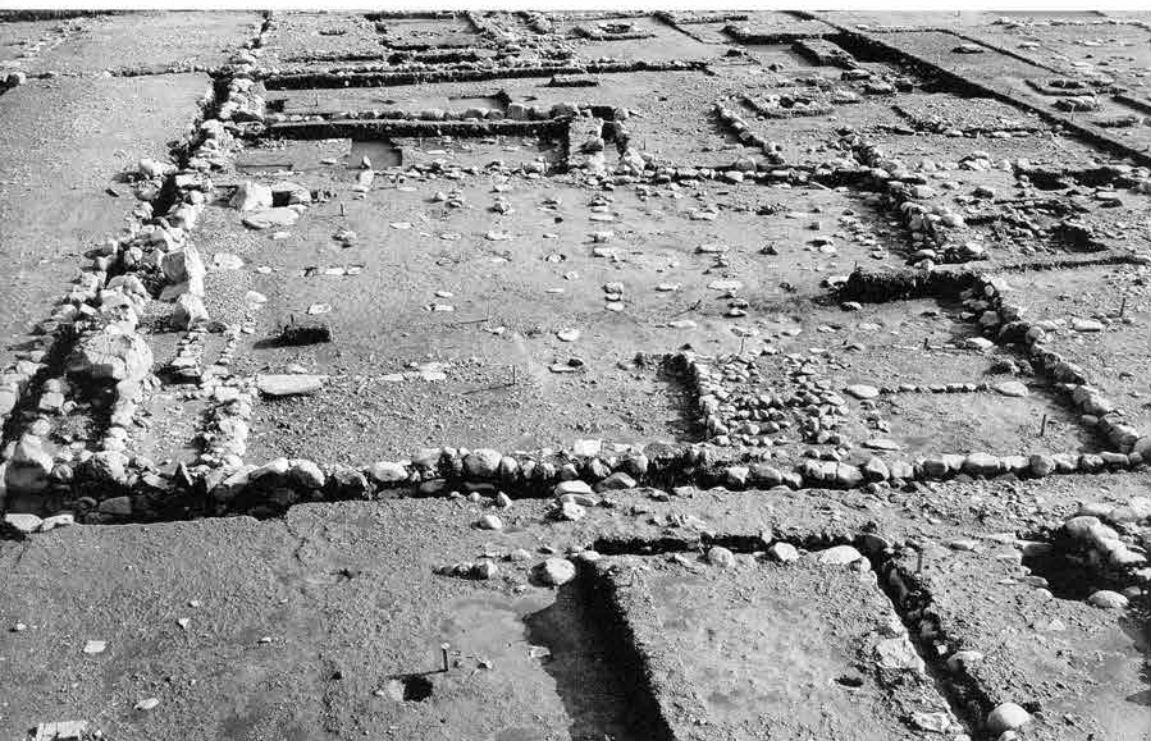
区画51-14
井戸SE3089
区画51-11
井戸SE3088





第51次調査

区画51-15
(北から)



区画51-15北半
(西から)



区画51-15
門S12911
(東から)

第51次調査



区画51-15
庭園SG2914
(南から)



区画51-15北西部
SX3232
SX3233
(東から)



区画51-15北西部
SX3231
SX3232
(南から)



第51次調査

区画51-15
中央部(西から)



区画51-15
中央部東半分(北から)



区画51-15
SX3112-SF3093
(西から)

区画51-15
越前焼大甕設置遺構
SX3115
(東から)



区画51-15
井戸SE3083
井戸SE3086



区画51-15
礎石建物SB3201
(東から)





溝SD2861 (北から)



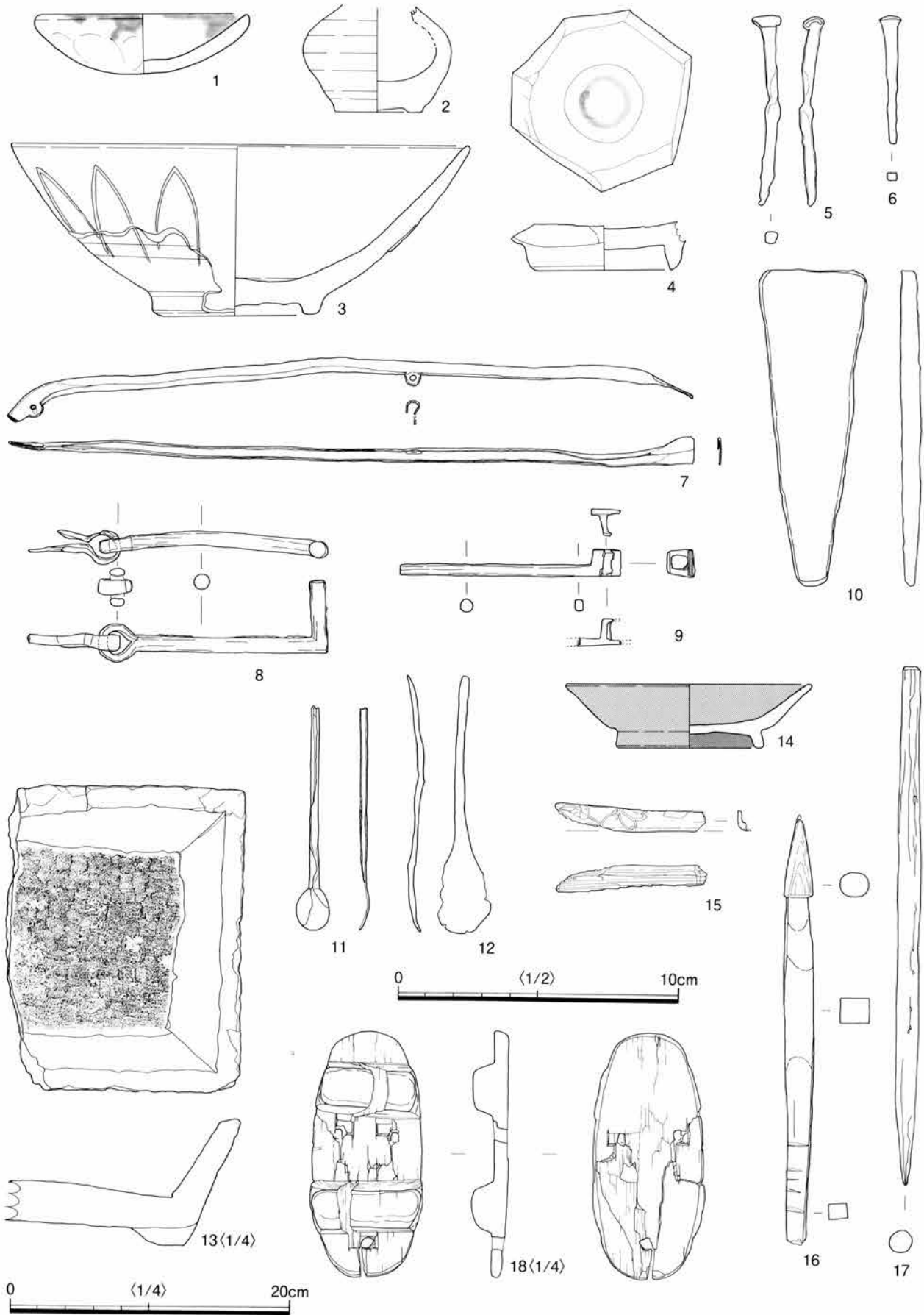
溝SD3031 (北から)
溝SD3037 (西から)



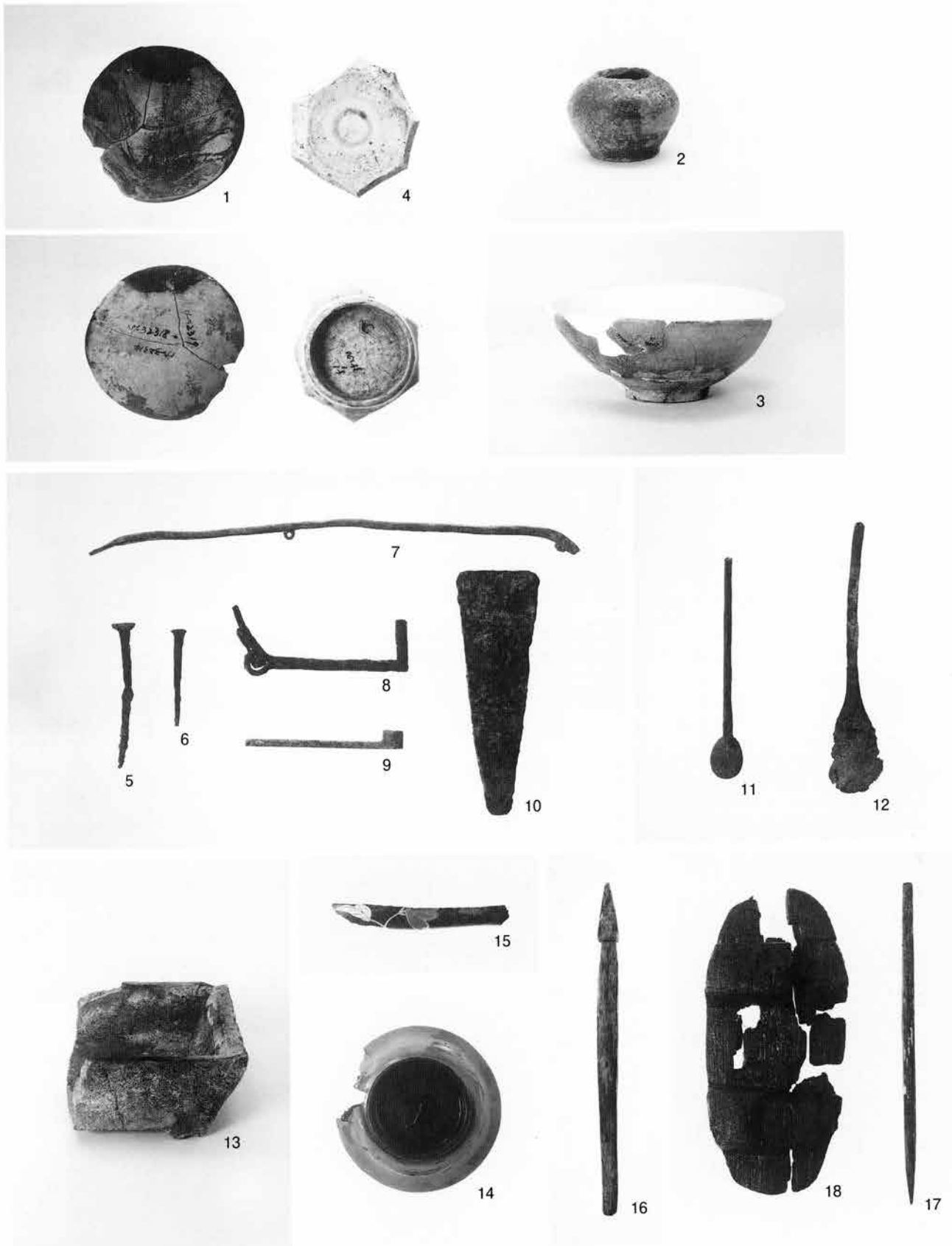
溝SD3032 (西から)

第7図 第51次調査出土遺物(1)

区画1



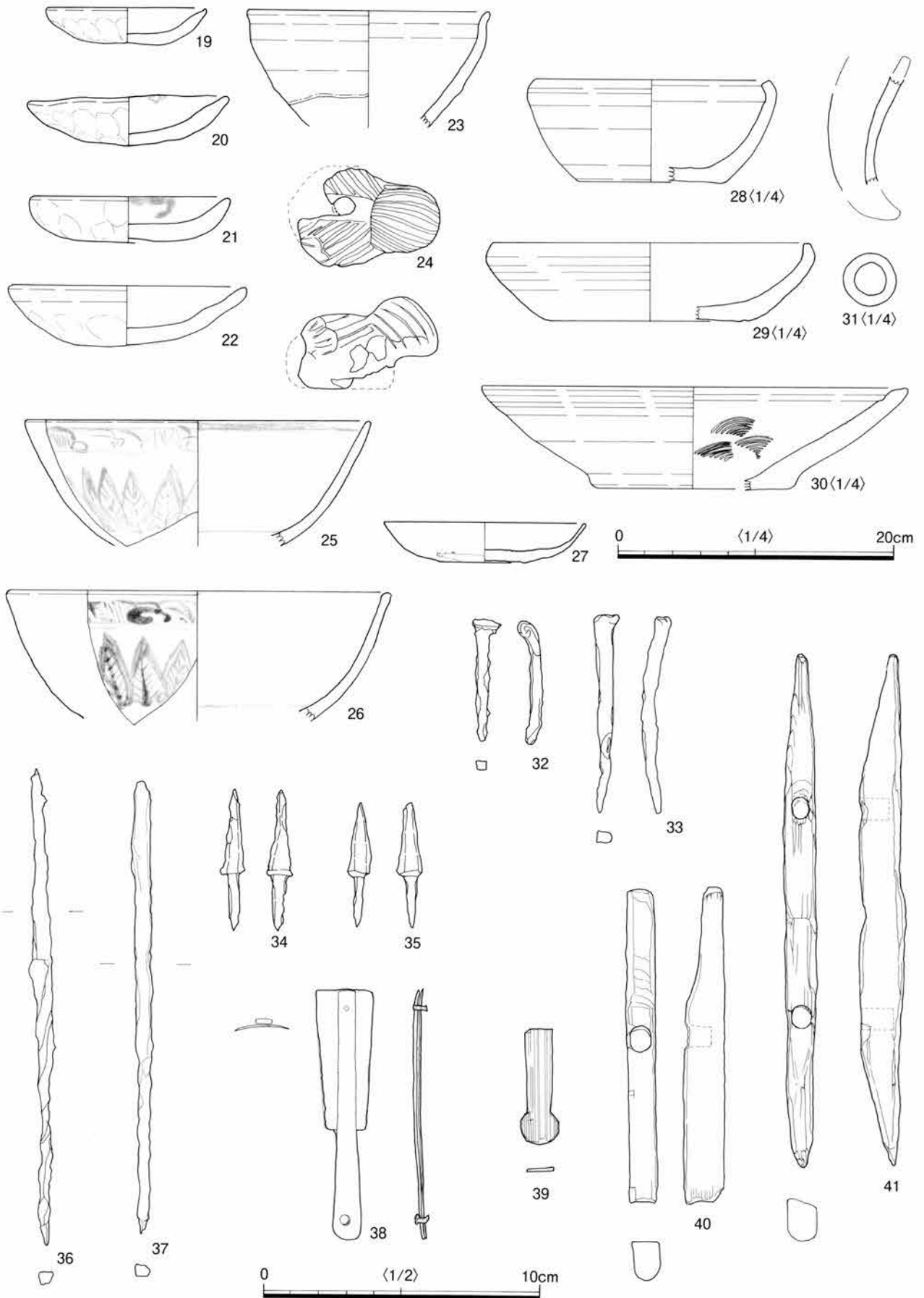
土師質皿1 灰釉壺2 碗3 染付碗4 金属製品釘5・6 飾金具7 燭止8 不明9・10 匙11・12
 石製品盤13 木製品漆皿14 漆製品15 棒状製品16 箸17 下駄18



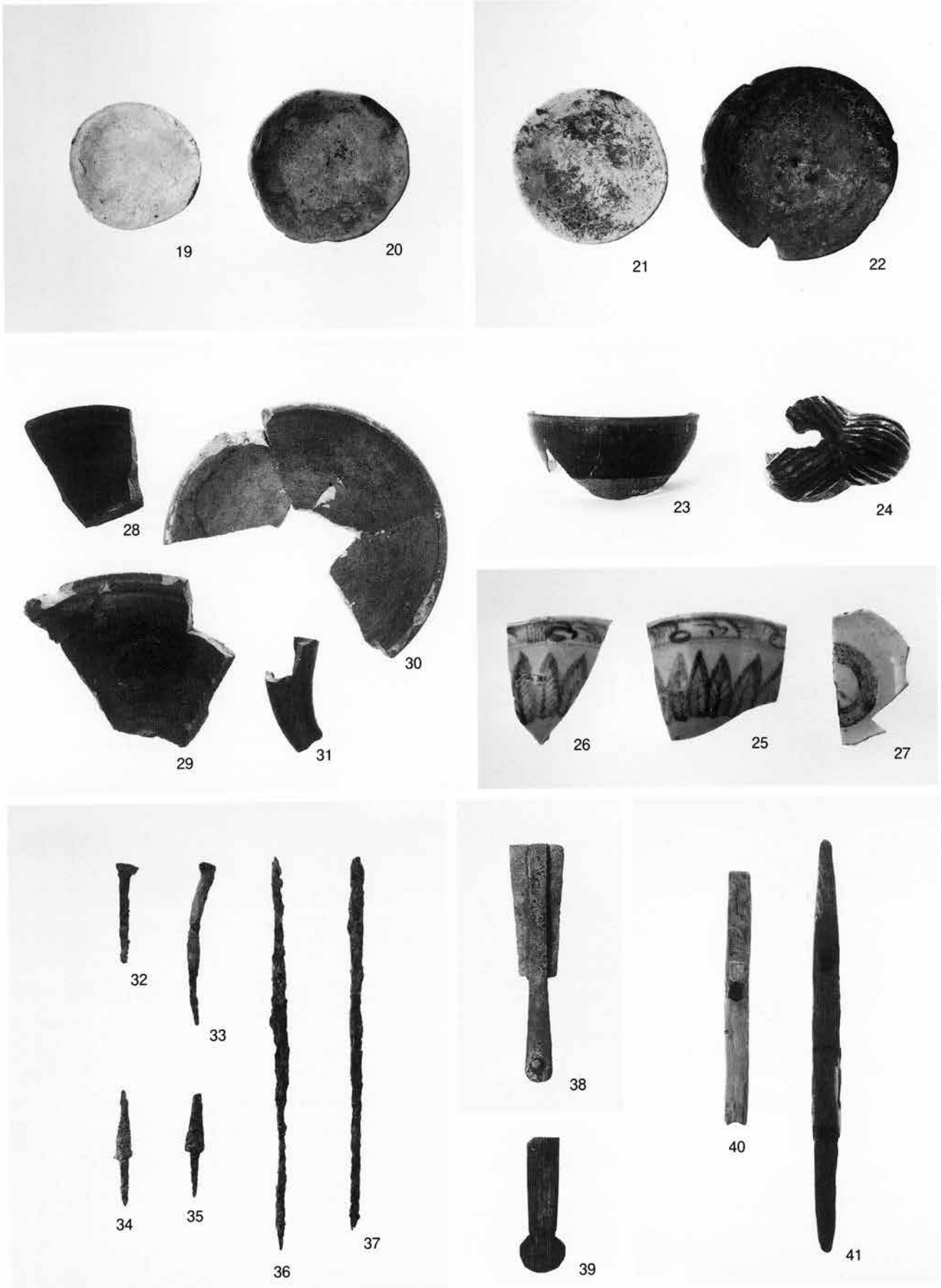
区画51-1 土師質皿1 灰釉壺2 碗3 染付碗4 金属製品釘5・6 飾金具7 燭止8 不明9・10 匙11・12
 石製品盤13 木製品漆皿14 漆製品15 棒状製品16 箸17 下駄18

第8図 第51次調査出土遺物(2)

区画2



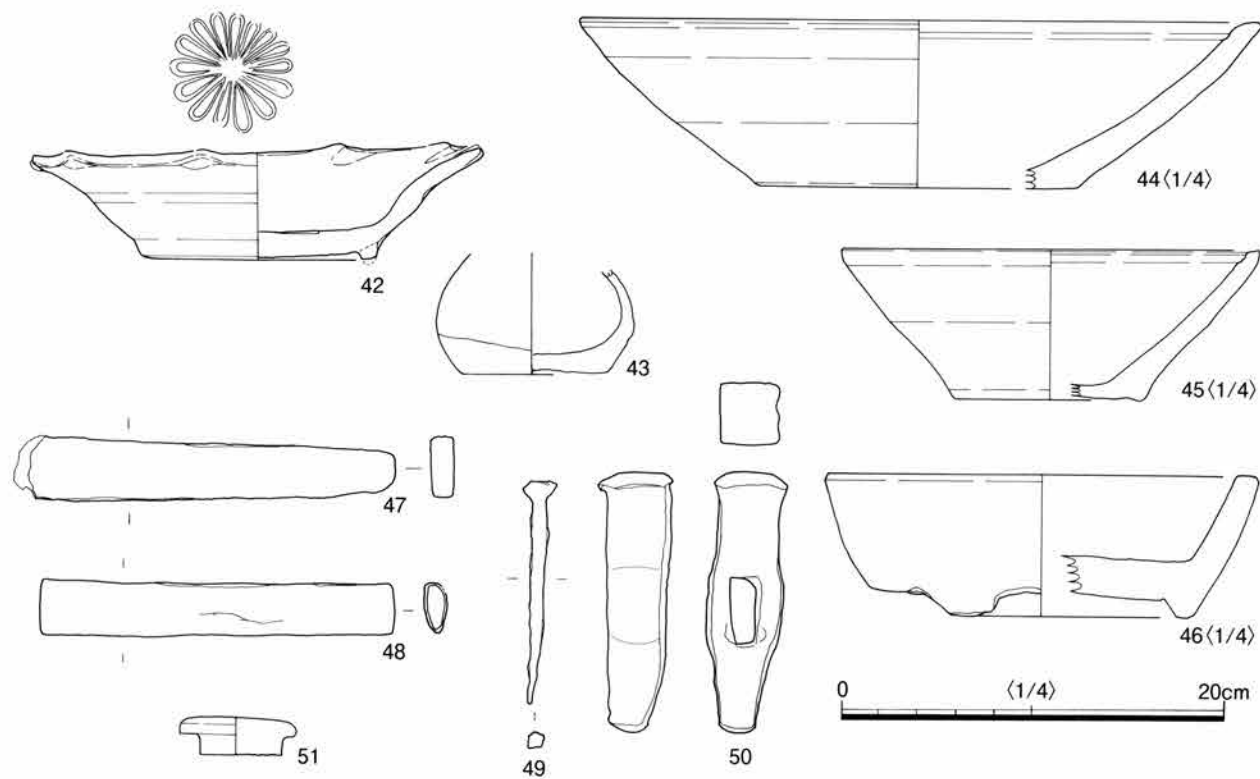
土師質皿19~22 鉄釉碗23 水滴24 染付碗25・26 白磁皿27 越前焼鉢28・29 浅鉢30 角坏31
 金属製品釘32・33 鋸34・35 火箸36・37 飾金具38 木製品人形状板39 糸巻き木杵40・41



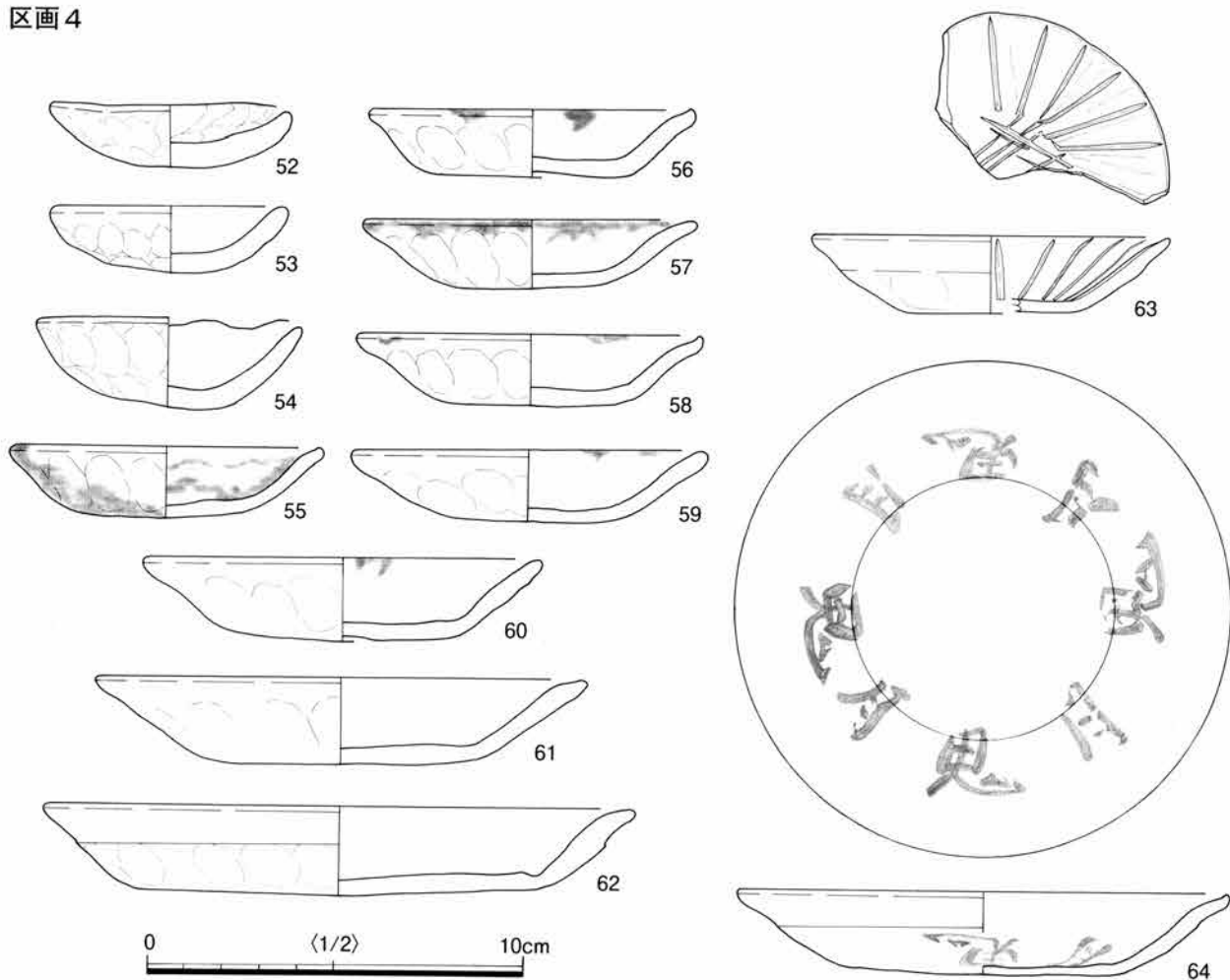
区画51-2 土師質皿19~22 鉄釉碗23 水滴24 染付碗25・26 白磁皿27 越前焼鉢28・29 浅鉢30 角坏31
 金属製品釘32・33 鎌34・35 火箸36・37 飾金具38 木製品人形状板39 糸巻き木杵40・41

第9図 第51次調査出土遺物 (3)

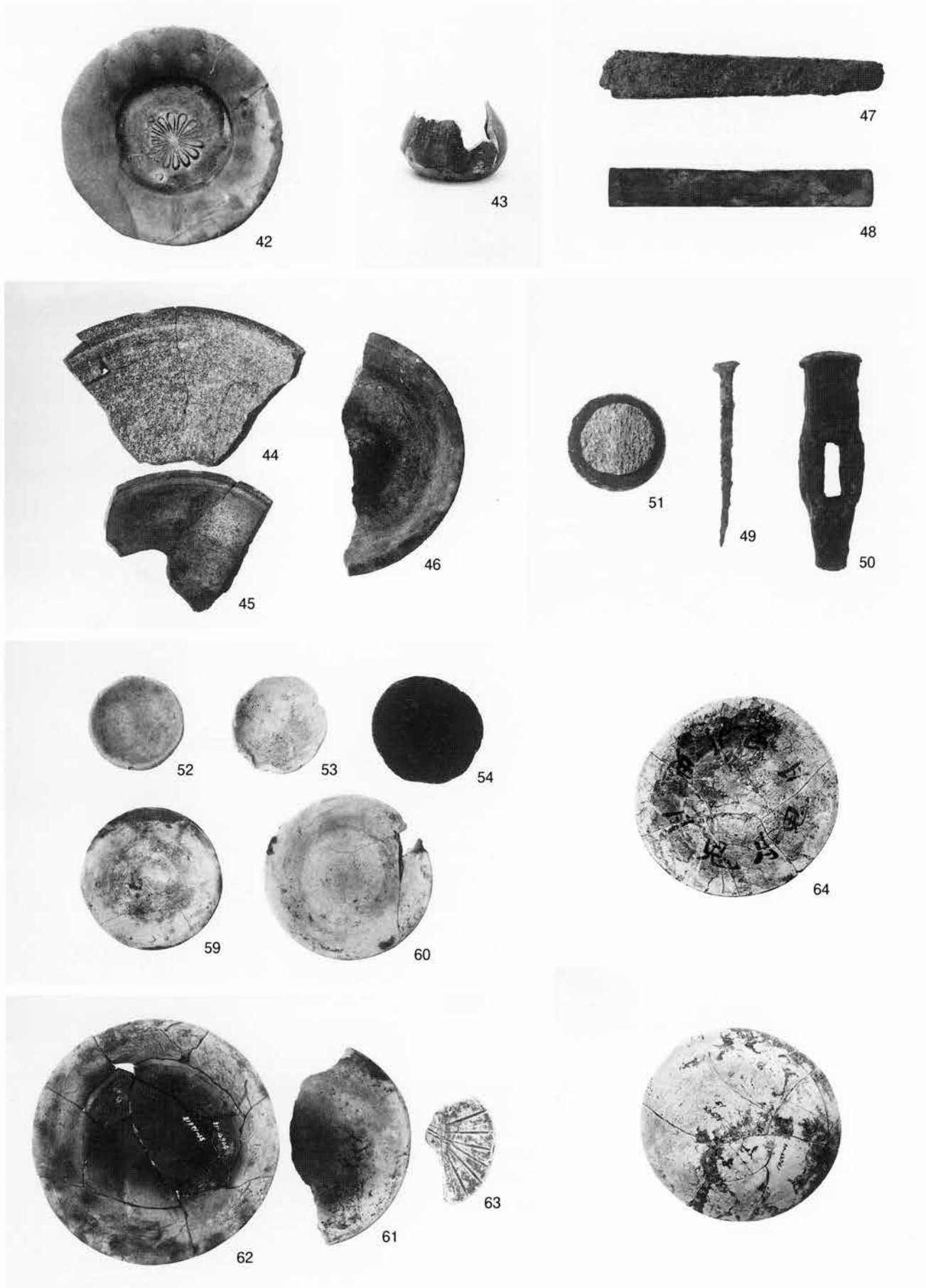
区画3



区画4



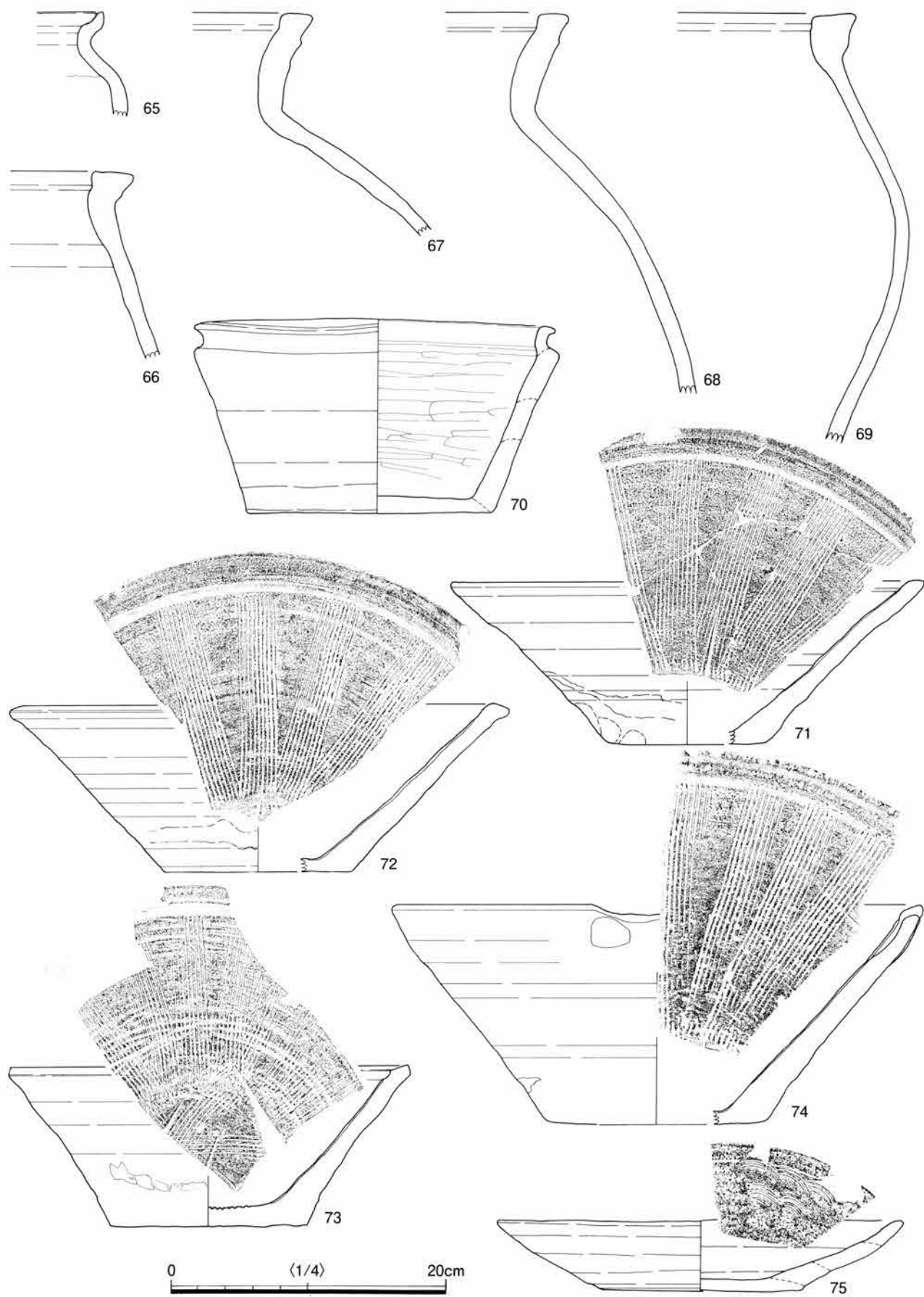
灰釉皿42 鉄釉茶入43 越前焼鉢44・45 石製品盤46 金属製品刀子47 小柄48 釘49 金柄50
鹿角製品蓋51 土師質皿52~64



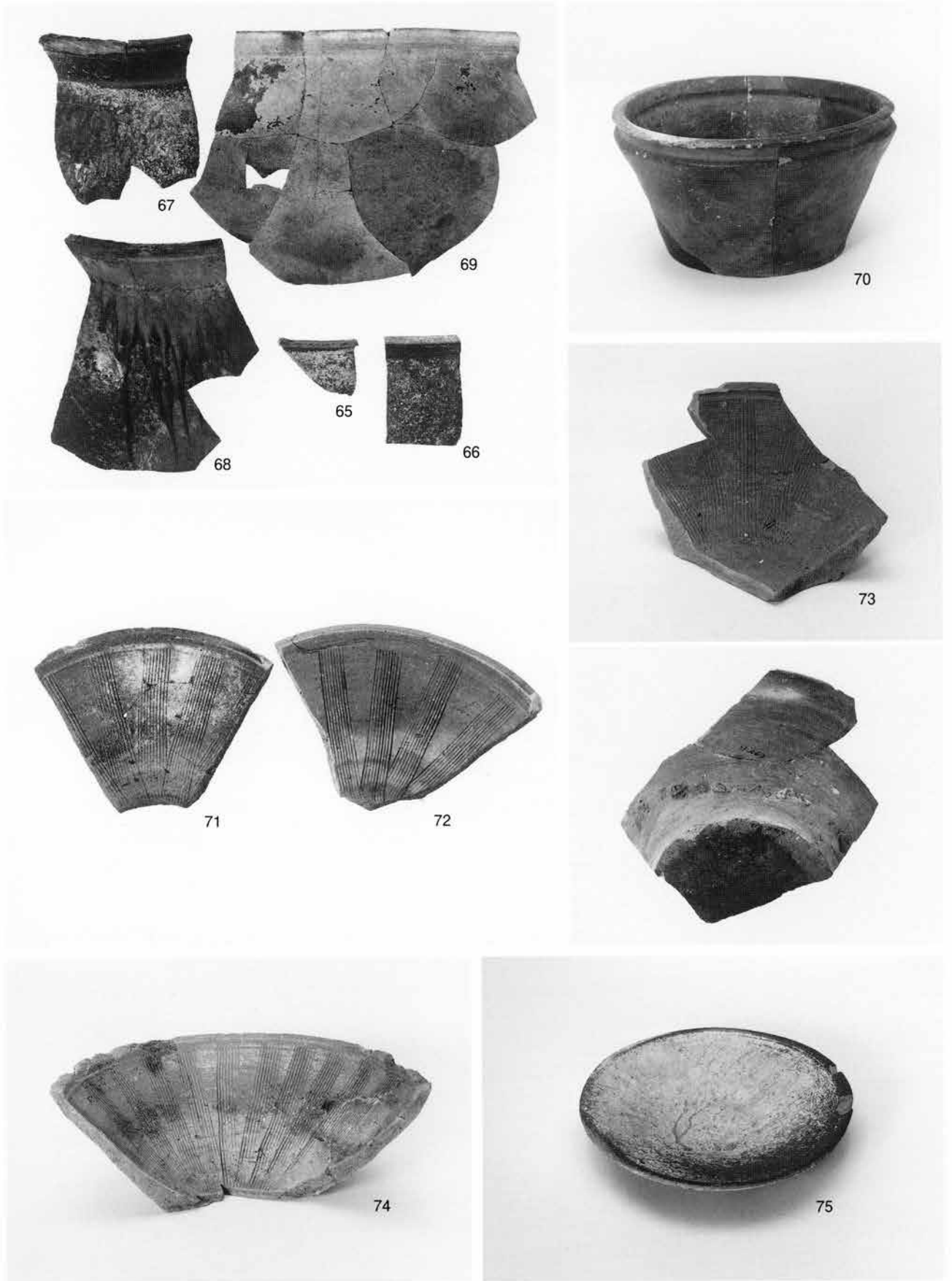
区画51-3 灰釉Ⅲ42 鉄釉茶入43 越前焼鉢44・45 石製品盤46 金属製品刀子47 小柄48 釘49 金植50
 鹿角製品蓋51 区画51-4 土師質Ⅲ52~54・59~64

第10図 第51次調査出土遺物(4)

区画4



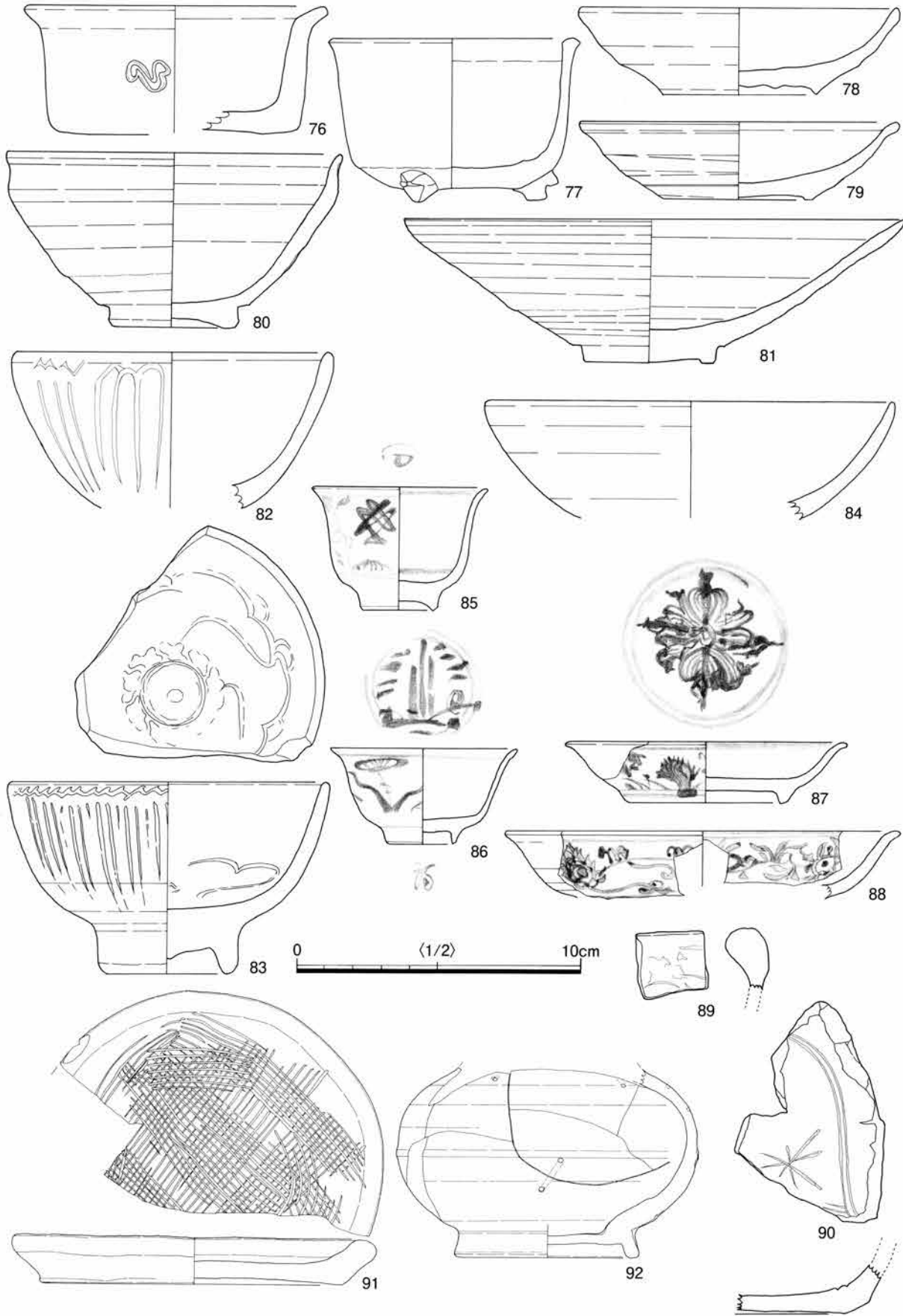
越前焼甕65~69 鉢70 搦鉢71~74 浅鉢75



区画51-4 越前焼甕65~69 鉢70 搦鉢71~74 浅鉢75

第11図 第51次調査出土遺物 (5)

区画4



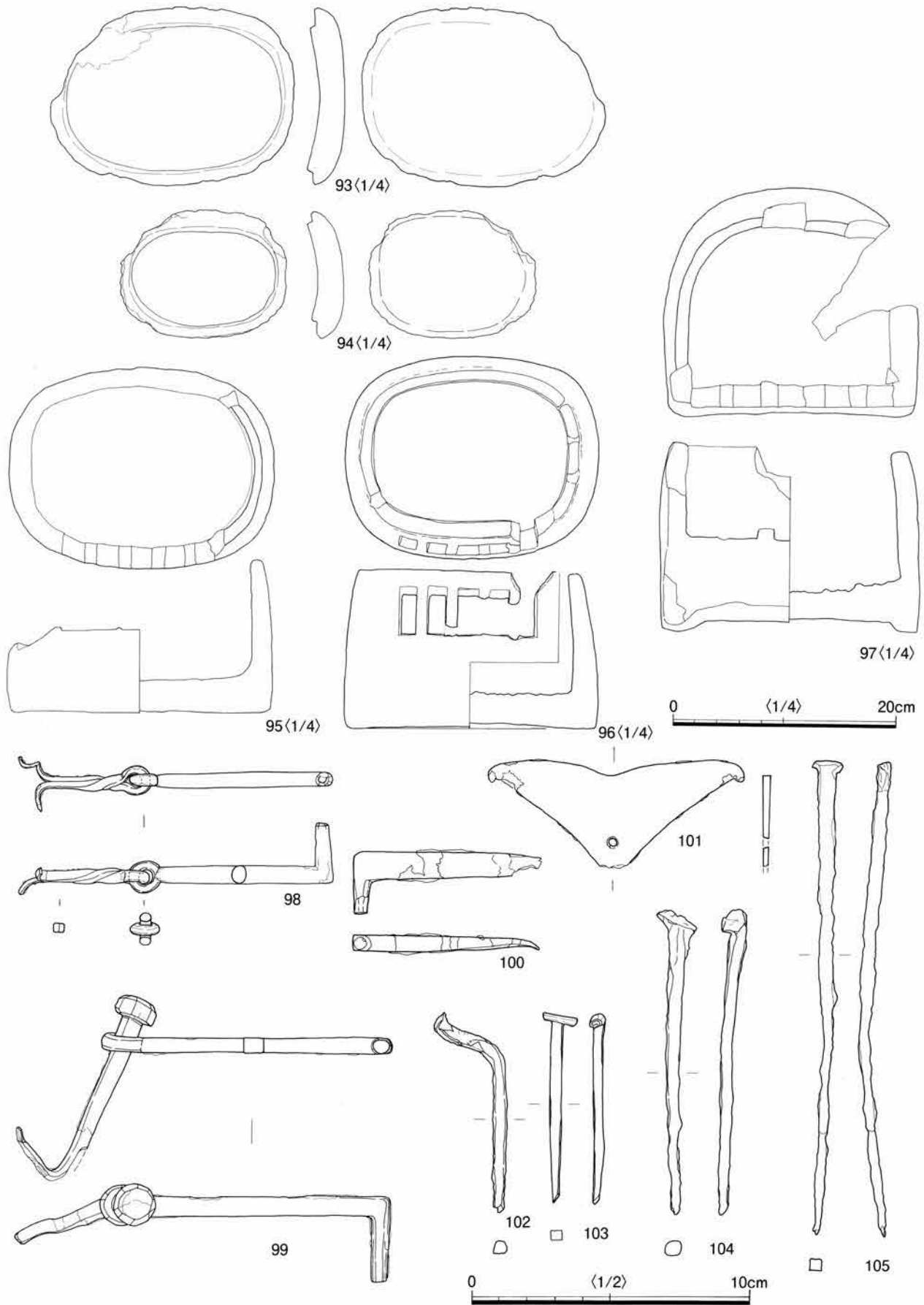
瓦質土器香炉76 鉄釉香炉77 皿78・79 碗80 平碗81 青磁碗82~84 下蕪花瓶92
 染付坏85・86 皿87・88 華南彩釉陶器89・90 越前焼卸皿91



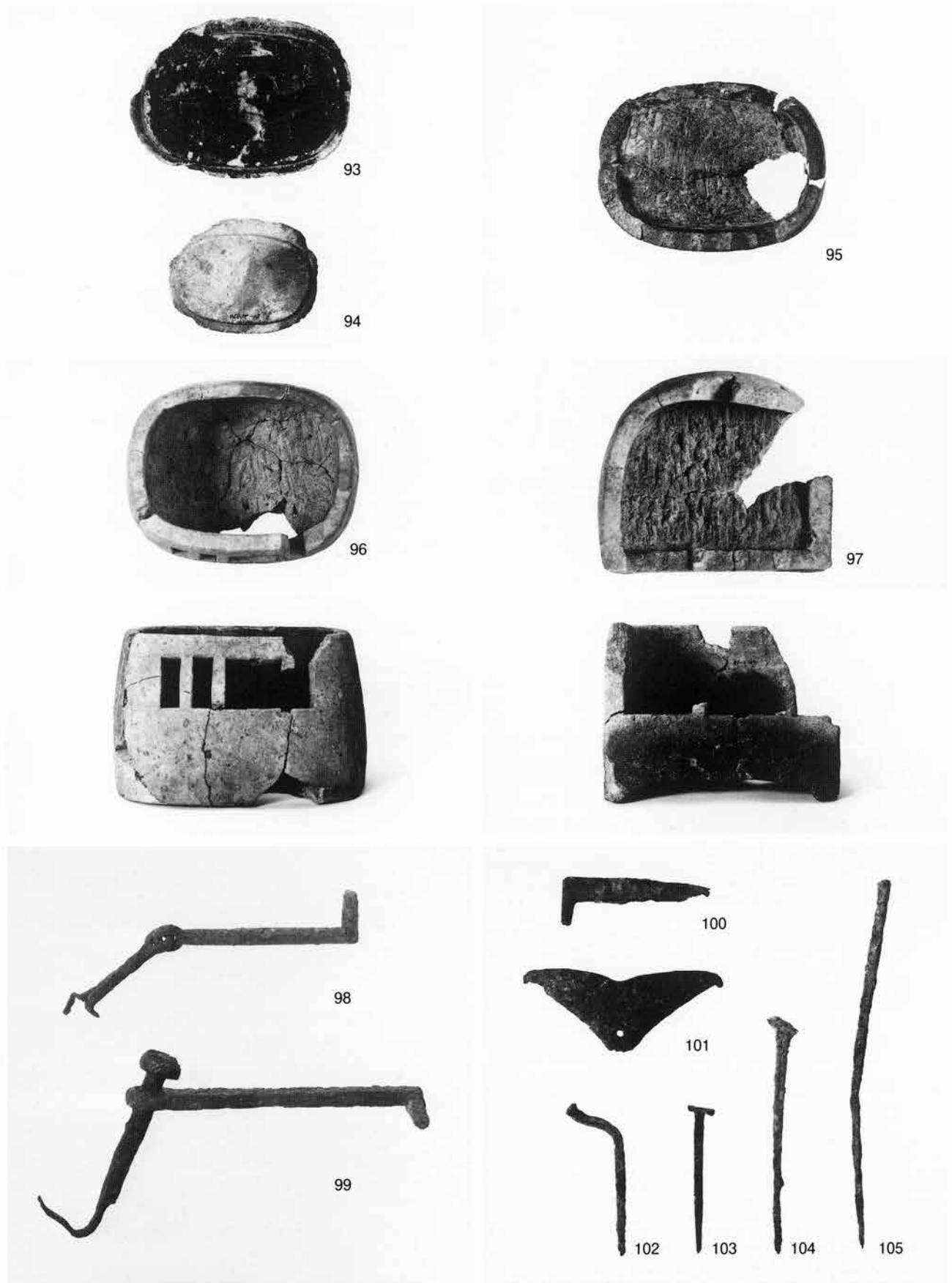
区画51-4 瓦質土器香炉76 鉄釉香炉77 皿78・79 碗80 平碗81 青磁碗82~84 下蕪花瓶92
 染付坏85・86 皿87・88 華南彩釉陶器89・90 越前焼卸皿91

第12図 第51次調査出土遺物 (6)

区画4



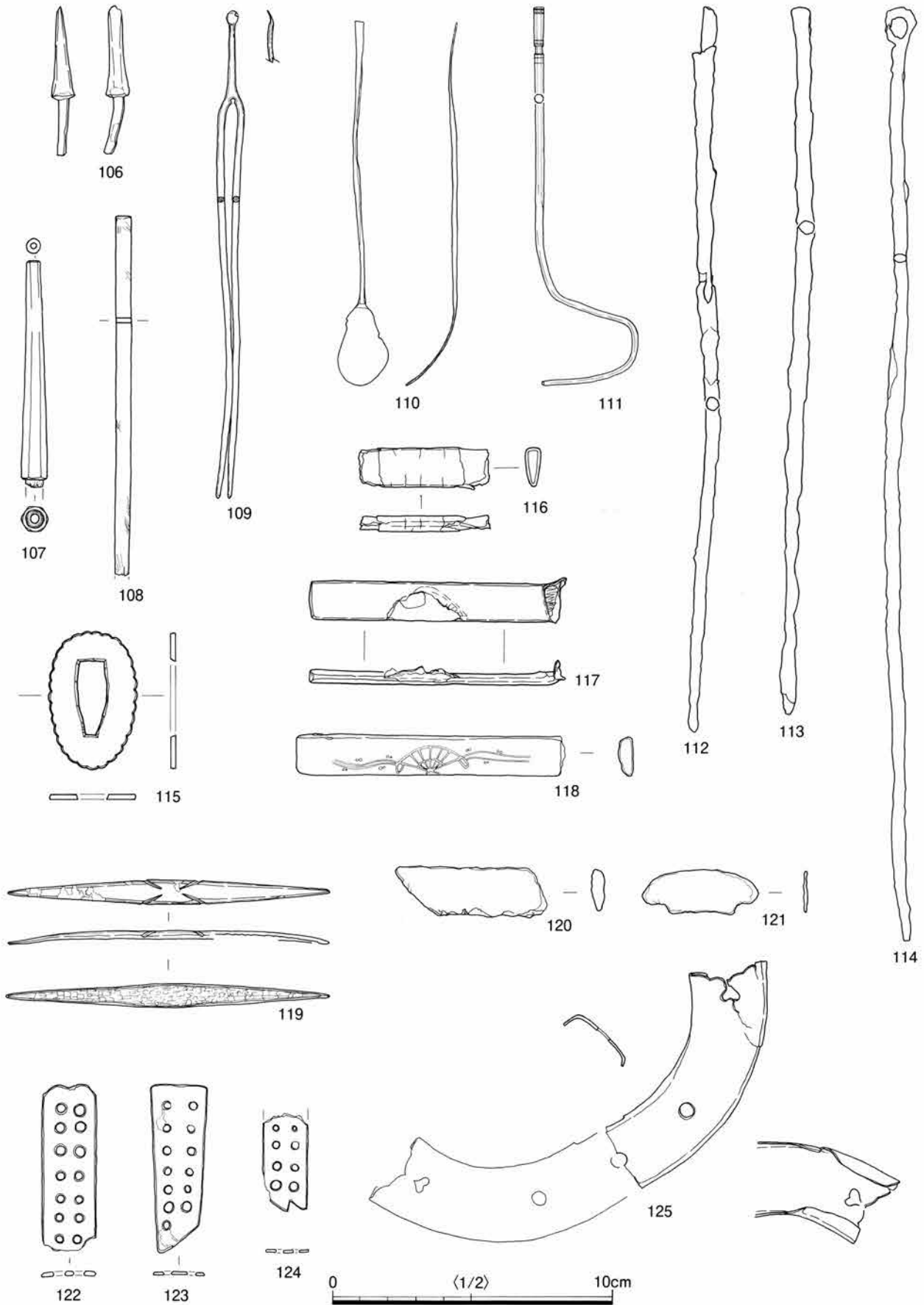
石製品バンドコ93-97 金属製品扇止98・99 肘金100 火打金101 釘102~105



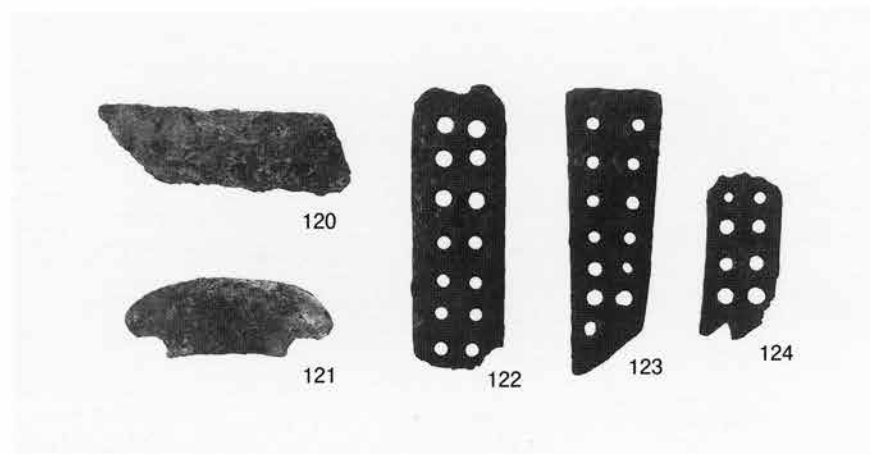
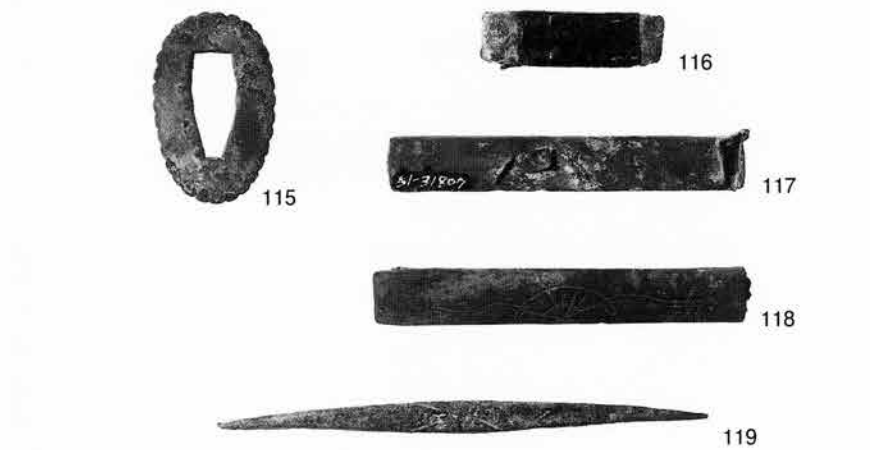
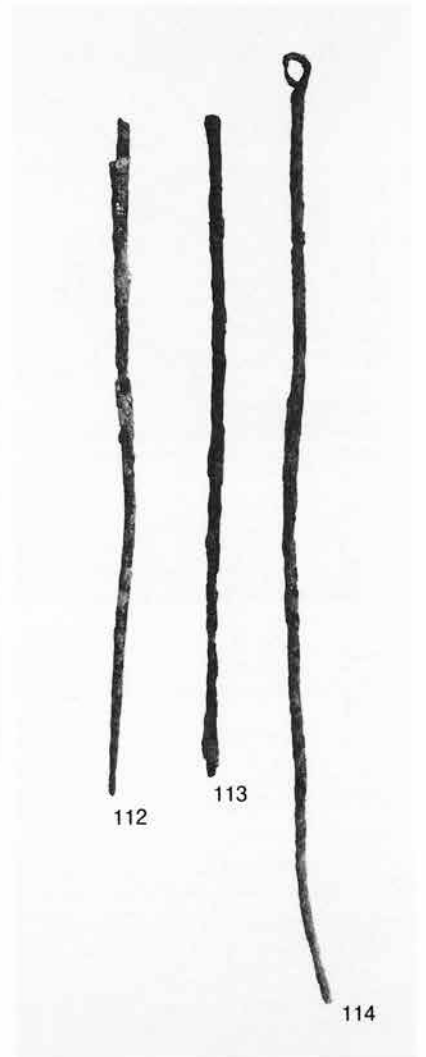
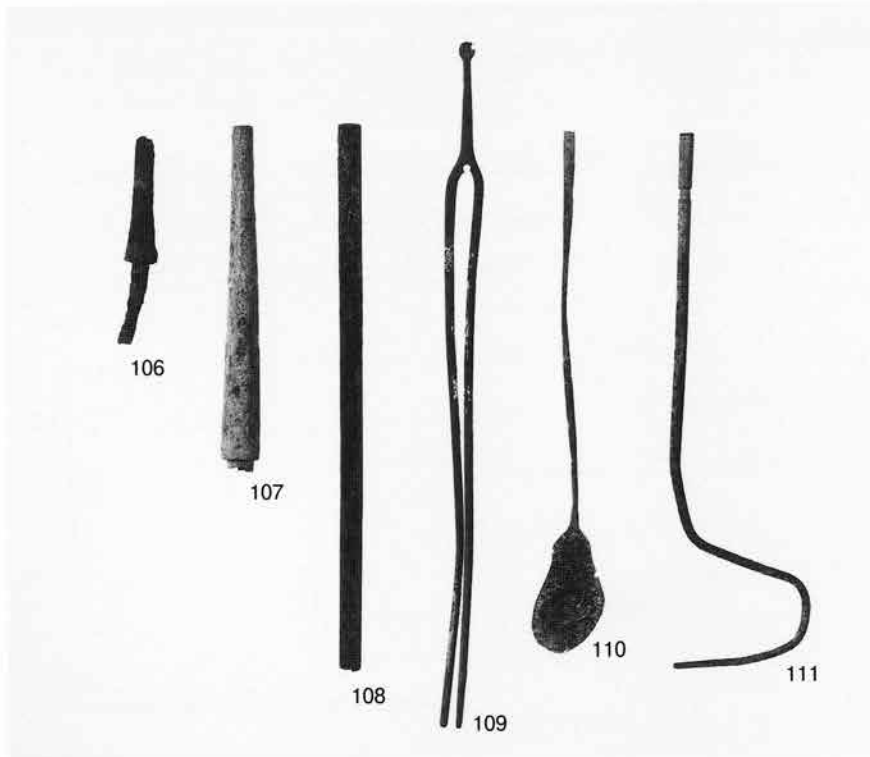
区画51-4 石製品バンドコ93~97 金属製品燧止98・99 肘金100 火打金101 釘102~105

第13図 第51次調査出土遺物(7)

区画4



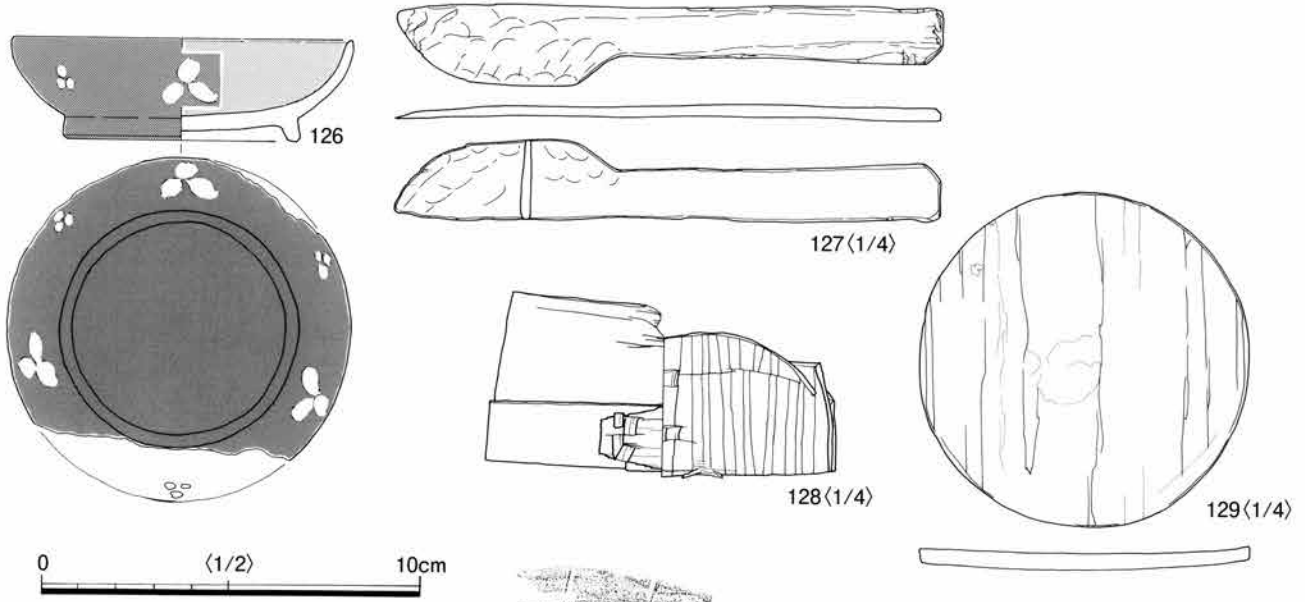
金属製品 鍼106 不明107・108 簪109 匙110 火箸111~114 切羽115 刀子鞘116 小柄117・118
 飾金具119 小刀120 金具121 小札122~124 兜鍪形台125



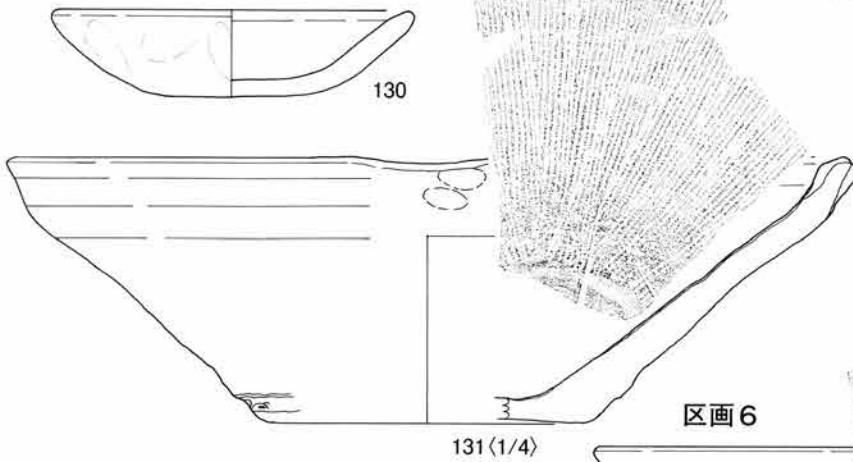
区画51-4 金属製品 鏃106 不明107・108 簪109 匙110 火箸111~114 切羽115 刀子鞘116 小柄117・118 飾金具119 小刀120 金具121 小札122~124 兜鍪形台125

第14図 第51次調査出土遺物 (8)

区画4



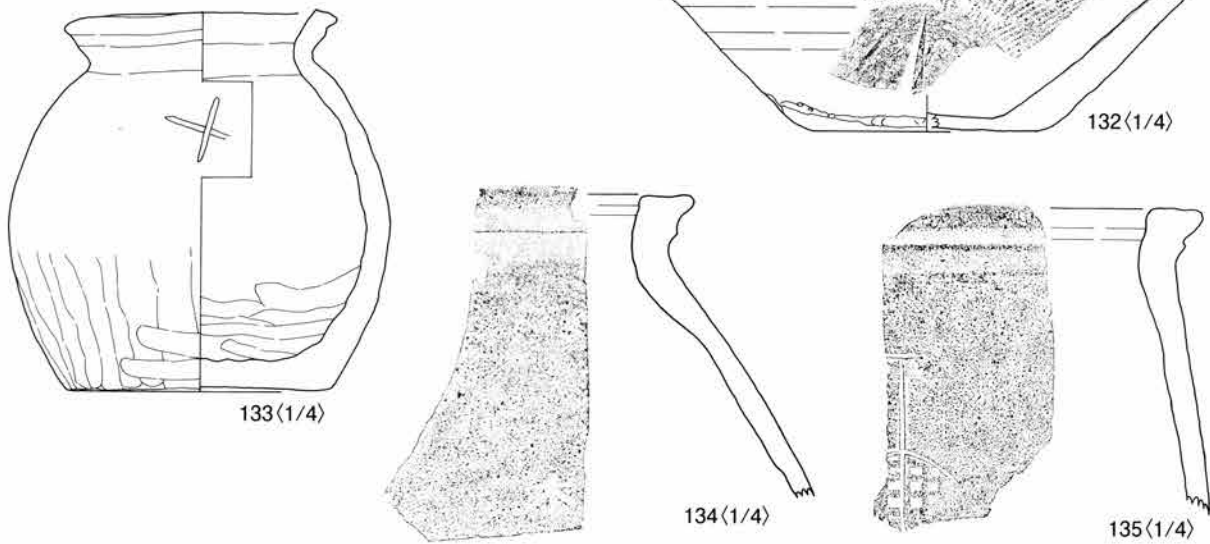
区画5



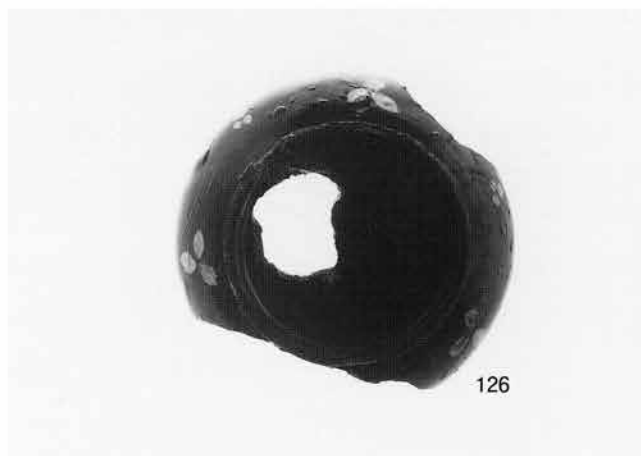
区画6



区画9



木製品漆皿126 篋127 曲物128 曲物底板129 土師質皿130 越前焼播鉢131・132 壺133 甕134・135



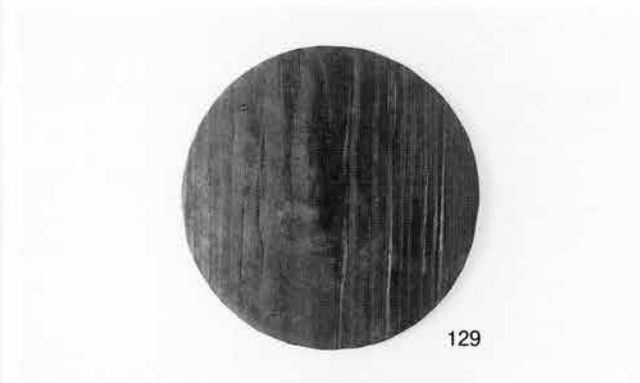
126



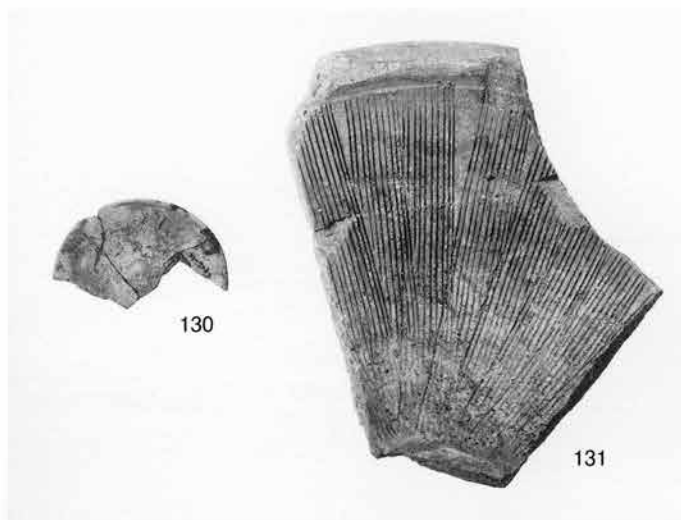
128



127

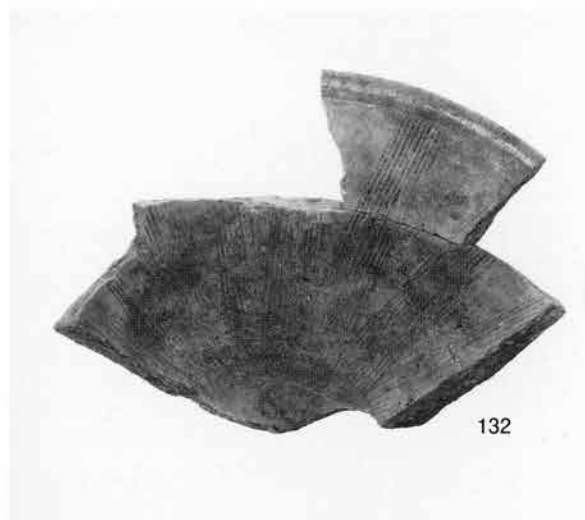


129



130

131



132



133



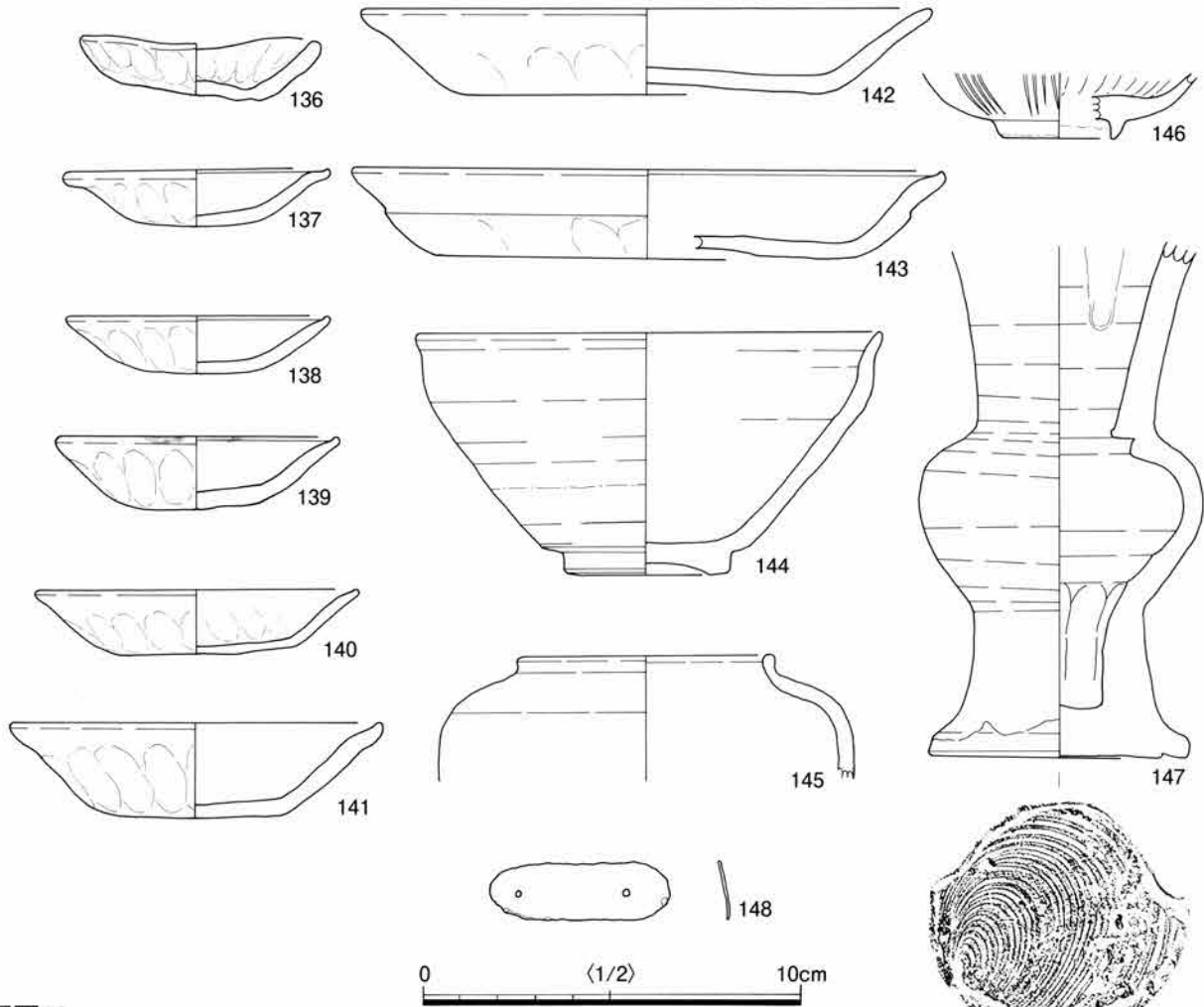
134

135

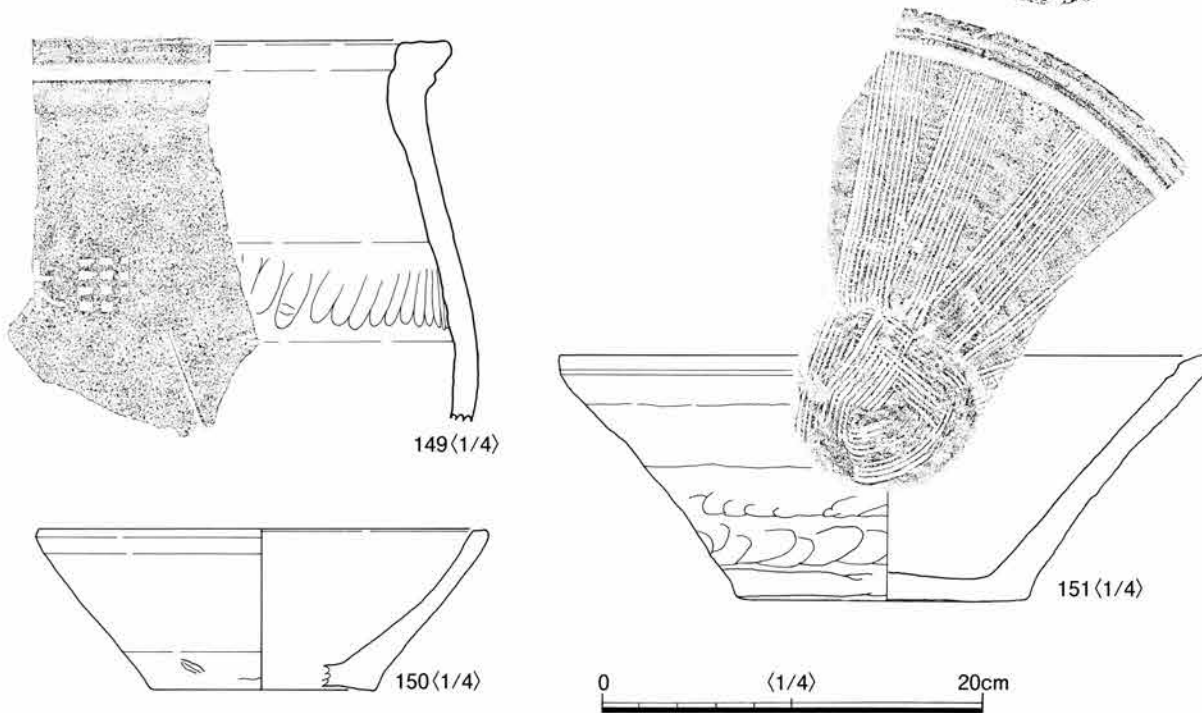
区画51-4 木製品漆皿126 椀127 曲物128 曲物底板129 区画51-5 土師質皿130 越前焼播鉢131
 区画51-6 越前焼播鉢132 区画51-9 越前焼壺133 甕134・135

第15図 第51次調査出土遺物 (9)

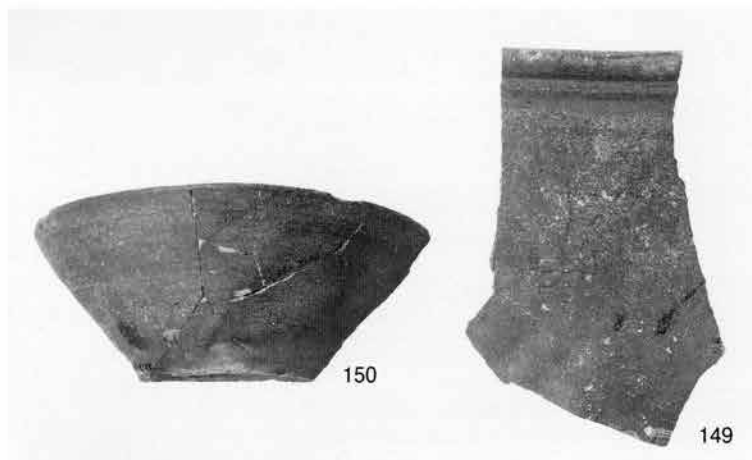
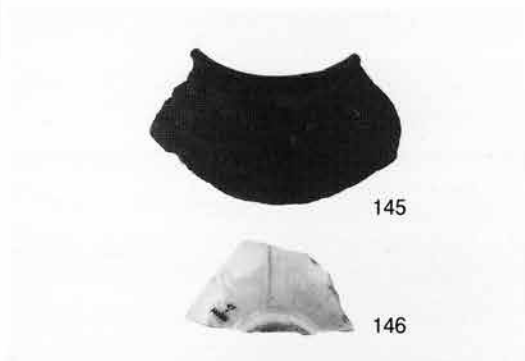
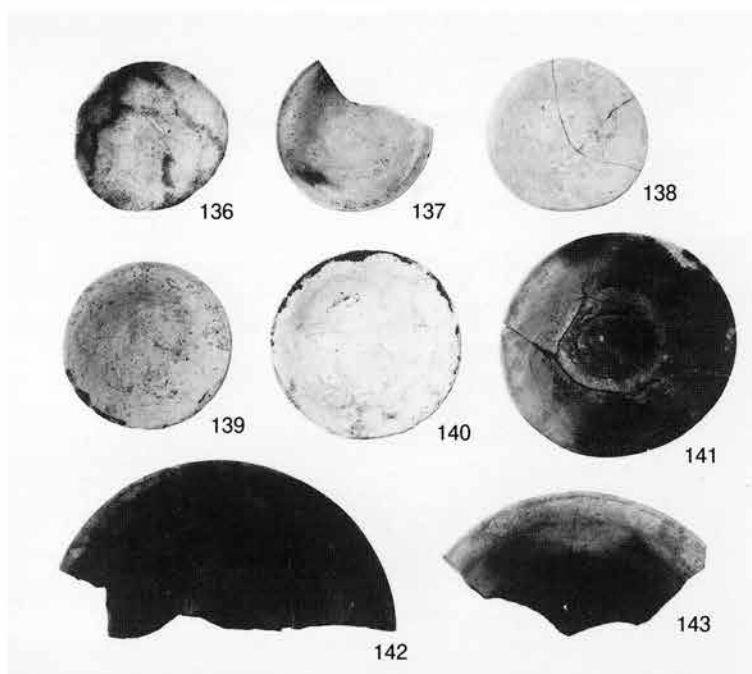
区画9



区画11



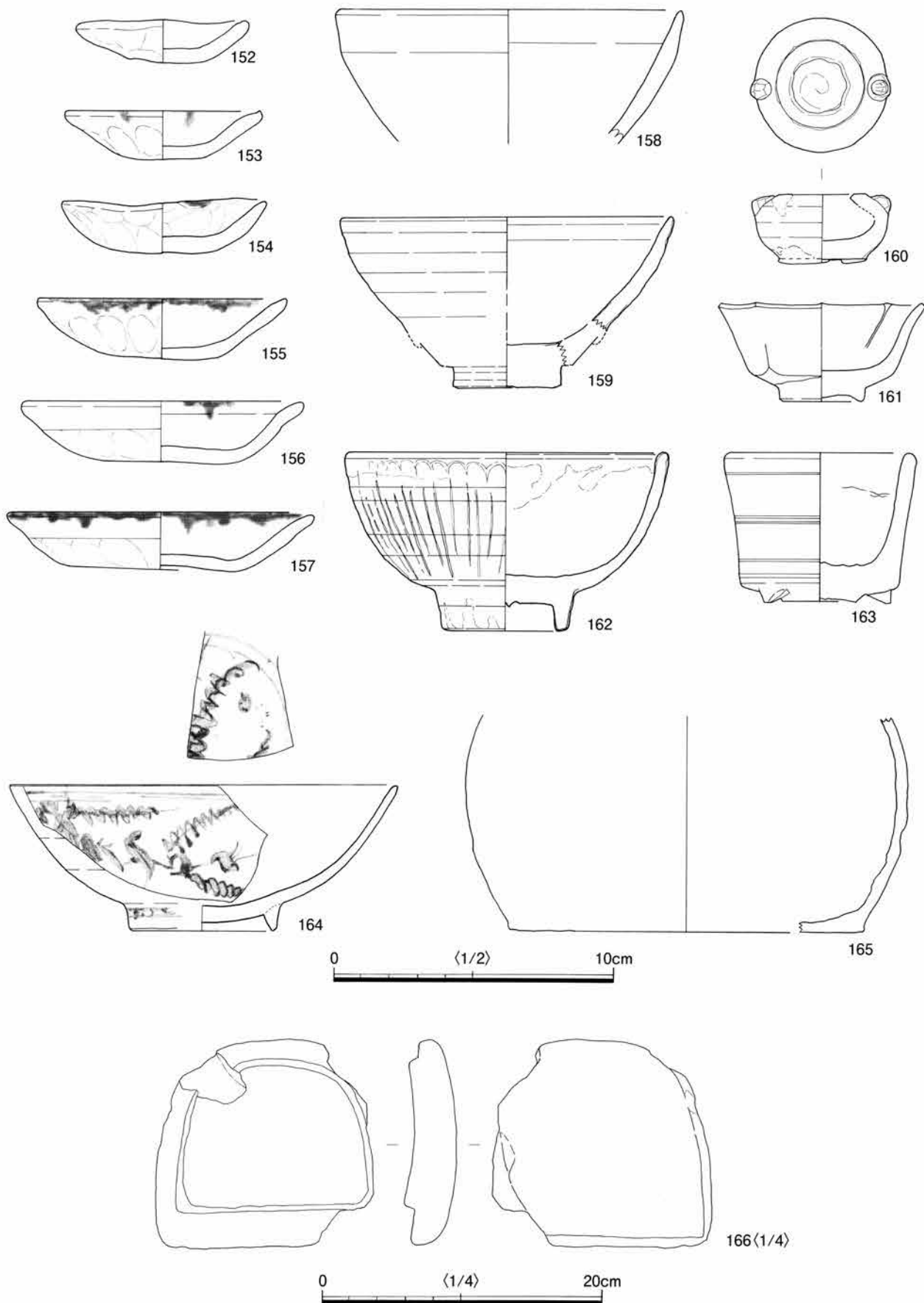
土師質皿136~143 鉄釉碗144 茶入145 白磁皿146 灰釉花瓶147 金属製品飾金具148
越前焼甕149 鉢150 播鉢151



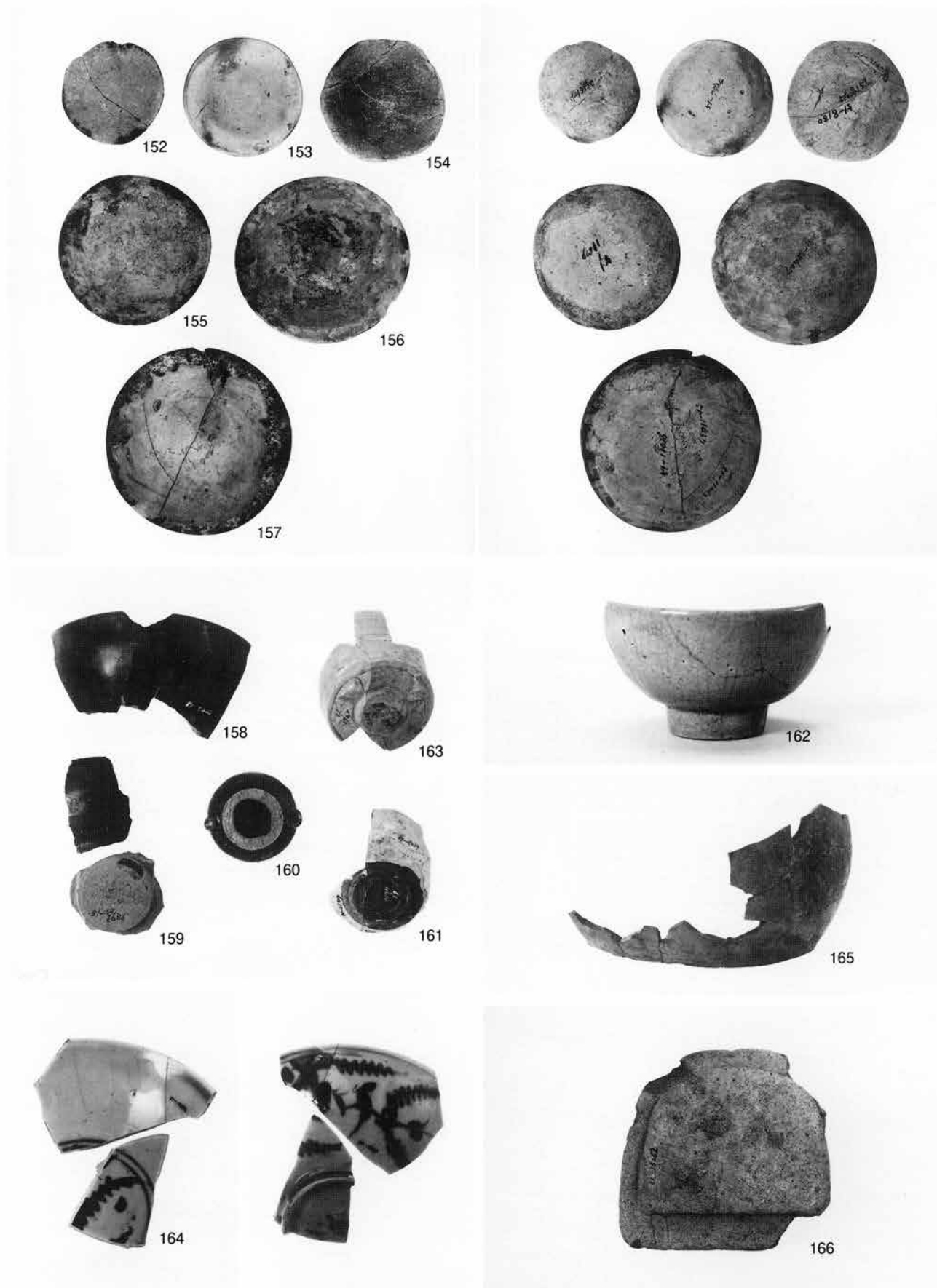
区画51-9 土師質皿136~143 鉄釉碗144 茶入145 白磁皿146 灰釉花瓶147 金属製品飾金具148
 区画51-11 越前焼甕149 鉢150 搦鉢151

第16図 第51次調査出土遺物 (10)

区画11



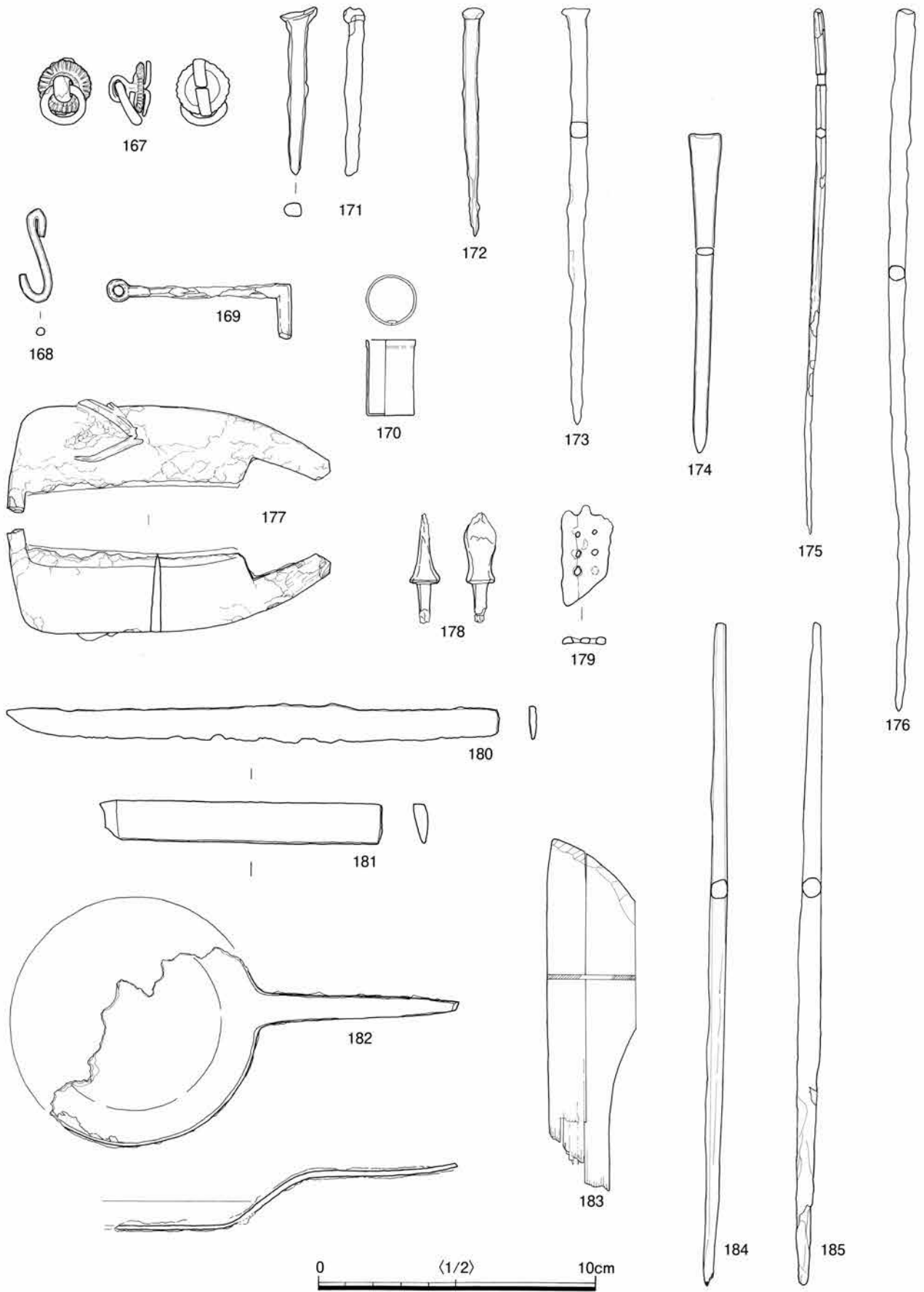
土師質皿152~157 鉄釉碗158 水滴160 中国製黒釉碗159 白磁坏161 青磁碗162 香炉163
 染付碗164 朝鮮製壺165 石製品バンドコ蓋166



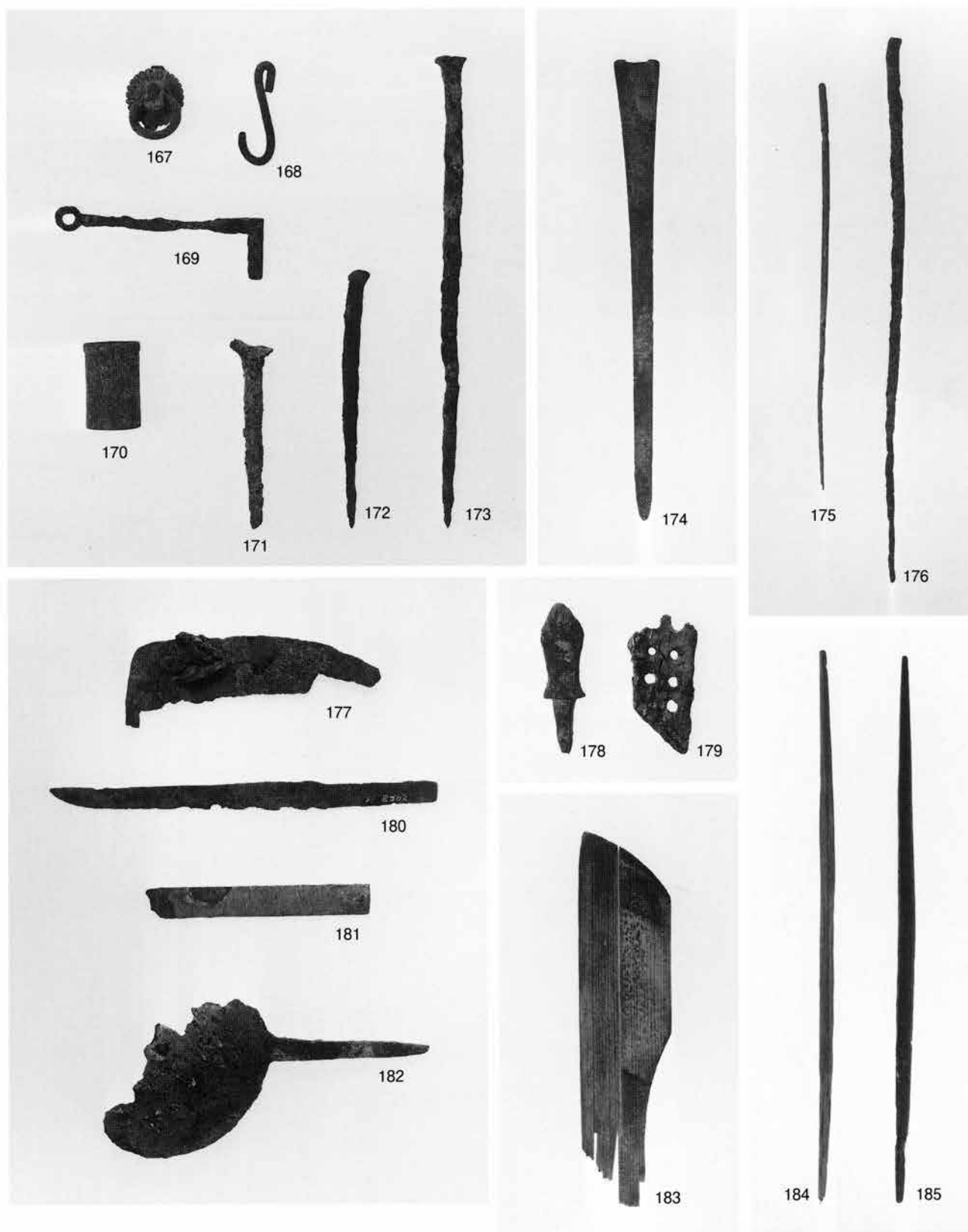
区画51-11 土師質皿152~157 鉄釉碗158 水滴160 中国製黒釉碗159 白磁坏161 青磁碗162 香炉163
 染付碗164 朝鮮製壺165 石製品バンドコ蓋166

第17図 第51次調査出土遺物 (11)

区画11



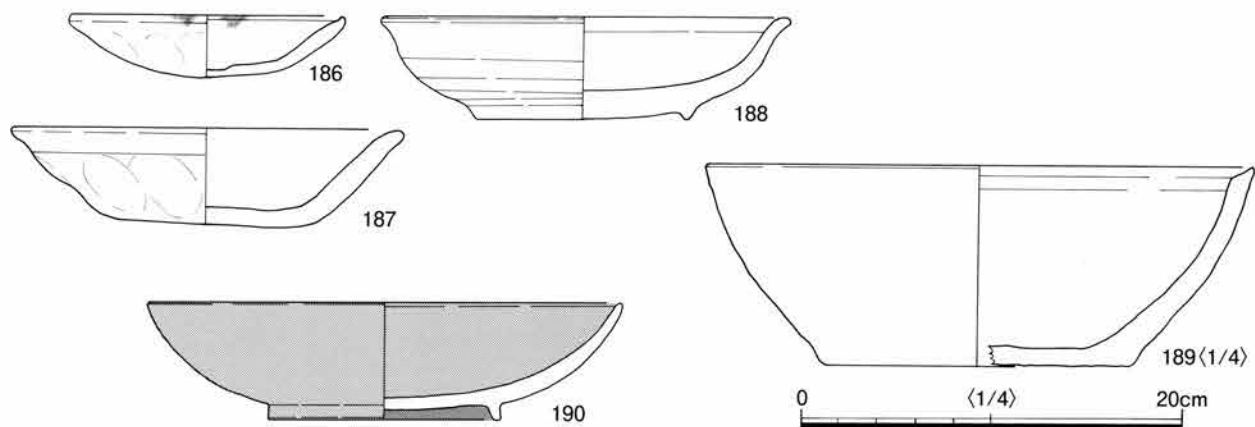
金属製品環付金具167 金具168 扇止169 不明筒状製品170 釘171~173 筭174 火箸175・176
 鉈177 鏃178 小札179 刀子180 小柄181 火皿182 木製品篋183 箸184・185



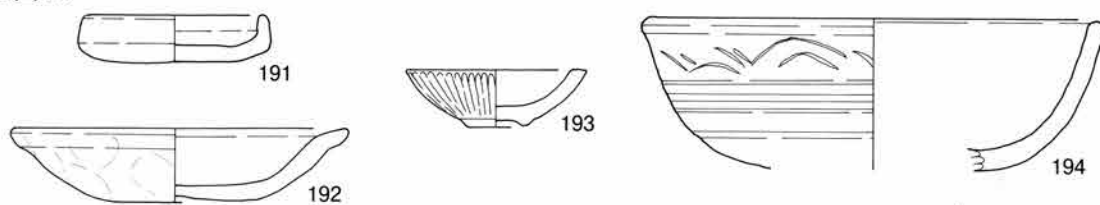
区画51-11 金属製品環付金具167 金具168 燭止169 不明筒状製品170 釘171~173 筭174 火箸175・176
 鉋177 鏃178 小札179 刀子180 小柄181 火皿182 木製品篋183 箸184・185

第18図 第51次調査出土遺物 (12)

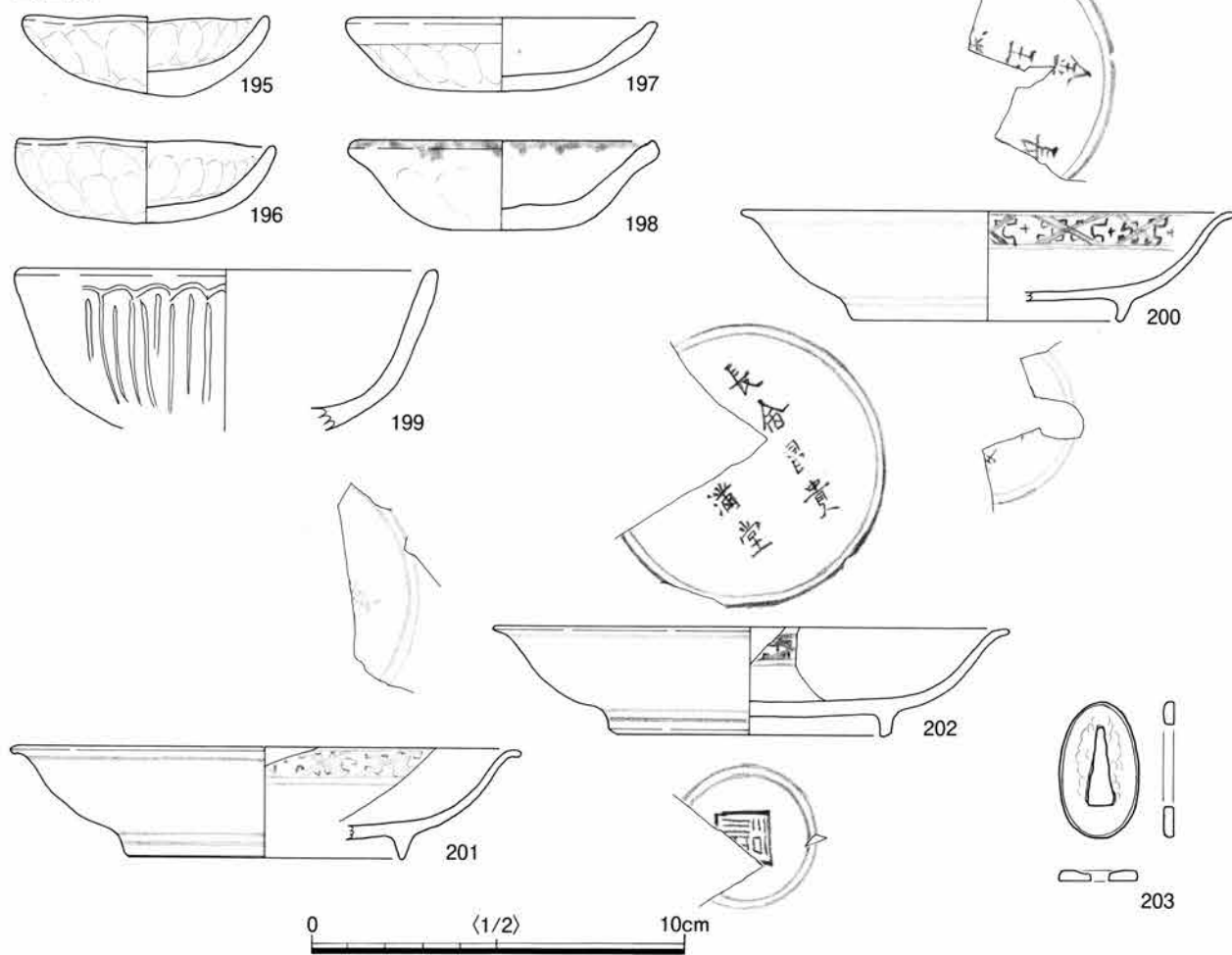
区画12



区画13



区画14

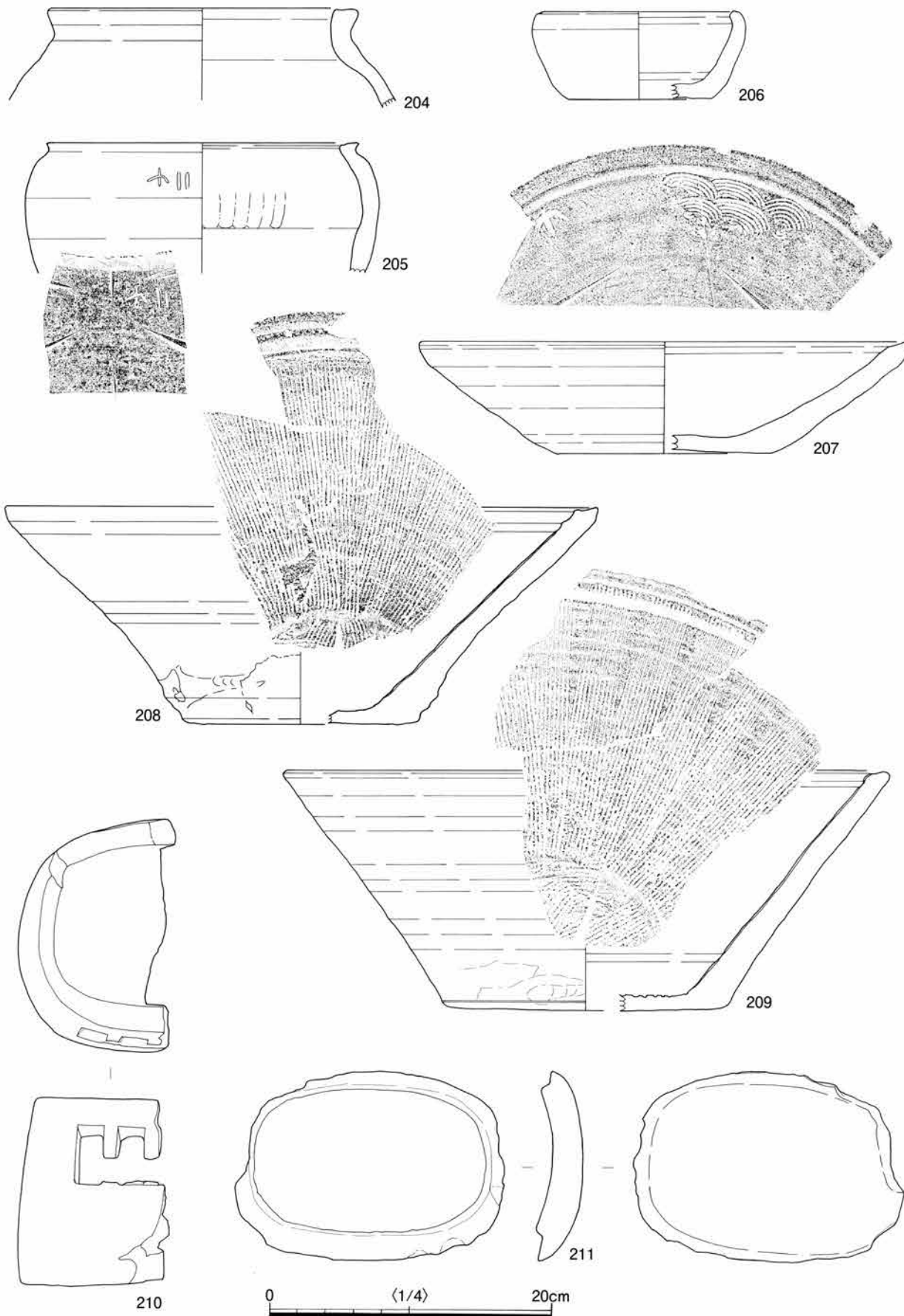


土師質皿186・187・191・192・195～198 灰釉皿188 越前焼鉢189 木製品漆皿190 白磁菊皿193
青磁碗194・199 染付皿200～202 金属製品切羽203

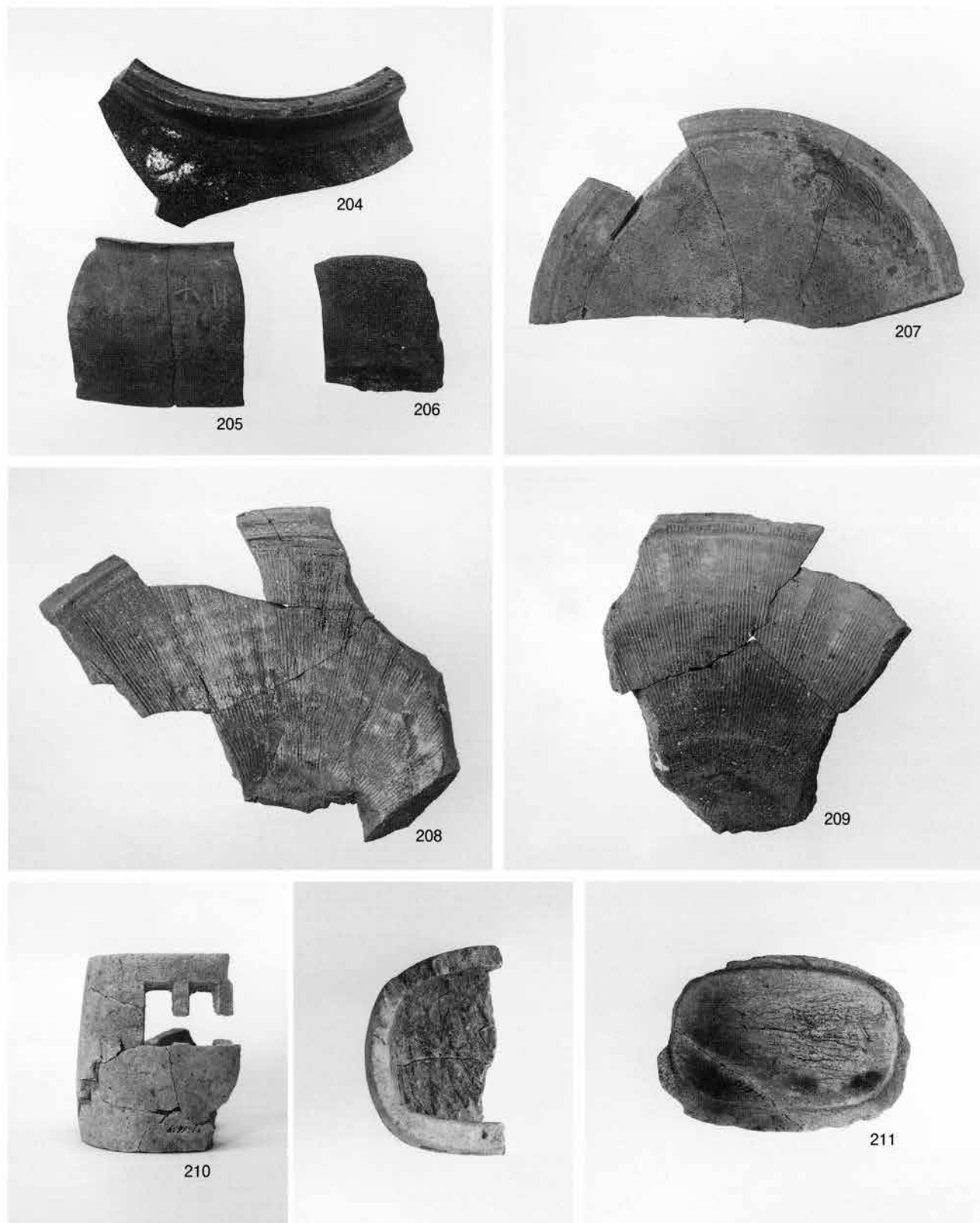


区画51-12 土師質Ⅲ186・187 灰釉Ⅲ188 越前焼鉢189 木製品漆Ⅲ190 区画51-13 土師質Ⅲ191・192
 白磁菊Ⅲ193 青磁碗194・199 区画51-14 土師質Ⅲ195~198 染付Ⅲ200~202 金属製品切羽203

区画14



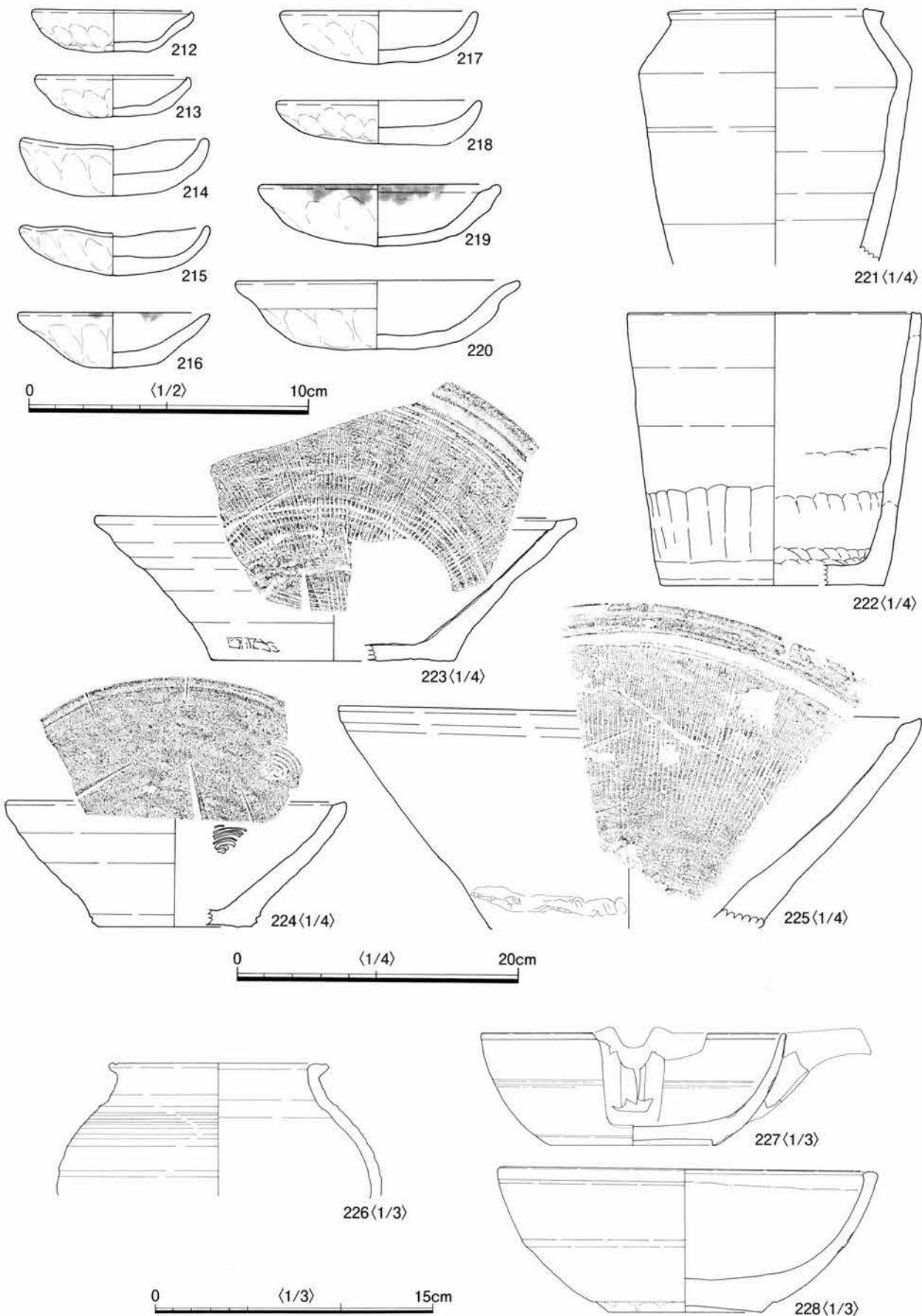
越前焼甕204 壺205 鉢206 浅鉢207 播鉢208・209 石製品バンドコ210・211



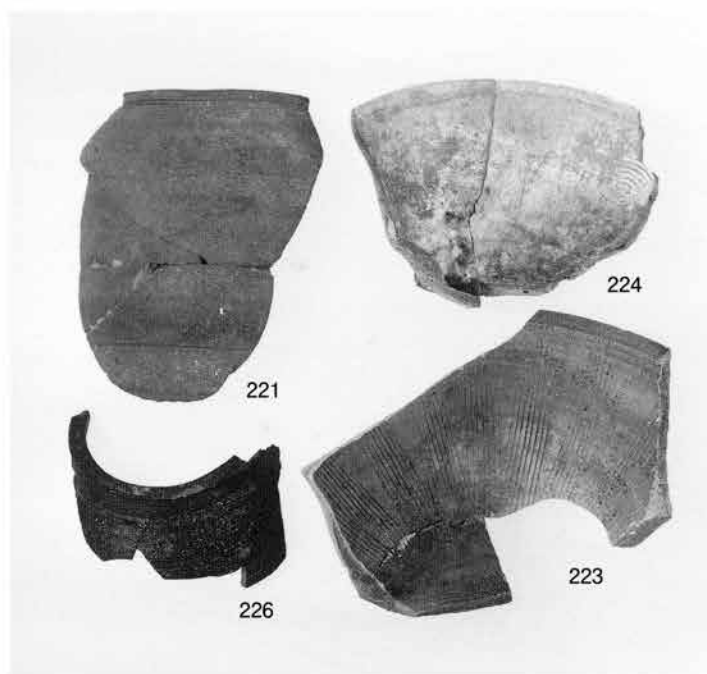
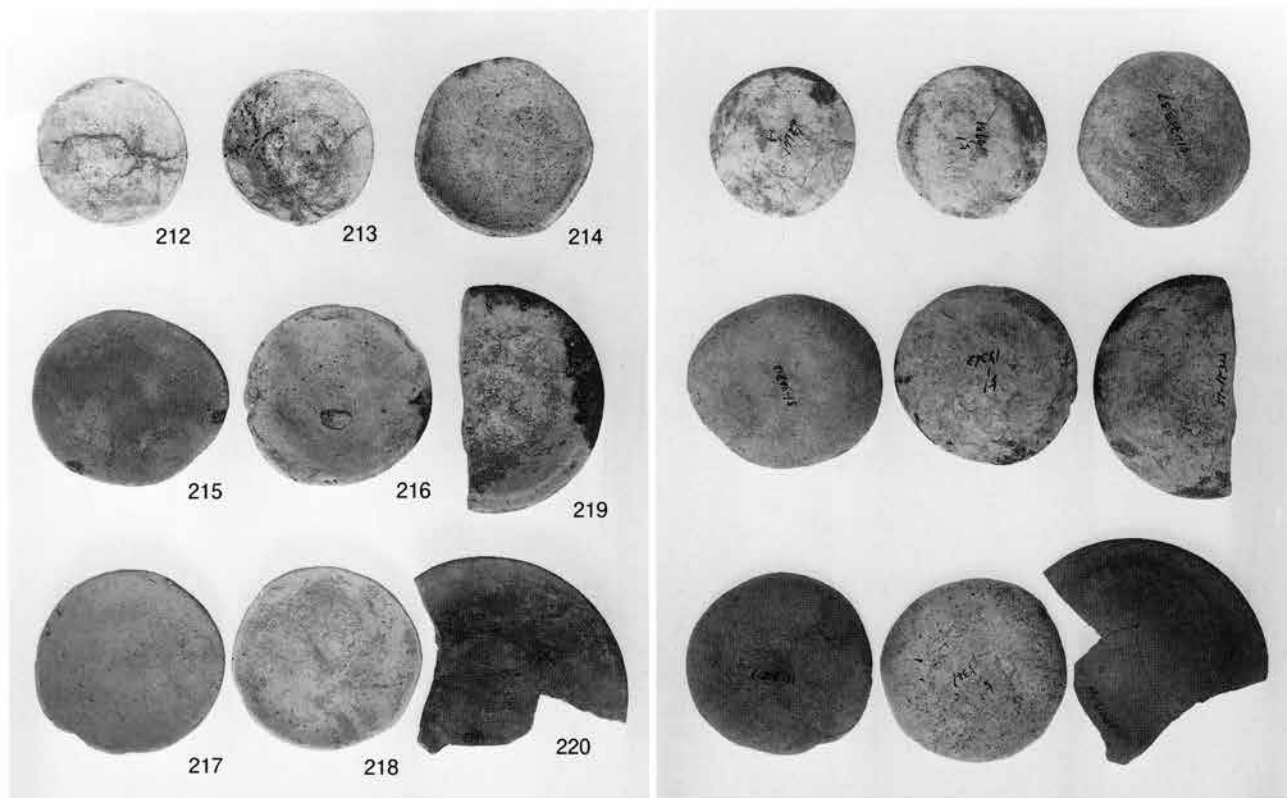
区画51-14 越前焼甕204 壺205 鉢206 浅鉢207 播鉢208・209 石製品バンドコ210・211

第20図 第51次調査出土遺物 (14)

区画15

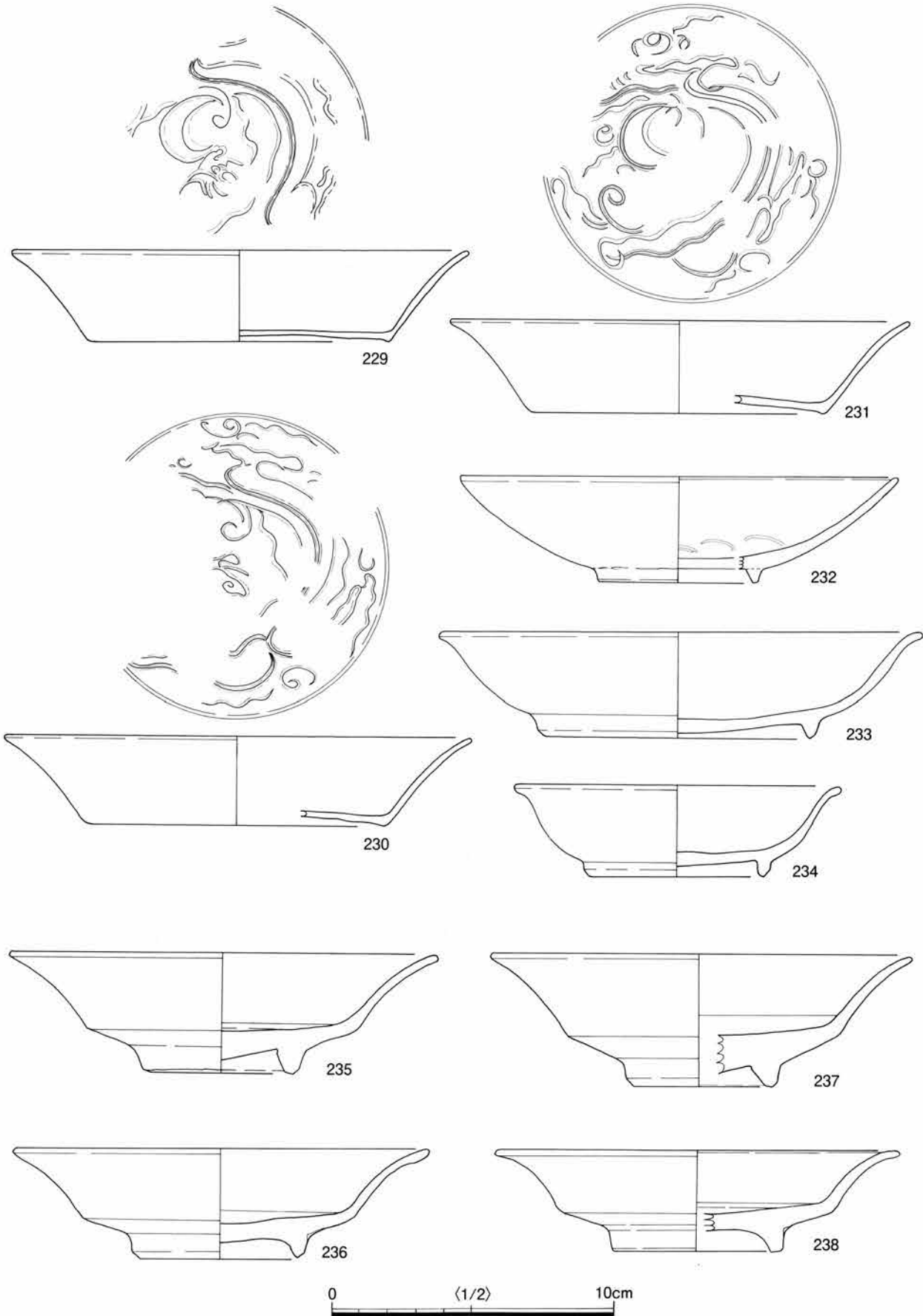


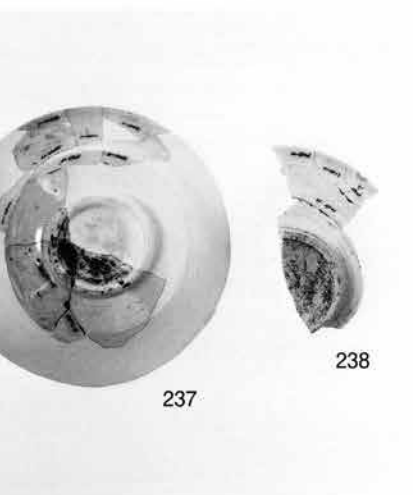
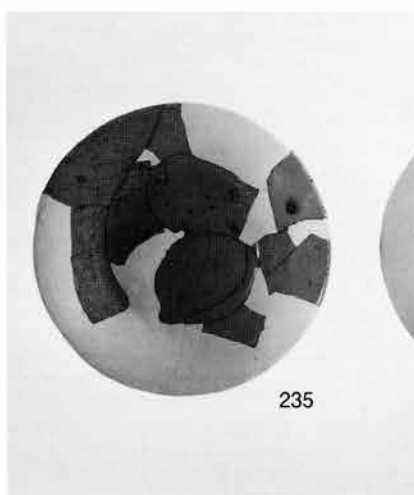
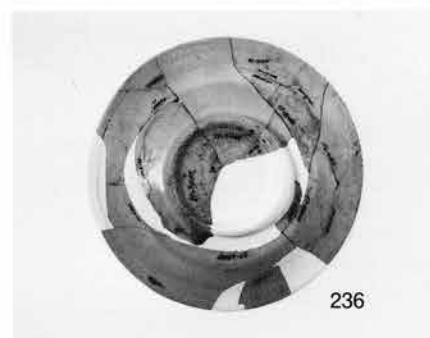
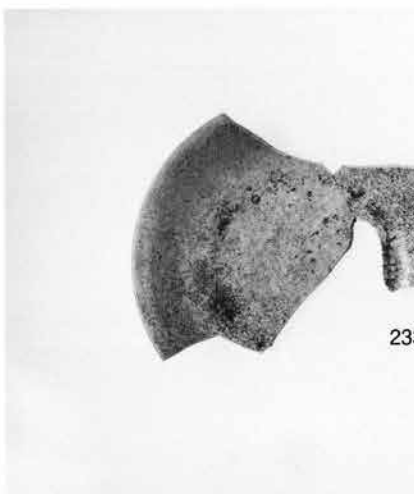
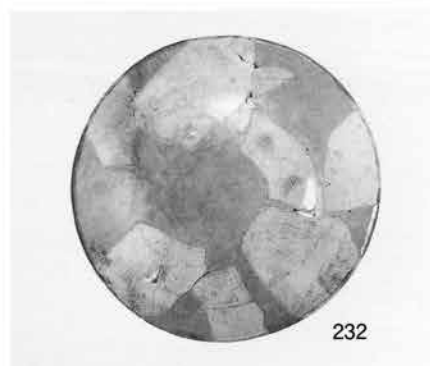
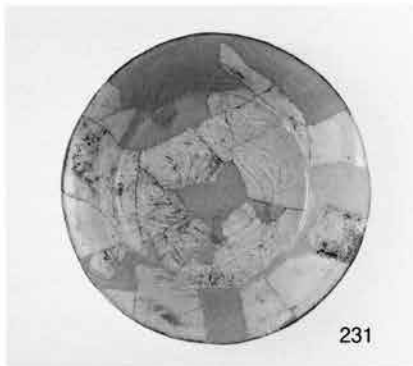
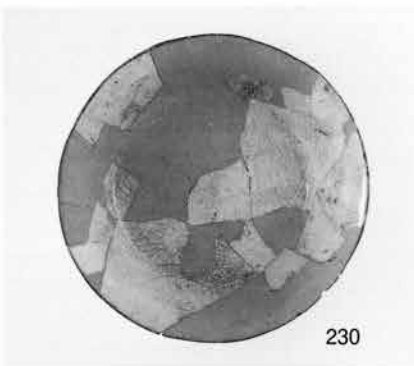
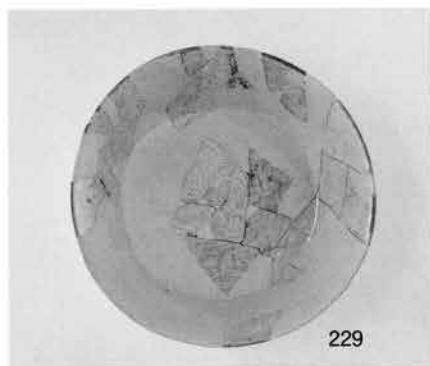
土師質皿212~220 越前焼壺221 火桶222 播鉢223~225 中国製黒釉壺226 青磁片口鉢227 乳鉢228



区画51-15 土師質皿212~220 越前焼壺221 火桶222 播鉢223~225 中国製黒釉壺226 青磁片口鉢227 乳鉢228

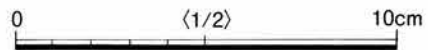
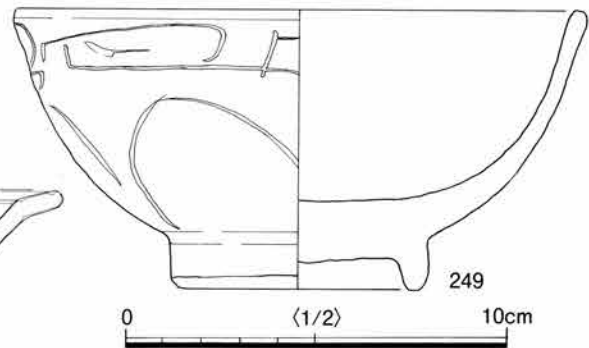
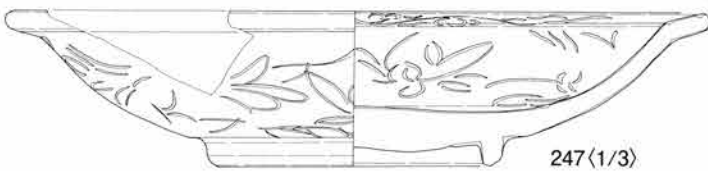
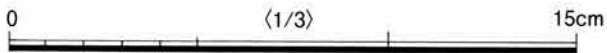
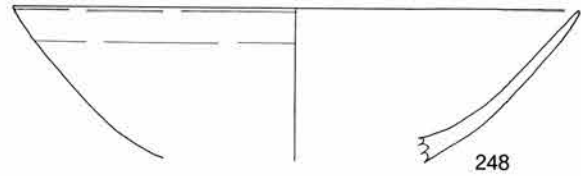
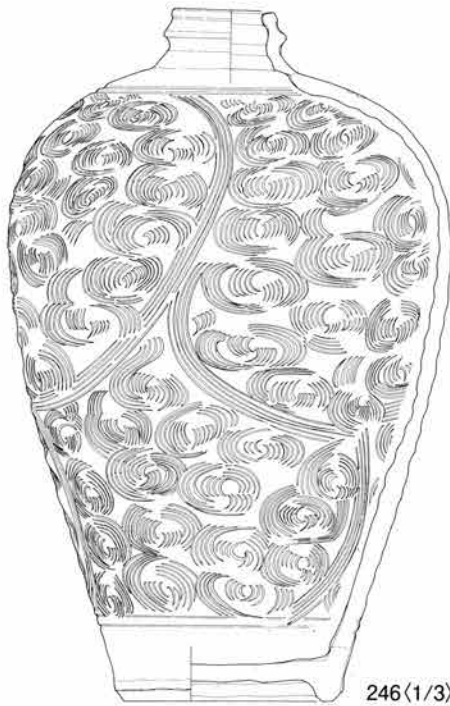
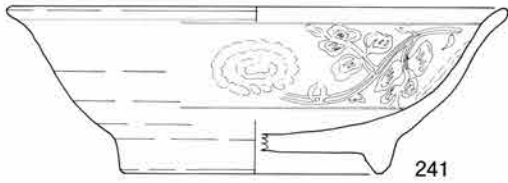
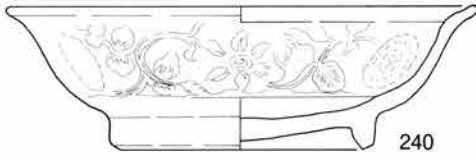
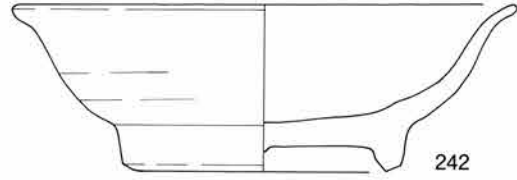
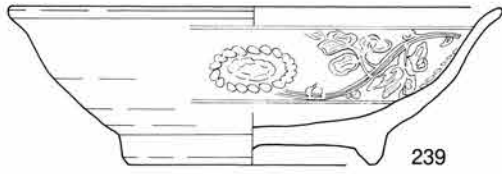
区画15



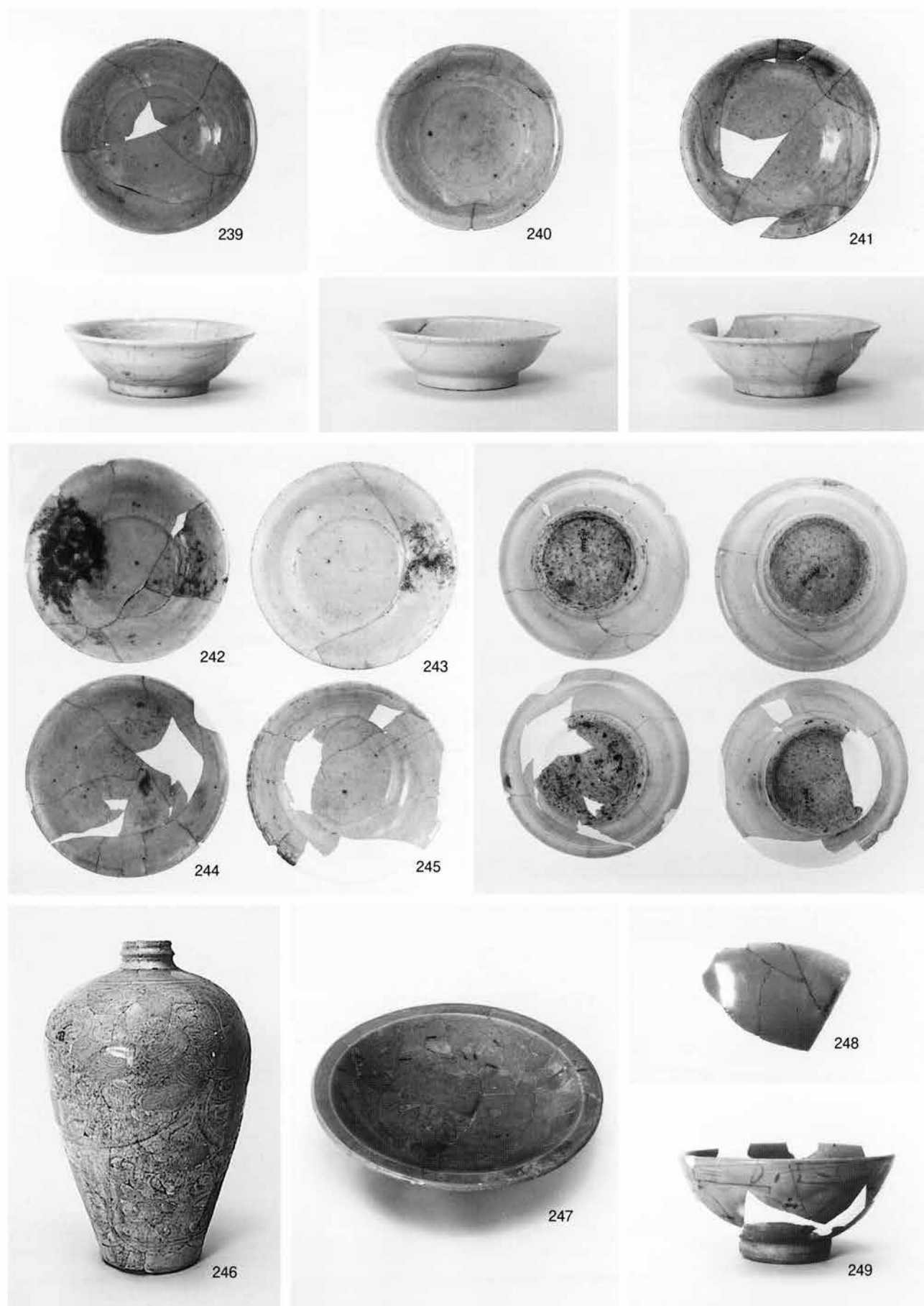


第22図 第51次調査出土遺物(16)

区画15



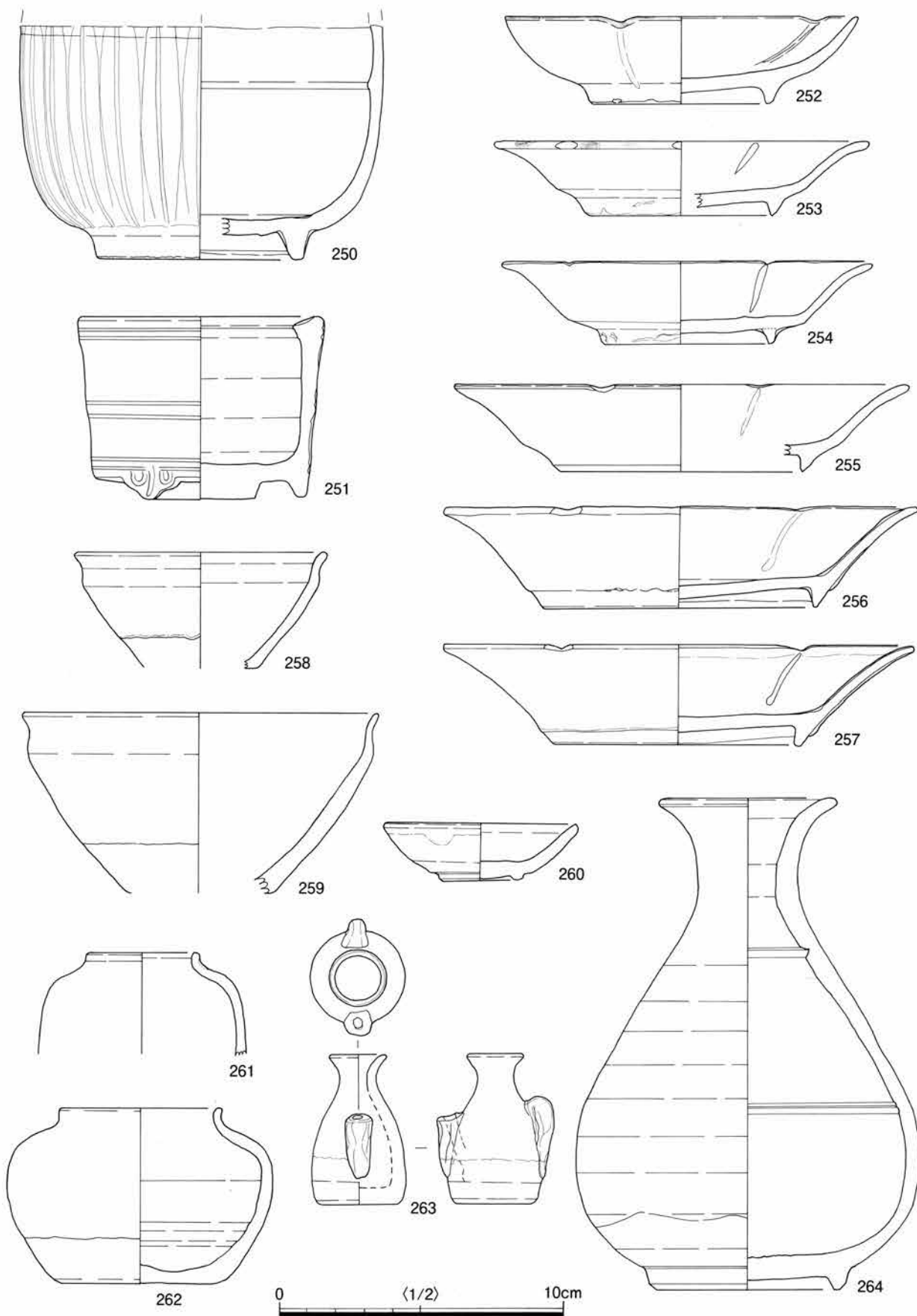
白磁皿239~245 青白磁梅瓶246 青磁盤247 碗248・249



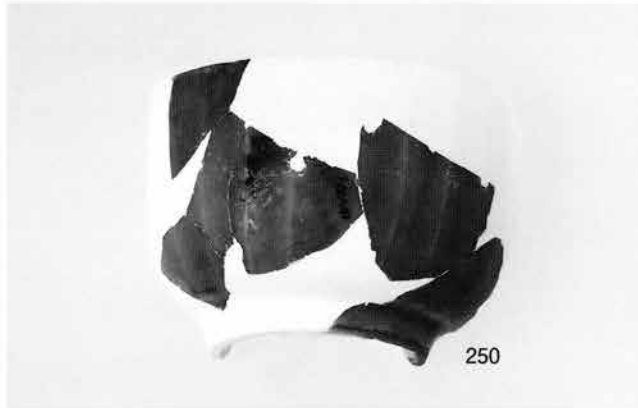
区画51-15 白磁皿239~245 青白磁梅瓶246 青磁盤247 碗248・249

第23図 第51次調査出土遺物 (17)

区画15



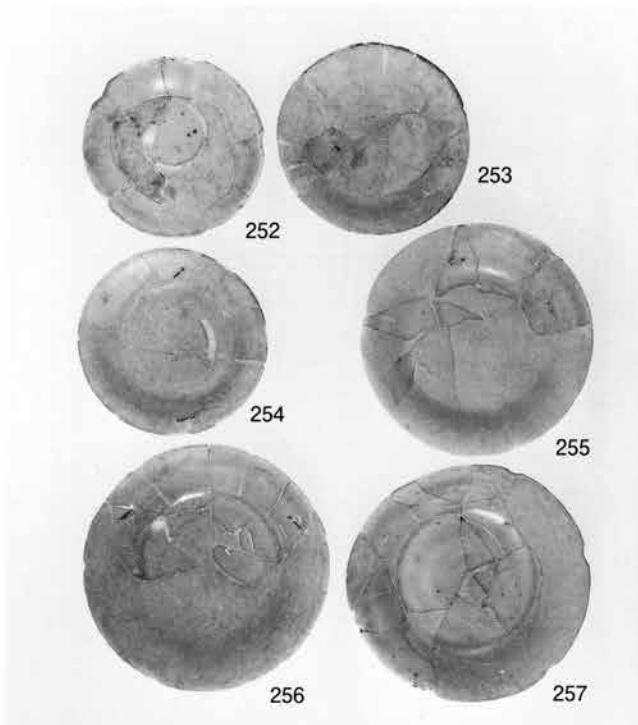
青磁壺250 香炉251 皿252~257 鉄釉碗258 皿260 茶入261・262 水滴263 黄釉碗259
中国製黒釉壺264



250



251



252

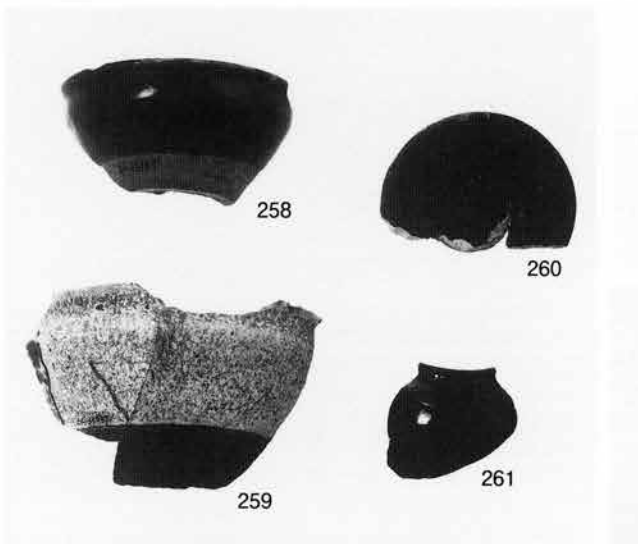
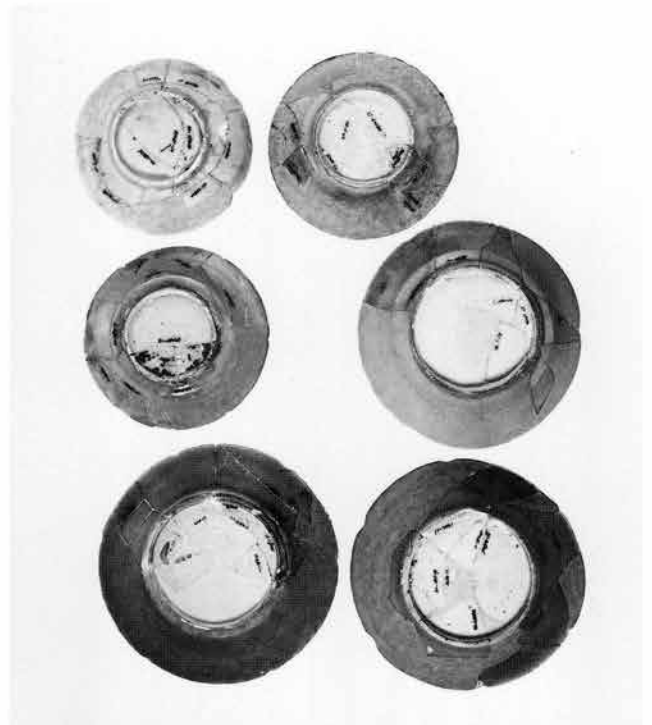
253

254

255

256

257



258

260

259

261

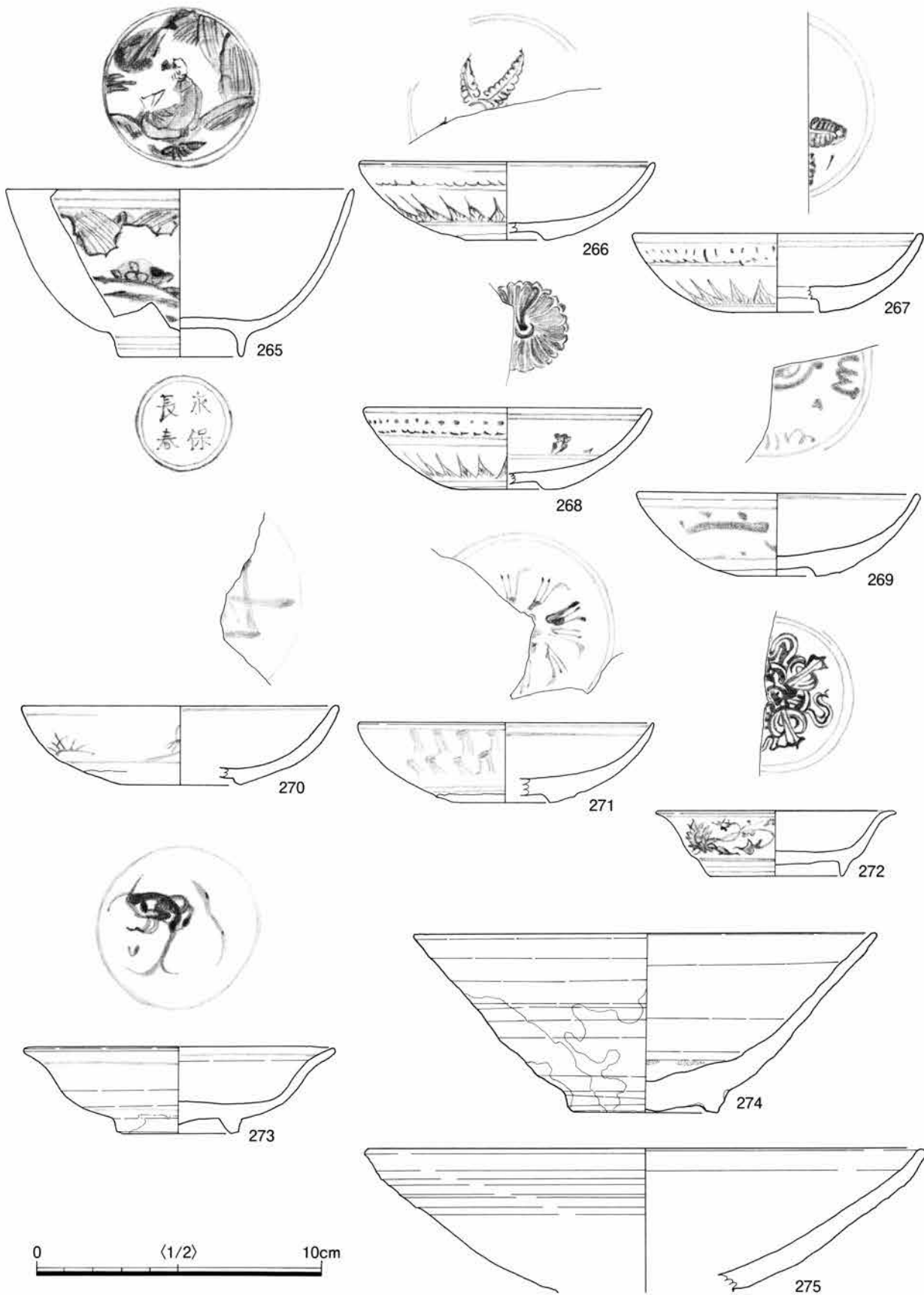


262

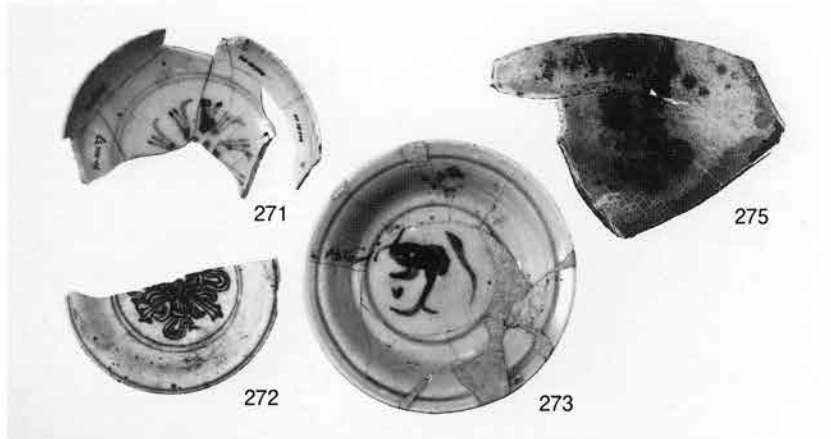
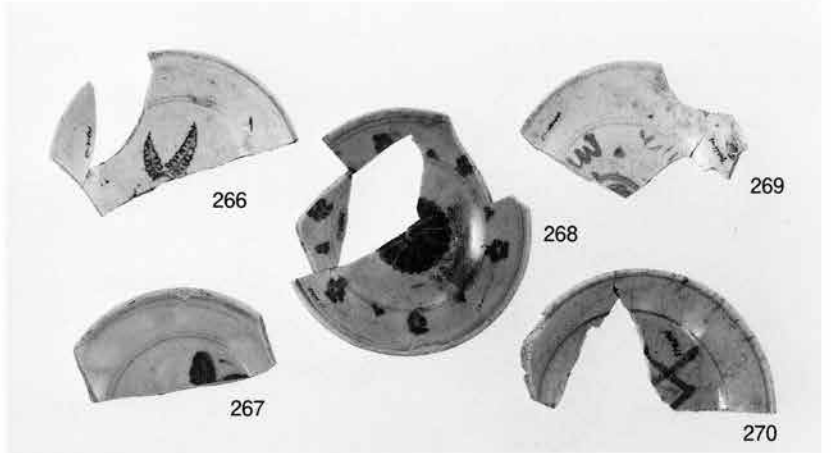
263

264

区画51-15 青磁壺250 香炉251 皿252~257 鉄釉碗258 皿260 茶入261・262 水滴263 黄釉碗259
中国製黒釉壺264

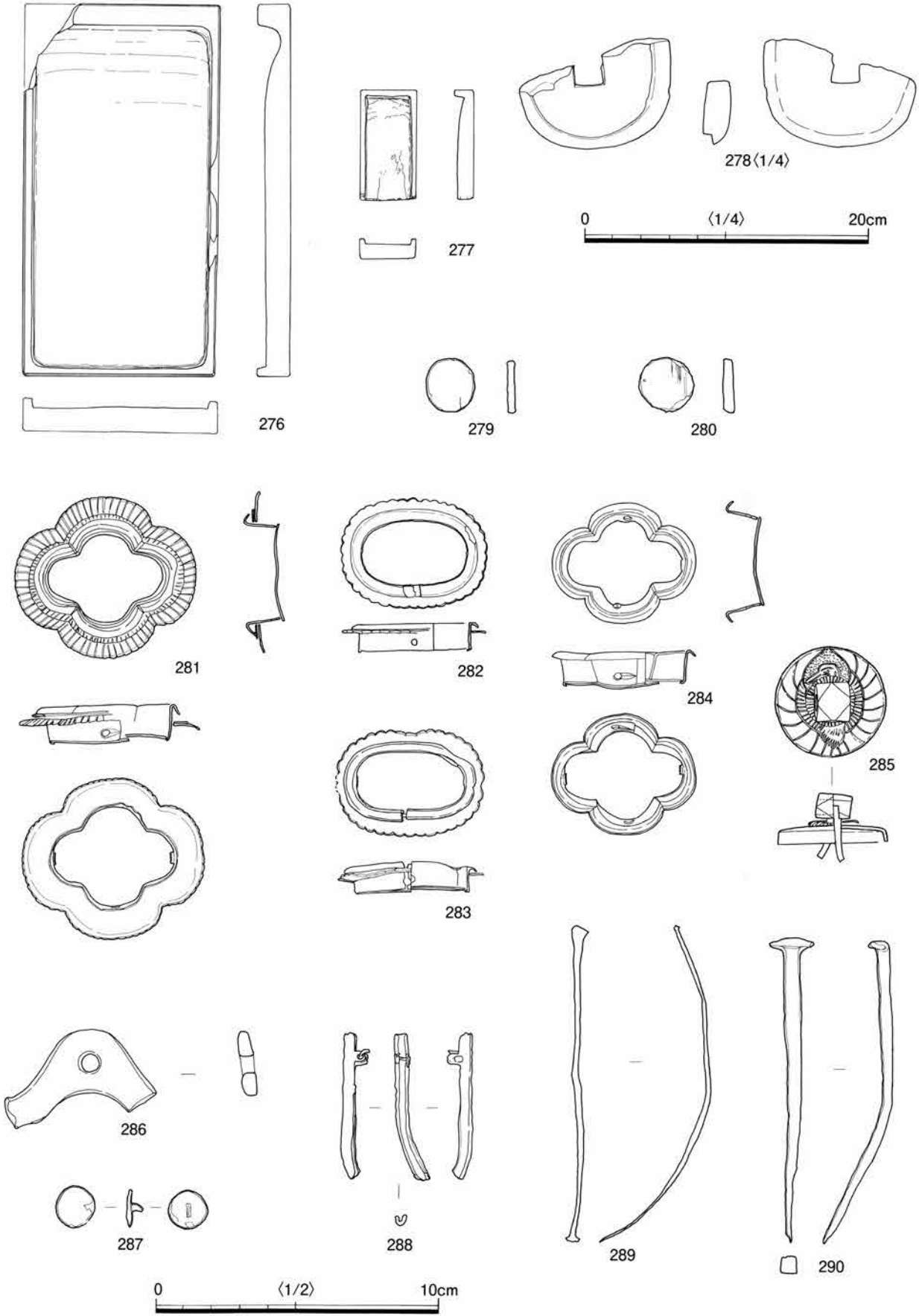


染付碗265 皿266~273 朝鮮製平碗274・275

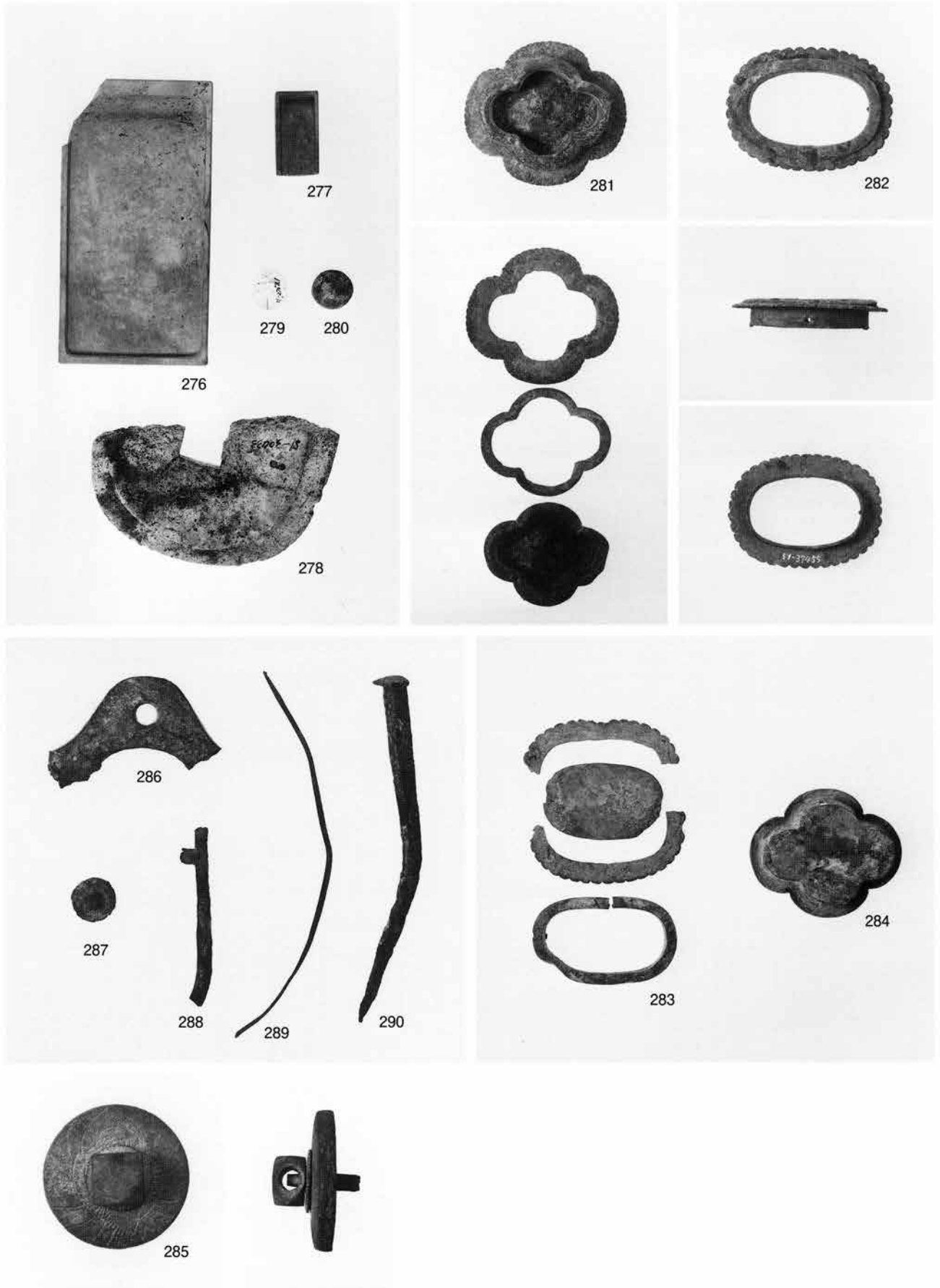


区画51-15 染付碗265 III266~273 朝鮮製平碗274・275

区画15

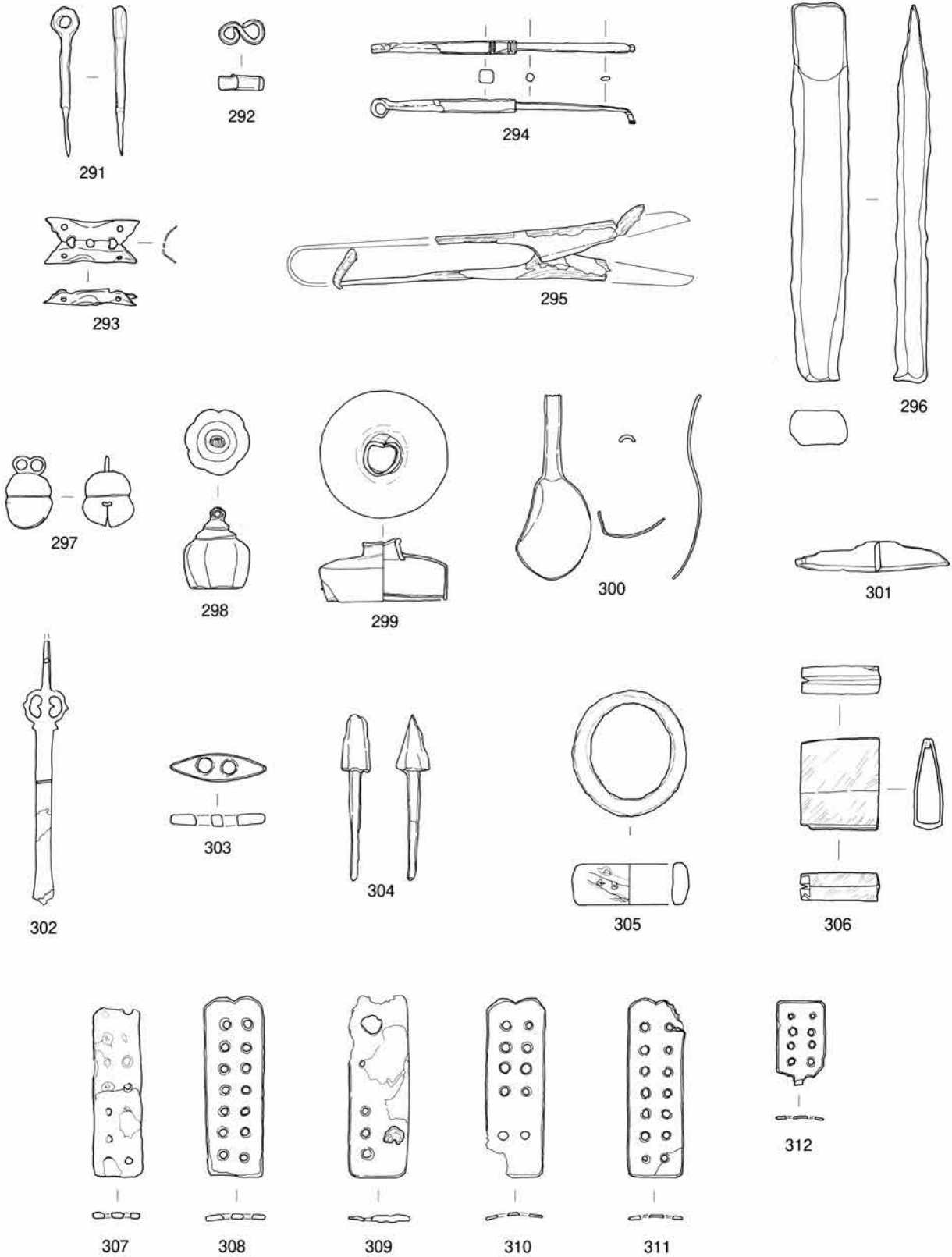


石製品 碗276・277 バンドコ278 鹿角製品 駒石279・280 金属製品 引手金具281~284 環付金具285
金具286~289 釘290



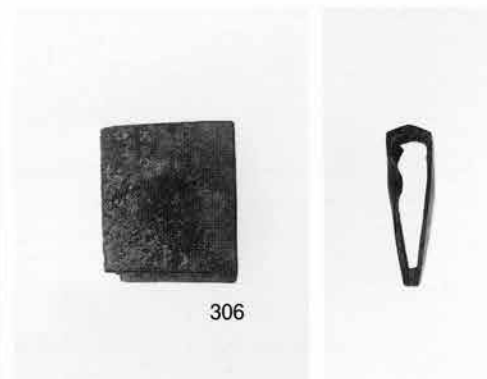
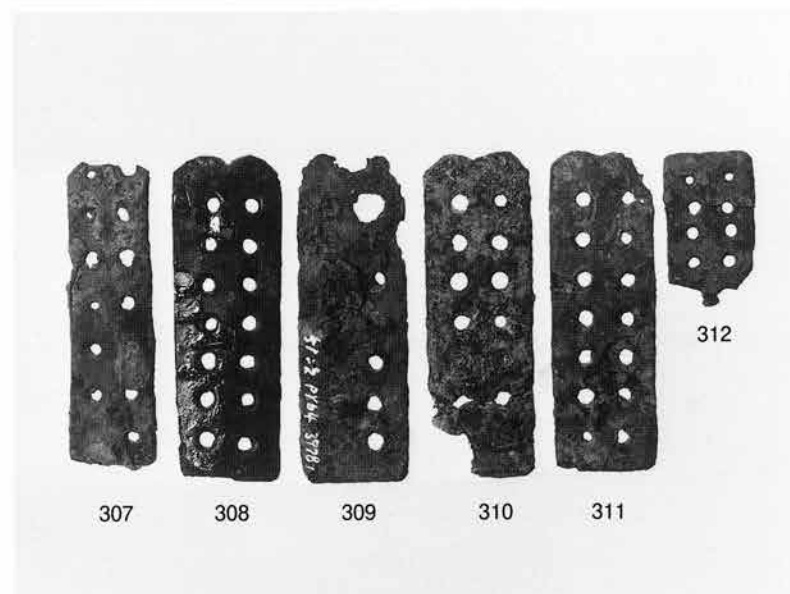
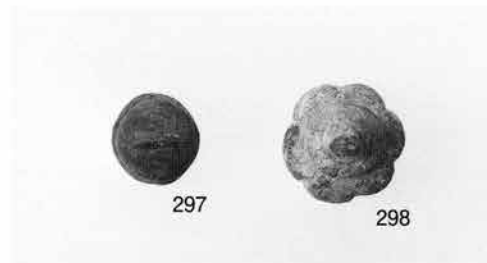
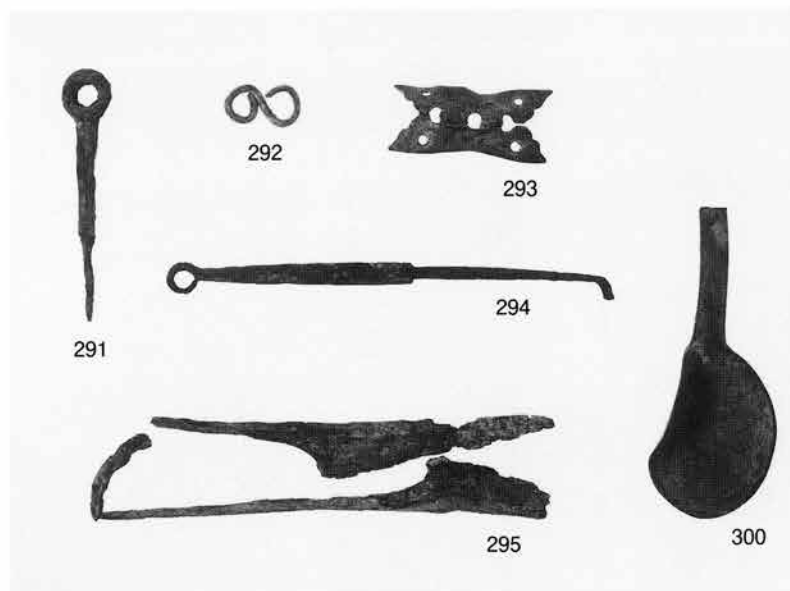
区画51-15 石製品硯276・277 バンドコ278 鹿角製品駒石279・280 金属製品引手金具281～284
 環付金具285 金具286～289 釘290

区画15



0 (1/2) 10cm

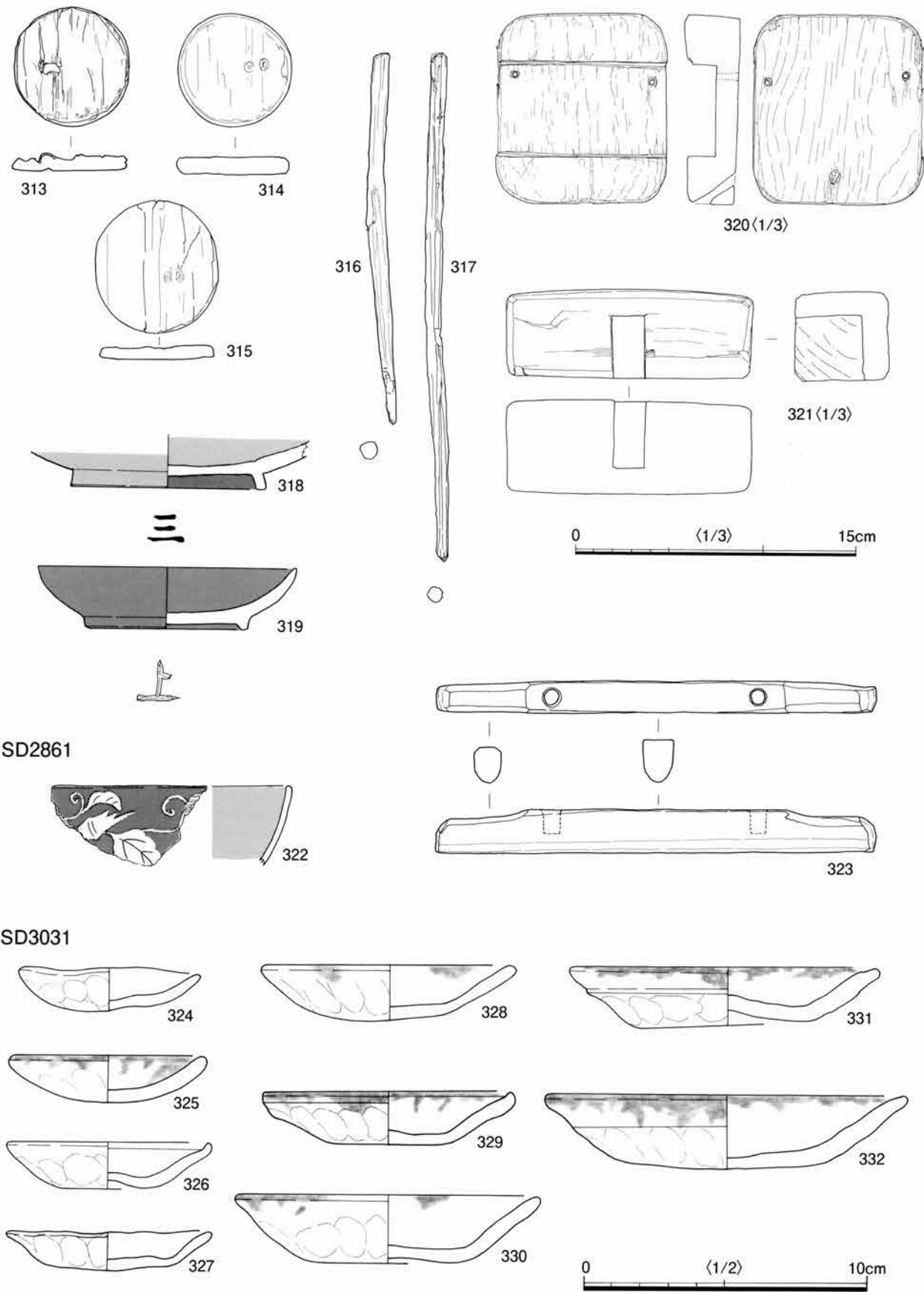
金属製品壺金291 責袴292 飾金具293・302 鍵294 鉄295 タガネ296 鈴297 錘298 水滴299 匙300 不明301 袴303 鏃304 不明鉄製品305 鏢306 小札307~312



区画51-15 金属製品壺金291 責鞆292 飾金具293・302 鍵294 鋏295 タガネ296 鈴297 錘298 水滴299
匙300 不明301 鞆303 鏃304 不明鉄製品305 鏹306 小札307~312

第27図 第51次調査出土遺物 (21)

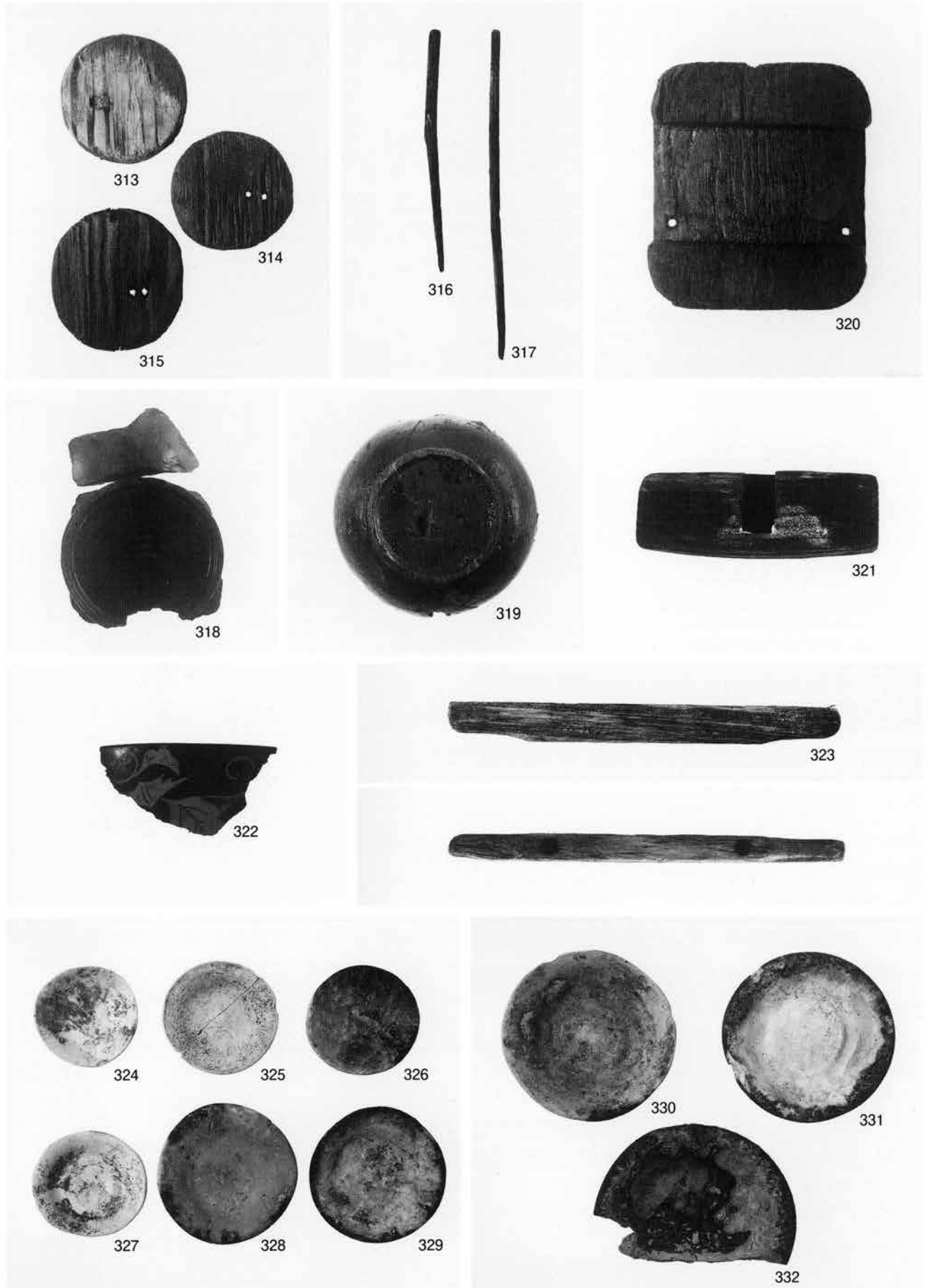
区画15



SD2861

SD3031

木製品曲物蓋313～315 箸316・317 漆皿318・319 下駄320 加工材321 漆碗322
糸巻き木杵323 土師質皿324～332

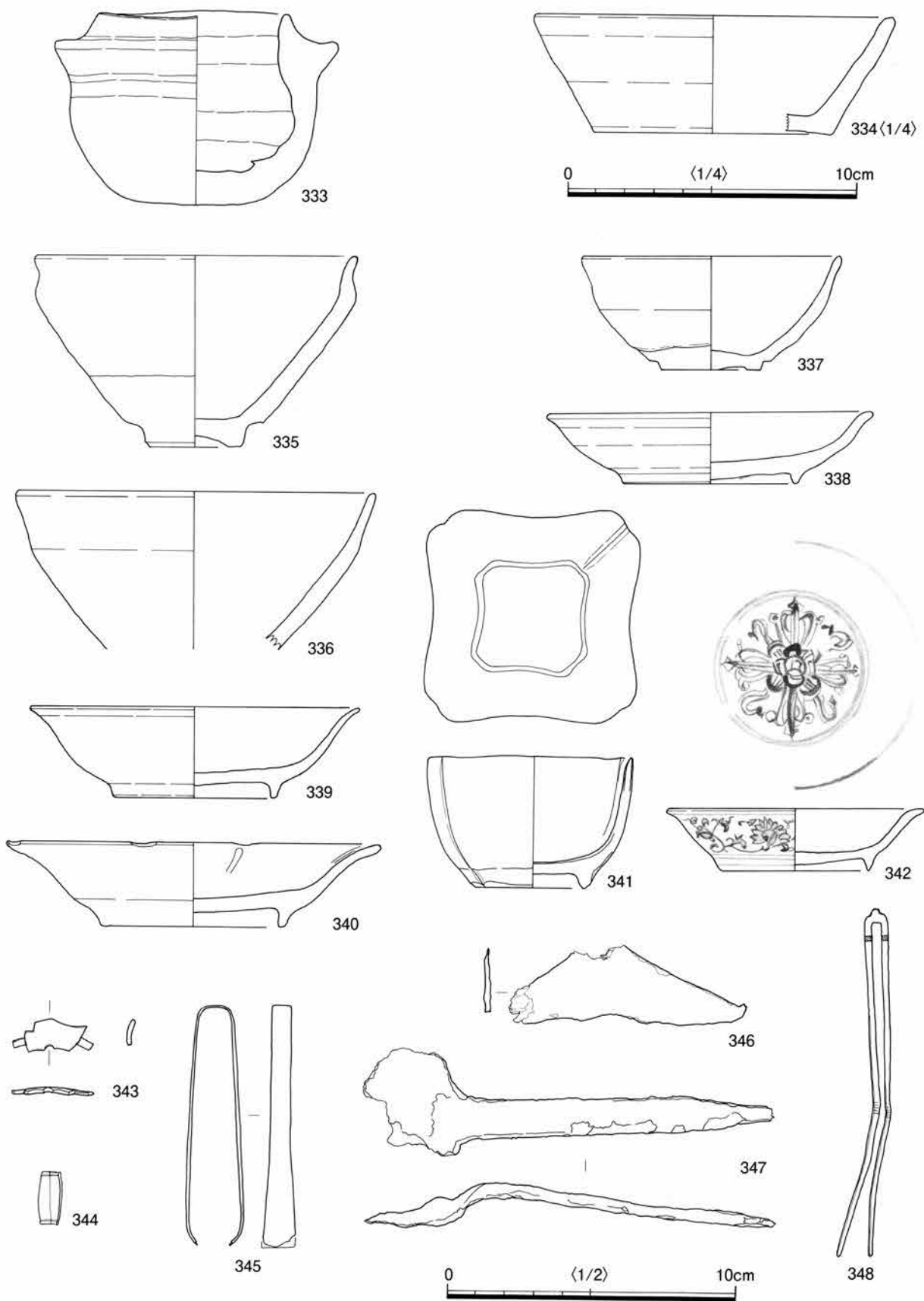


区画51-15 木製品曲物蓋313~315 箸316・317 漆皿318・319 下駄320 加工材321

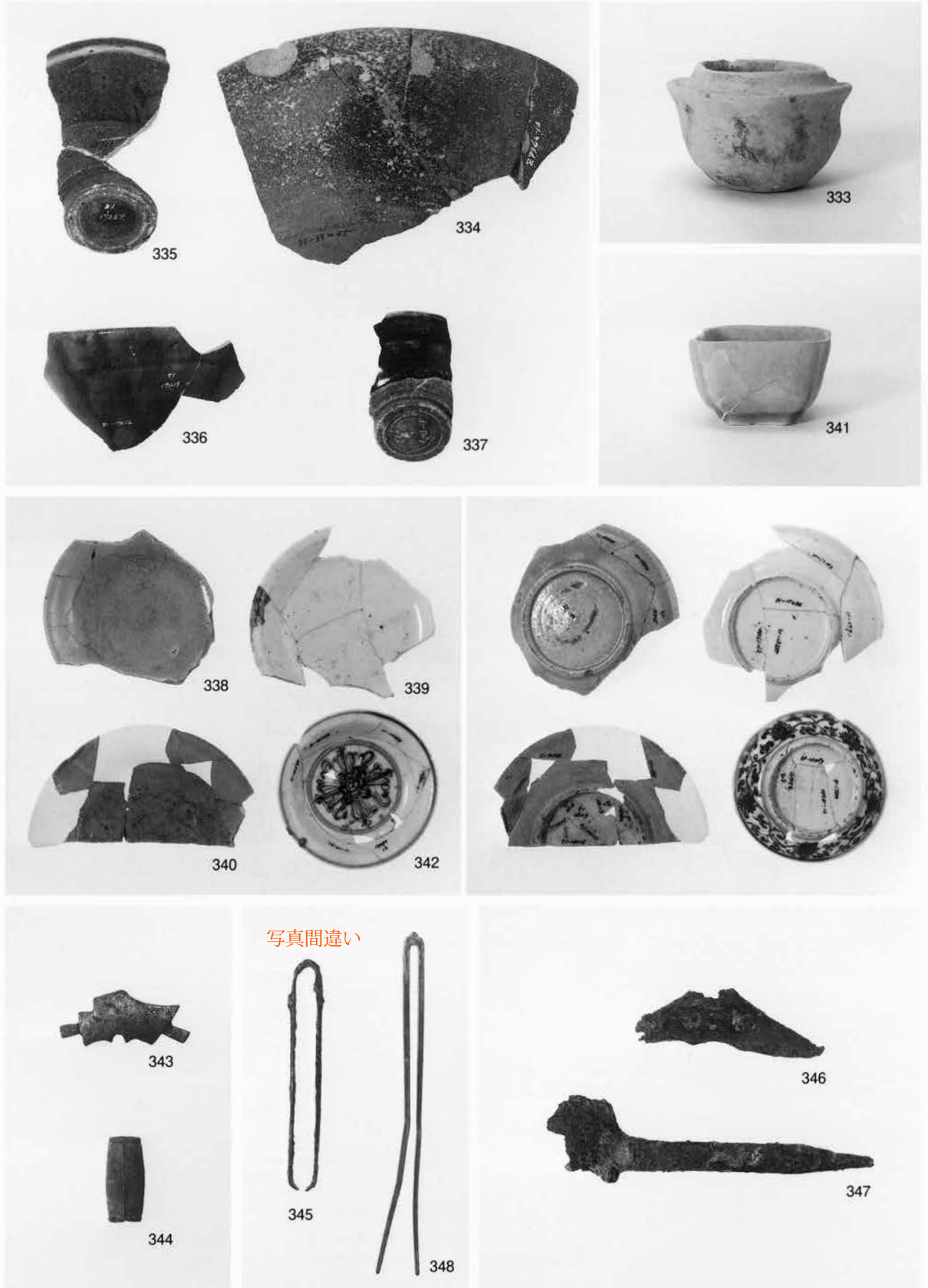
SD2861 木製品漆椀322 糸巻き木杵323 SD3031 土師質皿324~332

第28図 第51次調査出土遺物 (22)

SD3031



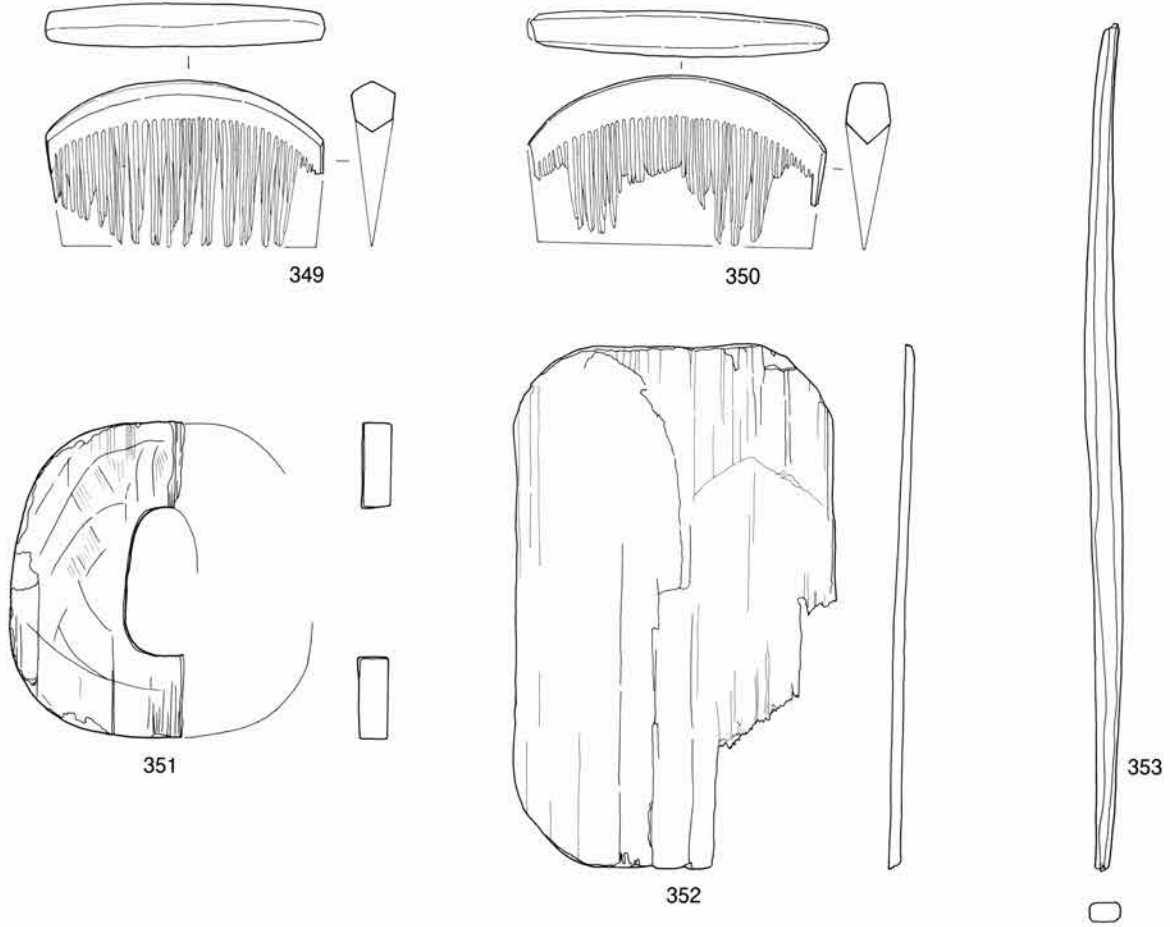
土師質土釜333 越前焼鉢334 鉄釉碗335~337 灰釉皿338 白磁皿339 青磁皿340 坏341
 染付皿342 金属製品目貫343 円筒状金具344 毛抜き345 火打金346 火皿347 簪348



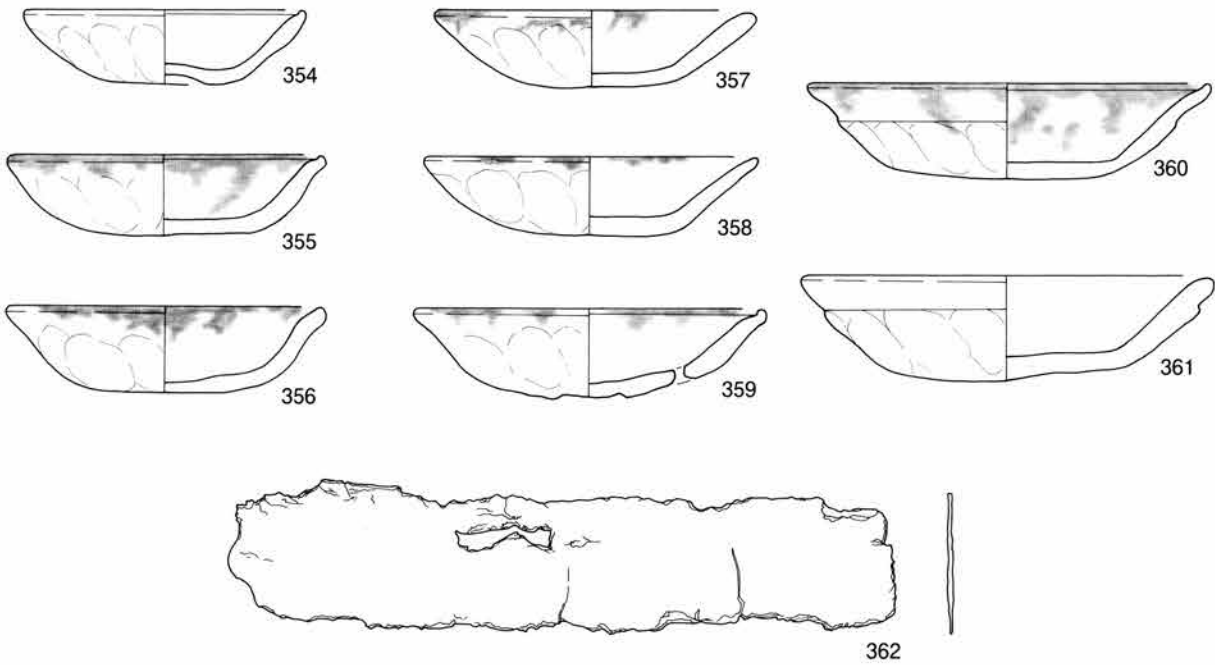
SD3031 土師質土釜333 越前焼鉢334 鉄釉碗335~337 灰釉皿338 白磁皿339 青磁皿340 坏341
 染付皿342 金属製品目貫343 円筒状金具344 毛抜き345 火打金346 火皿347 簪348

第29図 第51次調査出土遺物 (23)

SD3031

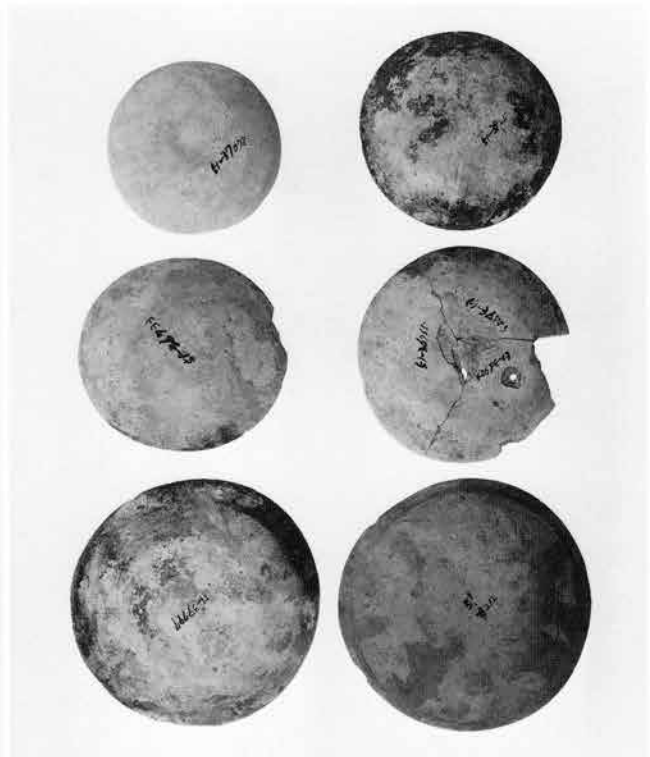
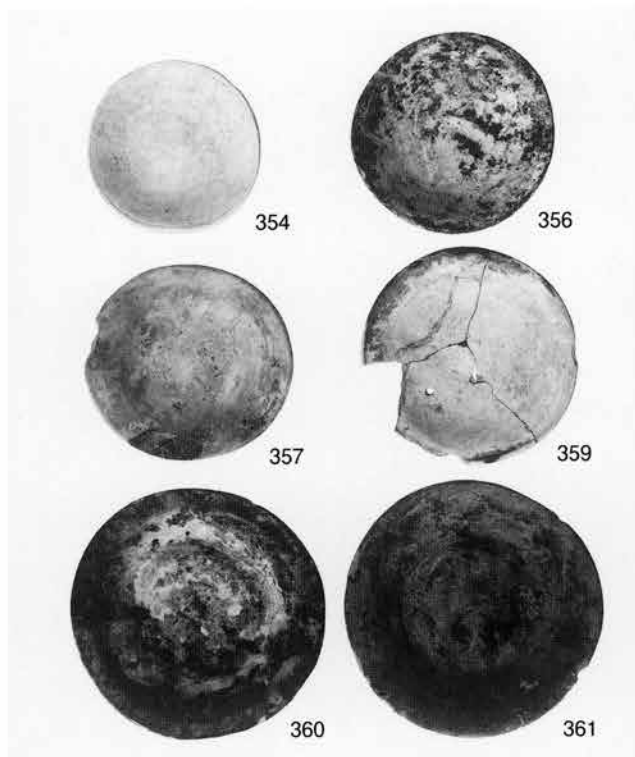
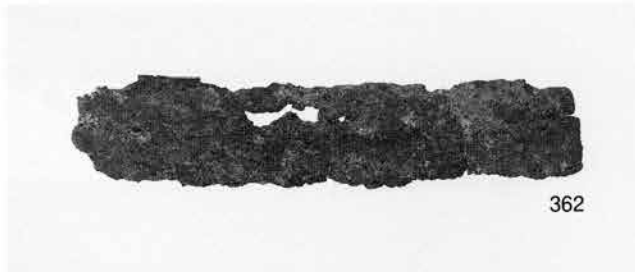
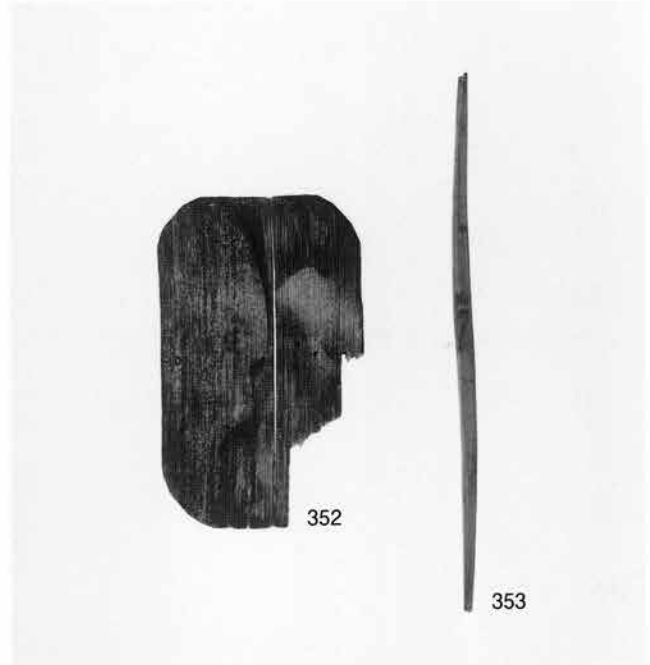
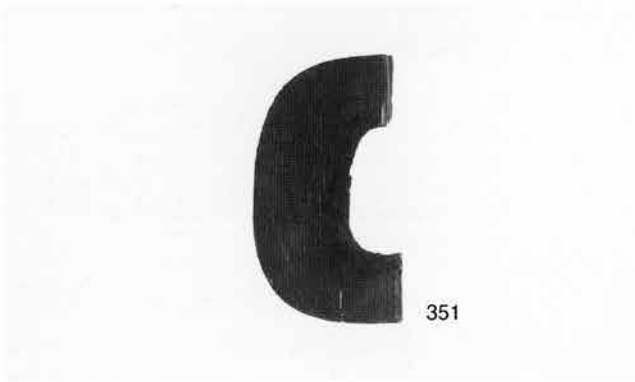
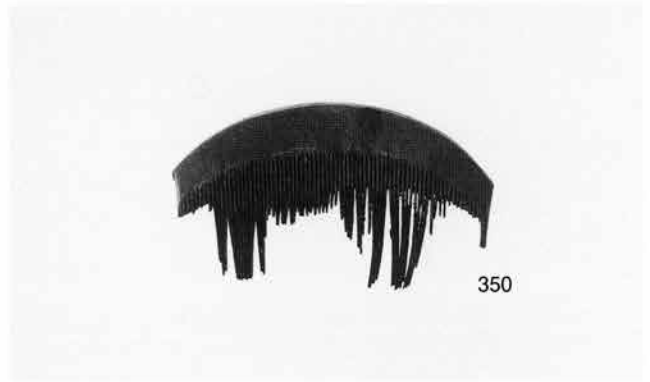


SD3032



0 (1/2) 10cm

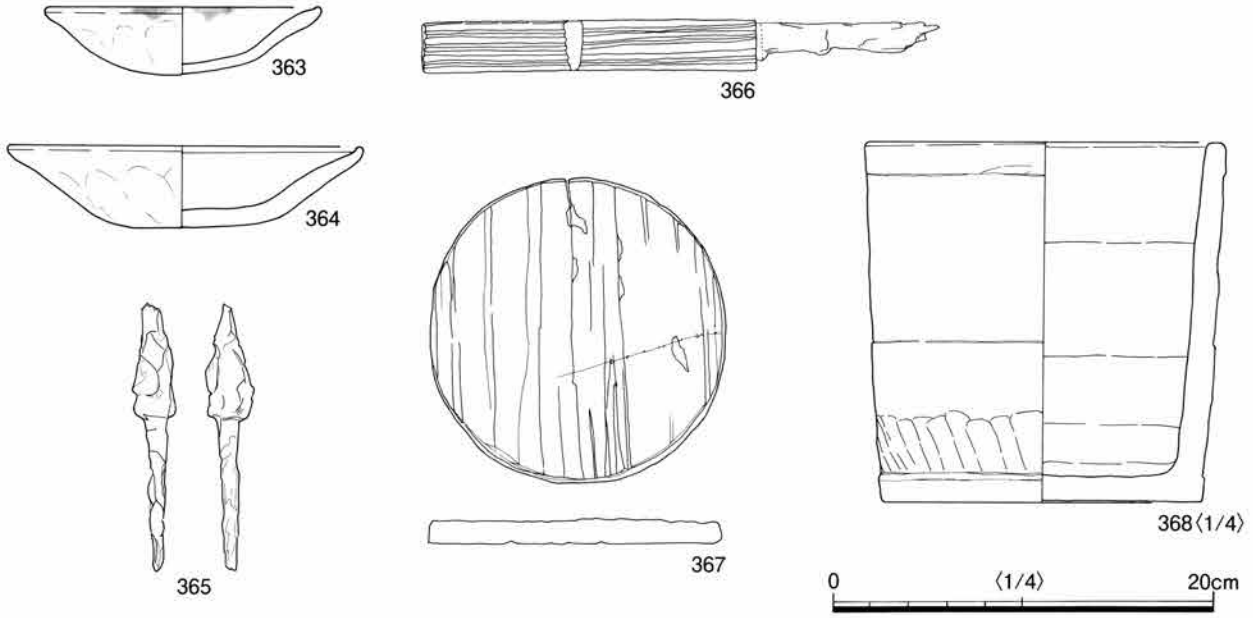
木製品櫛349・350 鏝351 折敷352 箸353 土師質皿354～361 金属製品包丁362



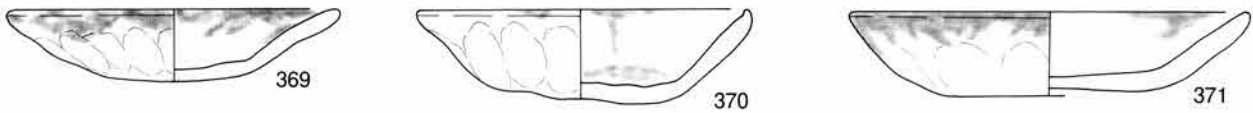
SD3031 木製品櫛349・350 鏢351 折敷352 箸353 SD3032 土師質皿354～361 金属製品包丁362

第30図 第51次調査出土遺物 (24)

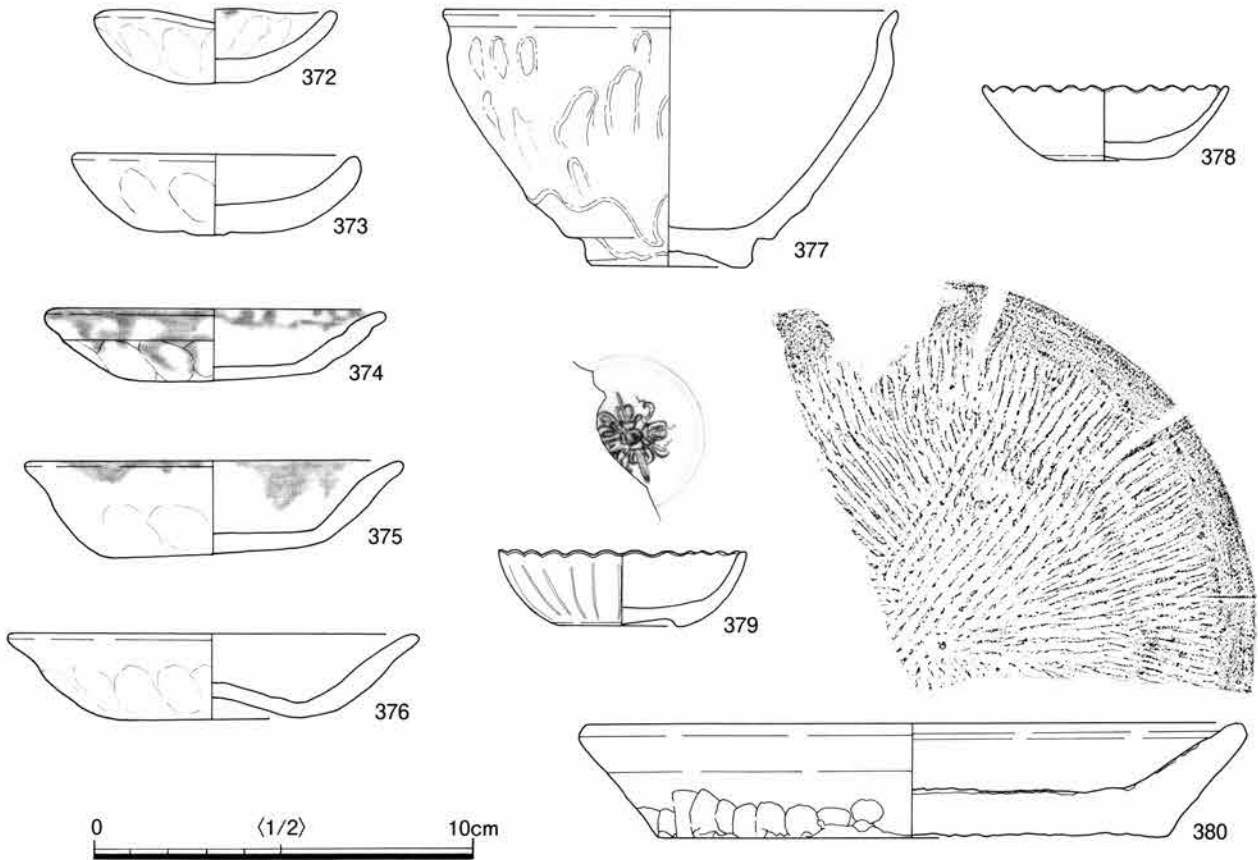
SD3034



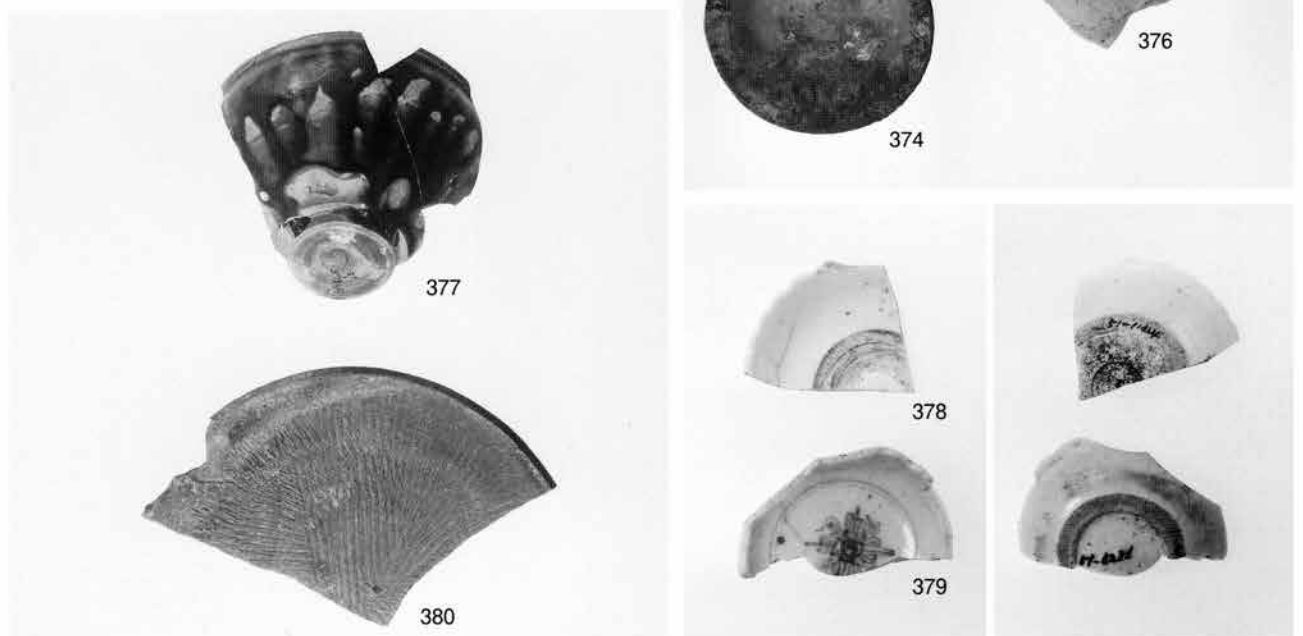
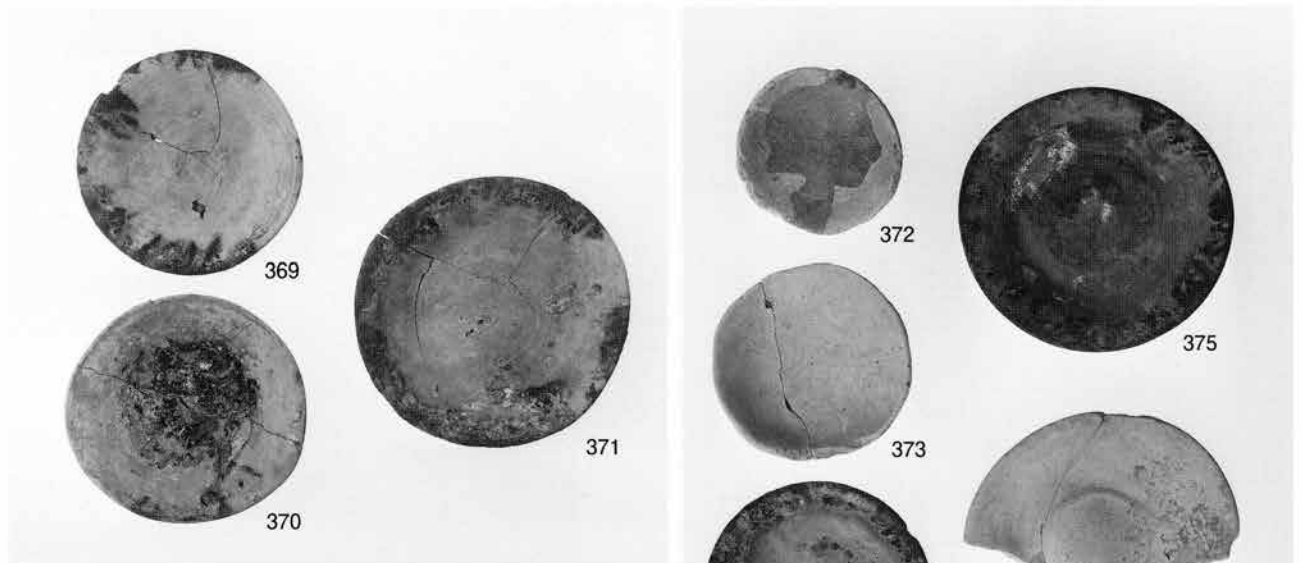
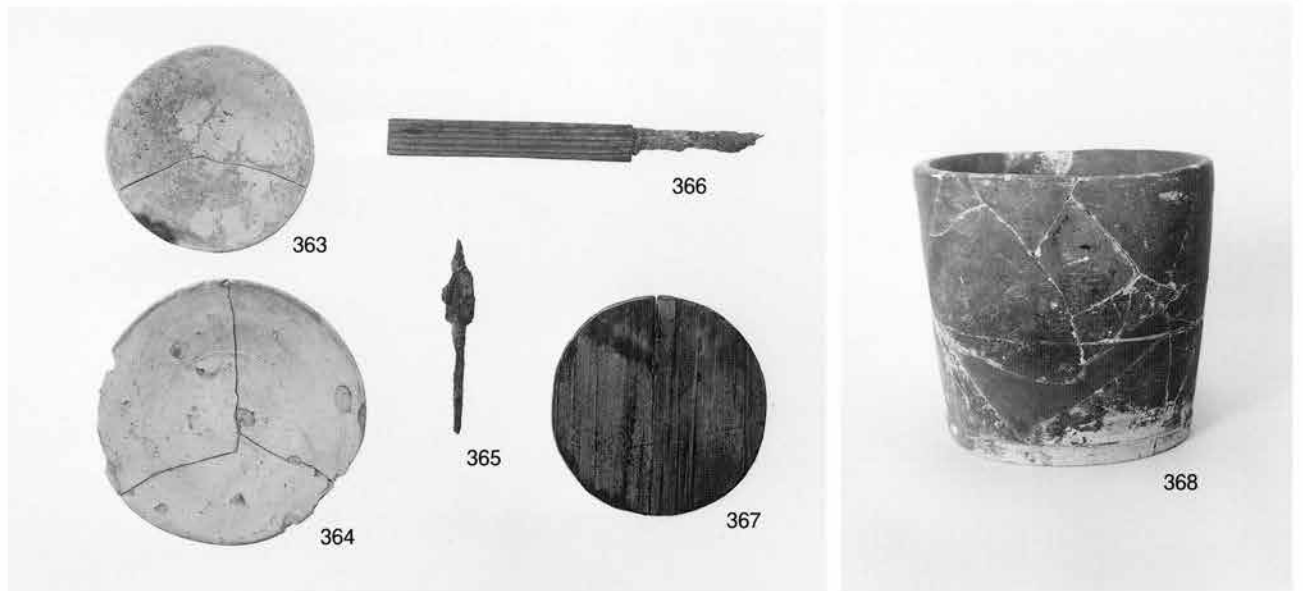
SD3035



SD3036



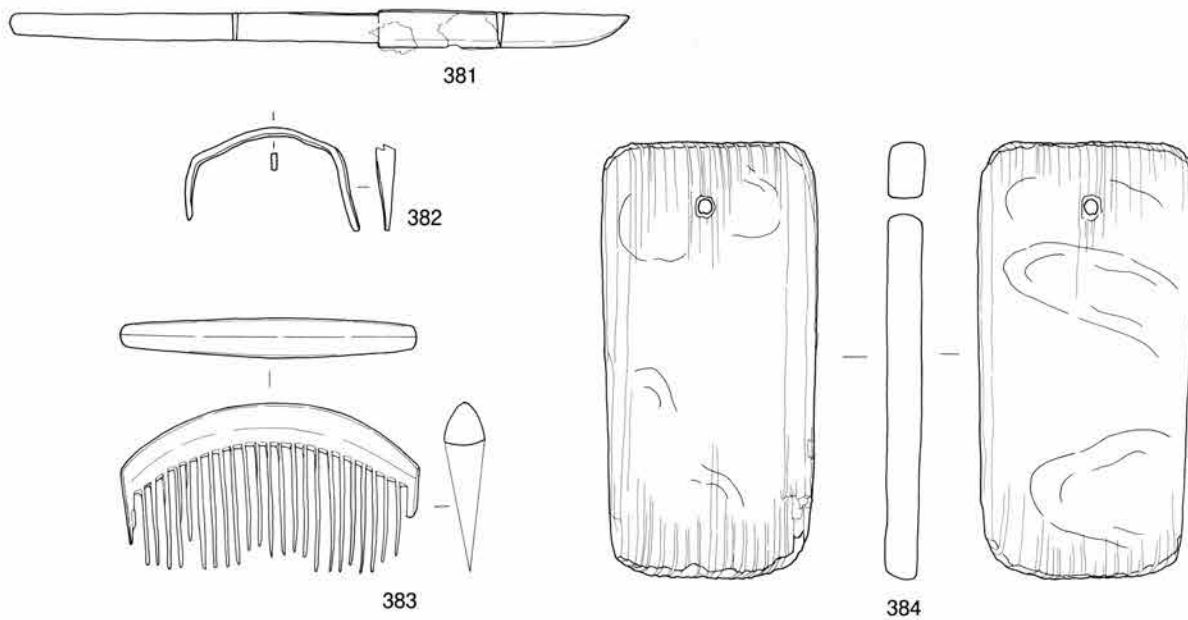
土師質皿363・364・369～376 金属製品鏃365 小柄366 木製品曲物底板367
越前焼火桶368 卸皿380 鉄釉碗377 白磁菊皿378 染付菊皿379



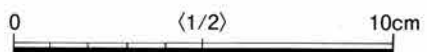
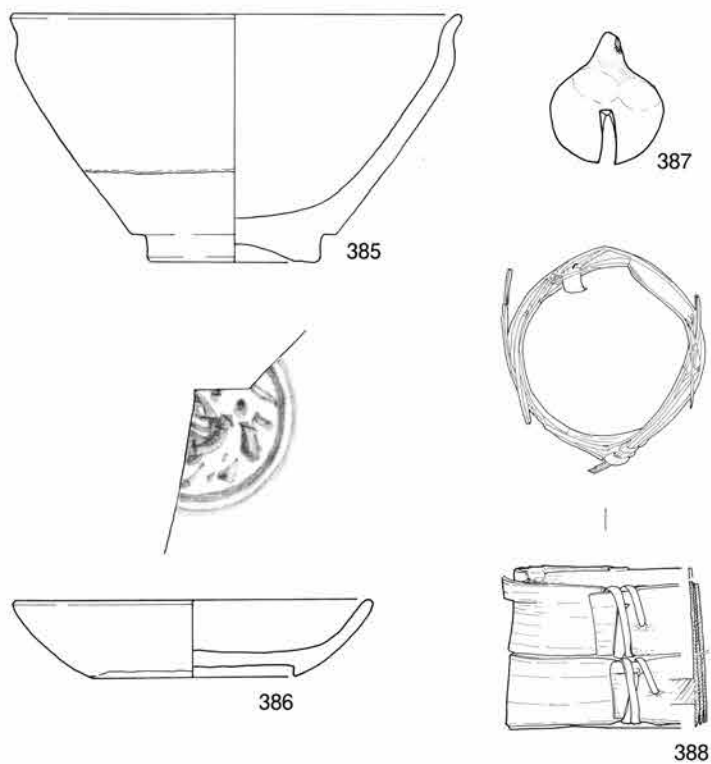
SD3034 土師質皿363・364 金属製品鏃365 小柄366 木製品曲物底板367 越前焼火桶368
 SD3035 土師質皿369～371 SD3036 鉄釉碗377 白磁菊皿378 染付菊皿379 越前焼卸皿380

第31図 第51次調査出土遺物 (25)

SD3036



SD3037



金属製品 刀子381 鏃382 木製品 櫛383 下駄384 曲物388 鉄釉碗385 染付皿386
土師質土鈴387

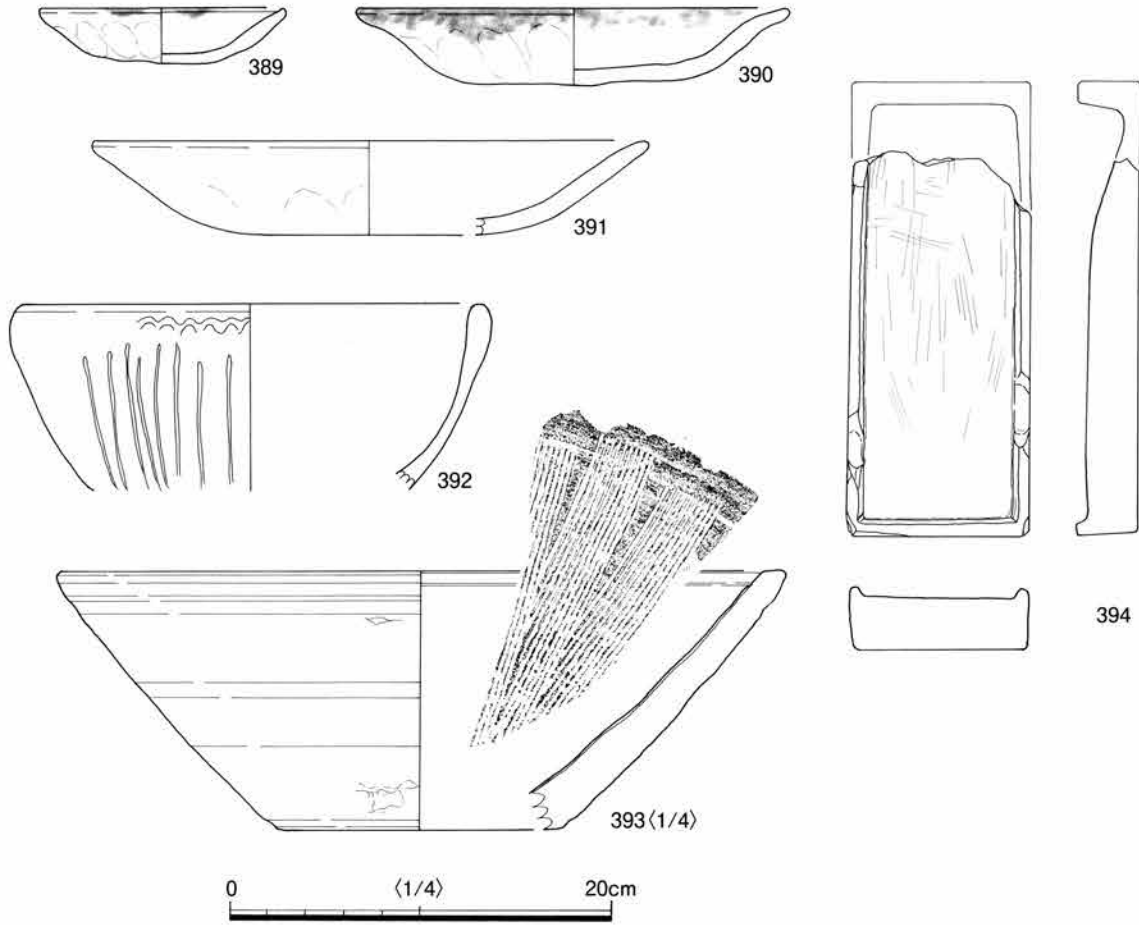


SD3036 金属製品刀子381 鏝382 木製品櫛383 下駄384

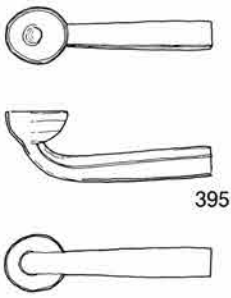
SD3037 鉄釉碗385 染付皿386 土師質土鈴387 木製品曲物388

第32図 第51次調査出土遺物 (26)

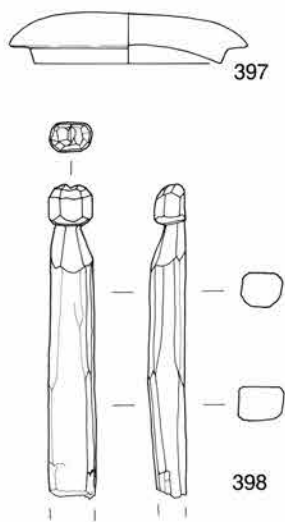
SD3040



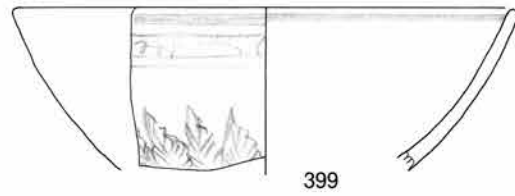
SD3042



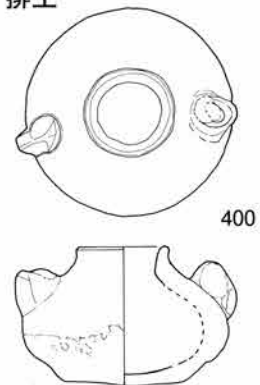
SD3050



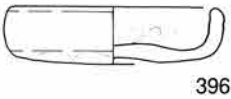
表土



排土

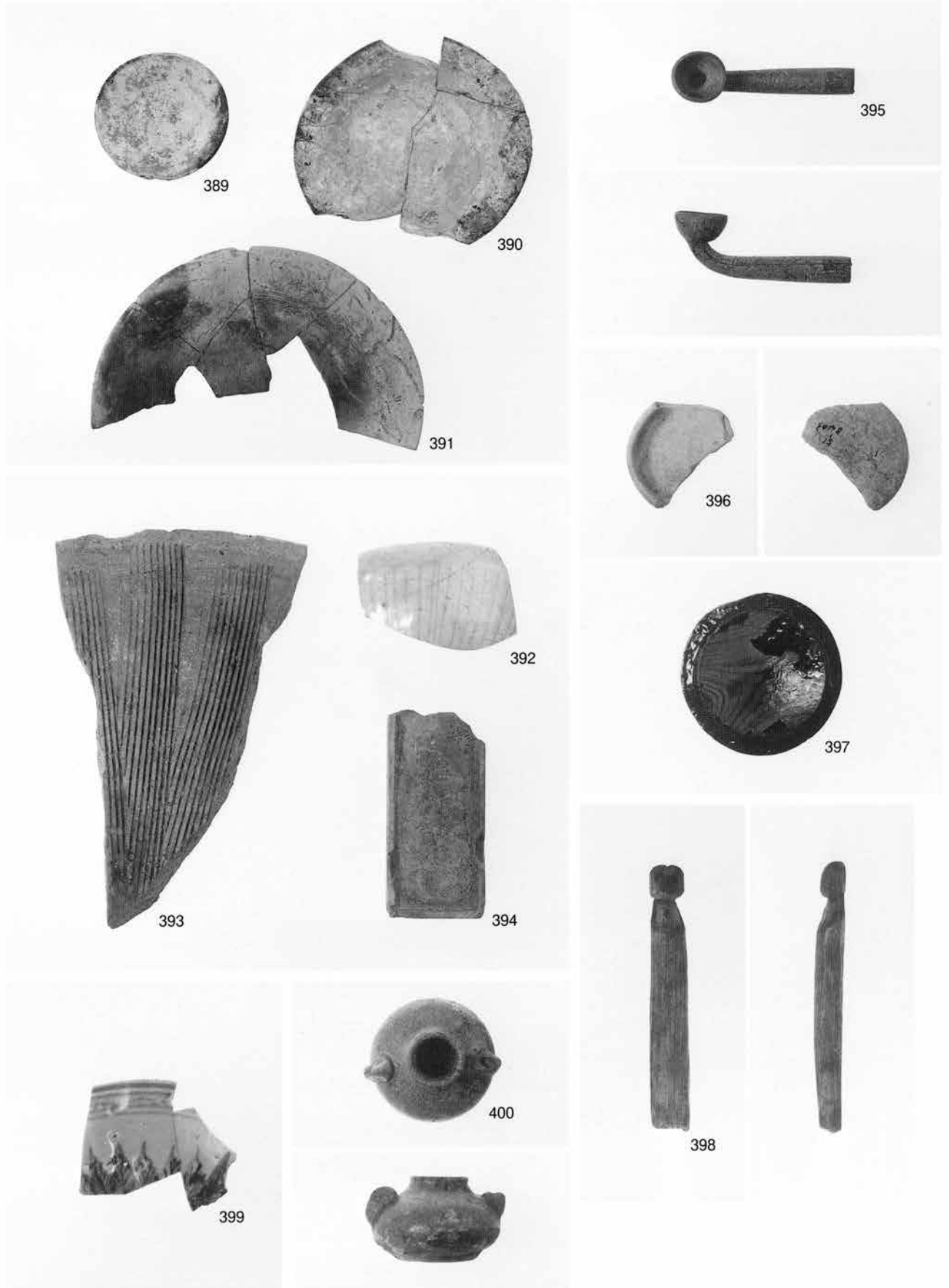


SD3045



0 (1/2) 10cm

土師質皿389~391・396 青磁碗392 越前焼播鉢393 石製品硯394 金属製品キセル395
木製品漆塗り蓋397 陽物398 染付碗399 灰釉水滴400



SD3040 土師質Ⅲ389～391 青磁碗392 越前焼播鉢393 石製品硯394

SD3042 金属製品キセル395 SD3045 土師質Ⅲ396 SD3050 木製品漆塗り蓋397 陽物398

表土 染付碗399 排土 灰釉水滴400

Ⅲ 第 52 次 調 査

Ⅲ 第52次調査

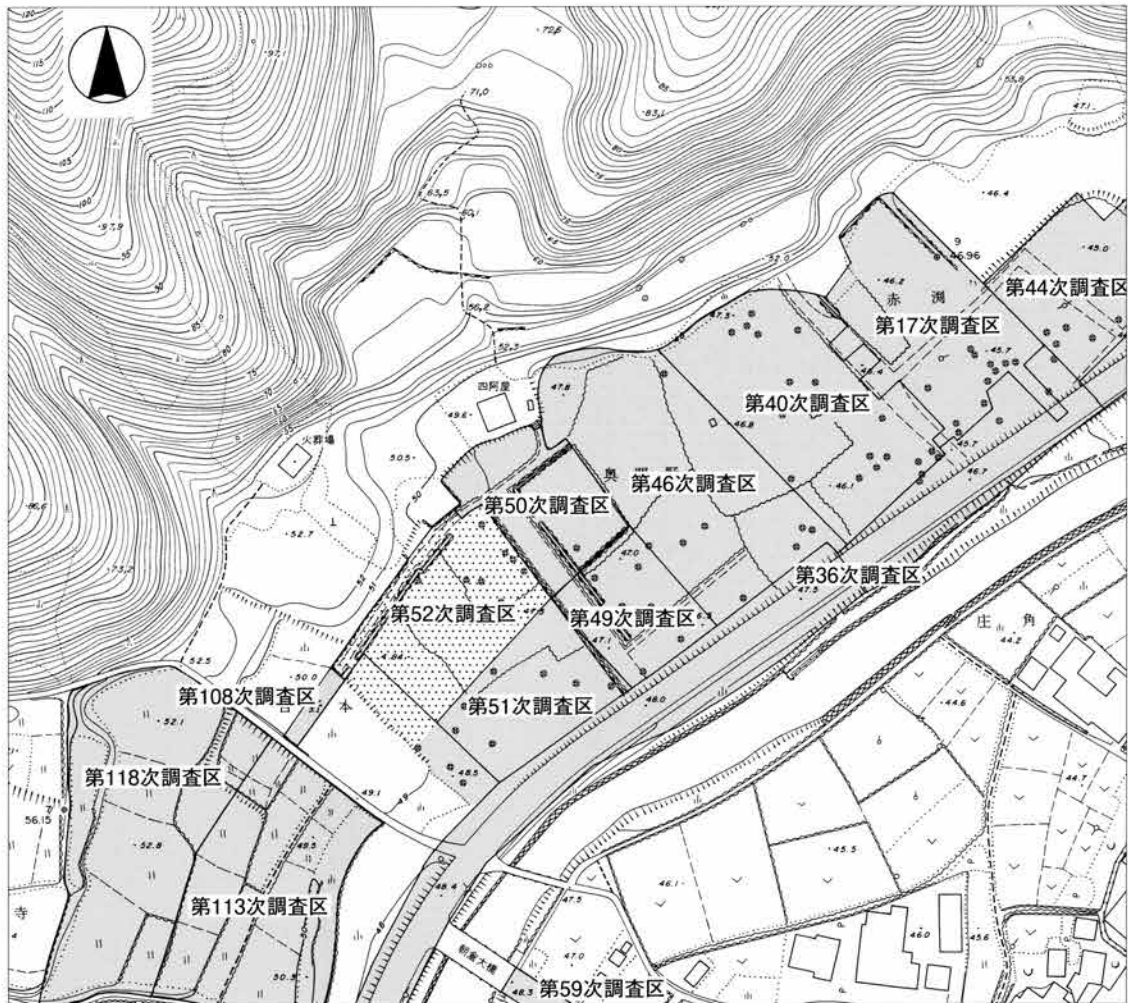
1. 調査の経過と概要

今回報告する第52次調査区は、福井市城戸ノ内町吉野本地係に所在し、第51次調査区の西隣に位置する。

第52次調査地区のある吉野本地係から北へ奥間野地係・赤淵地係にかけては、県道鯖江・美山線改良工事に伴う調査も含めて第17次調査・第40次調査・第42次調査・第44次調査、第46次調査、第49・50次調査と発掘調査を重ね約6,000m²を発掘してきた。これらの地区は一乗谷川近くを南北方向に幅8mの南北幹線道路がとおり、この幹線道路に面して町屋が軒を連ねる。山裾側はサイゴ寺跡、法万寺跡など寺院があった。その中間は中級の武家屋敷が存在する地区である。

今回の第51次・52次調査は、大規模な武家屋敷が並ぶ平井地区とは異なる吉野本～赤淵地係の町割りやその構成を明らかにすることを旨とした第4次5カ年計画の調査の第4年次にあたる。

第52次調査は第51次調査に引き続き、昭和60年8月4日から開始した。11月7日には第51次調査地区

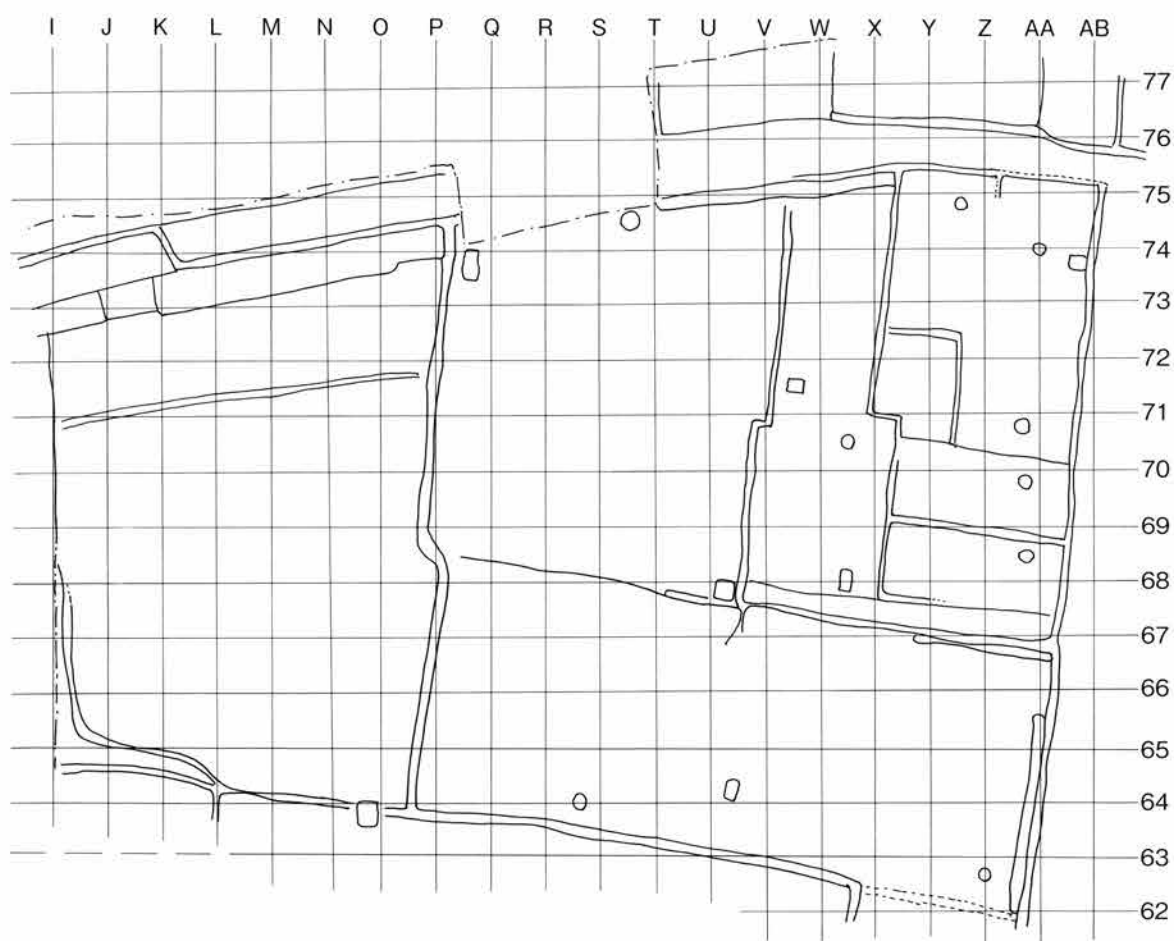


挿図7 第52次調査区周辺地形図 (1/2,000)

と合せてヘリコプターによる写真測量を行い、12月6日までに補足調査も終了した。

今回報告する第52次調査区は、51次調査区と接する所は発掘調査で見つかった屋敷によって分けたので、実際の調査地区と少し異なる。すなわちいわゆる「医者の家」は第52次調査でも発掘したが第51次調査報告で扱い、反対に南側の52-8は第51次調査でも発掘したが第52次調査分として報告する。

第52次調査は、東西方向の幹線道路SS2001に面して面積45m²ほどの小区画の家が4軒並ぶ。これらの家々はそれぞれ井戸を持つ。しかしながら、これまで便所として考えられてきた石積遺構はない。東西道路に直角に交わる南北方向の道路SS2952に面しては区画52-7(面積400m²)と区画52-8(700m²)程の屋敷が2軒ある。このうち区画52-8は「医師の家」よりやや幅の広い土塀基礎を持ち、土塀には薬医門をもつところから武家屋敷を想定している。ただ今回の屋敷では主屋のほか主要な建物跡が削平されていたため屋敷内部の構成については詳らかにならなかった。



挿図8 第52次調査区グリッド設定図

第52次調査日誌抄

昭和60年(1985)8月5日～12月6日

- | | | | |
|------|---|-------|--|
| 8. 5 | 地区杭の設定 | 9. 2 | SS2952北半分の道路面(砂利敷)を検出。石垣が崩れて作業困難。 |
| 6 | 調査区の東北から遺構検出を開始。礎石建物SB3210を検出。 | 4 | SS2952上の盛り土は、上下2層に分かれ、上層からは江戸後期の伊万里出土。 |
| 7 | 第51次調査区から続く溝SD3035を西に向かって掘り進める。その南は遺構らしき石やピットなし。 | 6 | 西側の上の屋敷に登る坂道を検出。 |
| 8 | 51-1・2付近を調査。区画の溝を検出。 | 10 | SA3184の南半分を調査。区画52-8の門を検出。 |
| 10 | 天候を見て、西側の土堀基礎付近の耕土や盛り土を取る。 | 14 | 道路SS2952の側溝SD3180を検出。この頃から長雨に悩まされる。 |
| 12 | 道路SS2952の上は西側の石垣が崩れた石で埋まっている。 | 10. 2 | 門SI3189付近の遺構精査。午後から52-8、52-7の下層調査に入る。52-7東南部で銅銭埋設遺構検出。 |
| 14 | 13・14日の2日間でSS2952の北半分の崩れた石をほぼ除去する。 | 4 | 区画52-7の東北隅にある石積み施設SF3196は、南北溝SD2862を埋めてから造っていることが判明。 |
| 15 | 土堀基礎SA3185から東に向かって、再度遺構検出にかかる。SE3190、SD3174を検出。 | 7 | 門SI3189から北側のSS2952の道路面を検出作業にかかる。 |
| 19 | 礎石建物SB3198、溝SD3173等を検出。 | 11 | 道路SS2952の道路面をほぼ検出。 |
| 20 | 溝SD3174を東に掘り進める。石段SV2962を検出。 | 14 | 道路SS2952の側溝を検出。 |
| 22 | 70～68ライン付近を調査。溝SD3171、石積遺構SF3195等を検出。第52次調査区の屋敷の区画がほぼ明らかとなった。 | 16 | 道路SS2952上の石の排除にかかる。 |
| 24 | 区画52-6と区画52-1・2の遺構面を探す。 | 28 | 写真撮影のため遺構清掃。 |
| 25 | SF3195、SD3176、SD3175を掘る。 | 30 | 写真撮影。 |
| 27 | 第51次調査区SB3059の上を覆う茶褐色土を除去し、礎石を検出。SB3059西側の焼土をとる。 | 11. 7 | 第51次調査区も合わせて、ヘリコプターによる写真測量を実施。 |
| 28 | 第51次調査区SB3201を検出。 | 12 | 補足調査。 |
| 29 | 区画52-8の東半分を調査。しっかりとした整地面は認められたが、遺構は無し。 | 18 | 補足調査遺構の実測 |
| | | 27 | レベル等の測量。 |
| | | 12. 6 | 発掘機材等を撤収し調査終了。 |

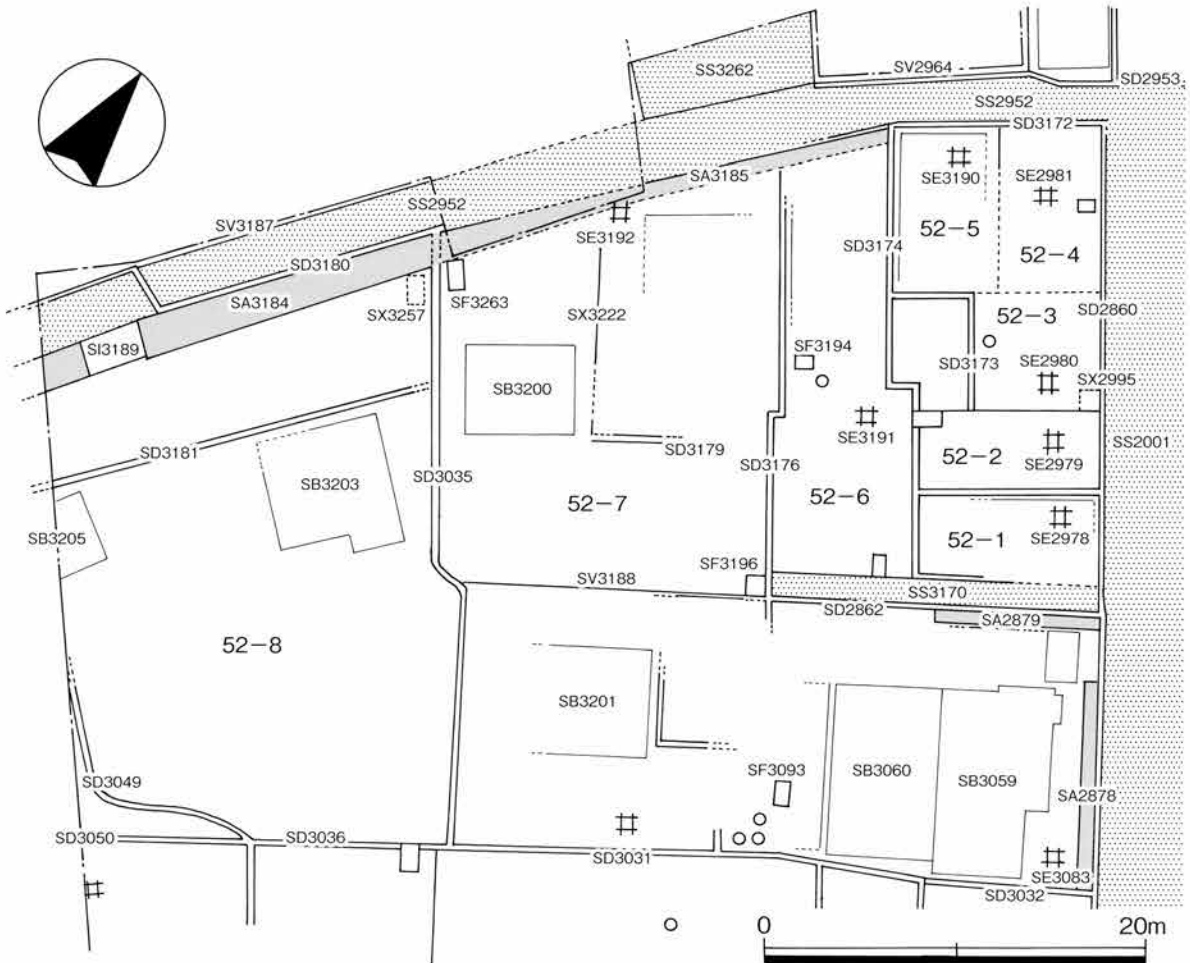
2. 遺構 (第33図～38図、PL41～PL50)

第52次調査区は、第51次調査区の西側に位置する。区画51-15「医師の家」の西半分は第52次調査で発掘したが、第51次調査区として報告したので、ここでは触れない。第52次調査区は東西道路SS2001に面する小区画屋敷52-1～5からなる第1区画群と南北道路SS2952に面する中規模屋敷からなる第2区画群の2つに分けられる。第1区画群は52-1～5までの5区画である。51-1～51-4まではSS2001に間口を開いているが、52-5はSS2952に間口を開く。これらはいずれも間口4mから7m、奥行き7m～11m、面積は36m²～77m²の小区画群である。第2区画群は52-6～52-8の3区画で、52-6は小区画が2つ合わさったとも推定される。52-7と52-8は道路に面した所だけ土堀を有する中規模屋敷である。

最初に52次調査区を取り巻く道路や、屋敷地を区画する溝について記述した後、52-1から区画ごとに述べる。

町割りに関する遺構

SS2952 東西幹線道路SS2001と直交する南北方向の道路で、幅は場所によって多少異なるが、広い所で3.3m、狭い所で2mある。東西道路SS2001の交差点から南に約15mはSS2001と直交している



挿図9 第52次調査区略図

が、それ以南は15°程東に触れている。道路表面は、全面に砂利が叩き締められて舗装されている。SS2952の西は2m近く高くなっており、巨石を積んだ石垣となっている。またSS2001との交差点から15m南には山側の屋敷に登っていく道SS3262が交わる。SS3262の幅は約9mある。この付近から北へは道路SS2952の両側に側溝が存在するが、南へは道路東側はSD3035まで、道路西側は門SI3189の向かい付近まで側溝がない。

道路側溝SD3180は道路西側を北に流れて、区画52-8の門SI3189の付近で斜めに道路を横切って道路東側を流れ、暗渠SZ3264の所で東に屈折してSD3035となる。この道路面SS2952を覆う盛土には伊万里や唐津が含まれ、江戸時代初めごろまでには埋められたと考えられる。

SV2964、SV3187 南北方向の道路SS2952の西側に並ぶ巨石を積み上げた石垣である。石は1m×0.7m×0.5mを超える石も使用されている。西側の屋敷と道路SS2952との比高差は約2mあり、場所によってはこうした巨石が2段に積み上げられている。発掘調査時には、道路に多数の巨石が崩れ落ちていた。

SS3262 調査地区北西隅近くに位置し、南北道路SS2952に繋がる道路である。発掘した長さは3mであるが、道路幅は9mある。道路SS2952の境に石段SX3261がある。SS3262は通常の道路ではなく西側の屋敷(古絵図に描かれている法萬寺)に繋がる通路であろう。この通路の両側にも巨石が積まれている。

SS3170 石組溝SD2862の西に位置する袋小路で、幅1m、長さ17.5mある。溝SD2860を挟んで東西道路SS2001に繋がる。この通路の西には区画52-1と区画52-6があり、奥には区画52-7があって行き止まりとなっている。区画52-1との境界は明瞭ではなかった。

SD2862 第51次調査地区の区画51-15の西側を北流する溝で、東西方向の溝SD2860に繋がる。幅は0.4m、深さ0.5mほどある。東西方向の溝SD3176を合流させている。なお、その合流点の南にある石積遺構SF3096は、この溝を壊して作っている。したがって、石積遺構SF3196より南は、SF3196をつくった時点で埋められていたのであろう。また、東西方向のSD2860との合流地点に近いところは、下層溝が区画51-15の土塀基礎SA2879の下にもぐっていく。

区画52-1

東西方向の幹線道路SS2001に面する路地SS3170の西に位置する小区画屋敷である。規模は地口3.5m×奥行10m、面積35m²を測る。西は溝SD3171、南は溝SD3175で区画される。敷地は道路SS2001より0.4mほど高く、南の屋敷地52-6より0.3mほど低い。屋敷地の東南隅に溝SD2860に笏谷石SX2993によって蓋がされている。蓋石の大きさは長さ0.8m×幅0.45m×厚さ0.15mである。蓋石から入ったところには、6石からなる石敷となっていることから、この笏谷石の蓋石のところが52-1の屋敷の入口だったと考えられる。

SB2968 表面が削平されているため建物規模ははっきりしないが、SS2001に面して礎石が3石、2間半分残っているため、地口いっぱいには建っていたと推定される。西側も溝SD3171の溝石を兼ねるように礎石が3間分残っていた。屋敷地の奥にも礎石が東側に4石、南側に2石確認できる。

SE2978 屋敷地の北西隅寄りにある井戸である。井戸の上端はかなり壊れているが、井戸の南側には扁平な笏谷石を4石敷いてあり、すぐそばに礎石があることからこの井戸は建物SB2968内にあったことになる。この区画は井戸を有するが、これまでの調査で便所と推定してきた石積遺構は存在しない。

区画52-2

同じく道路SS2001に面し、区画52-1の西隣に位置する小区画屋敷である。規模は地口4.5m×奥行10m、面積45m²を測る。東は溝SD3171によって52-1と区画され、南はSD3175によって52-6と区画される。西は石垣SV2962で52-3と区画され、52-3が0.3m高い。建物については、表面が削平され礎石が残っていないため不明である。

SE2979 屋敷地の北西寄りに位置する石組の井戸である。直径は0.7m、深さは安全を考慮して底まで掘り下げていないので不明。井戸の北側が砂利敷状になっている。

SF3193 屋敷の南西隅に位置し、規模は縦1.6m×横1.0m×深さ0.5mである。西側から流れてくる溝SD3174が、この石積施設SF3193に直接流れ込む形になっているところから、便所ではなく一時的に水を溜める施設と考えられる。

区画52-3

道路SS2001に面する屋敷で、東は石垣SV2692、南はS溝D3174で区画される。西隣との境界ははっきりしないが、溝SD3173とその南北方向の延長線上と推定される。地口は約6m、奥行きは11m、面積は、南西隅で溝SD3174が敷地に入り込んでいるため約65m²である。敷地は溝SD3173で南北に2分される。

建物については、東西方向大通りSS2001の側溝SD2860の溝石に礎石と思われる石が3石2間分認められるが、他に対応する礎石がないので建物規模は不明である。溝SD3173以南については、SD3173の南北方向の溝石に3石2間分の礎石らしき石が認められることから、4m四方の狭い空間にすぎないが、2間四方の礎石建物が建っていた可能性がある。なお区画53-3も、便所と推定される石組遺構は認められない。

SE2980 敷地北西部に位置する自然石の石組井戸である。直径は0.8m、深さは底まで掘り下げていないので不明。井戸の北側と西側には扁平な石が敷かれており、この平らな石が天端石で、この上に井戸枠が載っていたと推定される。

SX2995 北東隅に位置する石積施設である。規模は縦0.8m×横0.8m×深さ0.5mである。北面の石は溝SD2860の側石を兼ねるような形になっている。石積施設SX2995は、位置からして便所とは思えない。他に溝SD3173に接するように越前焼大甕SX3212が設置されている。

区画52-4

東西方向の道路SS2001と南北方向の道路SS2952が交わる南東に位置する屋敷で、規模は東西約9m×南北約5.5m、面積約49.5m²である。したがって、この屋敷地は東西方向に長く、井戸や水回りの遺構が道路SS2001側にあることから、入口も道路SS2952側だった可能性が高い。

SB3206 道路SS2952に面する南北方向5mの礎石建物である。西端の礎石は、溝SD3172の溝石を兼ね、北側の礎石列も溝SD2860の天端石を兼ねている。東端はSX3211付近と推定され、敷地いっぱいに建っていたようである

SE2981 屋敷地のほぼ中央に位置する直径0.6m程の石組の井戸である。井戸の南側に平らな天端石が残存している。井戸の西側から北方向に溝SD2860まで中央を揃えた2列の石列SX2996があり、その東には石敷1m×0.5mの範囲で石敷がある。

SF2985 区画の北端、溝SD2860に接しており、大きさは縦0.8m×横0.8m×深さ0.6mである。この石

積施設も位置と石敷SX2996の存在から便所とは考えられず、井戸や石積施設、石敷など一連の遺構から、この付近が台所的な空間だったと推定される。

区画52-5

この区画もSS2952に面する地口5.5m×奥行9m、面積約49.5mの小規模屋敷である。南は溝SD3174、東は溝SD3173によって区画される。北端は、52-4との間がはっきりしないが、SB3206の南列付近であらうされる。建物は2棟ある。

SB3197 道路SS2952に面する礎石建物である。礎石が不明なところもあるが、東西方向は溝SD3172から石列SX3208までの4m、南北方向は地口いっぱいの5mと推定される。建物内には井戸SE3190がある。この井戸から東側は焼土が広がっていた。

SB3198 SB3197の東側に隣接する礎石建物である。この建物は小規模ながら礎石が比較的よく残っており、東西3.4m×南北3.4mである。この建物内の北西隅には南北1.1m×南北1.4m×深さ0.5mの土壇SX3210がある。

SE3190 礎石建物SB3197の内部にあり、直径0.5m程の石組井戸である。この井戸も東側に平らな大きい石が見られるところから天端まで残っていたのであろう。

52-3～52-5までの区画は、その境界が明瞭ではなくひとつの屋敷とも捉えることができるが、井戸が3本見つかったところから、3区画に分けるのが自然と考えた。ただ、これら3区画からも便所と考えられる石積施設は存在しなかった。

区画52-6

先述した52-1～5までの屋敷との南側に位置する屋敷で、北は溝SD3174で、南はSD3176で区画される。東側は通路SS3170に面し、西側は道路SS2952に面する。屋敷の規模は、東西方向は約22m、南北方向は西端で6m、東端で7.5mある。これはこの屋敷の南北を区画する溝SD3174とSD3176の2本の溝が、この屋敷からみると外に屈折しているためである。溝SD3175の52-2との境界付近では木炭や灰を含む泥で埋まっていた。

この区画は両溝の屈折部分で2つの屋敷に分けられる可能性がある。この区画を2つの屋敷地と捉えると、西側は屋敷と道路の間に土塁SA3185があり、入口らしき所は確認できない。東側の入口については通路SS3170に接して石積遺構SF3195が存在するので、その西の石敷SX3215付近、もしくはさらに西の溝SD3176とSX3216の間を想定することができる。

SD3174 区画52-6の北側の境界溝である。幅は約0.3m、深さは0.3mある。道路SS2952から13.5m東に流れ、一度2m北に直角に屈折した後、また屈折して10m東に流れる。道路SS3170に達して、北に流れを変えるが、そこから溝がはっきりしなくなる。

SD3176 区画52-7との境界となる溝である。幅は約0.3m、深さは0.3mある。土塀基礎SA3185から12m東に流れ、溝幅分南に屈折してまた東に流れ、溝SD2862に合流する。

SB3221 敷地の西寄りに位置する礎石建物である。おそらく東西に長い建物で染行方向は4mと推定されるが桁行方向は不明。

SE3191 屋敷地内中央部の屋敷地が広がったところに位置する石組の井戸である。直径約1.2mで天端石もよく残っている。この井戸付近は焼土が薄く広がっていた。もし、区画52-6を2つの屋敷と想定

すると井戸はこのSE3191しかなく、共同井戸となる。

SF3194 屋敷中央部の南側に位置する。SF3194は石がほとんど抜かれており、東側の側石が残るだけである。規模は東西0.6m×南北1.0m×深さ0.6mほどである。

SF3195 区画の東端道SS3170に接するようにある。SF3195は南側の人頭大の天端石4石並んで残っている。このSF3195の内部は、下層に灰を多く含む黒い泥で埋まっていた。

敷地東端近くに規模1m四方、深さ0.2mの浅い土壙SX3216がある。内部は焼土で埋まっていた。この周辺には石敷SX3218の他、上面が平らな石が見られるが、まとまって遺構を形成しない。また、屋敷地の北東隅は、後世に水田化するときに削られて一段低くなっている。

区画52-7

南北方向の道路SS2952に接する屋敷である。北は溝SD3176、東は石垣SV3188、南は溝SD3035で区画される。屋敷地の規模は、南北約15.5m×東西約20mである。西は土塀基礎SA3185がある。ただこの土塀基礎の南半分については、中央付近に井戸SE3192が土塀石垣に食い込むようになっていて、この部分の石垣は、後世に積まれたような跡があったことから、存在しなかった可能性がある。というのはこの間に門に類する入口がないとこの屋敷に入ることができないからである。しかし、このSE3192から石積遺構SF3263の間に明確な門跡は見つからなかった。

SA3185 区画52-7の西を限る土塀の基礎で、道路SS2952に面する。この土塀基礎は、区画52-6から南に延び、幅は0.8m、残存している高さは、屋敷内から測ると0.6m、道路側からは0.3mほどである。外側に面を揃え、石を横長に使って2～3石積んでいる。

SV3188 52-7の東を限る石垣で、51-15との境界となる。長さは南端から12mあり、それより北は溝SD3177となる。高さは0.3m程で、小振りの自然石を2～3石積み上げている。51-15との比高差は0.3m程あって52-7側が高い。

SD3035 屋敷の南を区画する溝で、幅約0.5m、深さ約0.7mと深くて幅が広い。西端は、土塀基礎SA3185とSA3184の間を抜けてSD3184に繋がる。この部分はおそらく暗渠になっていたと推定される。また、溝SD3035は区画52-7東南隅で北側に屈曲して東に流れる。

この屋敷地は、溝SD3179ラインで東西に2分され、さらに西半分は石列SX3222によって分けられる。溝SD3179は南北方向の石組溝で3m分しか残っていない。石列SX3222は径15cmほどの石が一行に7.5m並ぶ。

SB3200 南西エリアに位置する。礎石は2石しか残っていなかったが、礎石を据えた跡3か所が残っていた。この建物は溝SD3035や溝SD3176、石垣SV3188と方向をそろえており、土塀基礎SA3185とは10°程東に振っている。規模は南北5.6m×東西4.7mと推定される。

SF3263 屋敷地の南西隅に位置し、東西1.5m×南北0.8m×深さ0.4mの石積み施設である。通常の石積施設より長い。直径0.3m程の石が2段ほど積まれ、中は焼土で埋まっていた。

SB3199 北西のエリアに位置し、土塀基礎SA3185から1.5m東に礎石が3石並んでいた。礎石が3石しか残っていなかったため規模は不明である。礎石建物SB3199の西側にある右列SX3217はこのSB3199の雨だれ溝の側石であろう。

SE3192 この北西エリアの南西隅に位置する井戸で、直径が0.8mとやや小さい。この区画52-7では唯一の井戸である。他に石で囲った浅い土壙SX3220やSX3219があるが詳細は不明。

SX3229 SD3179以東のエリアで見つかった銅銭を埋蔵遺構である。楕円形土壇に石を2～3石積み上げ、その上に長径0.7m、短径0.5m、長さ0.3m程の底を抜いた笏谷石の水鉢を重ねていた。さらに越前焼播鉢で蓋がしてあった。底には銅銭3,784枚が納められていた。銅銭には紐を通してあったらしい。この遺構の脇に礎石らしき石が2石残っているところから、おそらく建物の床下に埋蔵されていたのだろう。



挿図10 銅銭出土状況

区画52-8

道路SS2952に面して土塀基礎SA3184とそこに設けられた門SI3189を持つ規模の大きい屋敷である。規模は、東西方向については北辺となるSD3035が土塀基礎外側から測って32.5mある。南北方向については、北の境界となる溝SD3036から南へ約20m分発掘調査しているが、さらに南側は発掘調査外となるため、屋敷規模は不明である。



挿図11 土塀基礎石垣SA3184 (東から)

SA3184 52-8の北端から門まで16mを測り、門より南は8m分検出した。幅は門より北がやや広くて2.5mあり、南側はやや狭くて1.7mある。残存している高さは、道路面から約1m、屋敷内側から約1.5mある。外側の石垣の積み方は、まず道路側溝の溝石を並べ、その上に不規則ではあるが1mから2mおきに0.7m×0.5m程の石を置いてその間を径0.3m前後の石を2～3石積み上げている。内側の石垣の積み方は径0.2～0.3mの石を4～5段積み上げている。



挿図12 土塀基礎石垣SA3184 (東から)

SI8189 両脇に高さ約1.0mの大きい石を立てている。道路から1m入ったところに2.4m間隔で礎石が2石あるところから棟門形式の門だった考えられる。SS2922の道路面と門のレベルはほぼ同じであるが、屋敷は門のレベルから0.4m近く低い。

SD3181 門SI3189から東に約4.5m離れて土塀基礎SA3184とほぼ平行にのびる溝である。この間はSX3257・SB3204を除いて遺構がなく薄い砂利敷となっていた。なお溝SD3181は北端で溝SD3035とは繋がっていない。南の端は不明であるが、検出した長さは約20m、幅0.3m、深さ0.2mある。砂利敷面の北端にあるSX3257は石積施設が崩れたものと考えられ、内側にあった杭は石積みの崩落を防ぐために打った杭と考えられる。なおSB3204は礎石3石のみで規模は不明。

SB3203 屋敷地の北端近くに位置し、溝SD3181とほぼ平行に建つ礎石建物である。規模は南北6.6m(3間半)×東西5.8m(3間)の南北棟で、東北部に0.9m×2.7mの張り出しを持つ。礎石は失われているところもあるが、外周の礎石には半間の間にも1石入れているところが多い。

SB3205 発掘南端に位置し、溝SD3181とは平行ではなく南側がやや東に振っている。礎石建物

SB3203からは9m南に離れている。規模は東西方向が3.7mで、南北方向は発掘区の外になり不明である。北辺は比較的大ぶりの石を詰めて並べており、土台を回した建物だった可能性がある。このことから建物SB3205は蔵のような建物とも推定される。

石列SX3254と石列SX3255の間は、通路だったと推定される。この通路でこの屋敷の空間2分でき、屋敷内部の使われ方が異なっていたと考えられる。

この通路付近から東については、上層の遺構が削平されていた。0.3m下にSX3245をはじめとするいくつかの土壙が見つかったが、しっかりとした遺構面とはならなかった。SX3245、SX3248からは建築部材の木片が多数出土した。

SD3049 調査区東南隅近くの東西方向の溝で、屋敷地の東端近くで北に大きく屈曲する屈曲部分から溝石が失われて溝も浅くなり溝そのものが不明確になる。

3. 第52次調査遺物（第39～58図、PL.51～70、表3～7、挿図13、口絵4）

本報告で取り扱う遺物は第52次調査で出土した遺物群である。出土遺物の総点数は16,815点を数える。ただし、本調査区では3,784枚の銭貨がSX3229からまとまって出土したが、これは1件（点）として換算している。この調査区では町屋が6区画、武家屋敷が2区画確認された。それぞれの遺物量は町屋全体で4,715点、武家屋敷の区画52-7は1,934点、武家屋敷区画52-8では5,956点となっている。その他に道路や溝から3,179点の出土があり、排土や整備作業中に1,031点の出土がある。

器種			点数	%	器種			点数	%	器種			点数	%
日本製	越前焼	甕	3,335		中国製陶磁器	青磁	碗	179		金属製品	バンドコ	バンドコ	24	
		壺	1,712				皿	374				風炉	1	
		鉢	255				鉢	21				臼	3	
		播鉢	953				盤	37				硯	19	
		桶	20				壺	2				盤	103	
	掛花生	1		杯		1		砥石	25					
	計	6,276	37.32	香炉		25		鉢	2					
	土師質	皿	5,176			花瓶	4		玉石		13			
		土釜	59			不明	3		火炉		85			
		土鈴	7			計	646	3.84	火炉蓋		2			
鍾		2		碗	15		その他	21						
灯心押		3		皿	1,652		計	298	1.77					
計	5,247	31.20	杯	102		漆碗	47							
鉄軸	碗	241		壺	1		漆皿	3						
	皿	8		花瓶	8		漆片	8						
	小壺	2	52.05	計	1,778	10.57	漆板	3						
	蓋	1		碗	288		曲物	26						
	壺	118		皿	536		折敷	43						
陶器	鉢	2		杯	16		付札	1						
	瓶	1		計	840	5.00	下駄	13						
	不明	1		赤絵皿	1		鞘	3						
	計	374	2.22	青白磁	6		箸	12						
	碗	21		その他	3		楔	8						
灰軸	皿	249		計	10	0.45	柱	5						
	壺	25		朝鮮・その他	74	0.44	建築材	32						
	鉢	6		小計	3,348	19.91	桶	20						
	杯	1		器種	点数	%	取手	1						
	瓶	1		銅銭	139		杭	3						
瓦質	香炉	4		銅銭一括	1	(SX3229出土)	釣瓶	1						
	卸皿	5		釘	129		籠	4						
	計	312	1.86	堀止	5		まな板	1						
	火鉢	3		鋸	1		播粉木	1						
	風炉	4		錘	2		漆箱	2						
須恵質	香炉	7		火箸	9		漆蓋	1						
	杯	1		鉢	4		匏	2						
	不明	2		鍋	7		櫛	2						
	計	17	0.10	紅皿	1		柄	5						
	須恵質	11		鉄	2		栓	2						
近世	64		毛抜き	3		灯明台	1							
その他国産陶器	26		鍵状金具	1		糸車等	9							
計	101	0.60	鉄線	1		箱	7							
小計	12,327	73.31	火打金	2		杓子	1							
日本製	陶磁器以外	銅銭	139		錠前	1		小仏像	1					
		銅銭一括	1	(SX3229出土)	引手	1		斎串	5					
		釘	129		鈴	1		矢柄	1					
		堀止	5		燭台	1		その他	200					
		鋸	1		環付金具	1		計	474	2.82				
		錘	2		隅金具	1		鞆の羽口	2					
		火箸	9		覆輪	1		種子	8					
		鉢	4		飾金具	1		貝	3					
		鍋	7		小柄	8		骨	2					
		紅皿	1		刀子	1		計	15	0.09				
		鉄	2		切羽	3		陶磁器以外小計	1,140	6.78				
		毛抜き	3		小札	5		合計	16,815	100.00				
		鍵状金具	1		賣金具	2								
		鉄線	1		賣替	1								
		火打金	2		鏡	1								
錠前	1		鐵	1										
引手	1		鐵砲玉	1										
鈴	1		鉛	1										
燭台	1		金箔	1										
環付金具	1		キセル	1										
隅金具	1		その他	12										
覆輪	1		計	353	2.10									
飾金具	1													
小柄	8													
刀子	1													
切羽	3													
小札	5													
賣金具	2													
賣替	1													
鏡	1													
鐵	1													
鐵砲玉	1													
鉛	1													
金箔	1													
キセル	1													
その他	12													
計	353	2.10												

表3 第52次調査出土遺物一覧表

遺物の整理および掲載は、はじめに道路遺構と側溝および武家屋敷や町屋を区画する溝からの遺物をまとめた。つぎに町屋および武家屋敷内の出土遺物を扱い、整備中などその他からの出土遺物は最後に掲載した。出土遺物は上層からⅠ遺構面、Ⅱ遺構面、Ⅲ遺構面からの出土にわけられる。ただし、昭和60年度刊行の概報⁽¹⁾でも報告されているが、区画が異なれば遺構面すなわち遺物群が対応しているとは限らない。

また、本調査区は多種多様な遺物が出土しているが、時間的制約のなかで、以前に実測されていた遺物の掲載がほとんどである。多数の遺物の図・写真を掲載できなかったことは否めないため、出土遺物の種類・数量については、遺物台帳から作成した表3を参照していただきたい。今後、図・写真等が未掲載になった遺物が重要な遺物と判断されたものについては別稿で報告するものとする。

既刊の報告書を踏襲し、遺物の分類については越前焼大甕・挿鉢の分類は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983年、土師質皿は『朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』1979年による。また、近世および中世前の出土遺物については記載していない。金属製品の材質については、肉眼・磁性の観察によるところが多いため銅製の記載についても合金である可能性を持つ。

SS2952出土遺物 (第39図、PL.51)

越前焼 (401)は口縁部が肥厚なⅣ群の甕で、焼成は良好である。(402)は口径33.8cmの鉢である。

SS3262出土遺物 (第39図、PL.51)

金属製品 (403)は鉄製の錘である。非常に腐食し、上部が欠損しているが中央部がくびれた六角形を呈す。一乗谷では棗形のものも多く出土している。約120gである。

SD3172出土遺物 (第39図、PL.51)

瓦質土器 (404)は風炉である。口径21.6cmに復元でき、肩部には円形の窓を開ける。これは瓦質であるが、一乗谷では笏谷石と呼称される緑色凝灰岩製の風炉も出土している。

土師質土器 (406)はB類の土師質皿で口径7.1cm、器高1.8cmを測る。

SD2953出土遺物 (第39図、PL.51)

越前焼 (405)は口径5.8cm、底径9.4cm、器高11.2cmを測る壺で、胎土は灰色である。

SD2862出土遺物 (第39図、PL.51)

越前焼 (407)は口径9.8cmを測る壺で、胴部にヘラ記号を有す。(408)は口径4.4cm、底径5.2cm、器高7.5cmを測る壺である。

土師質土器 (409・410)はC類の皿で、(409)は口径9.4cm、器高2.3cmを測り、胎土は暗赤褐色である。(410)は口径9.1cm、器高2.1cmを測り、胎土は灰白色である。共に口縁部にタールが付着する。

瀬戸・美濃焼 (411)は口径10.2cm、器高2.7cmを測り、内面を菊皿状に削ぐ灰釉皿である。

中国製陶磁器 (412)は口径が約12.5cmに復元できる青磁碗である。体部外面には縞蓮弁文を有する。(413)は端反の白磁皿で口径11.2cm、器高2.85cmを測る。

金属製品 (414)は金製の葉状の飾金具である。最大長4.2cm、最大幅2.4cm、厚さ約0.5mmを測り、重

量は約2gである。葉の切り込みなどの形状から、菊の葉状とも考えられる。

SD3171出土遺物 (第39図、PL.51)

越前焼 (415)は口径が約19cmの鉢である。茶褐色に焼き締まっている。

土師質土器 (416)はD類の皿で、口径約16.7cm、器高2.6cmに復元できる。

SD3175出土遺物 (第40図、PL.52)

越前焼 (417)はⅣ群の甕である。

中国製陶磁器 (418)は青磁碗である。口径12.8cm、器高4.4cmを測る。

木製品 (419)は播粉木と考えられる。残存長は17.7cm、最大径3.2cmである。播部は欠損している。

SD3176出土遺物 (第40図、PL.52)

越前焼 (420)はⅢ群、(421)はⅣ群の甕である。(422)は壺で、口縁は欠損しているが底部は13.2cmを測る。肩部にヘラ記号を有す。(423)は口径17.1cm、器高7.1cmの鉢である。

土師質土器 (424)～(426)はC類の皿である。(424)は口径8.7cm、器高2.15cmである。(425)は8.8cm、器高2.3cmである。(426)は口径8.9cm、器高2.0cmである。(425)・(426)は同溝の下層から出土した。

中国製陶磁器 (427)は口径11.8cm、底径、6.8cm、器高3.1cmを測る端反りの白磁皿である。(428)は口径12.0cmを測る端反りの染付皿である。

SD3177出土遺物 (第40図、PL.52)

越前焼 (429)は口径19.2cm、底径8.8cm、器高6.8cmを測る鉢である。

土師質土器 (430)は口径6.5cm、器高2.8cmを測るB類の皿である。タール痕はない。

SD3035出土遺物 (第40・41図、PL.52・53)

越前焼 (431)はⅢ群の甕である。口径が約19cmに復元できる。(432)は口径23.4cm、器高8.9cmを測る鉢である。(433)・(434)は播鉢である。(433)は口径36.1cm、底径20.2cm、器高12.9cmに復元できるⅣ群の播鉢である。9条1組の播目を有するが、非常に磨り減っている。(434)は口縁断面が丸みをおびたⅢ群の播鉢で口径21.6cm、器高7.8cmを測る。7条1組の播目を有する。(435)は口径19.4cm、底径16.2cm、器高20.4cmを測る桶である。底板の上に六段程の粘土を積む。内面は継目の残る箇所もあるが、外面はヘラ等で調整されている。

土師質土器 (436)～(438)・(440)はC類の皿である。(436)は口径6.8cm、器高1.8cmを測り、(437)は口径7.2cm、器高1.7cmを測る。(438)は口径8.7cm、器高1.9cmを測り、(440)は口径9.0cm、器高2.0cmを測る。(439・441)はD類の皿である。(439)は口径10.9cm、器高2.1cmを測り、(441)は口径10.7cm、器高2.4cmを測る。(440)・(441)はⅡ遺構面出土である。

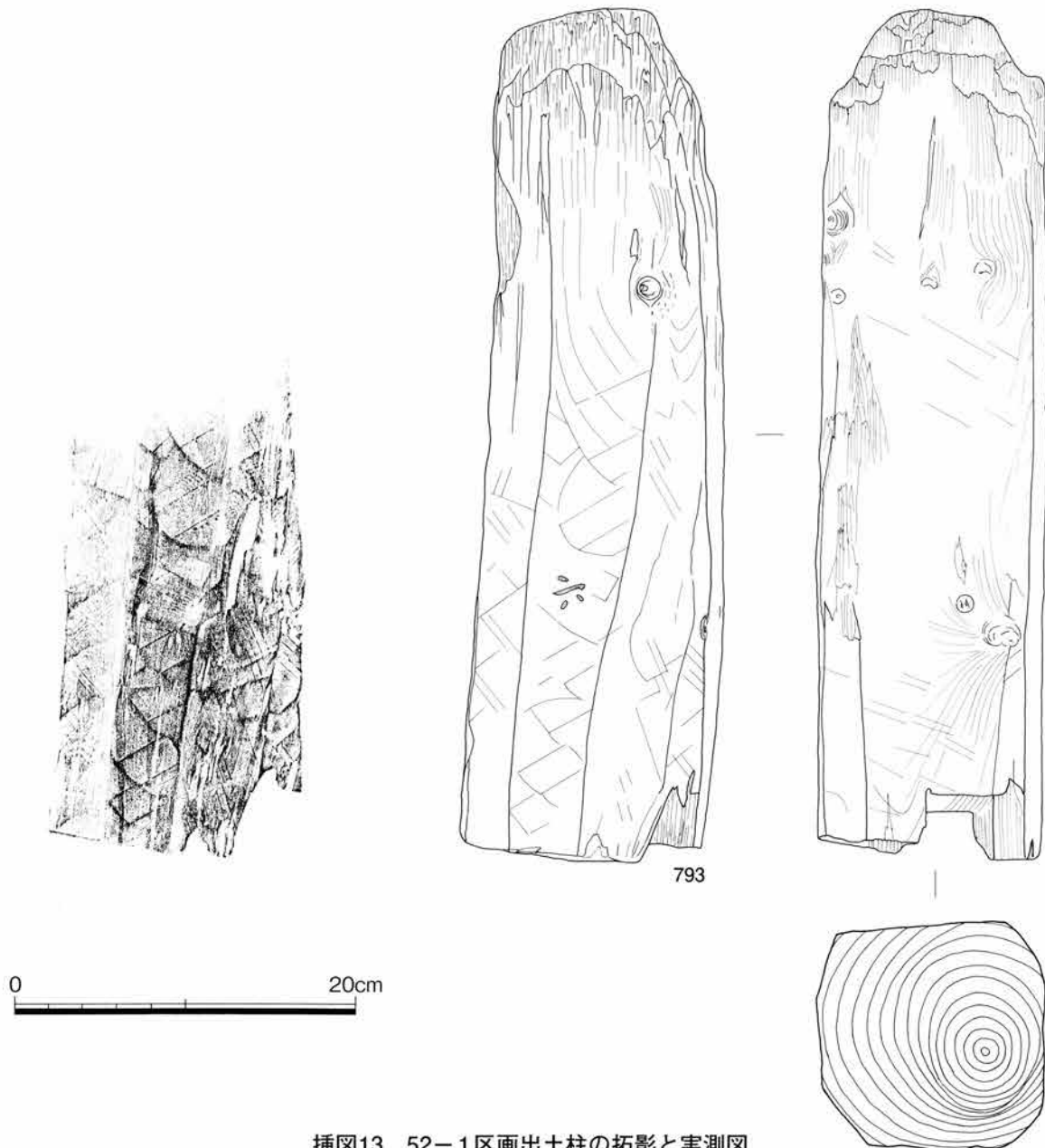
瀬戸・美濃焼 (442)は口径10.2cmを測る鉄釉碗である。(444)は口径12.0cm、底径4.8cm、器高2.6cmの端反灰釉卸皿である。釉は、口縁内部にのみかかり、胎土は緻密で堅く焼き締まる。底部は回転糸切痕が残る。(443)は口径7.2cm器高4.0cmに復元できる灰釉香炉である。

瓦質土器 (445)は口径約12.0cm、器高約5.0cmに復元できる三足の香炉と考えられる。菊の印花が横

一段に巡る。Ⅱ遺構面出土である。

中国製陶磁器 (446)は口径13.0cmに復元できる青磁碗である。線刻の蓮弁文が施され、透明がかった薄い青緑色の釉がかかる。Ⅱ遺構面出土である。(447)は底径6.0cmの青磁皿と考えられる。内面見込に印花文がみられる。青磁碗底部を打ち欠き、2次的に使用した遺物が出土することがあるが、この(447)も器壁が薄いため明確でないが同様の使用が考えられる。(448)は端反の白磁皿である。口径11.2cm、底径6.4cm、器高2.9cmを測る。

金属製品 (449)は刀子で、残存刃長は7.9cm、茎の長さは6.6cmである。全てⅡ遺構面出土である。(450)は鉄釘である。全長は13.0cm、頭部は巻頭である。頭部は天端から見ると、長辺が1.7cm、短辺が1.0cmである。首部の断面は0.6cm×0.6cmで、ほぼ正方形であるが、中央になるとやや平たく長方形になる。釘頭より2/3まで均等に先細り、先端までは急に細くなる。(451)は長さ34.5cmを測る火箸である。断面は約3mm角である。



挿図13 52-1区画出土柱の拓影と実測図

石製品 (452)はD型のバンドコの蓋部である。表裏面ともに丁寧な器面調整が行なわれている。内面は煤で黒色になっている。Ⅱ遺構である。

区画52-1 出土遺物 (第42・43図、PL.54・55、挿図13)

越前焼 (453)はⅣ群の甕である。(454)は口径11.8cm、(455)は口径11.8cm、(456)は口径4.3cmの壺である。これらの壺はⅡ遺構面出土である。(457)はⅡ遺構面から出土した口径24.8cmの鉢である。

中国製陶磁器 (459)は長径10.1cm、短径7.8cm、器高2.6cmの青磁皿である。(458)は口径12.2cm器高3.1cmの白磁菊皿である。畳付け部分以外、全面に白磁釉が施されている。(460)は口径9.0cm、器高2.0cmの端反白磁皿である。(461)は口径11.6cm、器高2.9cmの白磁皿である。(460)・(461)はⅡ遺構面出土である。

金属製品 (462)は鉄製の鍔である。全長12.9cmを測る。打ち込んだときに表に見える部分の長さは11.3cm、爪部の長さは2.9cmである。断面は幅0.9cm、厚み0.4cmで、やや板状である。(463)は鉄鏃である。本体は円錐形、茎は四角い。全長5.1cm、茎長3.1cmである。(464)は刀装具の内の足金物である。漆は付着していない。Ⅱ遺構面出土である。その他の武器類として鉄砲の鉛製弾丸1点がある。径1.2cmである。(465)は責金具である。最大外直径3.4cm、最大内直径2.5cmを測る。Ⅱ遺構面出土である。

木製品 (466)・(467)・(469)・(470)・(471)、(472)・(473)糸車の部品と考えられる。Ⅱ遺構面出土である。第51次調査区でも出土している。(793)は柱である。材質は松と思われ、芯持ちの材である。柱の中央やや下に「六」の墨書番付が見られる。高さは50.0cm、断面は14.2cm×12.8cmを測る。全体に湾曲しており、頭部は欠損し、底部には鑿による溝が中心を通るように作られている。この溝幅は約4.0cm、深さは約2.0cmを測る。表面は手斧ではつられ、平刃で刃幅は最大で約3.0cmを測る。また番付のある面にはこれより大きな刃痕もあるようにみられる。別の刃によるものか、あるいは同一の刃で加工したことによる痕跡なのかは明らかでない。SE2978の井戸の西側で出土し、整備工事の際に引き抜いた。

その他 (468)韃の羽口である。最大径10.1cm、残存長11.3cmを測る。土製の羽口で、非常に堅く焼き締まっている。

区画52-2 出土遺物 (第43～45図、PL.55～57)

越前焼 (474)はⅣ群の甕である。(475)は口径31.9cmの鉢である。(476)は口径30.2cm、器高9.4cmを測るⅢ群の播鉢である。櫛幅2.9cm、櫛目は10条1組である。(477)は口径20.8cm、器高8.7cmを測るⅣ群の播鉢である。櫛幅2.8cm、櫛目は11条1組である。全てⅠ遺構面出土である。

土師質土器 (478)は口径8.6cm、器高2.3cmを測るC類の皿である。(479)は口径9.4cm、器高2.4cmを測るA類の皿である。(480)は灯心押で直径2.7cm器高0.5cmを測る。全てⅠ遺構面出土である。

瀬戸・美濃焼 (481)は口径10.5cm、器高6.2cmを測る鉄釉碗である。胎土は肌色で、ホソボソしており、鉄釉の発色は良好で飴色を呈す。(482)は口径12.2cmを測る灰釉碗である。ともにⅠ遺構面出土である。

中国製陶磁器 (483)は口径12.9cm、底径7.2cm、器高3.3cmを測る端反りの白磁皿である。(484)は口径12.2cmを測る端反白磁皿である。(485)は口径16.4cm、底径10.5cm、器高2.8cmに復元できる端反白磁皿である。全てⅠ遺構面出土である。(486)は口径9.4cm器高2.8cmを測る端反の染付皿である。外面胴部には唐草文、見込には十字花文を描く。(487)は口径11.9cm、器高2.6cmを測る端反の染付皿である。外面胴部、見込に唐草文を描く。(487)以外の中国製陶磁器はⅠ遺構面出土である。

木製品 (488) は神像である。器高11.0cm、最大幅2.8cm、厚1.3cmを測る。前面は赤色顔料が残り、背面には墨書がかすかに残るが、判読不能である。また、頭部背面に径0.1cmのクギ孔が2箇所、縦に存在する。壁などに取り付けられていたのであろうか。I 遺構面出土である。(489) は杓子で残存長19.2cm、最大幅5.3cm、厚さ約0.6cmを測る。墨書で宝袋、俵、宝珠、小槌、蓬葉文様などの絵や、その裏には男女の巫覡が描かれている。また、俵や宝珠とともに蛭藻金が描かれているとする理解もある⁽²⁾。五穀豊穡、子孫繁栄などを願った「招福杓子」といわれるものである。(490) は用途不明の棒状製品と考えられる。残存長17.7cm、最大径1.1cmを測る。先端には、長さ3.2cmを測る円錐形の銅製金属器を被せている。(491) は刀子の鞘と考えられる。長さ9.1cm、幅2.9cm、厚さ0.6cmを測る。(488) 以外はII 遺構面出土である。

SF3193出土遺物 (第45図、PL.57)

土師質土器 SF3193はI 遺構である。(492) は口径7.2cm、器高1.9cmを測るB類の皿である。(493) は口径7.1cm、器高1.8cmを測るC類の皿である。

瀬戸・美濃焼 (494) は口径7.7cm、器高1.7cmを測る灰釉皿である。見込に印花をもつ。

中国製陶磁器 (495) は口縁の外反する青磁の稜花皿である。口径13.4cm、器高3.1cmを測る。(496) は口径12.6cmを測る染付碗である。外面口縁部は波濤文、外面胴部は芭蕉葉文を描く。(497) は底径3.9cmを測る染付碗底部である。

区画52-3 出土遺物 (第45図、PL.57)

越前焼 (498) はIV群の甕である。(499) は皿群の播鉢で口径30.8cm、底径12.4cmを測る。櫛幅は約3.1cmで9条1組である。2点ともI 遺構面出土である。

土師質土器 (500) はG類の皿である。口径5.5cm、器高1.6cmを測り、蓋に使用されたとも考えられる。(501) は口径8.4cm、器高2.4cmを測るB類の皿である。(502) は口径8.9cm、器高2.0cmを測るC類の皿である。(503) は口径9.2cm、器高2.4cmを測るC類の皿である。タールが口縁外内面に多量に付着する。全てI 遺構面出土である。

瀬戸・美濃焼 (504) は鉄釉碗である。口径22.1cm、器高6.1cmを測る。口縁下のくびれは強く、外面腰部以下は錆釉が施される。(505) は口径9.1cm、器高2.3cmを測る灰釉皿である。見込に菊花文の印花をもつ。全てI 遺構面出土である。

区画52-4 出土遺物 (第45図、PL.57)

越前焼 (506) は鉢で口径15.3cm、底径11.8cm、器高6.5cmに復元できる。I 遺構面出土である。

区画52-5 出土遺物 (第46図、PL.58)

越前焼 (507) はIV群の甕である。(508) は口径20.8cmに復元できる壺である。共にI 遺構面出土である。(509) は口径7.1cmを測る掛花生と考えられる。越前焼としているが、他地域産の可能性もある。

土師質土器 (510) は口径5.4cm、器高2.1cmを測るB類の皿である。(511) は口径8.5cm、器高2.0cm、(512) は口径9.0cm、器高2.2cmのC類の皿である。(511) は口縁外内面にタールが付き、(512) は内面・外面ともに黒色である。(513) は直径3cm程の土鈴で、上に紐を通して吊るすための穴がある。これまでの出土例をみると、中に土製の小玉が入って音が出る。これは本体が欠損し、玉がない。

瀬戸・美濃焼 (514) は口径5.7cm、器高2.6cmの灰釉の坏である。外面胴部下以下は露胎である。

中国製陶磁器 (515) は口縁11.5cm、器高2.8cmの端反の白磁皿である。(516) は口径9.0cm、器高2.2cmの端反の染付皿である。外面は唐草文で、見込に羯磨文を描く。I 遺構面出土である。

区画52-6出土遺物 (第46・47図、PL.58・59)

越前焼 (517・518) はIV群の甕である。(519) はII群の甕である。(520) は口径4.7cm、器高10.9cmの小壺である。(521) は口径12.1cm、(522) は10.1cmの壺である。(523) は口径31.8cm、底径15.4cm、器高8.2cmの鉢である。口縁内面に櫛目文が3箇所確認できる。(524) は器高2.9cmの鉢である。(525) は口径21.6cm、器高8.7cmを測るIII群の挿鉢である。挿目は8条1組である。(526) はIV群の挿鉢で挿目は13条1組である。(527) は口径20.6cm、器高4.1cmを測る浅鉢である。内面全体に挿目を施す。挿目は8条1組である。(528) は残存率が悪いいため口径など復元できないが、火桶と考えられる。全てI 遺構面出土である。

土師質土器 (529) は口径7.1cm、器高1.8cmのB類の皿である。(530) は口径8.8cm、器高2.1cmを測り、(531) は口径8.6cm、器高2.3cmを測る。ともにC類の皿である。全てI 遺構面出土である。

中国製陶磁器 (532) は口径13.7cmを測る青磁碗である。(533) は口径16.4cm底径9.9cm、器高4.0cmを測る端反の白磁皿である。(534) は口径11.3cm、器高3.1cmを測る端反の白磁皿である。(535) は長径約10cmに復元できる白磁皿である。器高は1.9cmを測る。(536) は白磁角形掛花生である。口径5.3cm、器高は約15cmに復元できると思われる。灰色の胎土に白磁釉がかかる。欠損部分があるため穿孔は確認できない。白磁角形掛花生の一乗谷朝倉氏遺跡での出土は第50次発掘調査がある。I 遺構面からの出土である。(537) は底径7.4cmを測る染付皿である。見込には人物を描き、高台内には「洪武年造」の字款が描かれる。全てI 遺構面からの出土である。

金属製品 (538) は口径8.6cm、器高1.4cmをはかる銅製の燭台である。蠟燭を立てるため、筒型金属を皿の中央に穴をあけ取り付けている。皿内面中央付近に約3cmを測る円形の跡が薄く確認できるが、これが蠟燭の底部の大きさだと捉えることもできる。I 遺構面からの出土である。

石製品 (539) は砥石で、使用面の最大長14.8cm、幅4.7cmを測る。厚さは4.5cmあり、両面で砥いだ使用痕がある。(540) は硯で、底部に足を持つ。外面には漆膜が残る。残存長は8.4cm、残存幅2.9cm、厚1.4cmである。海の部分は欠損している。2点ともI 遺構面からの出土である。

SE3191出土遺物 (第48図、PL.60)

越前焼 SE3191はI 遺構である。(541) は鉢である。

中国製陶磁器 (542・543) は青磁碗である。(542) 口径21.7cm、(543) は口径12.0cmを測り、2点とも外面に線刻の蓮弁文をもつ。(544) は口径8.0cm、器高2.6cmを測る無文の青磁皿である。(545) は口径10.6cm、器高2.9cmを測る端反の白磁皿である。(546・547) は端反の染付皿である。(546) は口径11.0cmを測り、(547) は口径12.0cmを測る。外面には唐草文を描く。(548) は碁碁底の染付皿で、外面および見込に梵字文を描く。

SF3194出土遺物 (第48図、PL.60)

越前焼 SF3194はI 遺構である。(549) は口径23.2cmを測る鉢である。(550) は口径40.8cm、器高15.6cmを測るIV群の挿鉢である。挿目は8条1組である。

中国製陶磁器 (551) は口径10.4cmを測る端反の白磁皿である。

区画52-7 出土遺物 (第48~51図、PL.60~63)

越前焼 (555~557)はⅣ群の甕である。(559)はⅡ群の甕である。(558)・(554)は壺である。(552)は口径5.9cmを測り、(553)は口径6.6cmを測る壺である。(560)は口径5.7cm、器高6.6cmの鉢である。(561)は口径33.6cmを測るⅣ群の播鉢である。播目11条1組である。(562)は口径37.6cm、器高10.9cmを測るⅣ群の播鉢である。播目は11条1組である。胎土は黄白色で、焼き締まっていない。内面半分以下は非常に使用されており、播目が磨耗している。(563)は口径35.9cmを測るⅣ群の播鉢である。播目は9条1組である。以上、(555)~(563)はⅠ遺構面出土である。(565)はⅣ群の甕である。(564)は口径15.9cm、底径15.5cm、器高44.4cmを測る壺である。肩に窺記号が刻まれる。(566)は口径23.7cm、器高4.3cmを測るⅣ群の播鉢である。播目は9条1組である。(567)は口径35.9cmを測るⅣ群の播鉢である。(568)は鉢である。(564~568)はⅡ遺構面出土である。

土師質土器 (569)は口径4.6cm、器高1.3cmを測るG類の皿である。蓋として使用されたとも考えられる。(570)は復元長径約5.7cm、短径4.3cm、器高1.1cmを測る「耳かわらけ」といわれるH類の皿である。箸置として使用されたと考えられる。ともにⅠ遺構面出土である。

瀬戸・美濃焼 (571)は口径12.4cmを測る鉄釉碗である。底部は欠損している。(572)は口径4.7cmを測る鉄釉壺である。胴底部は釉葉がかからない。口縁は蓋を設置できるように肩部から約0.1cm窪み、幅0.9cmの受部を呈する。(573)は鉄釉の小壺である。口径2.2cm、底部3.3cmを測る。(574)は最大径3.3cm、器高1.3cmの小壺の蓋である。上面には鉄釉がかかるが、下面は露胎である。轆轤轆きで長く延びた底には回転糸切り痕がつく。(579)は口径約9.3cmに復元できる灰釉香炉である。(571~576)はⅠ遺構面出土で、(579)はⅡ遺構面出土である。

中国製陶磁器 (575)は口径9.1cm、器高2.6cmを測る端反の青磁皿である。(576)は口径11.9cm、器高3.5cmを測る青磁皿である。(580)は底径4.5cmを測る外面無文の青磁碗である。(575・576・580)はⅠ遺構面出土である。(577)は底径5.5cmを測る青磁壺である。上部が欠損している。(578)は口縁10.9cm、器高2.8cmを測る端反の白磁皿である。(577)・(578)はⅡ遺構面出土である。(581)は外面に宝相華唐草文、内面には玉取獅子文を描く端反の染付皿である。口径11.8cmを測る。(582)は碁笥底を呈する皿で、外面に芭蕉文が描かれる。内面には花鳥文が見られるものである。(581)・(582)はⅠ遺構面出土である。(583)は口径17.9cm、器高2.4cmを測る端反の赤絵皿である。Ⅱ遺構面出土である。

朝鮮製陶磁器 (584)は口径19.5cm、底径11.6cm、器高11.7cmを測る鉢である。胎土は暗赤褐色で、堅く焼き締まっている。Ⅱ遺構面出土である。

金属製品 (585)は責靫である。長軸1.5cmを測り、約0.5cmの穴を2個もつ。Ⅰ遺構面出土である。(586)は長径5.6cm、短径5.3cmの木瓜形の切羽である。表面から裏面の縁約0.5cmまで包み込むように漆膜で覆われている。(589)~(687)は銭貨である。(589)~(597)開通元寶、(598)・(599)軋重元寶、(600)軋徳元寶、(601)唐國通寶、(602)開元通寶、(603)宋通元寶、(604)太平通寶、(605・606)淳化元寶、(607・608)至道元寶、(609)咸平元寶、(610)景德元寶、(611)・(612)祥符元寶、(613)祥符通寶、(614)天禧通寶、(615)・(616)天聖元寶、(617)・(618)明道元寶、(619)・(620)景祐元寶、(621)~(624)皇宋通寶、(625)~(627)至和元寶、(628)・(629)至和通寶、(630)・(631)嘉祐元寶、(632)・(633)嘉祐通寶、(634)・(635)治平元寶、(636)・(637)治平通寶、(638)~(640)熙寧元寶、(641)~(643)元豐通寶、(644)~(647)元祐通寶、(648)~(652)紹聖元寶、(653)・(654)元符通寶、(655)~(658)聖宋元寶、(659)大觀通寶、(660)・(661)政和通寶、(662)宣和通寶、(663)建炎通寶、(664)~(666)淳熙元寶、(667)・(668)紹熙

元寶、(669)・(670)慶元通寶、(671)嘉泰通寶、(672)開禧通寶、(673)・(674)嘉定通寶、(675)～(677)紹定通寶、(678)・(679)景定元寶、(680)正隆元寶、(681)大定通寶、(682)・(683)洪武通寶、(684)永樂通寶、(685)宣德通寶、(686)朝鮮通寶、(687)天福鎮寶である。すべて銅銭で、50種、3,784枚を数える(表4)。銅銭が出土した遺構は16世紀中頃と推定されるSX3229である。周囲を2～3段の自然石を積上げた楕円形のピット内の底に、容器を伴わず直に置かれていた。これまでの多種の研究報告で記載されているが⁽³⁾、建物の床下に設けられた銅銭貯蔵のための施設と考えられ、出土した銭は備蓄銭と考えられる。一括して埋められており、朝倉氏滅亡後の散逸は無いものと思われる。銅銭は紐を通した緡銭の状態出土した部分が多い。1緡の平均を97枚と仮定した場合、出土した銅銭は39緡に換算できる。銭のほとんどは磨耗や破損はあまりみられず、精銭の出土銭である。銅銭の最古銭が開元通寶、最新銭が明銭の宣德通寶である。また、一乗谷で銭貨がまとまって出土した例と比較すると明銭の「永樂通寶」の割合が高いことが特徴である。以上、全てI遺構面出土である。

石製品 (587)は最大径4.4cmの球状石製品であり、中央に径0.8cm、深さ2.1cmの穴を穿つ。明確な用途は不明であるが、群書類集に収められている「七十一番歌合」の念珠挽の絵に、数珠に穴を開ける錐の重石として同様の石のような物を使用しているように見えるといわれている⁽⁴⁾。一乗谷では第15・25次発掘調査や第10・11次発掘調査で同じ形態の石製品が出土している。(588)は底部に足を持たず平らな長方硯である。残存最大長は13.1cm、幅8.3cm、高さ2.3cmを測る。内面は楕円形で、硯側縁帯幅は0.8cmで、硯下部縁帯幅は1.6cmと広がっている。陸部に墨の痕が少し残る。以上、全てI遺構面出土である。

No.	銭貨名	国名	初鑄年	枚数	No.	銭貨名	国名	初鑄年	枚数
1	開元通寶	唐	621	253	27	元祐通寶	北宋	1086	352
2	乾元重寶	〃	758	8	28	紹聖元寶	〃	1094	167
3	乾德元寶	前蜀	919	1	29	元符通寶	〃	1098	64
4	周通元寶	後周	955	1	30	聖宋元寶	〃	1101	138
5	唐國通寶	南唐	959	2	31	大觀通寶	〃	1107	19
6	宋通元寶	北宋	960	10	32	政和通寶	〃	1111	126
7	太平通寶	〃	976	25	33	宣和通寶	〃	1119	15
8	淳化元寶	〃	990	25	34	建炎通寶	南宋	1127	1
9	至道元寶	〃	995	69	35	淳熙元寶	〃	1174	11
10	咸平元寶	〃	998	58	36	紹熙元寶	〃	1190	3
11	景德元寶	〃	1004	75	37	慶元通寶	〃	1195	2
12	祥符元寶	〃	1009	98	38	嘉泰通寶	〃	1201	1
13	祥符通寶	〃	1009	55	39	開禧通寶	〃	1205	1
14	天禧通寶	〃	1017	90	40	嘉定通寶	〃	1208	6
15	天聖元寶	〃	1023	152	41	紹定通寶	〃	1228	4
16	明道元寶	〃	1032	25	42	景定元寶	〃	1260	3
17	景祐元寶	〃	1034	64	43	正隆元寶	金	1157	8
18	皇宋通寶	〃	1038	495	44	大定通寶	〃	1178	1
19	至和元寶	〃	1054	55	45	洪武通寶	明	1368	4
20	至和通寶	〃	1054	16	46	永樂通寶	〃	1408	169
21	嘉祐元寶	〃	1056	50	47	宣德通寶	〃	1433	1
22	嘉祐通寶	〃	1056	100	48	朝鮮通寶	朝鮮	1423	1
23	治平元寶	〃	1064	72	49	天福鎮寶	安南	984	1
24	治平通寶	〃	1064	14	50	判読不能			5
25	熙寧元寶	〃	1068	394		合計枚数			3,784
26	元豐通寶	〃	1078	474					

表4 SX3229出土銭貨一覧表

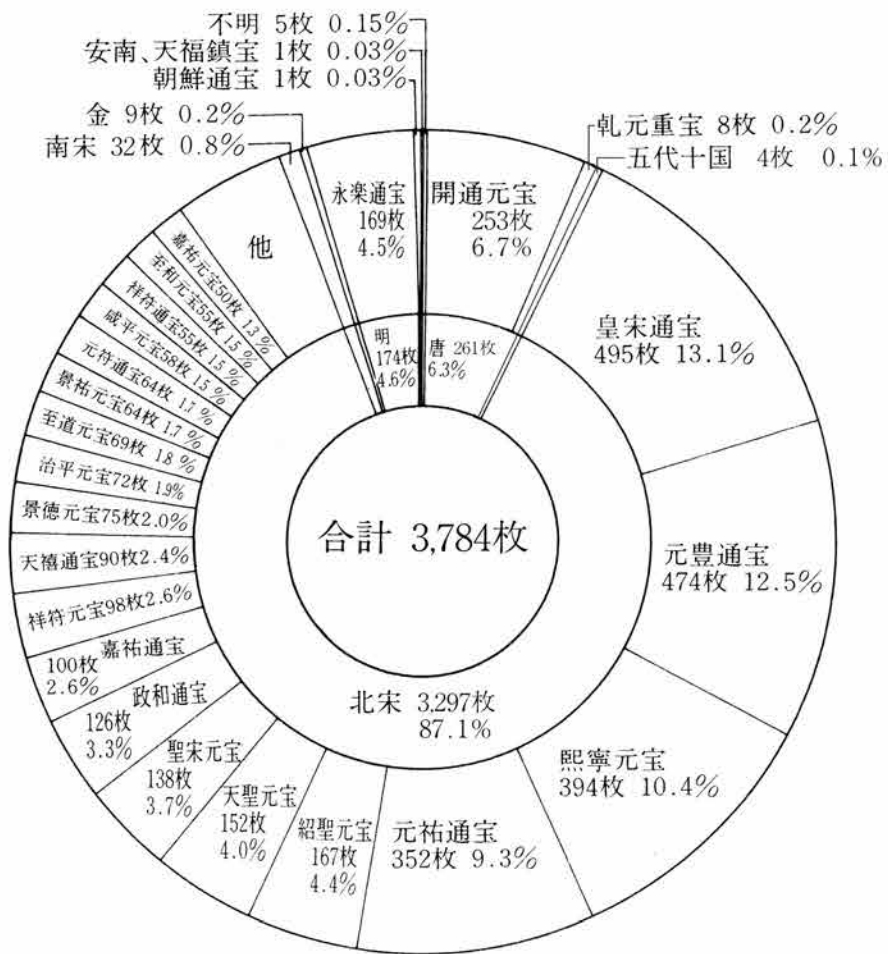


表5 SX3229出土銭貨構成



表6 SX3229出土唐銭の構成



表7 SX3229出土明銭の構成

区画52-8 出土遺物 (第52~58図、PL.64~70)

越前焼 (688)~(690)はⅣ群の甕である。(691)は口径14.6cmを測る壺である。(692)は口径14.6cmを測る壺である。(693)は口径9.1cmの壺である。(695)は口径13.8cm、底径14.1cm、器高22.4cmを測る壺である。肩部に篋記号をもつ。(688~693・695)はⅠ遺構面出土である。(694)は口径13.2cmの壺である。(696)は口径13.6cmの壺である。(694・696)はⅡ遺構面出土である。(697)は15.1cmを測る鉢である。(698)は口径31.6cm、底径15.0cm、器高8.3cmを測る鉢である。内面上部に櫛目で上下に半円を合せた文を呈す。(699)は口径34.0cm、底径16.9cm、器高7.2cmを測る鉢である。内面上部に櫛目で波状文を呈す。(697)~(699)はⅠ遺構面出土である。(700)は口径36.9cmを測るⅣ群の播鉢である。(701)は口径26.6cm、器高8.1cmを測るⅣ群の播鉢である。2点とも播目は8条1組で、Ⅰ遺構面出土である。(702)は、口径28.8cm、底径13.2cm、器高11.0cmを測るⅣ群の播鉢である。播目は9条1組である。(703)はⅢ群の播鉢で、口径23.7cm、底径12.4cm、器高8.1cmを測る。播目は7条1組である。(702)・(703)はⅡ遺構面出土である。(704)はⅢ群の播鉢で、播目が9条1組で間隔をあけて施されている。Ⅲ遺構面出土である。

土師質土器 (705)は口径5.9cm、器高1.5cmを測るC類の皿である。(706)は口径7.0cm、器高2.0cmのB類の皿である。(705)・(706)はⅠ遺構面出土である。(707)は口径6.9cm、器高1.9cmを測るB類の皿である。Ⅱ遺構面出土である。(708)は口径7.0cm、器高1.7cmを測るC類の皿である。Ⅲ遺構面出土である。(709)は口径8.8cm、器高2.2cmを測るC類の皿である。Ⅰ遺構面出土である。(710)は口径8.0cm、器高2.1cmを測るB類の皿である。Ⅱ遺構面出土である。(711)は口径8.5cm、器高1.9cmを測るC類の皿である。Ⅲ遺構面出土である。(712)は口径10.2cm、器高2.2cmを測るC類の皿である。Ⅰ遺構面から出土している。(713)は口径10.2cm、器高2.4cmを測るC類の皿である。Ⅱ遺構面出土である。(714)は口径10.1cm、器高1.9cmを測るA類の皿である。Ⅲ遺構面出土である。(715)は羽釜である。口径11.1cmを測る。体部に端部が上に反った貼り付けの鏝がつく。一乗谷では高さ約10cmになる標準的なサイズの土製の釜である。Ⅰ遺構面出土である。

瀬戸・美濃焼 (716)は口径11.8cm器高6.0cmを測る鉄釉碗である。内面と外面体部上半に鉄釉を施し、外面体部下半は露胎する。施釉の境界は整えられ、釉の垂れはない。底部はやや深く削り込み、内返り高台とする。(717)は口径11.7cm、器高6.3cmを測る鉄釉碗である。内面と外面体部上半に鉄釉を施し、外面体部下半は錆釉を施す。施釉の境界はほぼ整えられているが、釉の垂れが少し確認できる。(716)・(717)はⅠ遺構面出土である。(718)は口径11.5cm、器高6.3cmを測る鉄釉碗である。外面体部下半は錆釉を施す。施釉の境界は整えられ、釉の垂れはない。Ⅲ遺構面出土である。(719)は、口径11.7cmを測る鉄釉皿である。内面および外面体部上半は鉄釉を施し、下半は錆釉を施す。鉄釉は垂らしている。Ⅱ遺構面出土である。(720)は口径12.3cmを測り、推定復元すると器高14cm以上なる。広い口縁部から肩部にかけて僅かに膨らむ。胴部は直線的に立ち上がる寸胴状の壺である。内外面全体に黒褐色の錆釉が施される。Ⅰ遺構面出土である。(721)は口径5.4cm、器高1.6cmの灰釉皿である。見込に押印を施す。Ⅰ遺構面出土である。(722)は口径8.9cm、器高2.5cmを測る端反の灰釉皿である。底部は断面三角形の貼り付け高台で、高台内には輪トチン痕がある。Ⅰ遺構面出土である。(723)は口径11.8cm、器高2.5cmを測る灰釉皿である。見込に菊花の印花文をもつ。高台内には輪トチン痕が残る。Ⅰ遺構面出土である。(724)は口径10.6cm、器高2.7cmを測る灰釉皿である。内面を菊皿状に削ぐ。(725)は口径12.0cm、器高2.8cmの灰釉皿である。見込に菊花の印花文を有す。(724)・(725)はⅢ遺構面出土である。

中国製陶磁器 (726)は口径8.2cmを測る端反の青磁碗である。内面を菊花状に削ぐ。I遺構面出土である。(727)は底径4.0cmを測る青磁碗の底部である。高台内面の釉薬は削がれている。I遺構面出土である。(728)は口径15.8cmに復元できる青磁碗である。外面にノミ状工具で彫られた蓮弁文を施す。III遺構面出土である。(729)は底径4.6cmを測る青磁碗の底部である。外面は細線で蓮弁文を刻み、見込には薄く印花が確認できる。高台端部は丸く整え、高台内面の釉薬は削がれている。III遺構面出土である。(730)は口径10.4cm、器高3.6cmを測る青磁の菊皿で、I遺構面出土である。(731)は長径8.3cm、短径6.8cmを測る楕円形で、青磁釉が厚くかかる菊皿である。III遺構面出土である。(732)は口径6.4cmを測る青磁香炉である。(733)は口径8.2cm、器高6.6cmを測る青磁香炉である。口縁内側に返りが付き、口縁部、胴部、底部に数条の凹線が周り、竹節形につくられる。I遺構面出土である。(734)は口径8.8cmの青磁香炉であり、口縁部内側に返りが付く。算木文を施す。I遺構面出土である。(735)は口径7.9cmを測る青磁香炉である。口縁内側に返りが付き、口縁部、胴部、底部に数条の凹線が周り、竹節形につくられる。II遺構面出土である。(736)・(737)は口縁約9.0cm、器高約2.1cmを測り、(738)は口径22.2cm、器高3.9cmを測る端反の白磁皿である。(739)は高台内に「福」の字が描かれる白磁皿の底部で(736~738)と共にI遺構面出土である。(740)は口径10.7cm、器高2.6cmを測る白磁皿である。高台脇から丸みをもって開き口縁に至る。II遺構面出土である。(741)は口径13.1cm、器高3.1cmを測る白磁皿で、III遺構面からの出土である。(742)は口径6.4cm、底径2.4cm、器高3.6cm、(743)は口径6.2cm、底径2.4cm、器高3.2cmを測る白磁の坏である。2点とも見込に幅約0.8mmの輪状になった釉の掛からない部分を有する。(742)はI遺構面、(743)はIII遺構面出土である。(744)は口径13.4cm、器高5.2cmを測る染付碗である。外面口縁には波濤文帯を、胴部には芭蕉葉文を描く。見込には蓮花文を描く。II遺構面出土である。(745)は底径5.1cmを測り、III遺構面から出土した染付碗である。(746)は口径12.8cm、器高2.9cmの染付皿である。高台内に「宣徳年造」と描く。I遺構面出土である。(747)は底径9.9cmを測り、内面に玉取獅子文を描く染付皿である。I遺構面出土である。(748)は口径9.8cm、器高2.9cmを測る「碁笥底」をもつ染付皿である。II遺構面出土である。(749)は口径13.5cm、器高3.1cmの端反の染付皿である。III遺構面出土である。

金属製品 (750)は鉄製の鉤状金属製品で、最大長11.9cmを測る。幅約1.0cm、厚さ約0.4cmの棒状金属器の先端を鉤状にしている。用途は不明である。(759)・(758)は鉄釘である。(759)の全長は10.8cmだが先端がやや曲がっているため、本来はもう少し長い。頭部は巻頭であり、天端からみると長辺1.6cm、短辺0.9cmである。首部の断面は0.5×0.5cm、中央部断面は0.4×0.4cmで、ともに正方形である。I遺構面出土である。(758)は全長7.3cmである。頭部は巻頭だが巻ききらず、折れのみにとどまる。天端からみて長辺1.2cm、短辺0.5cmである。首部断面は0.6×0.4cmで長方形である。釘頭より1/2まで均等に先細り、残りで急に細くなる。I遺構面出土である。(754)は鉄製の猿繫である。2つの輪が組み合った状態で、全長は7.0cmを測る。L字型の部分は完形で、柱などの部材に固定する側は先端が切れている。L字型部材の全長は6.4cm、断面は円形に近く径0.7cm、先端2.2cmが直角に曲げられ、他端の輪は外径0.9cmである。一方、これに組み合う輪は外径が1.1cmで、先端は途中で切れる。I遺構面出土である。(755)は鉄製の猿繫である。L字型のみ完形で出土した。全長は7.4cm、輪部は外径1.5cm、穴の内径は0.7cmを計る。輪に近い部分の首部は太く、輪から3/7の辺りから断面が径0.6cmで一定になる。先端2.6cmが直角に曲げられ、先端断面は径0.5cmとやや細くなる。I遺構面出土である。(753)は鉄製の壺金である。全長4.9cm、頭部はほぼ円形で外形は1.3cm、内径は0.6cmを測る。頭部厚みは0.7cmで、

先端へ向かって次第に細くなる。Ⅰ遺構面出土である。(757)は鉄製の引手金具である。3枚が重なった状態でくっついており、全体にサビが多い。外形は長手方向で0.5cm、短手方向で3.8cm、内径は長手方向で3.6cm、短手で2.4cmを測る。最も内側の1枚目は筒形で、厚みが1cm、長手方向に釘穴が2つつく。縁の幅は0.3cmである。2枚目は板状で幅0.4cmである。3枚目は花びら状で、花卉は長手方向が0.8cm、幅は0.4cmである。Ⅲ遺構面出土である。(756)は鉄製のピンのような形をしている。全長は5.8cmを測る。頭部は円錐の先端を切断したような形で、天端は径1.1cmの円形、他方は径1.3cmの円形である。これにつながる首部の断面は0.4×0.4cmで正方形である。Ⅰ遺構面出土である。(751)は鉄製の錠前である。本体は長さ9.3cm、高さ3.1cm、厚み1.2cmを測る。本体には3本の棒状のものがついている。中央のものが最も太く、その断面は根元で0.9cm×0.5cmで長方形である。両側2本はやや細く、どちらも0.7cm×0.4cmである。このうち一方には板状の金物がついているが、完形ではない。3本とも途中でほぼ直角に曲がっている。Ⅲ遺構面出土である。(752)は銅製の隅金具である。T字を逆さまにし、中心で折り曲げ、左右を合せた形である。合わさった底部はそれぞれ0.3cmほど内側に折り曲げている。端部には4箇所穴が開き、ピンなどを刺して本体と固定したと思われる。表面に紋様は見られない。先端の凹みは4箇所のうち3箇所は2つあるが、残りは1つしかなく、仕上げにばらつきがみられる。Ⅰ遺構面出土である。(760)は火打金である。最大長10.8cm、幅4.2cm、厚さ約0.3cmを測る。Ⅲ遺構面出土である。(761)は銅製の錘である。中央部がくびれた六角形を呈す。約71gである。Ⅰ遺構面出土である。(763)は径1.2cmを測る金属製の鈴である。上部には紐などを通すための1つの穴があいた部品が付く。2つ穴のあいた金属製の鈴が第51次調査で出土している。中に玉が入り、音が鳴る。Ⅲ遺構面出土である。(765)は鉄製の鋏である。最大長13.5cm、刃部6.0cmを測る。Ⅲ遺構面出土である。(766)は毛抜きである。半分欠損している。残存長は9.6cmである。Ⅰ遺構面出土である。(764)は銅製の菊皿で、紅皿やお歯黒のための皿として使用されていたと考えられる。口径5.6cm、器高2.6cmを測る。Ⅱ遺構面出土である。(762)は長径3.1cm、短径2.4cmを測る鉄製の責金具である。埋没中に押し潰されて変形した可能性がある。(767~769)は鉄製の小札である。(767)は頭部を斜めに切り、紐通し孔を13ヵ所有する本小札とよばれる。最大長6.6cm、幅約1.6cmを測る。(768)・(769)は頭部に半円形が2個並び、紐通し孔が14ヵ所有する伊予札と呼ばれる。Ⅰ遺構面出土である。(768)は最大長6.4cm、幅約2.1cmを測る。Ⅱ遺構面出土である。(769)は最大長6.3cm、幅約1.8cmを測る。Ⅲ遺構面出土である。(770)は最大長4.3cm、幅1.3cmを測る銅製の飾金具である。毛彫り鑿や魚々子鑿で彫金しているが、直線が綺麗に繋がっていない点などの粗さが目立つ。Ⅰ遺構面出土である。(771)は長径3.9cm、短径2.1cmを測る切羽である。周囲を鑿で均等に刻み、整形している。Ⅰ遺構面出土である。

木製品 (772)は雪下駄で、長さ18.0cm、幅8.6cm、厚さ1.9cmを測る。Ⅰ遺構面出土である。(773)長さ22.3cm、最大幅8.4cmを測る連歯下駄である。Ⅰ遺構面出土である。(775)も連歯下駄である。長さ21.6cm、幅11.1cmを測る。「眼」と呼ばれる3つの穴を穿つが、鼻緒を通さない2つの眼は径約0.4cmの穴を重複して穿って、鼻緒を通す穴よりも大きく穿孔している。Ⅲ遺構面出土である。(774)は草履下駄と考えられるものである。長さ21.6cm、幅4.6cm、厚さ1.8cmを測る。中央より少し外れた部分に「挟り」が施されている。両端に片面は径約1cm、反対面は径約0.7cmになる穴をもち、内壁が焦げている。Ⅲ遺構面出土である。(776)は取手である。蓋や建具の取手と考えられる。取り付けるための釘が打たれている。Ⅰ遺構面出土である。(777)は内外面に朱漆で円文が描かれる黒漆椀である。高台径8.1cmを測る。口縁部は欠損している。Ⅱ遺構面出土である。(778)は高台径7.4cmを測る黒漆椀である。内外

面に亀甲文が描かれる。Ⅲ遺構面出土である。(779)は口径16.3cm、高台径7.7cm、器高8.2cmを測る黒漆碗である。内外面に文様は確認できない。Ⅲ遺構面出土である。(780)は口径15.5cm、高台径8.1cm、器高9.3cmである。内面に文様が確認できるが、明確に残らない。Ⅲ遺構面出土である。(781)は曲物の蓋である。最大径10.2cm、厚さ0.35cmである。中心より約3cm外に蓋の摘みを1箇所有する。Ⅱ遺構面出土である。(782)は木筒である。残存長15.1cm、最大幅2.3cm、最大厚0.6cmである。付札と考えられ、「□おか□□□□□せん」と墨書がある。Ⅲ遺構面出土である。(783)は刀剣の鞘である。残存長15.3cm、幅3.2cmを測る。刀剣が収まる幅は2.1cmである。Ⅲ遺構面出土である。(784)は梳櫛である。黒ずんだ部分もあるが漆を塗布した痕跡は見られない。Ⅲ遺構面出土である。(785)は用途不明の木製品である。(284)・(285)は箸である。(786)は長さ29.7cm、(787)は長さ25.6cmを測る。Ⅲ遺構面出土である。

その他出土地の遺物 (第58図、PL.70)

ここでは、排土や整備作業中に確認された遺物を掲載する。

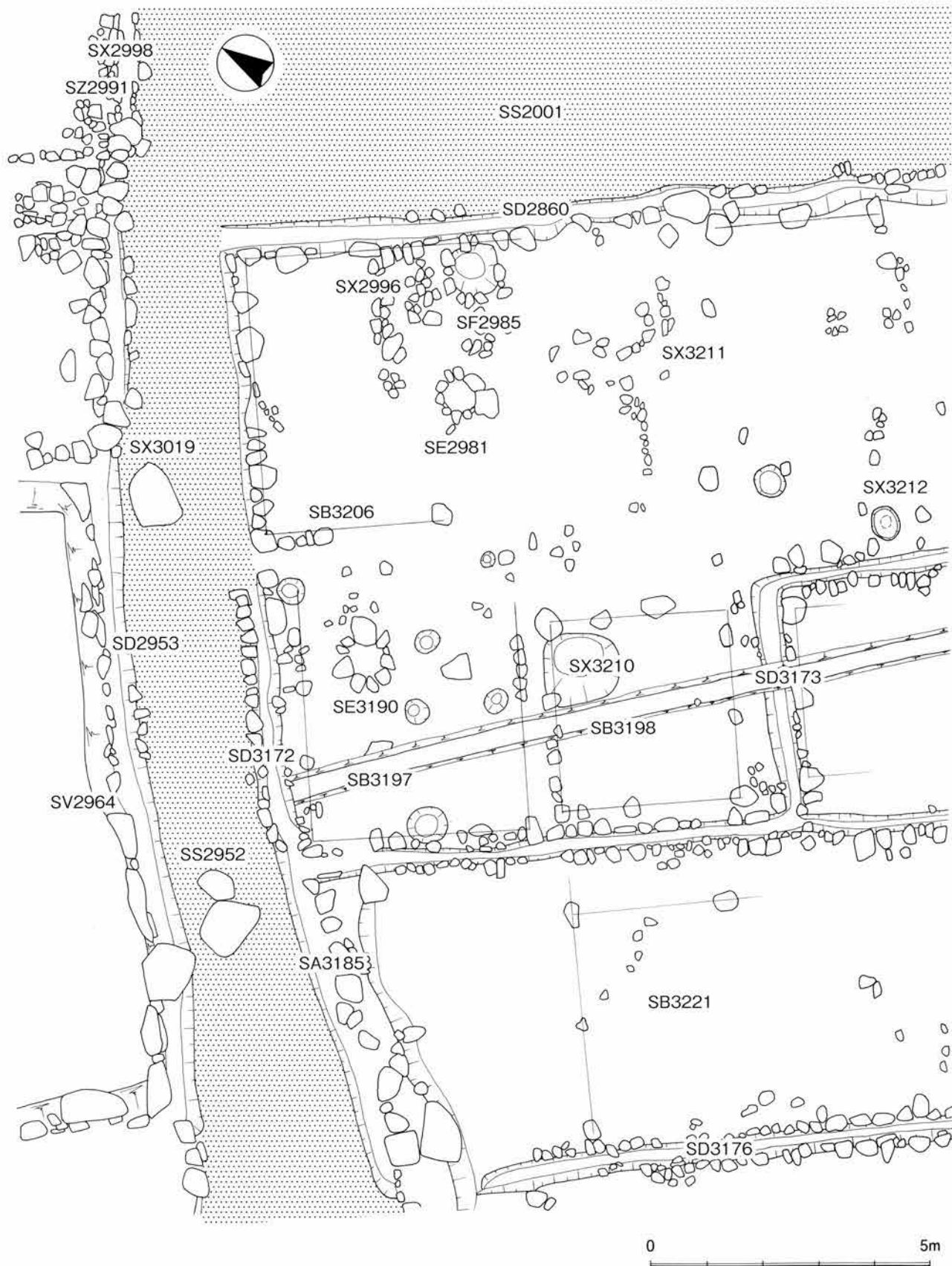
瀬戸・美濃焼 (788)は口径12.0cm、器高6.6cmを測る鉄釉碗である。内面と外面体部に鉄釉を施し、高台部分に錆釉を施す。体部下位から高台にかけて釉の垂れが確認できる。

金属製品 (789)は火打金である。最大長10.0cm、厚さ0.35cmを測る。(790)は鍔付金具である。(791)は長径3.6cm、短径2.1cmを測る切羽である。周囲を鏝で均等に刻み、整形している。(792)は小柄である。開扇文が彫金される。全長9.1cm、幅1.5cmを測る。

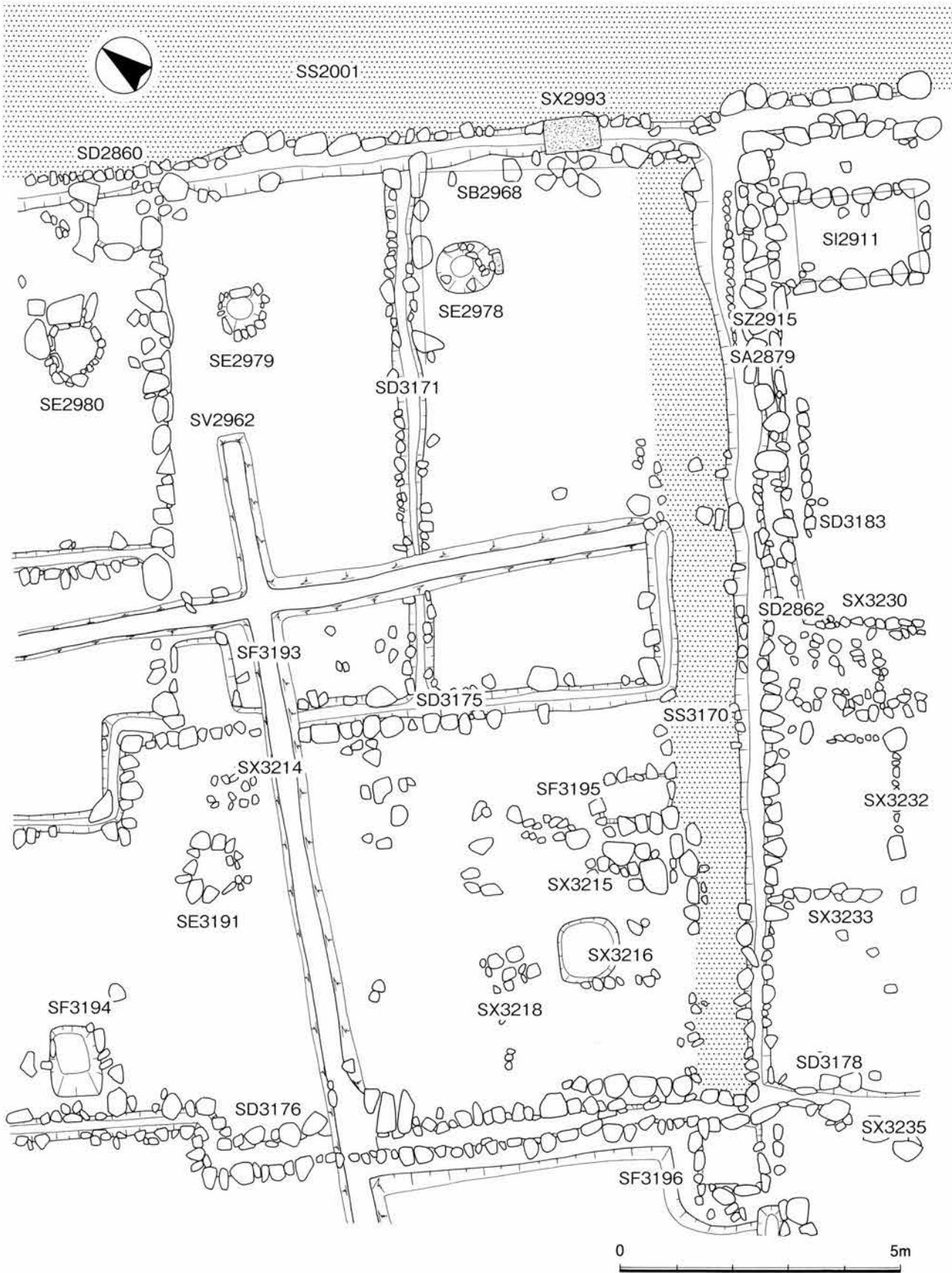
註

- (1) 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡XⅦ 一昭和60年度発掘調査整備事業概報一』福井県立朝倉氏遺跡資料館1986年発行では検出した遺構に伴う遺物群をグループⅠ・Ⅱ・Ⅲとしているが、本報告ではⅠ・Ⅱ・Ⅲ遺構面出土として、対応するものである。
- (2) 青木豊昭「蛭藻金発見に寄せて 戦国大名朝倉氏と黄金文化」『越前若狭 地域史の謎に挑む』2006年発行。
- (3) これまでに上記の「概報」や月輪泰「朝倉氏遺跡出土の銅銭について」『朝倉氏遺跡資料館紀要1989』福井県立朝倉氏遺跡資料館1990年発行、永井久美男編『中世の出土銭 一出土銭の調査と分類一』兵庫県埋蔵線調査会1994年発行、岩田隆「一乗谷の消費と流通」『戦国大名朝倉氏と一乗谷』高志書院2002年発行などで研究報告されている。
- (4) 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ 第10・11次、第54次調査』福井県立朝倉氏遺跡資料館1988年発行p28の中で、用途不明としながらも記述の推定をしている。

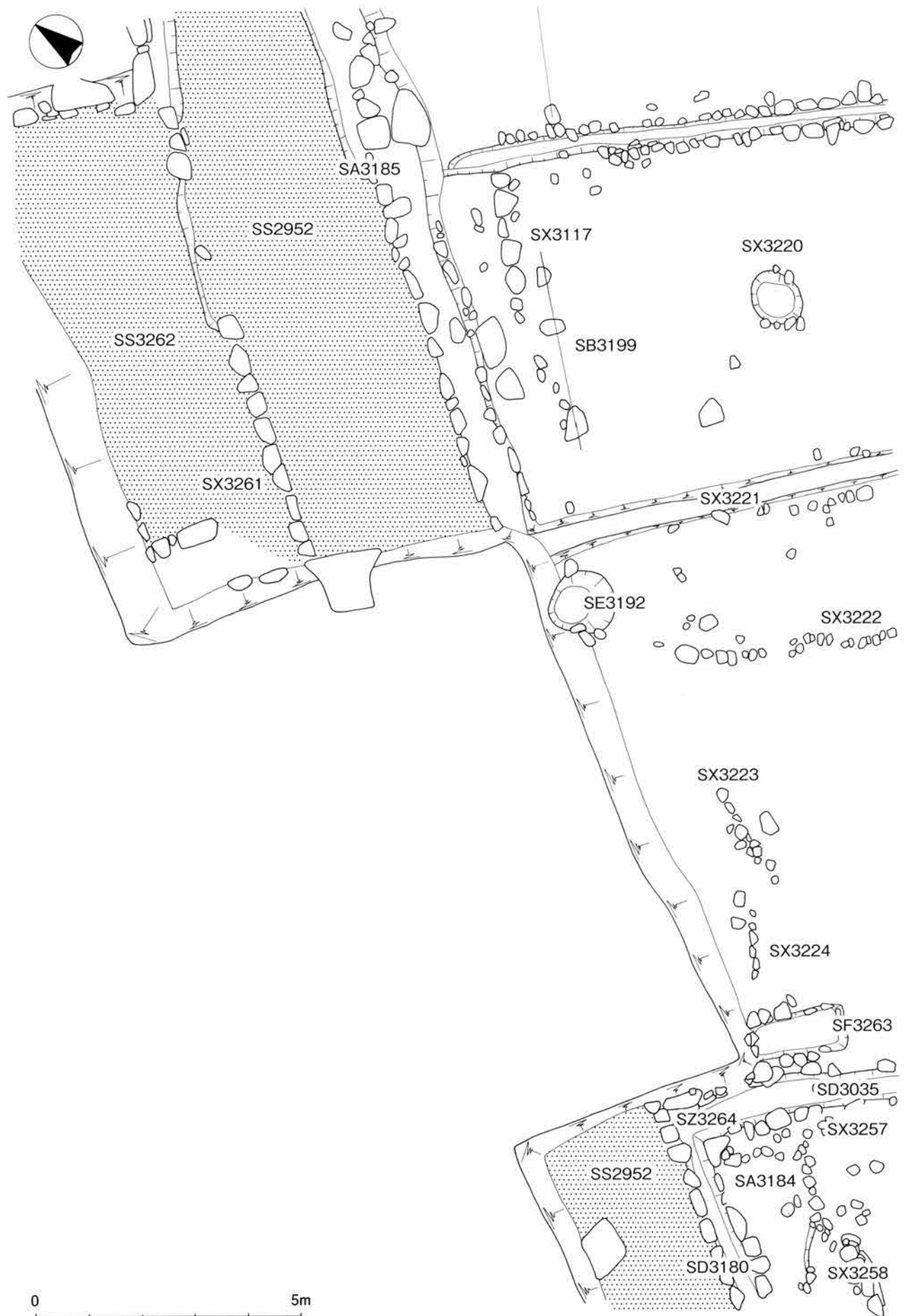
第33図 第52次調査遺構詳細図(1)



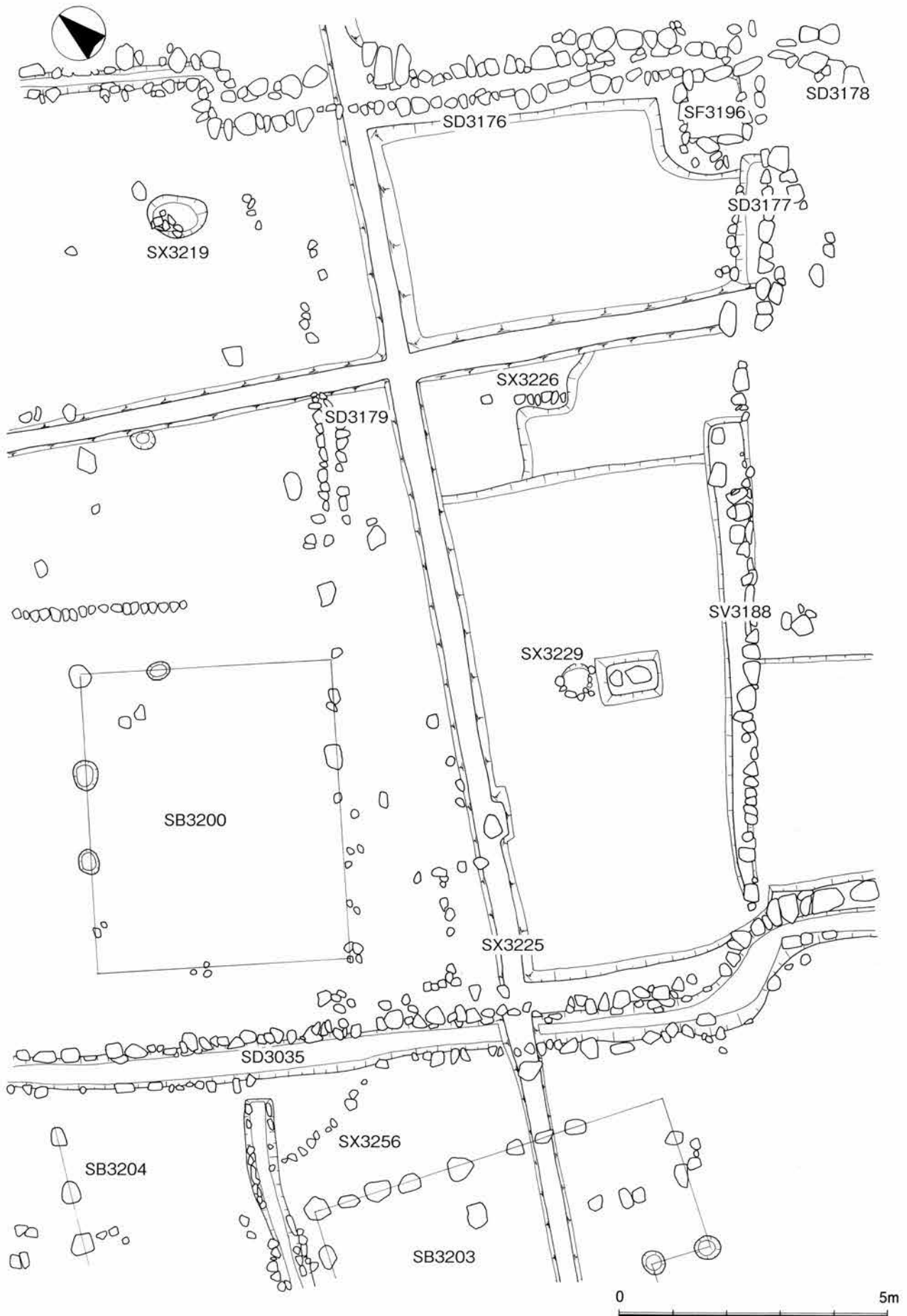
第34図 第52次調査遺構詳細図 (2)



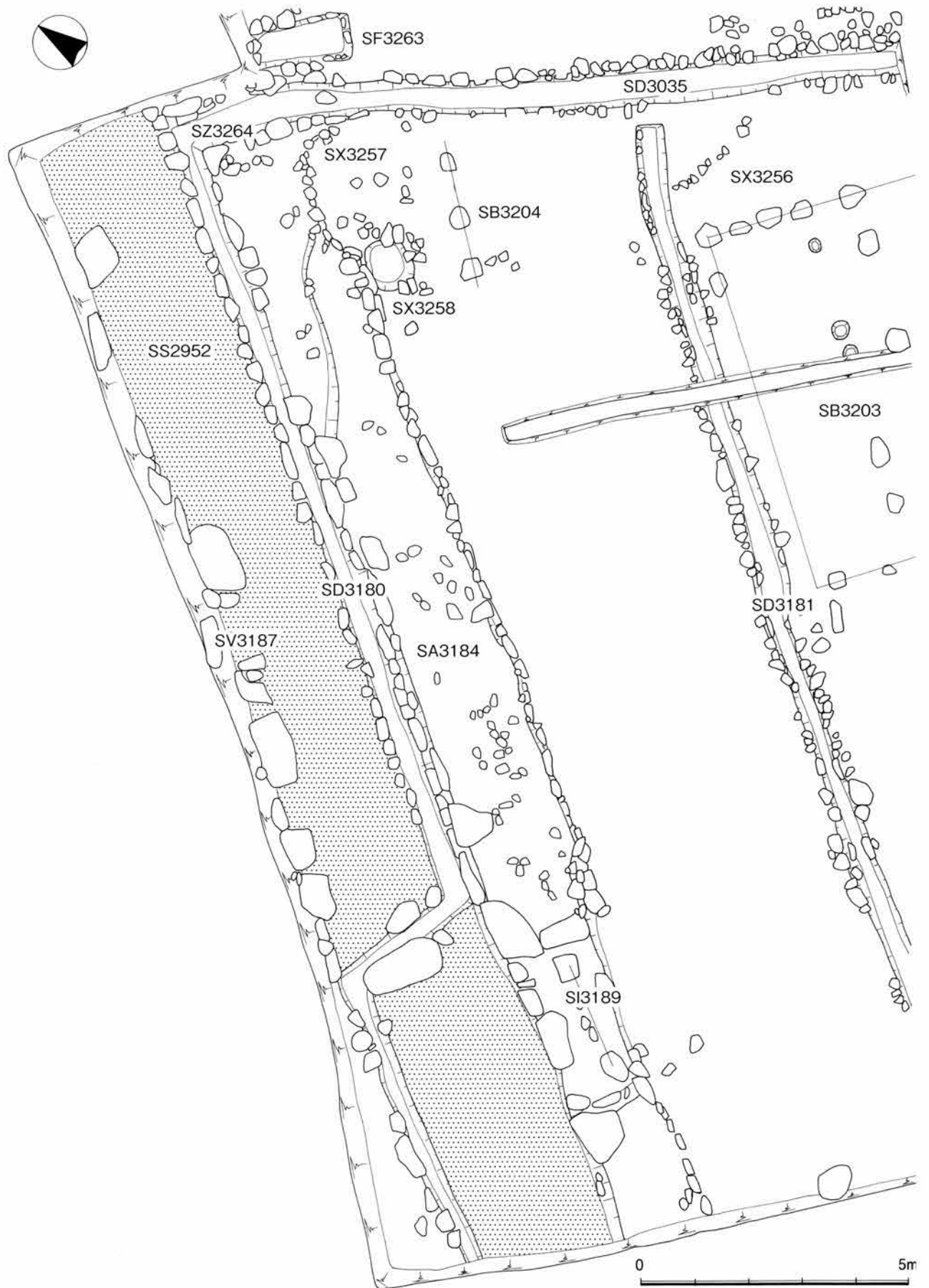
第35図 第52次調査遺構詳細図(3)



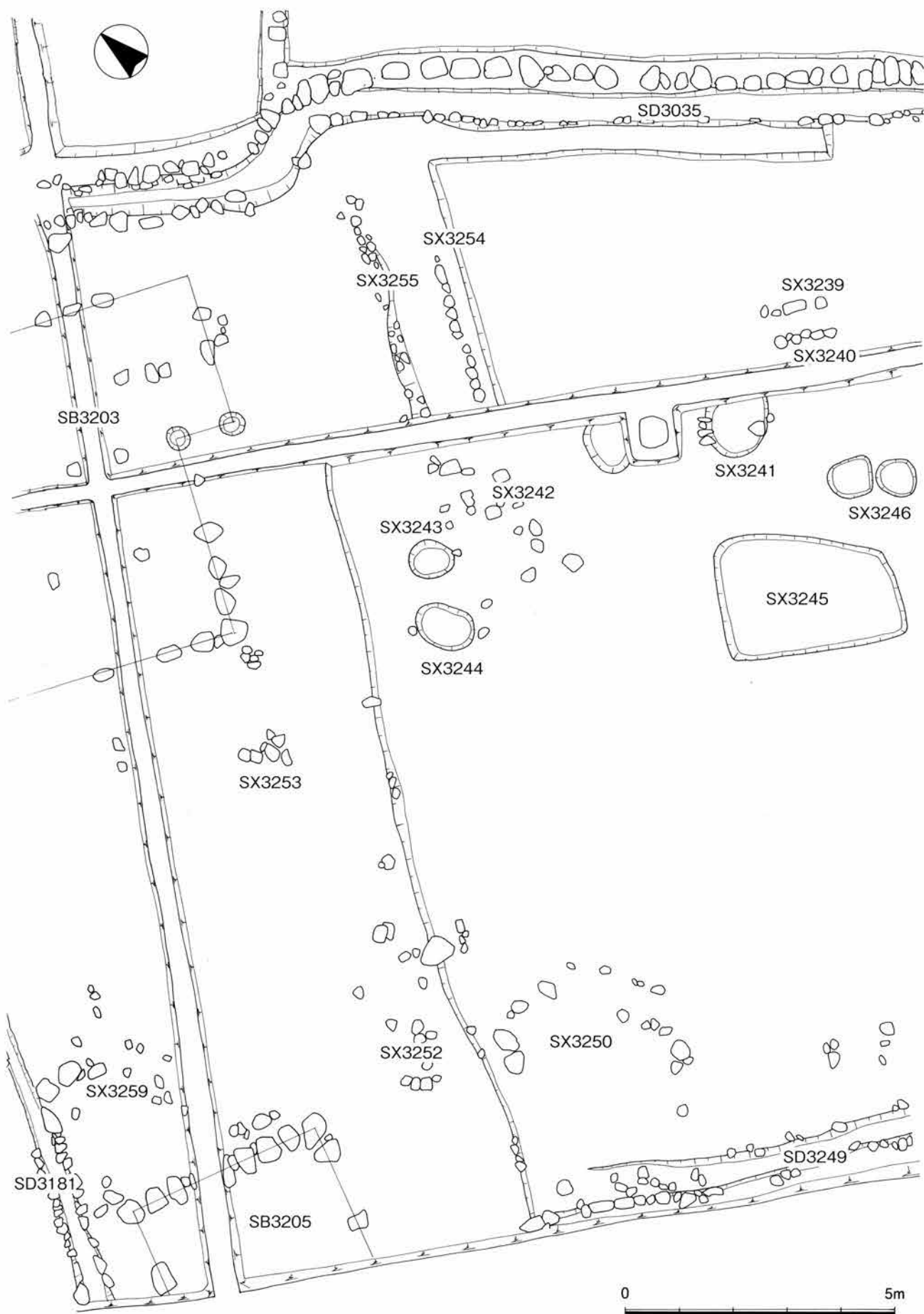
第36図 第52次調査遺構詳細図(4)



第37図 第52次調査遺構詳細図(5)



第38図 第52次調査遺構詳細図(6)





全景(南から)



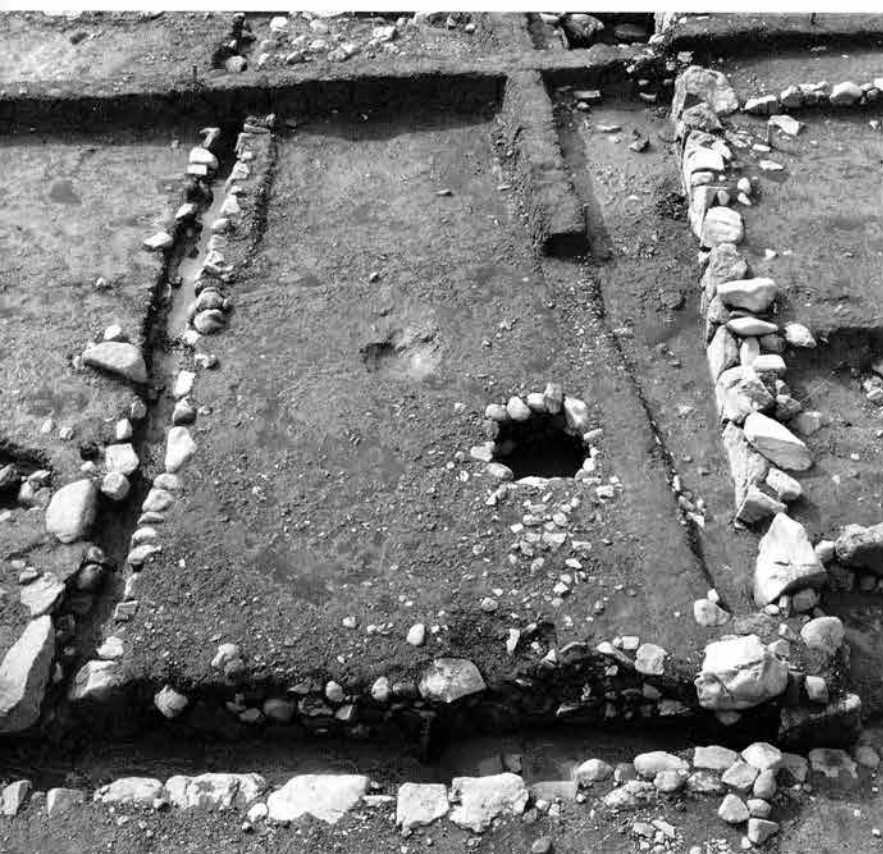
北半(東から)



区画52-1-2
(東から)



区画52-1
(北から)



区画52-2
(北から)



区画52-3
(北から)



区画52-4
(北から)



区画52-3
井戸SE2980
SX2995
(北から)



区画52-4
石積施設SF2985
井戸SE2931
石敷SX2996
(北から)



区画52-5
(西から)

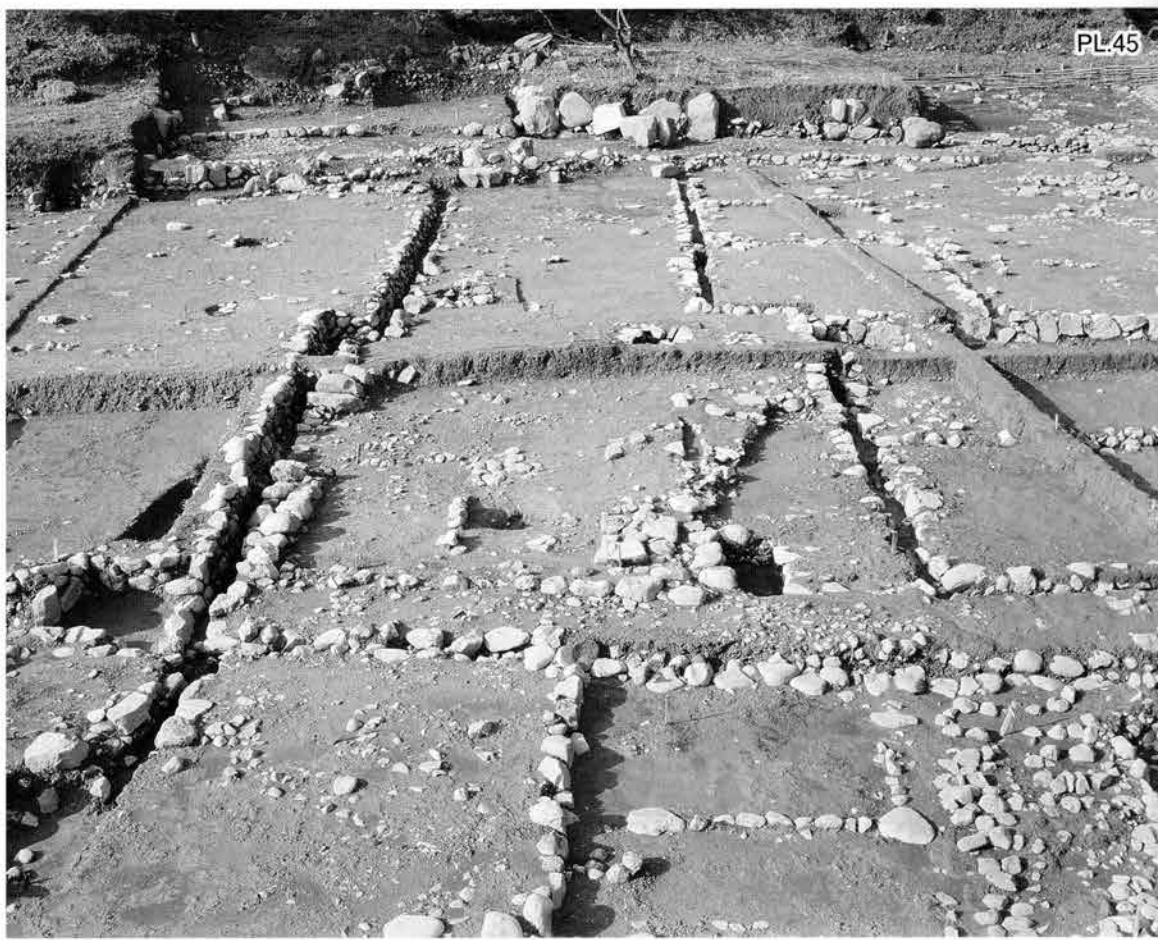


区画52-5
井戸SE3190



区画52-6
(西から)

第52次調査区



区画52-6
(東から)



区画52-6
石積施設SF3195
溝SD3174
(東から)



区画52-6
井戸SE3191
石積施設SF3194





第52次調査区

区画52-7北半
(東から)



区画52-7南半
(東から)



区画52-7
石積施設SF3263
溝SD3035

第52次調査区



区画52-7
石積施設SF3196(東から)
井戸SE3192(東から)



区画52-8全景
(西から)



区画52-8北半(東から)
礎石建物SB3203

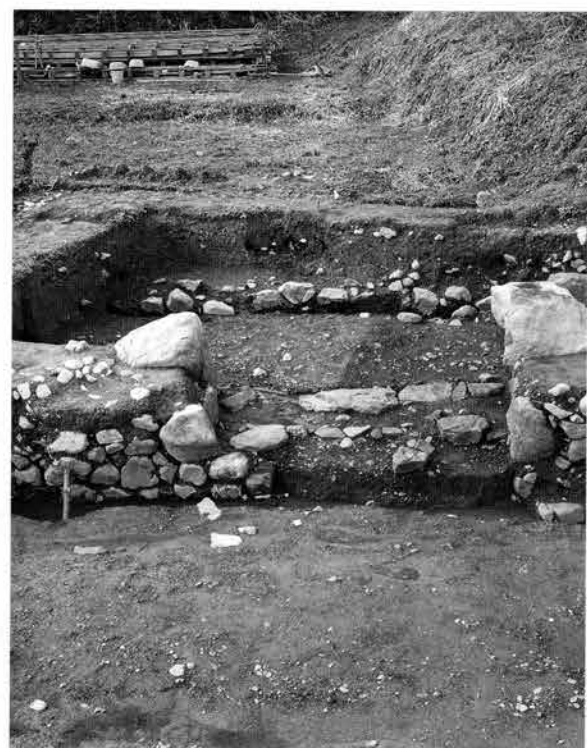


第52次調査区

区画52-8西半(南から)
礎石建物SB3205
礎石建物SB3203
溝SD3181



区画52-8
土塀基礎SA3184
(東から)



区画52-8
門SI3189(西から)
門SI3189(東から)

第52次調査区



区画52-8
溝SD3181(北から)
SX3257(東から)



PL.49



道路
SS2952(北から)
SS2952北半(北から)



道路SS2952
溝SD3172
土掘基礎SA3185
(北から)
道路SS3170
溝SD2862
(北から)





第52次調査区

溝SD3176(東から)
溝SD3176(南から)



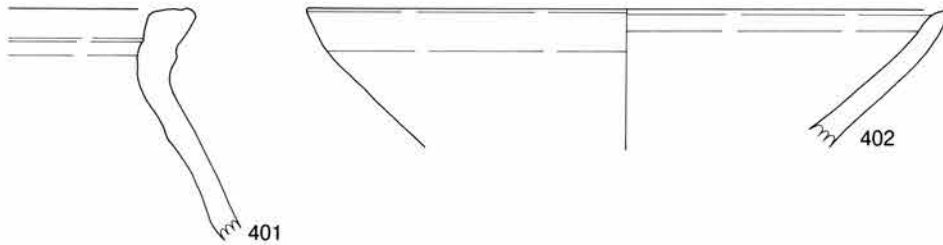
溝SD3035(西から)
溝SD3035(東から)



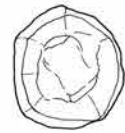
溝SD3171(北から)

第39図 第52次調査出土遺物(1)

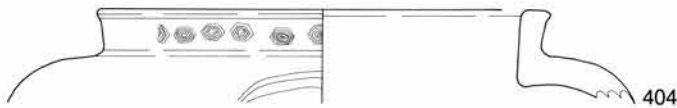
SS2952



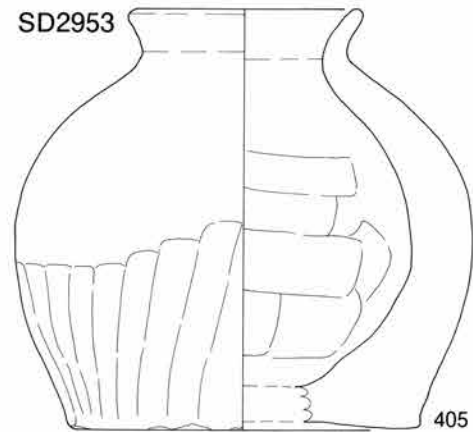
SS3262



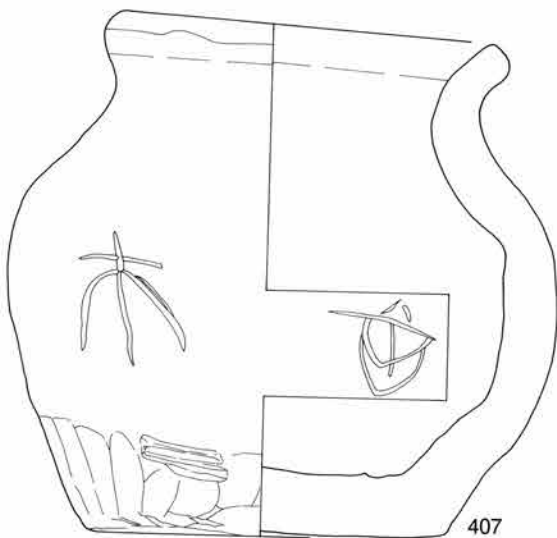
SD3172



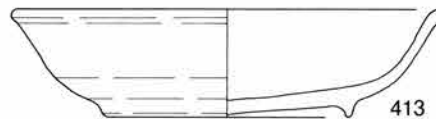
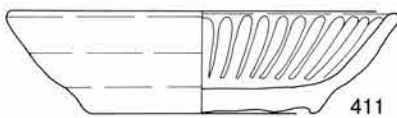
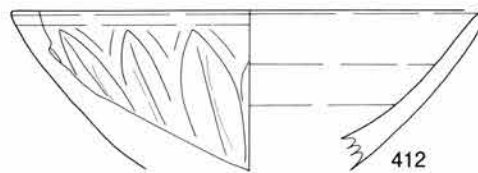
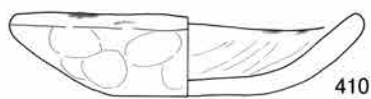
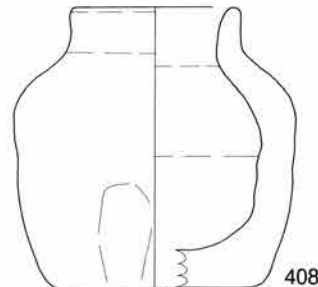
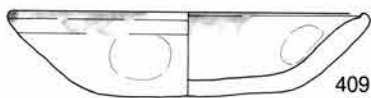
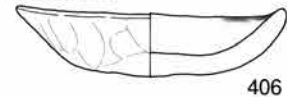
SD2953



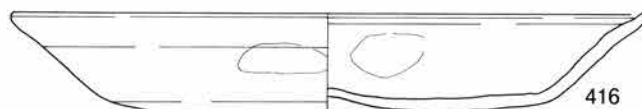
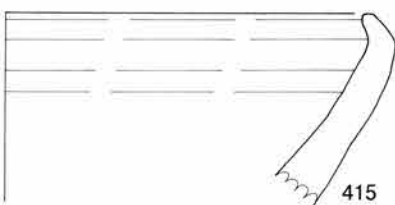
SD2862



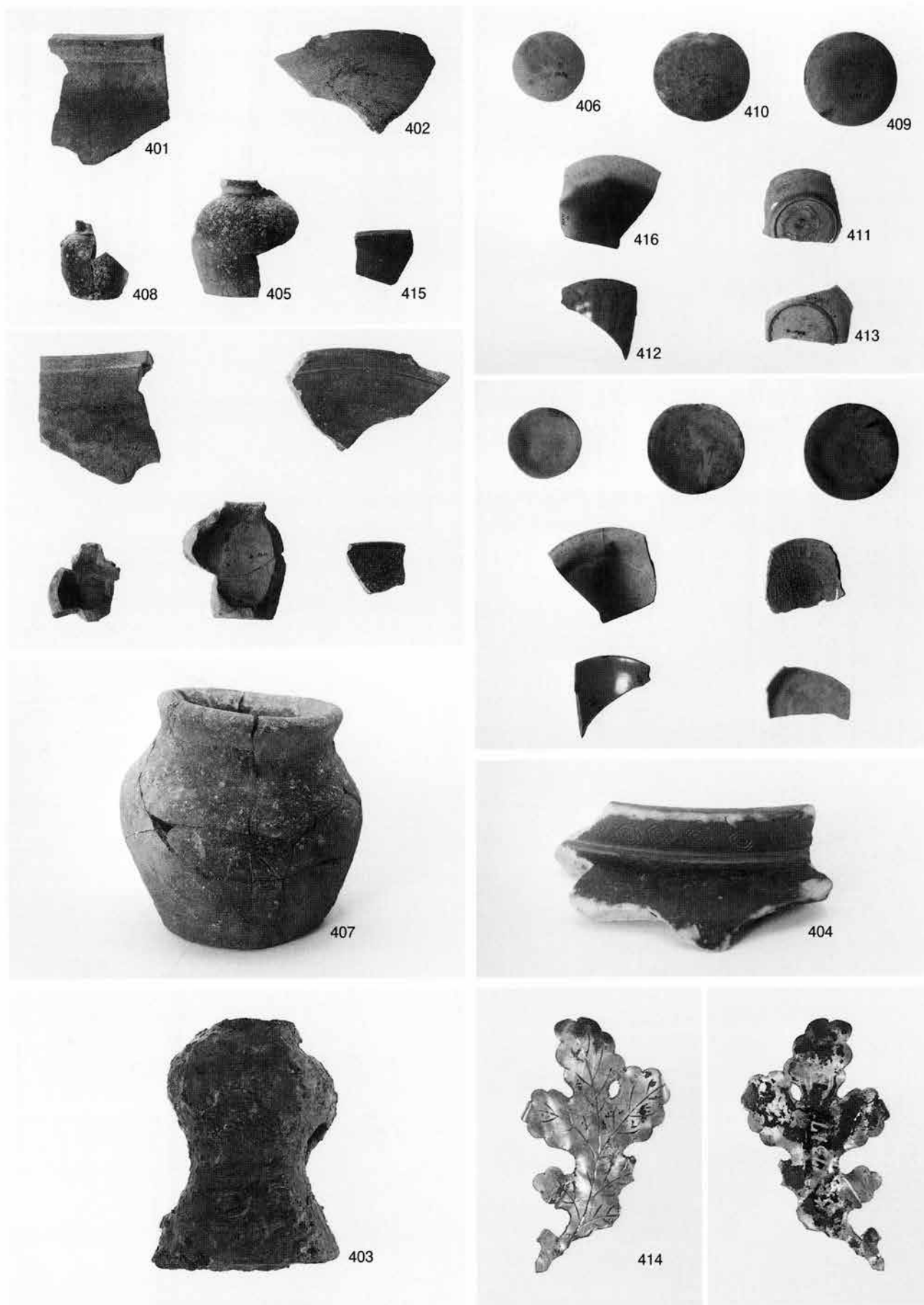
SD3172



SD3171



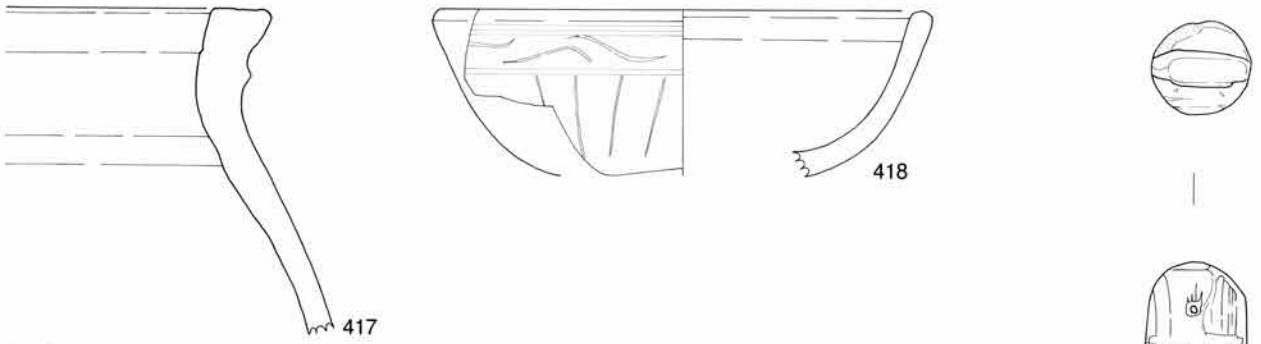
越前焼甕401 壺405・407・408 鉢402・415 土師質土器皿406・409・410・416 瓦質土器風炉404 灰釉皿411 青磁碗412
白磁皿413 金属製品錘403 飾金具414



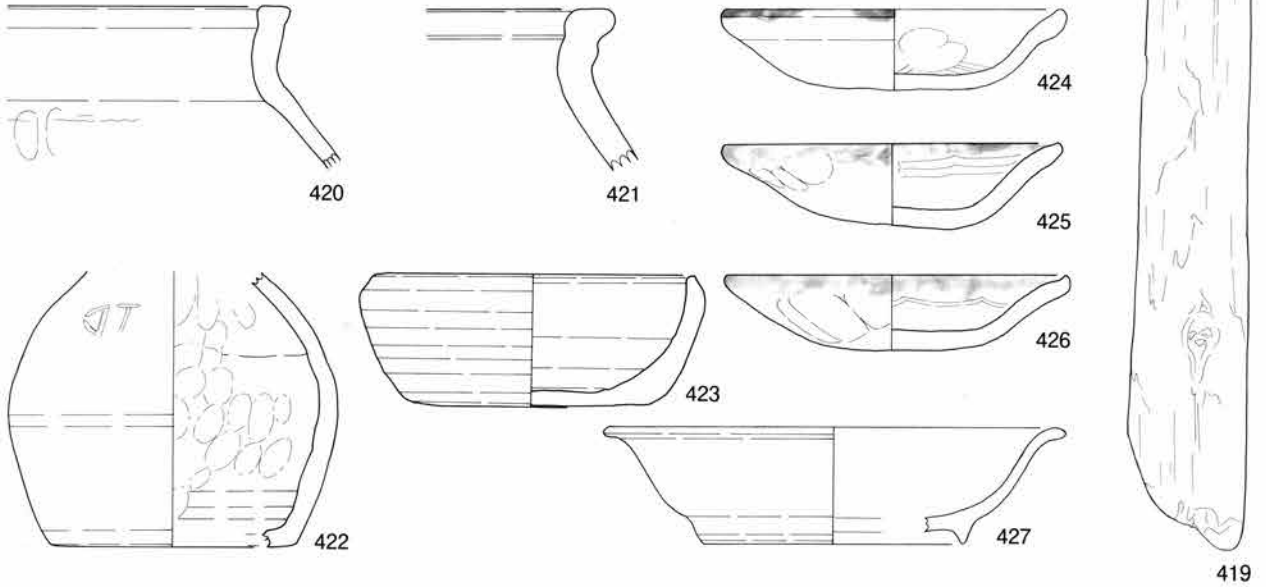
SS2952 越前焼甕401 鉢402 SS3262 金属製品鍾403 SD3172 瓦質土器風炉404 土師質土器皿406
 SS2953 越前焼壺405 SS2862 越前焼壺407 壺408 土師質土器皿409・410 灰釉皿411 青磁碗412 白磁皿413
 金属製品飾金具414 SD3171 越前焼鉢415 土師質土器皿416

第40図 第52次調査出土遺物(2)

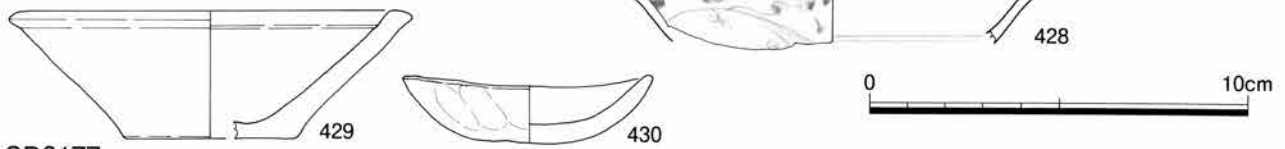
SD3175



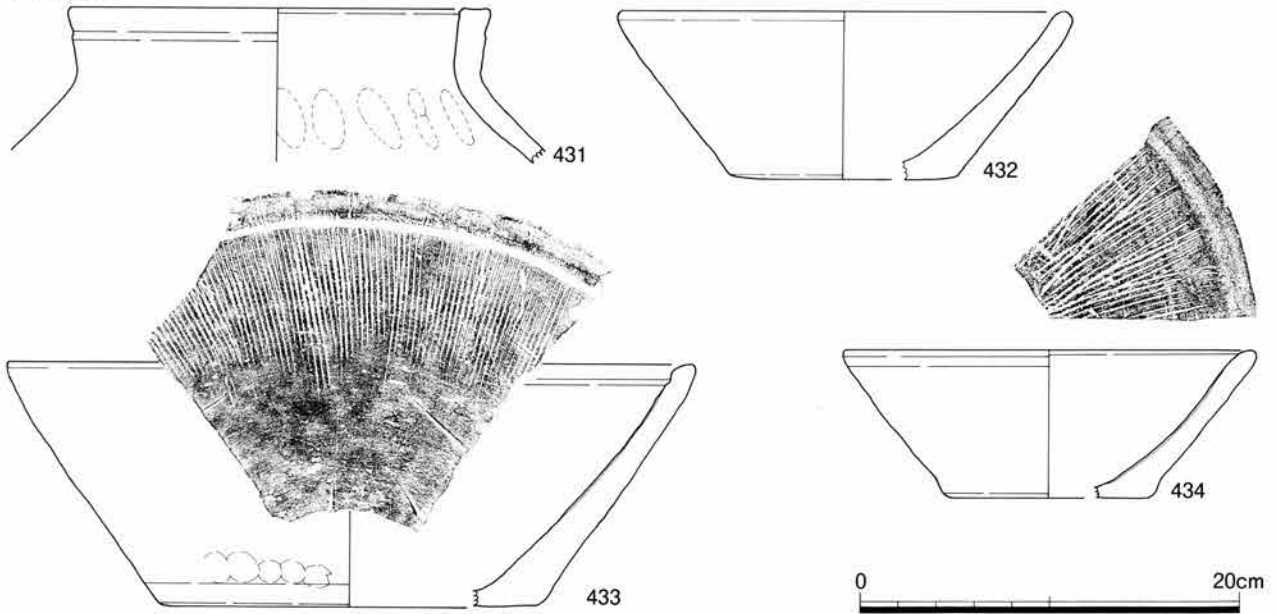
SD3176



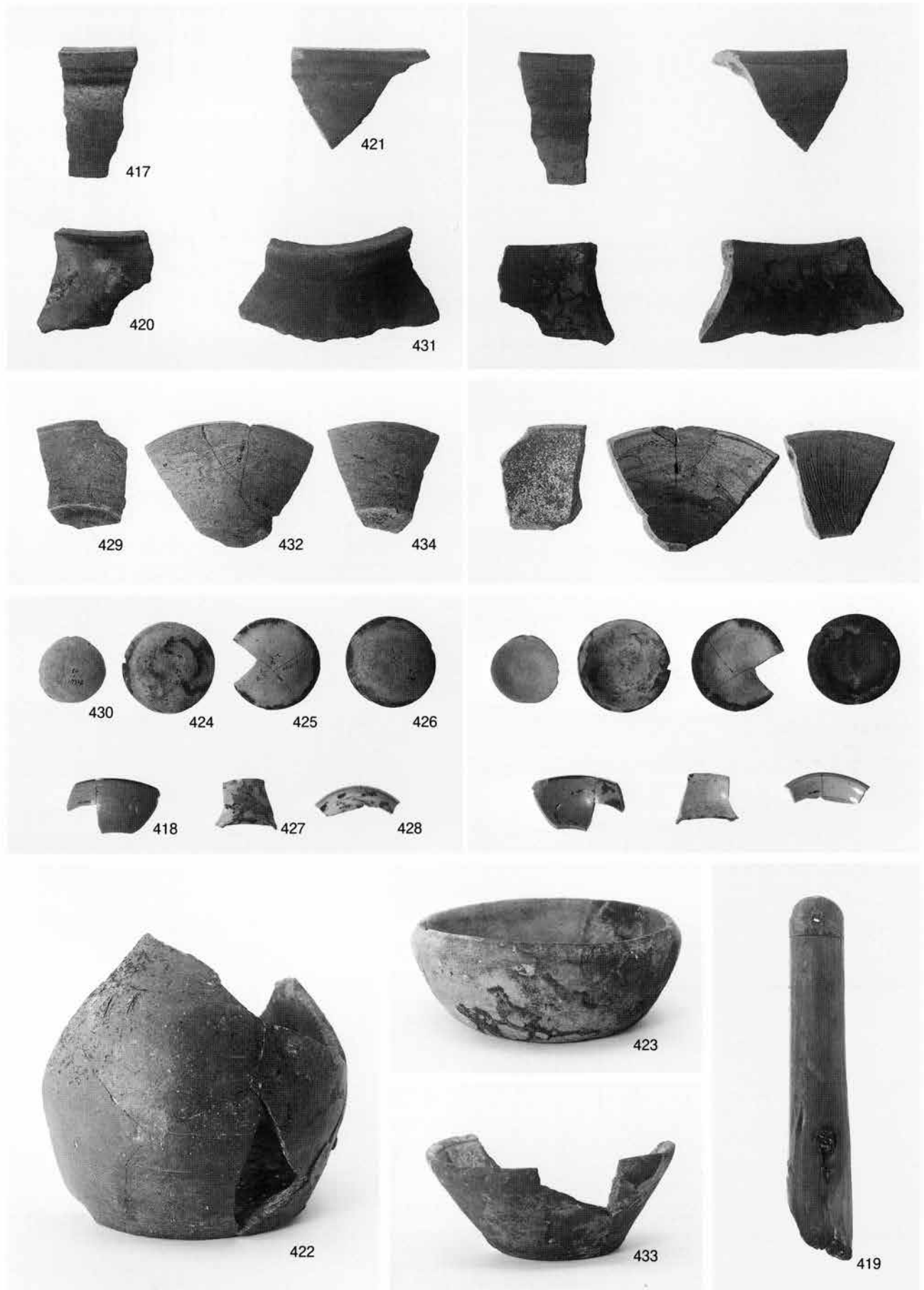
SD3177



SD3177



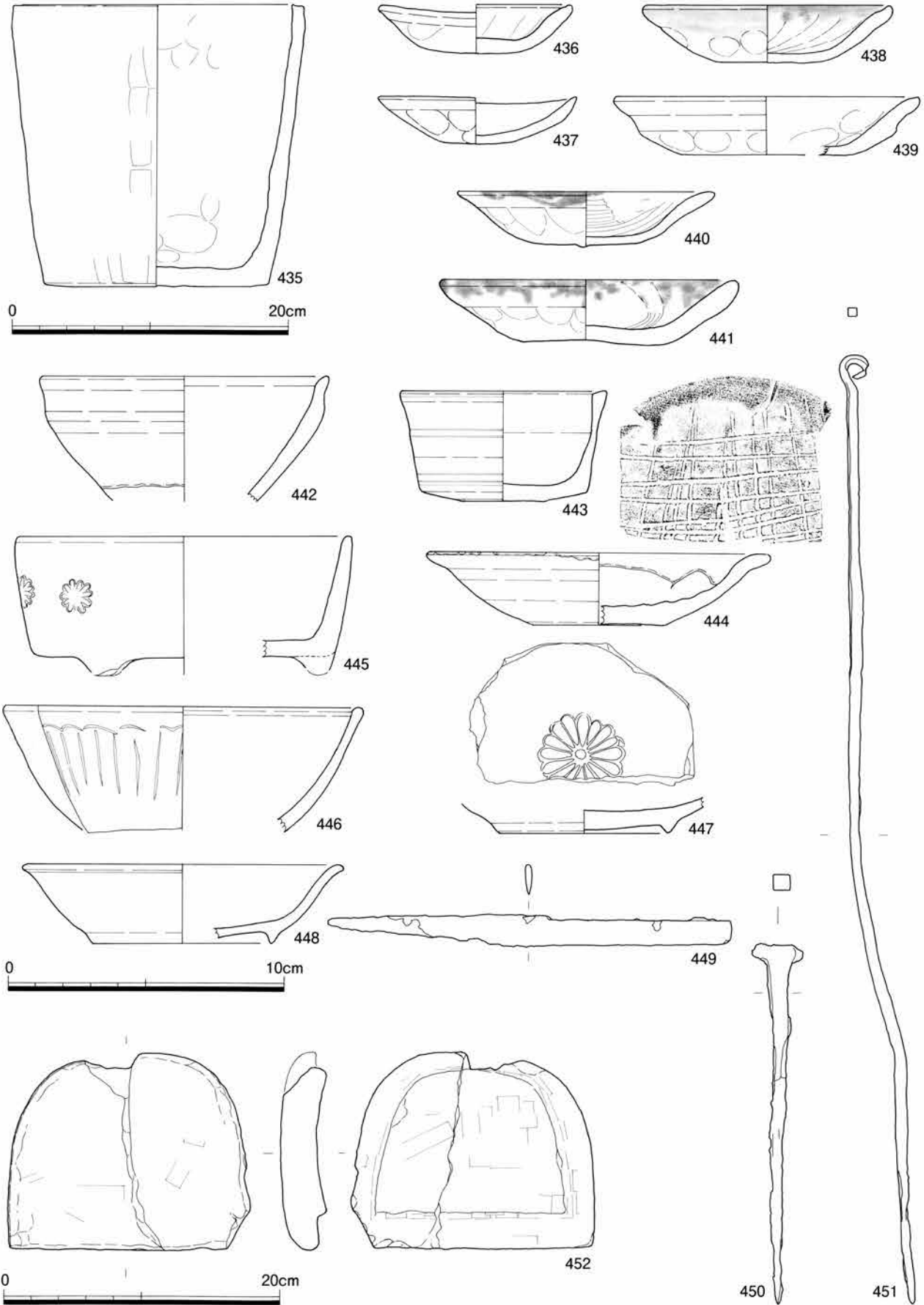
越前焼甕417・420・421・431 壺422 鉢423・429・432 播鉢433・434 土師質土器皿424~426・430 青磁碗418 白磁皿427
 染付皿428 木製品播粉木419



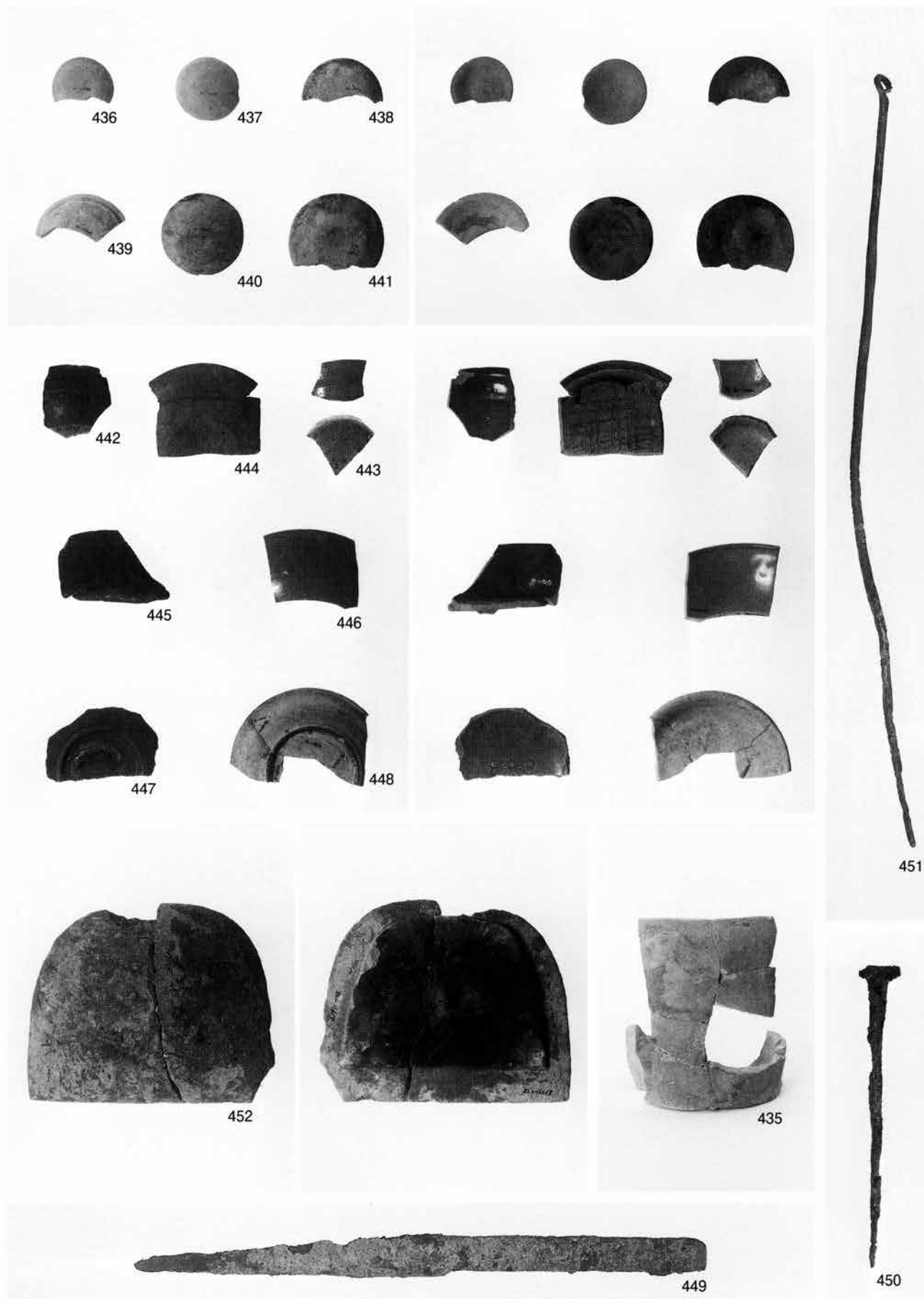
SD3175 越前焼甕417 青磁碗418 木製品搗粉木419 SD3176 越前焼甕420・421 壺422 鉢423
 土師質土器皿424～426 白磁皿427 染付皿428 SD3177 越前焼鉢429 土師質土器皿430 SD3035 越前焼甕431
 鉢432 搗鉢433・434

第41図 第52次調査出土遺物 (3)

SD3035



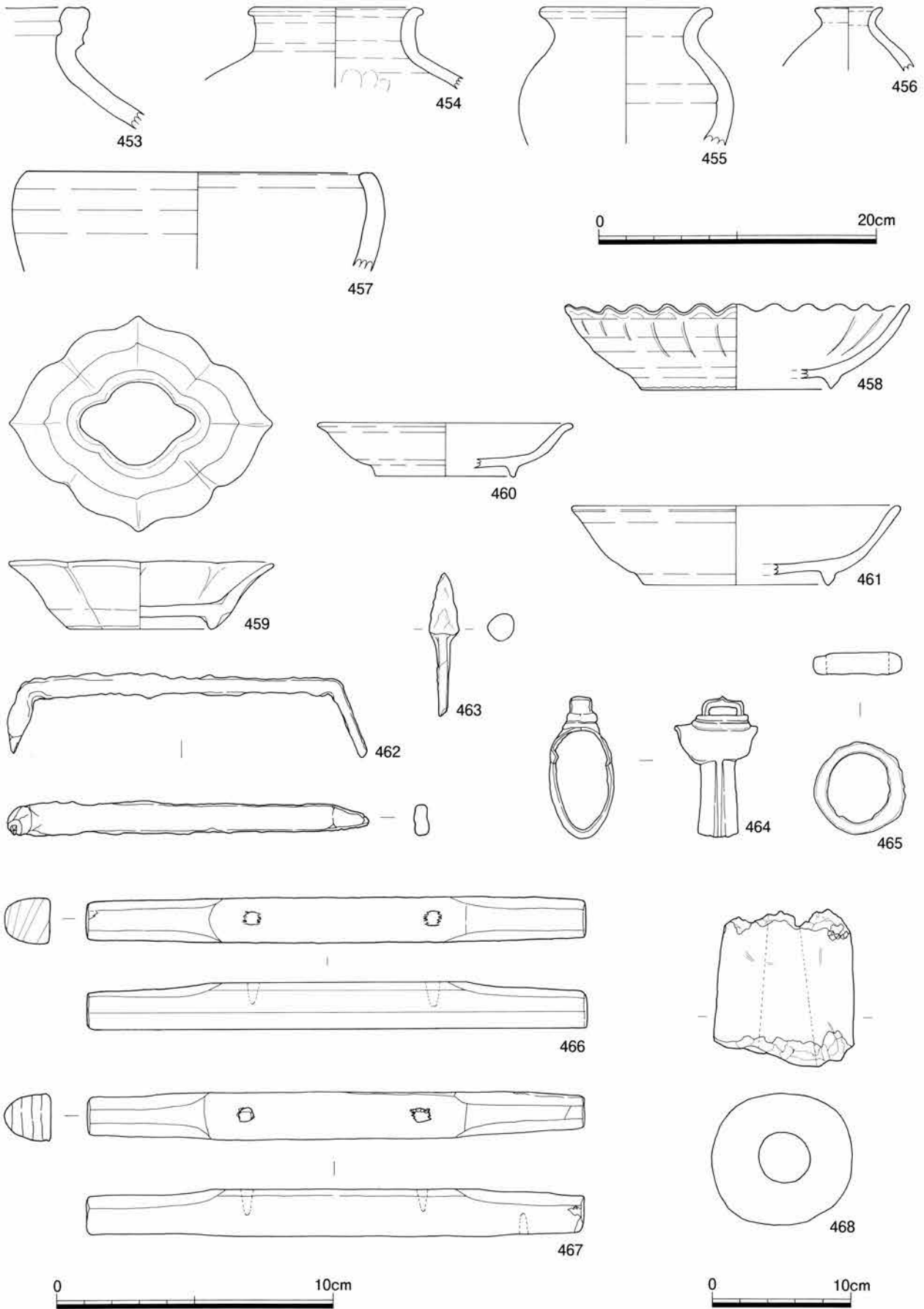
越前焼桶435 土師質土器皿436~441 鉄釉碗442 灰釉香炉443 卸皿444 瓦質土器香炉445 青磁碗446 皿447
白磁皿448 金属製品刀子449 釘450 火箸451 石製品バンドコ蓋452



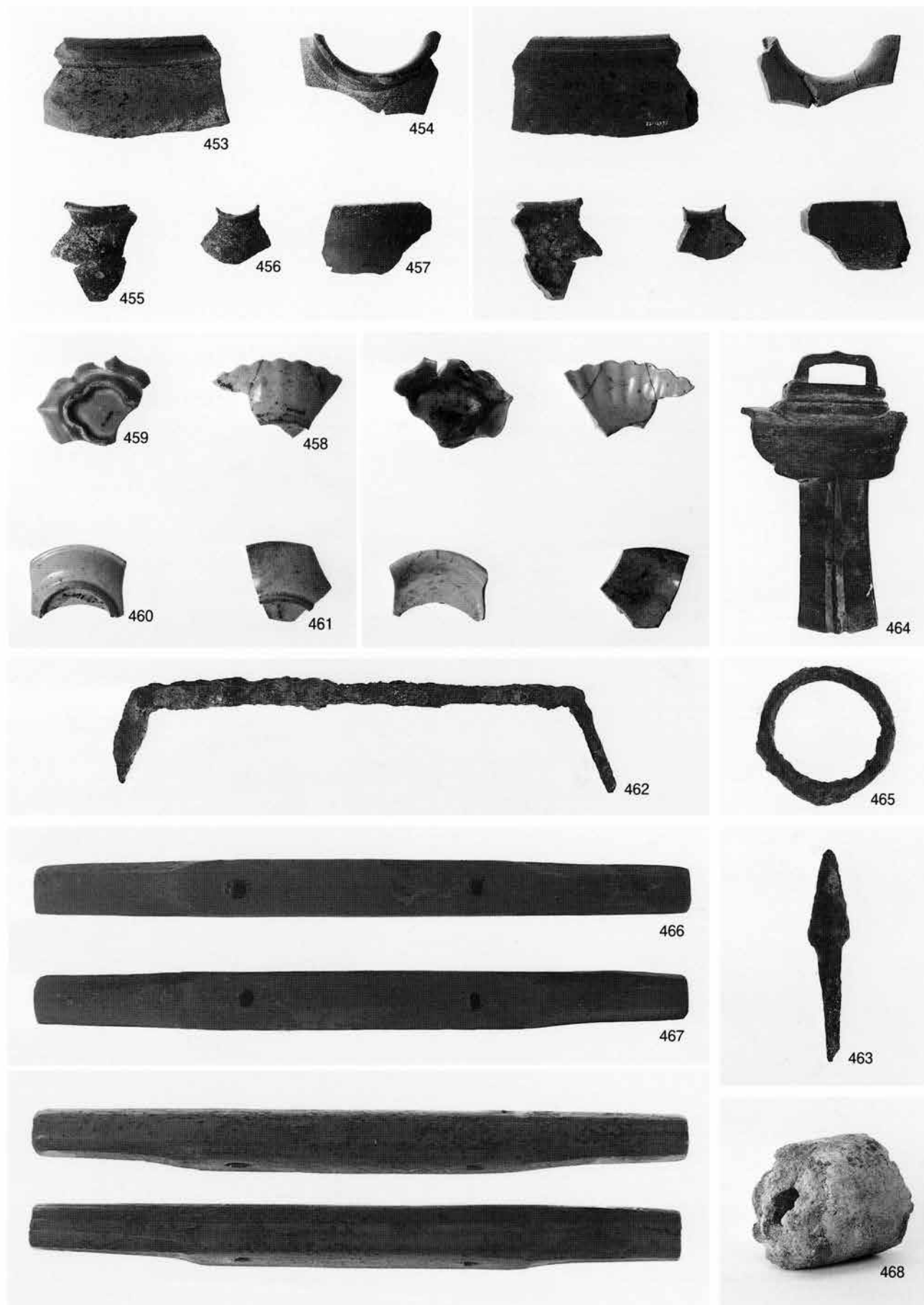
SD3035 越前焼桶 (435) 土師質土器皿436~441 鉄釉碗442 灰釉香炉443 卸皿444 瓦質土器香炉445 青磁碗446
 皿447 白磁皿448 金属製品刀子449 釘450 火箸451 石製品バンドコ蓋452

第42図 第52次調査出土遺物(4)

区画52-1



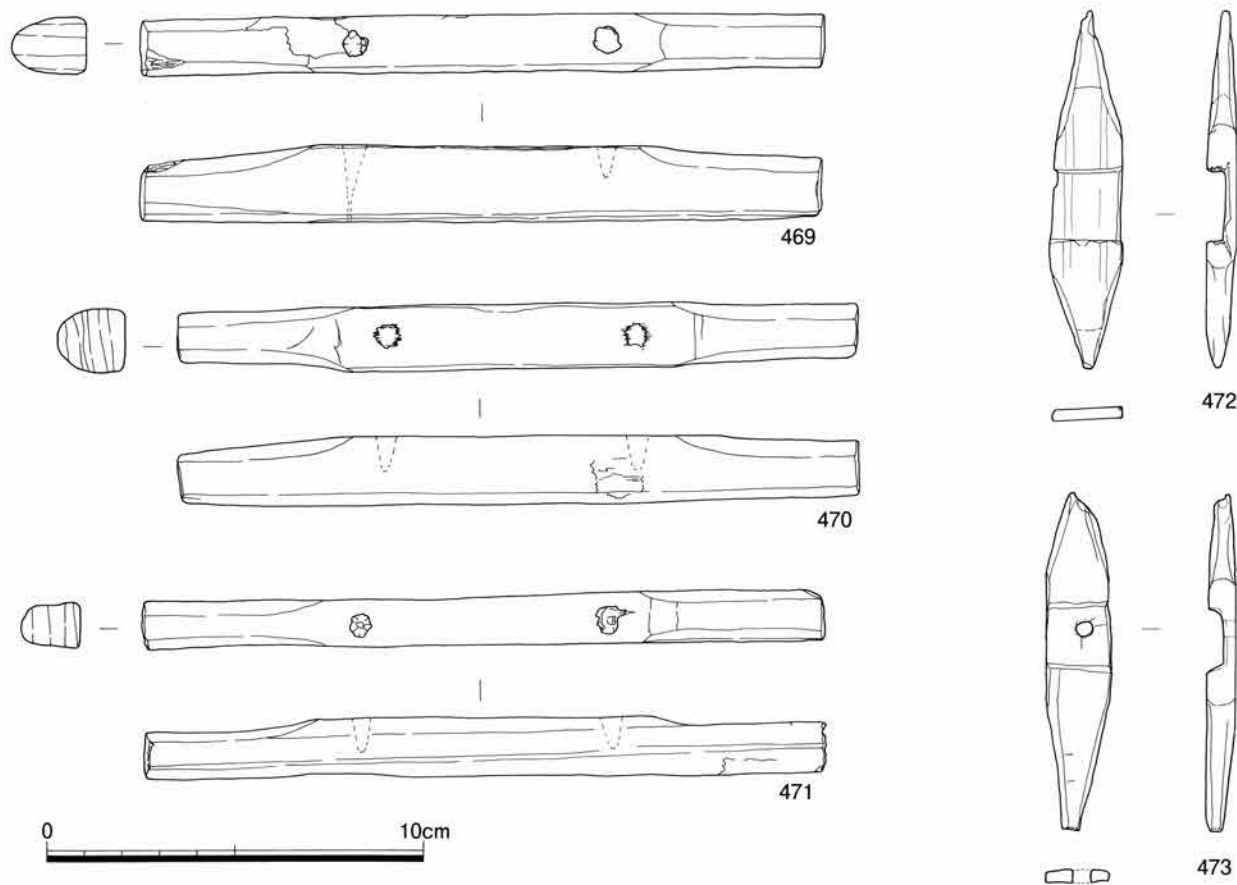
越前焼甕453 壺454~456 鉢457 青磁皿459 白磁皿458・460・461 金属製品鏝462 鉄鏝463 足金物464 賣金具465
木製品糸車466・467 その他鞆の羽口468



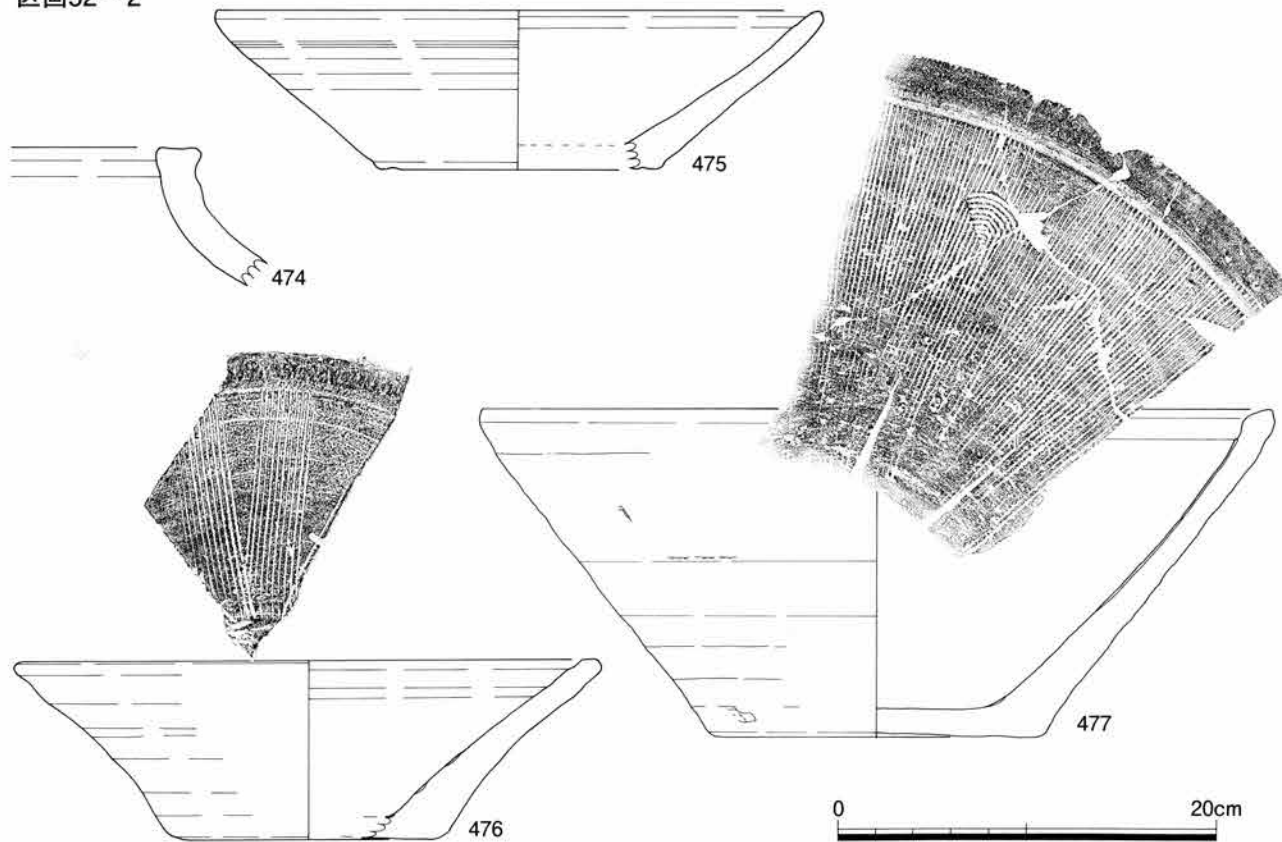
区画52-1 越前焼甕453 壺454~456 鉢457 青磁皿459 白磁皿458・460・461 金属製品鏝462 鉄鏝463 足金物464
 貴金具465 木製品系車466・467 その他鞆の羽口468

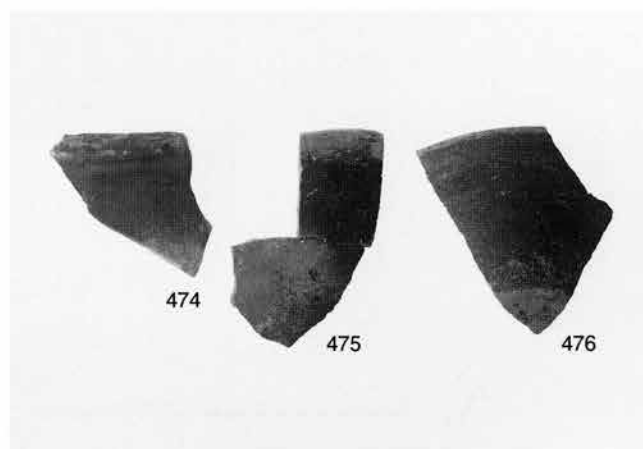
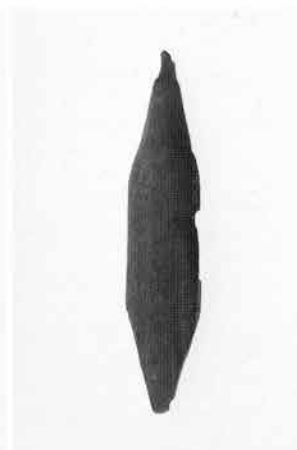
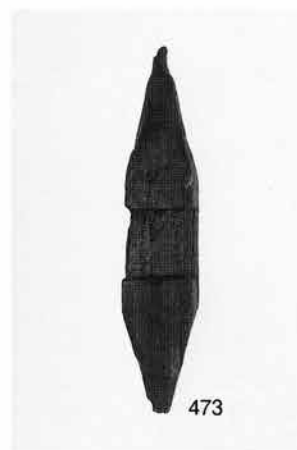
第43図 第52次調査出土遺物 (5)

区画52-1



区画52-2

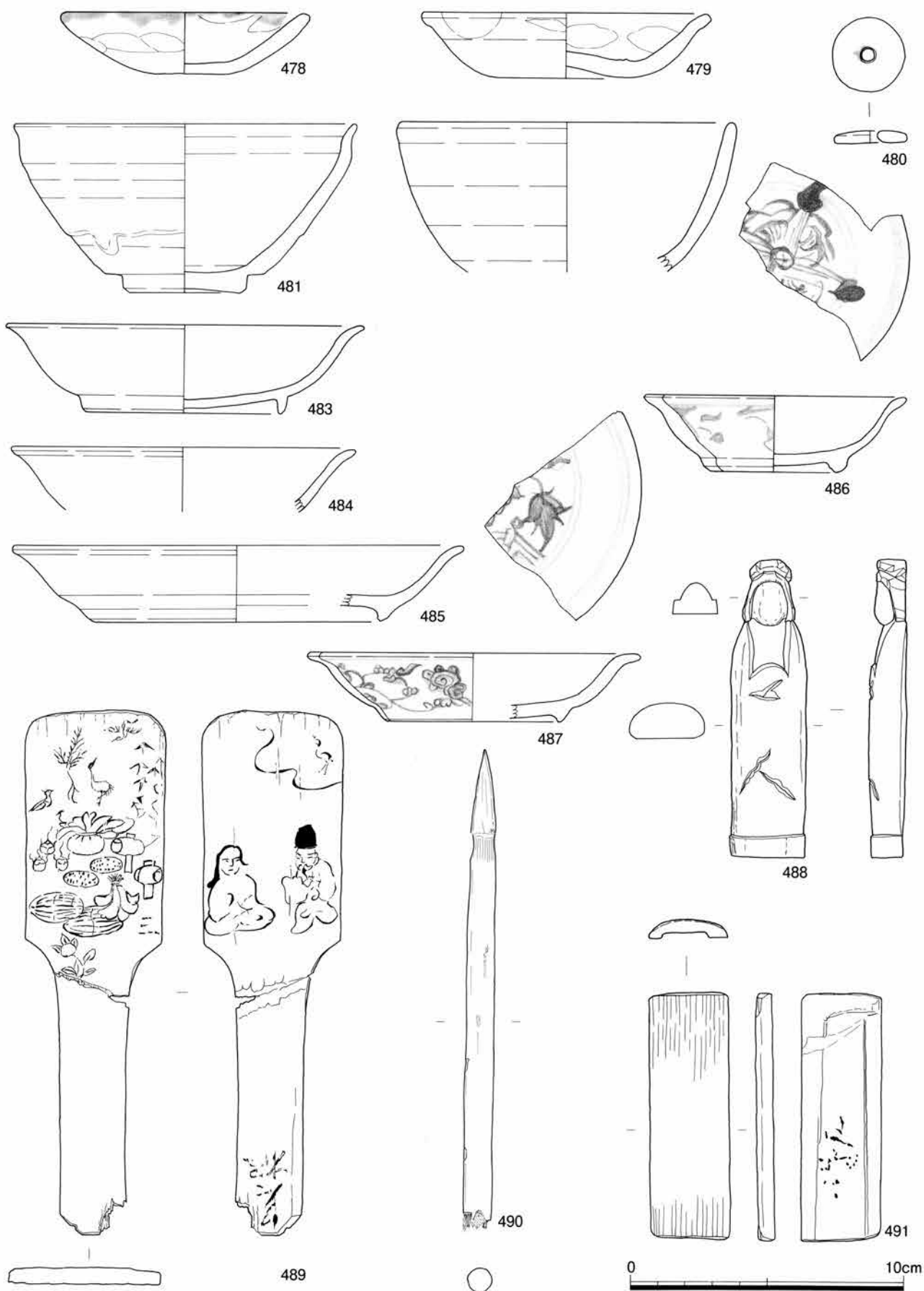




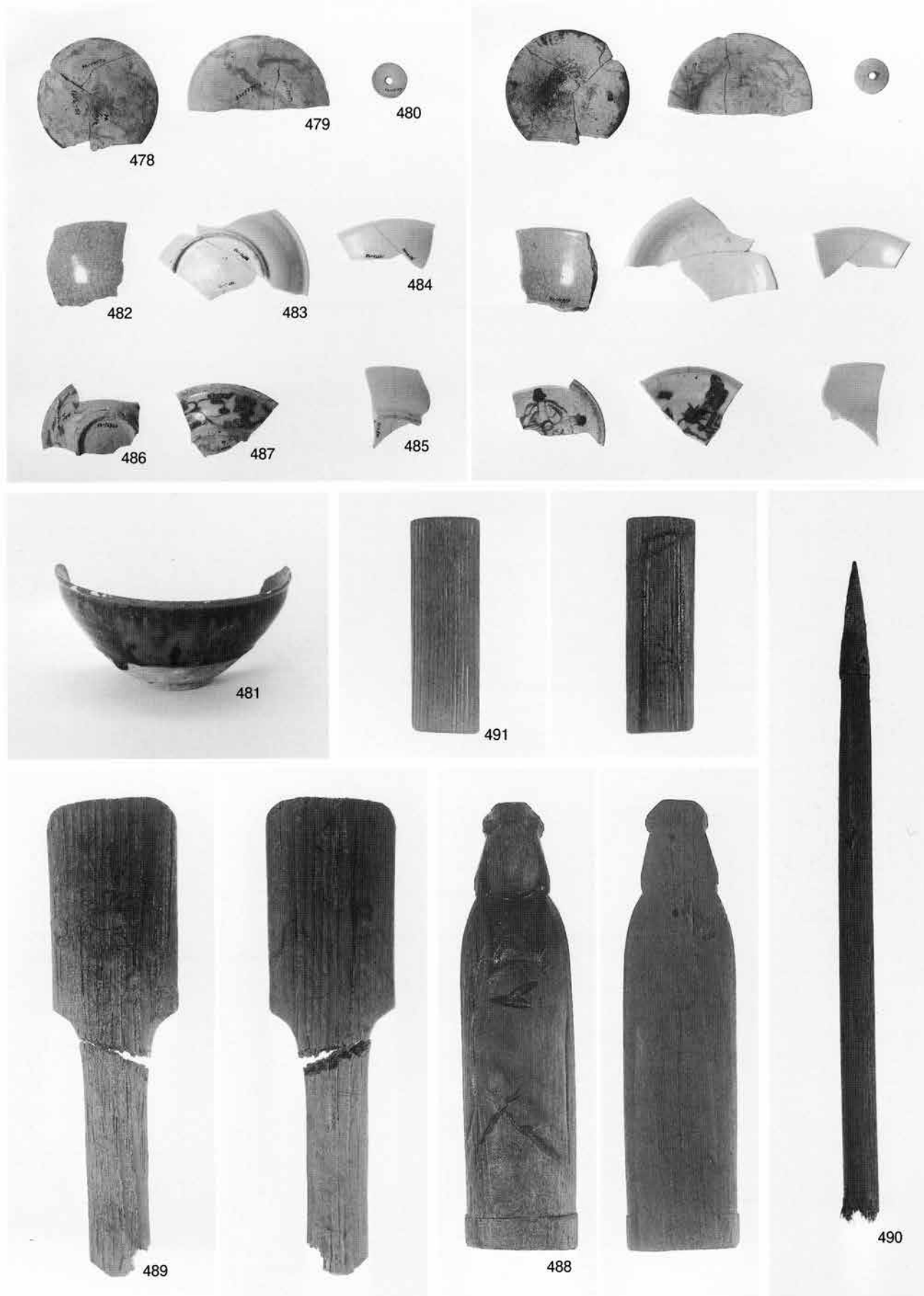
区画52-1 木製品糸車469~473 柱793 区画52-2 越前焼甕474 鉢475 播鉢476・477

第44図 第52次調査出土遺物 (6)

区画52-2



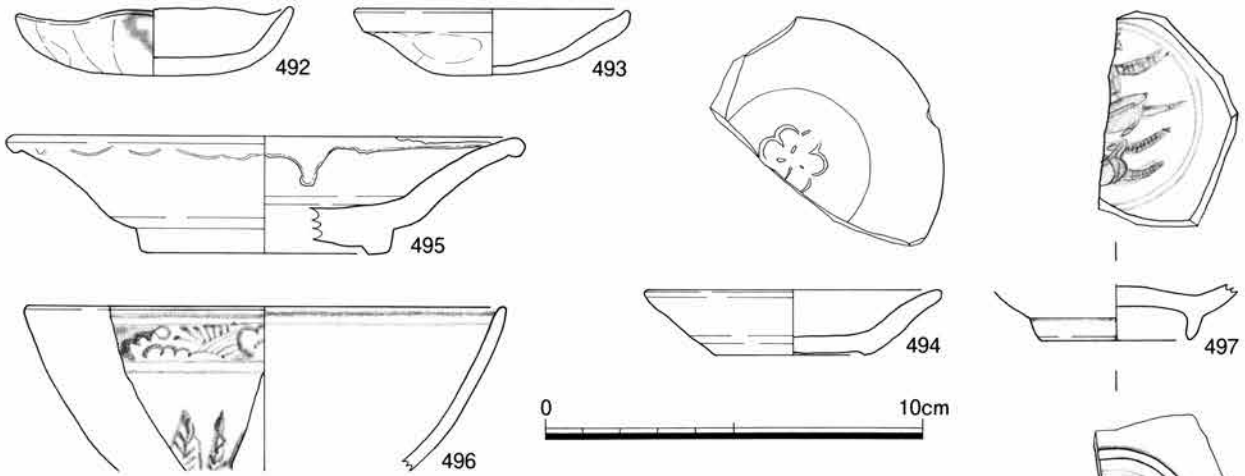
土師質土器皿478・479 灯心押480 鉄釉碗481 灰釉碗482 白磁皿483～485 染付皿486・487 木製品神像488 杓子489
棒状製品490 鞘491



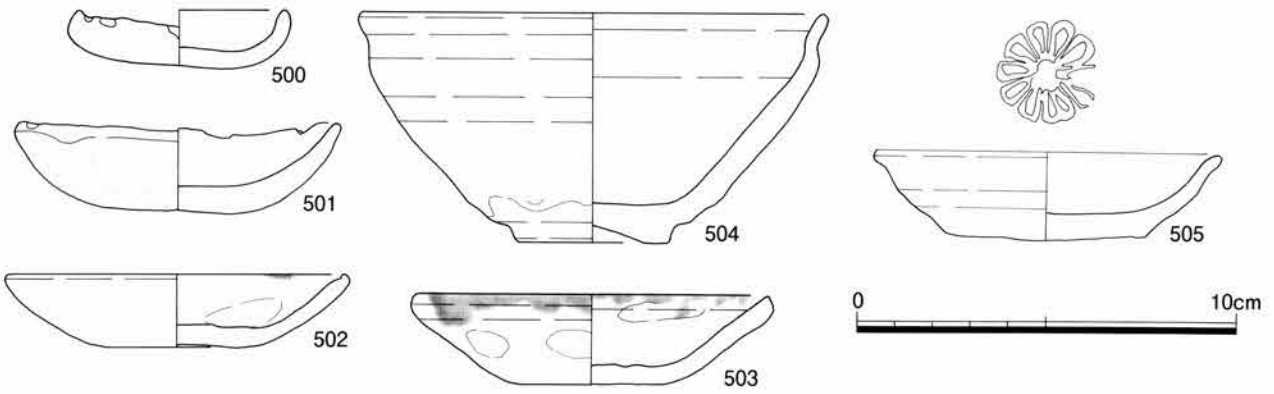
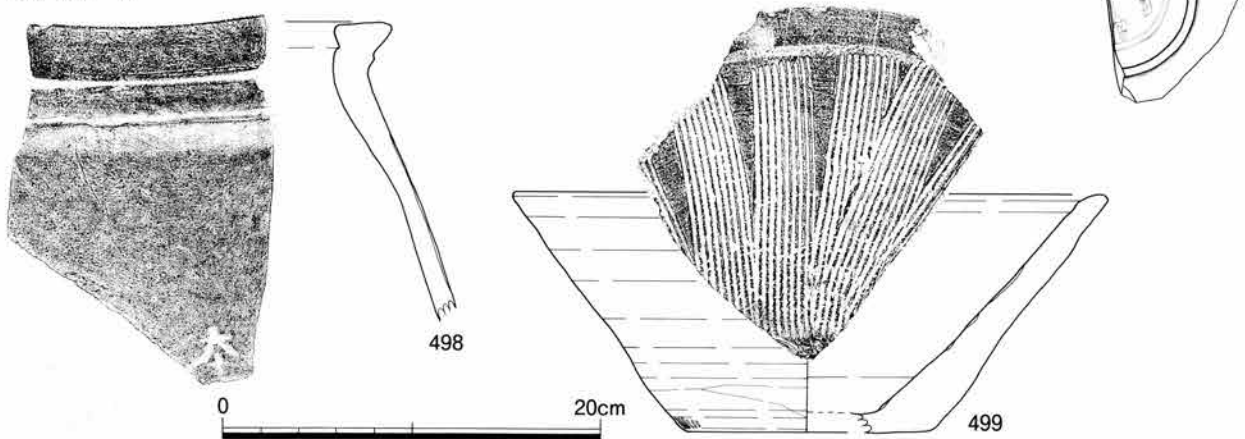
区画52-2 土師質土器皿478・479 灯心押480 鉄釉碗481 灰釉碗482 白磁皿483~485 染付皿486・487
 木製品神像488 杓子489 棒状製品490 鞘491

第45図 第52次調査出土遺物 (7)

区画52-2



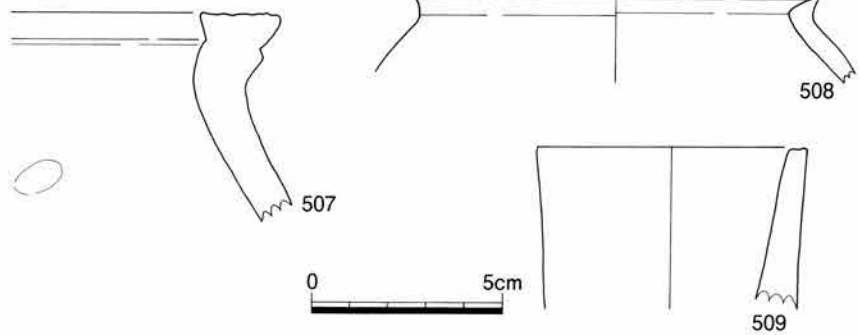
区画52-3



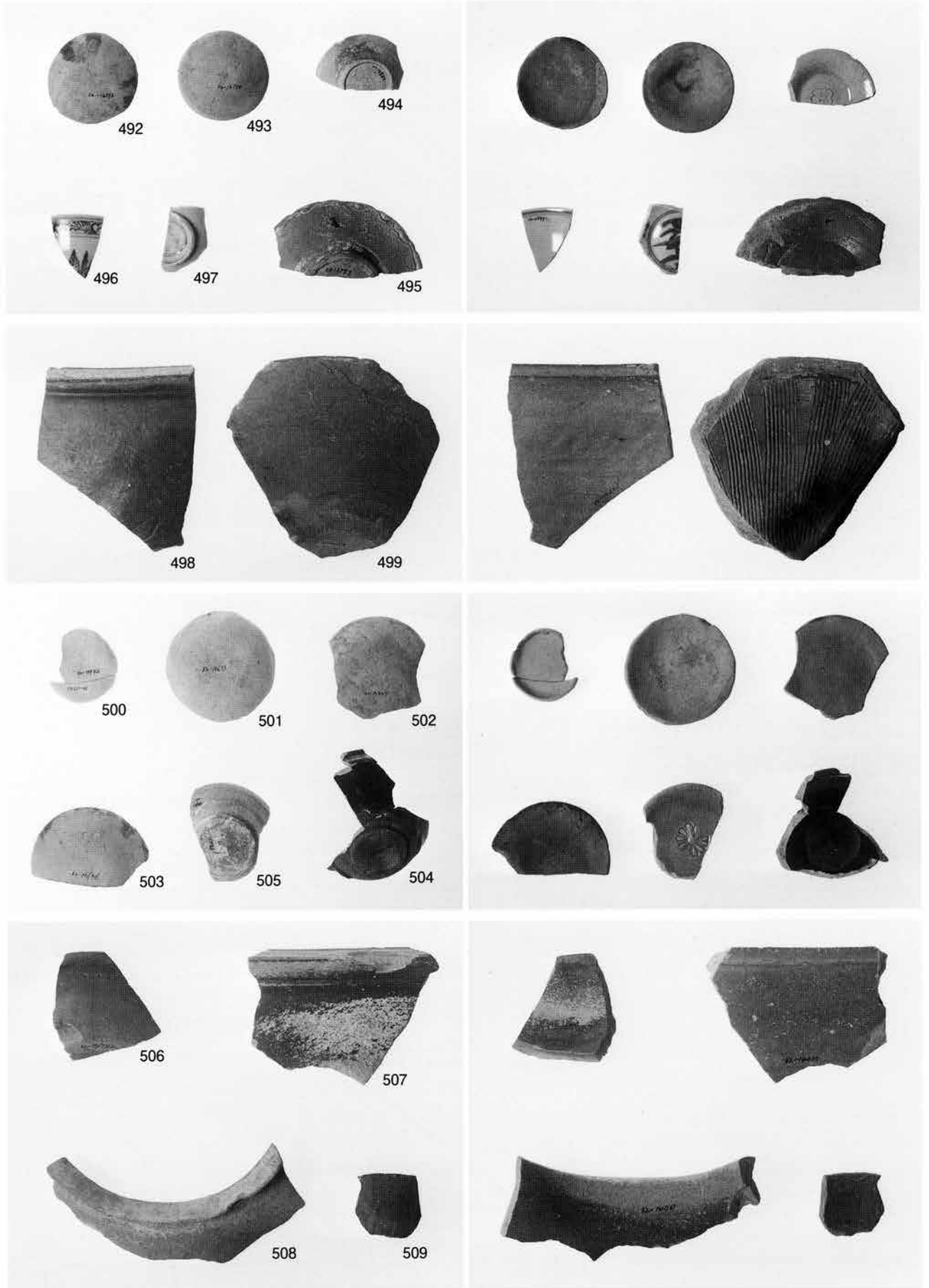
区画52-4



区画52-5



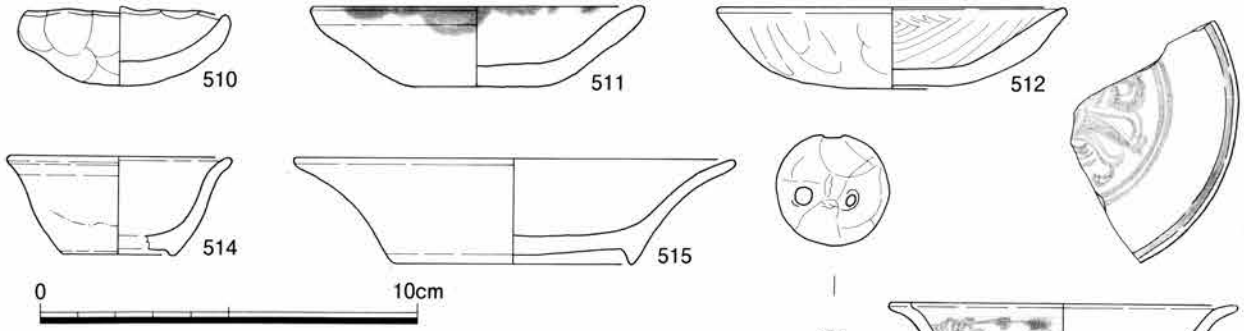
越前焼甕498・507 壺508 鉢506 播鉢499 掛花生509 土師質土器皿492・493・500~503 鉄釉碗504 灰釉皿494・505
青磁稜花皿495 染付碗496・497



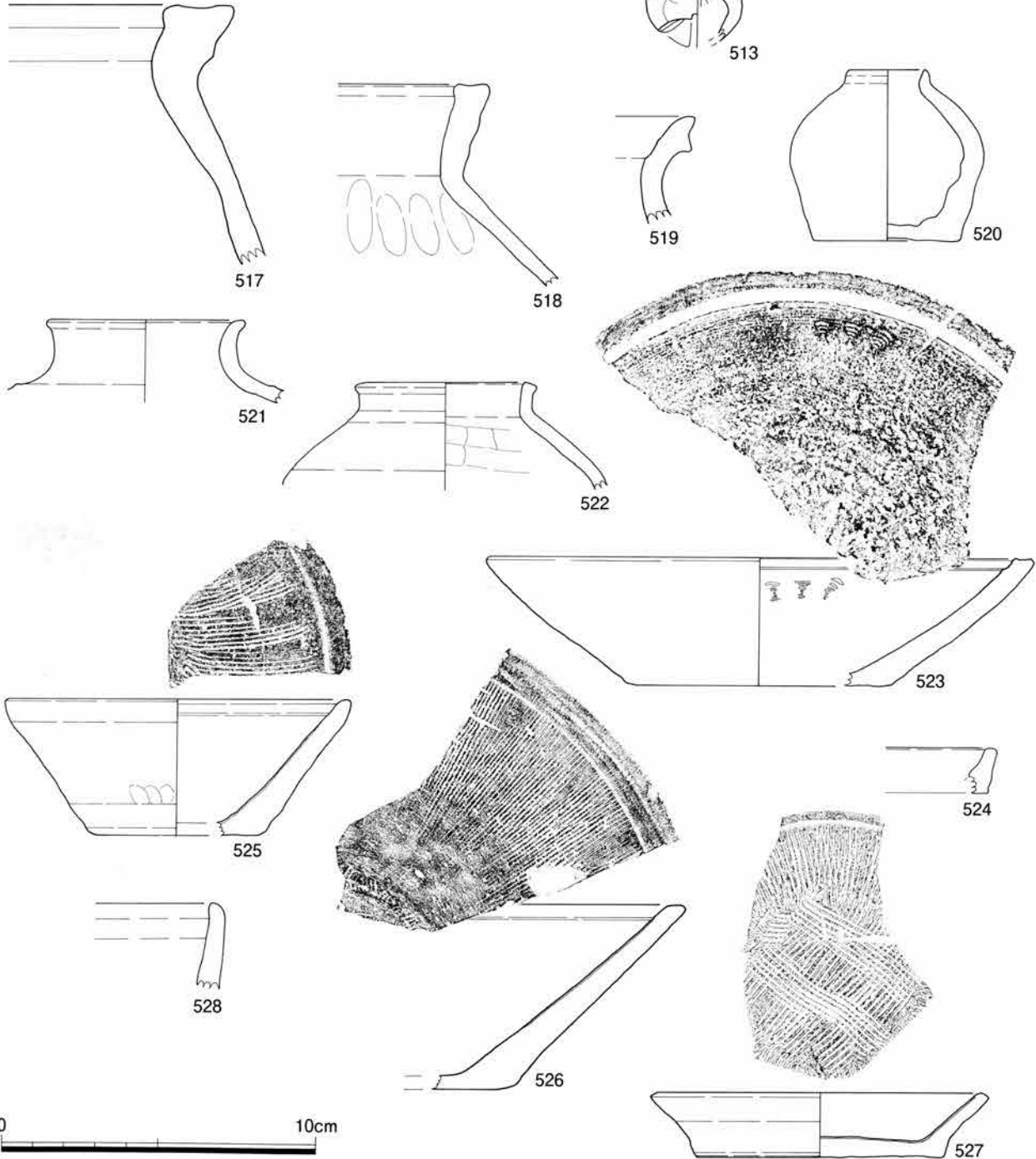
SF3193 土師質土器Ⅲ492-493 灰釉Ⅲ494 青磁稜花Ⅲ495 染付碗496-497 区画52-3 越前焼甕498 搦鉢499
 土師質土器Ⅲ500~503 鉄釉碗504 灰釉Ⅲ505 区画52-4 越前焼鉢506 区画52-5 越前焼甕507 壺508 掛花生509

第46図 第52次調査出土遺物 (8)

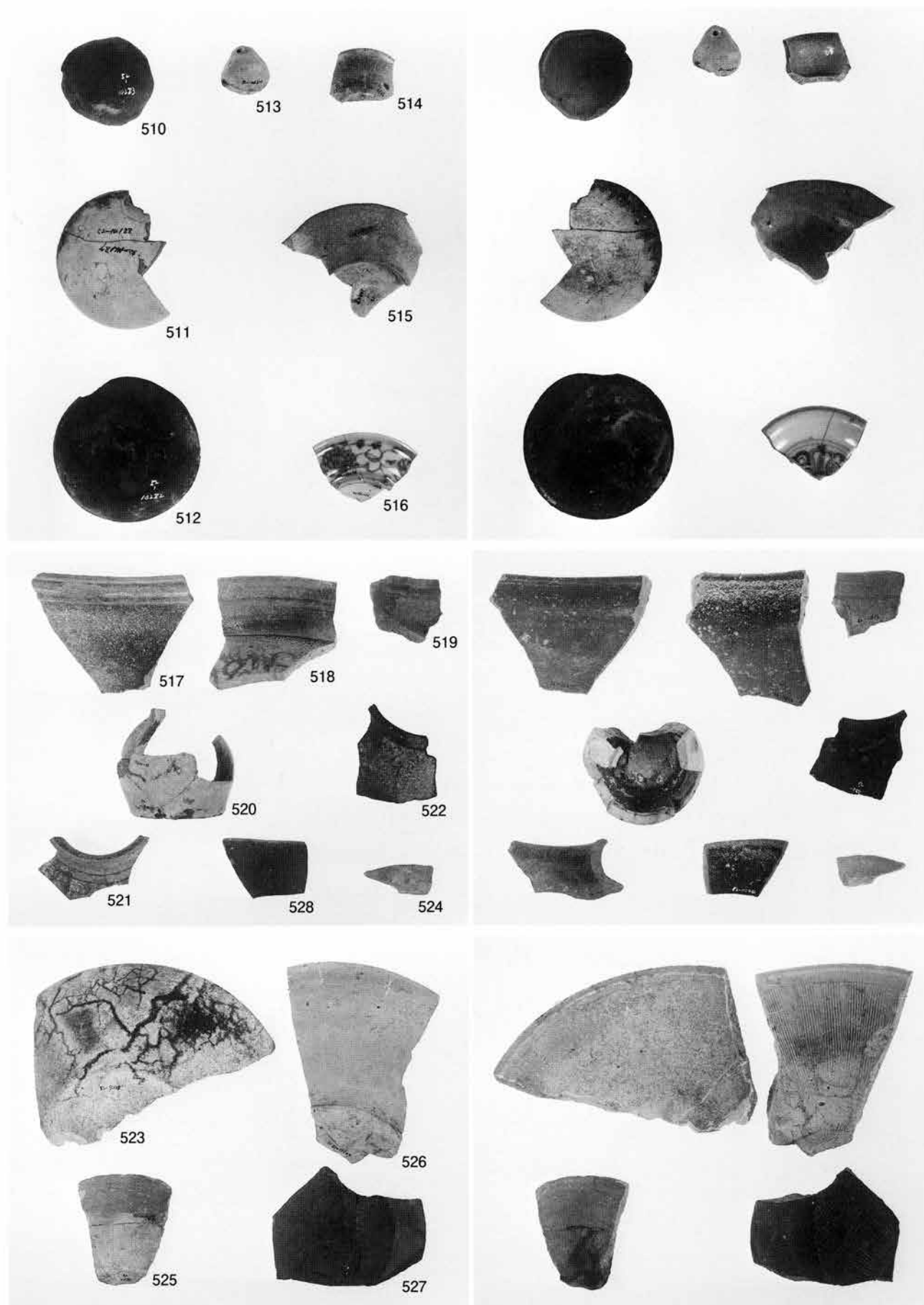
区画52-5



区画52-6



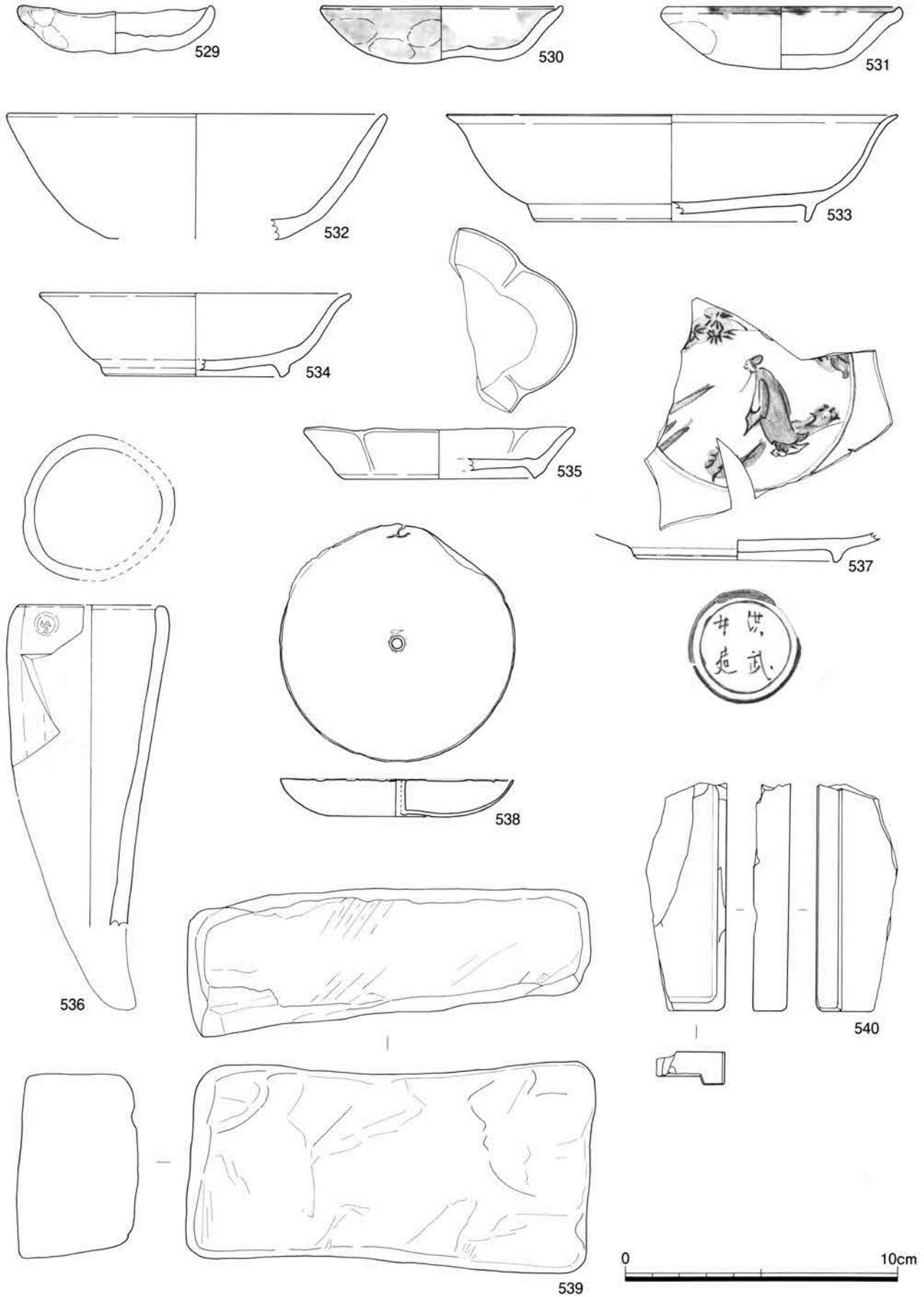
土師質土器皿510~512 土鈴513 灰釉坏514 白磁皿515 染付皿516 越前焼甕517~519 小壺520 壺521・522
鉢523・524 搦鉢525~527 火桶(528)



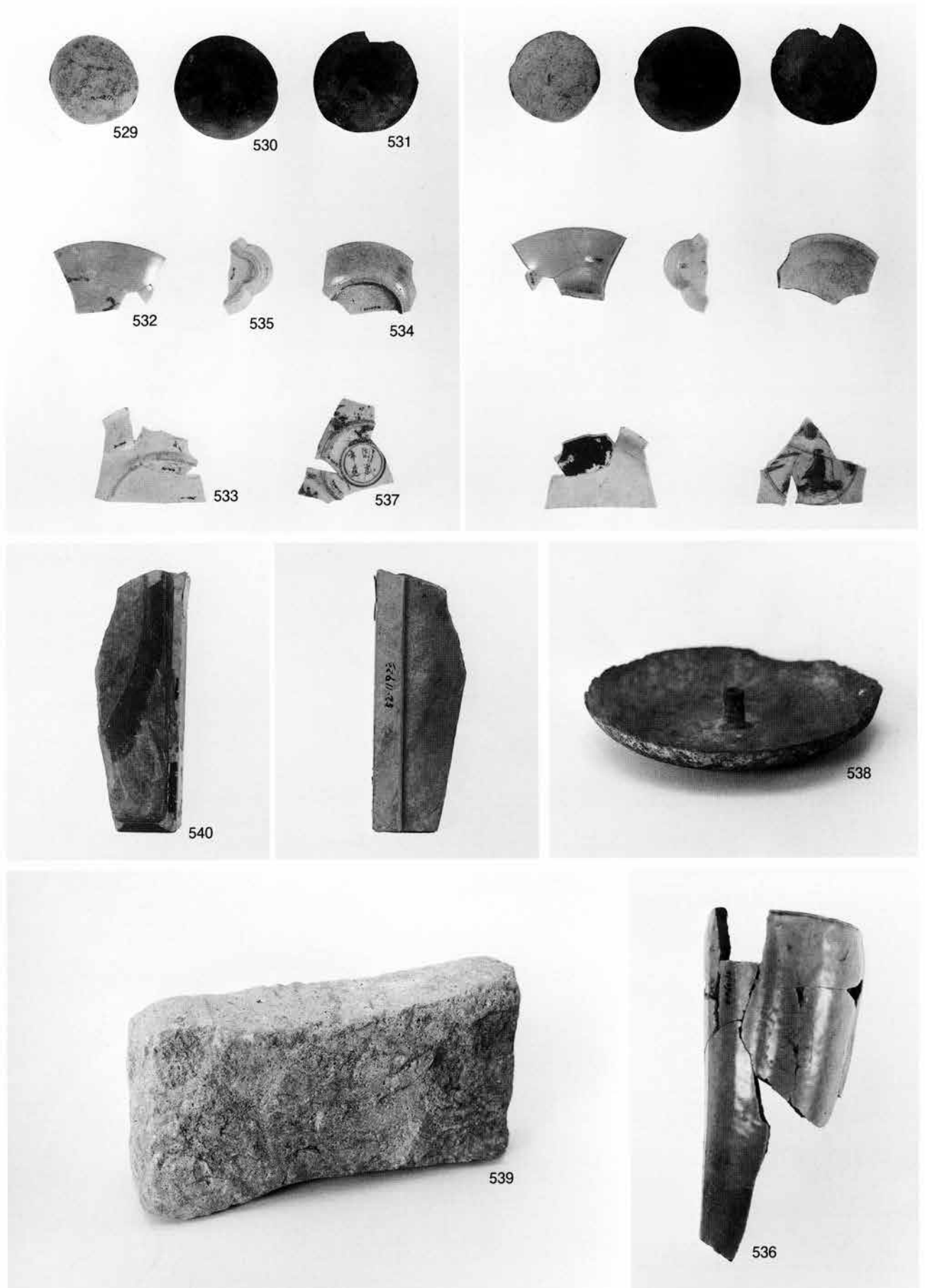
区画52-5 土師質土器皿510~512 土鈴513 灰釉杯514 白磁皿515 染付皿516
 区画52-6 越前焼甕517~519 小壺520 壺521・522 鉢523・524 播鉢525~527 火桶(528)

第47図 第52次調査出土遺物 (9)

区画52-6



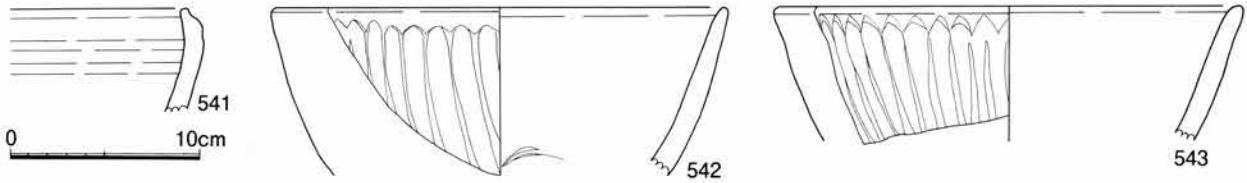
土師質土器皿529~531 青磁碗532 白磁皿533~535 角形掛花生536 染付皿537 金属製品燭台538 石製品砥石539 硯540



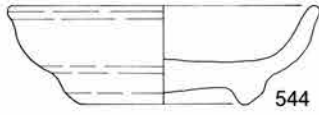
区画52-6 土師質土器皿529~531 青磁碗532 白磁皿533~535 角形掛花生536 染付皿537 金属製品燭台538
 石製品砥石539 硯540

第48図 第52次調査出土遺物(10)

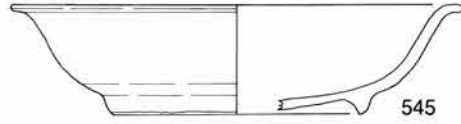
区画52-6 SE3191



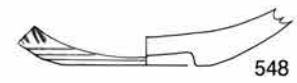
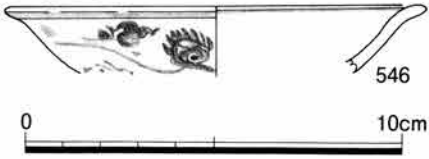
SE3196



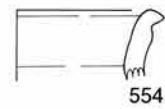
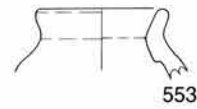
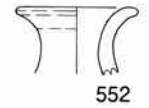
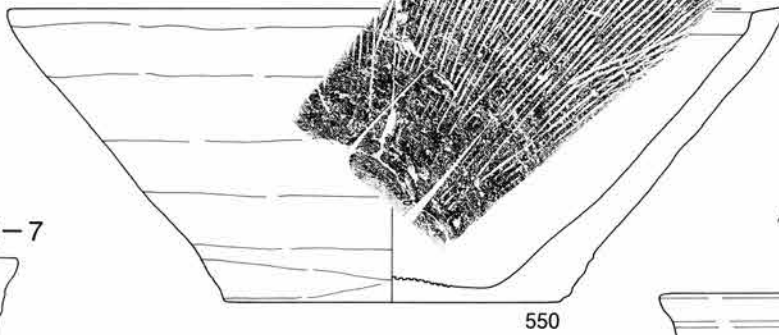
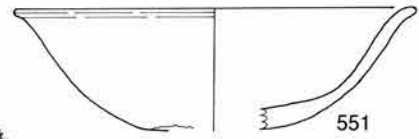
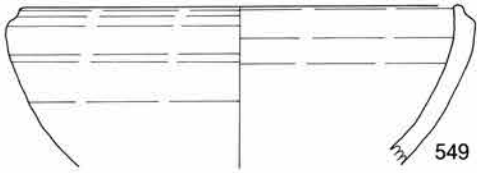
SE3191



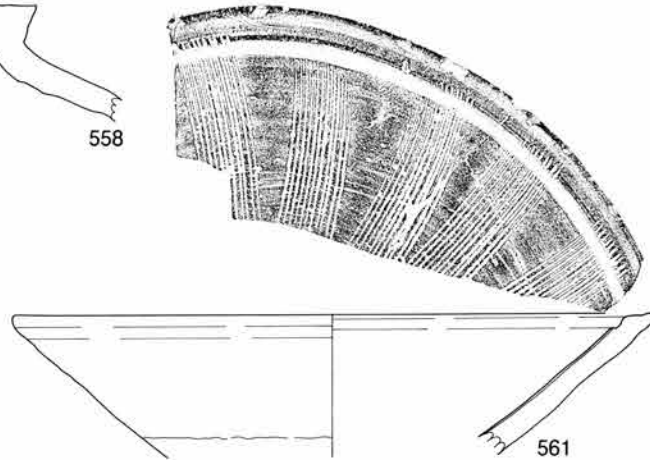
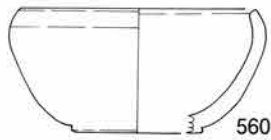
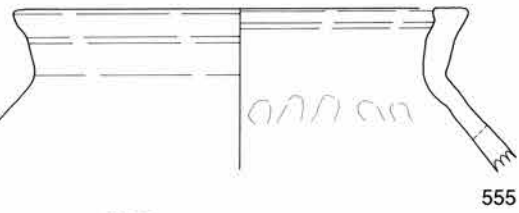
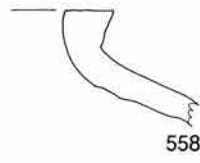
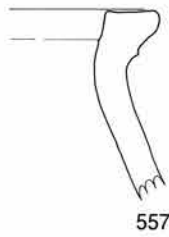
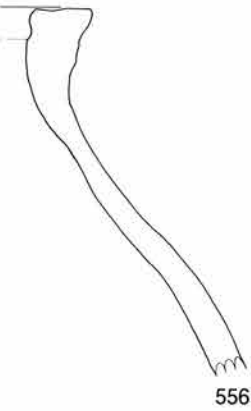
SE3139



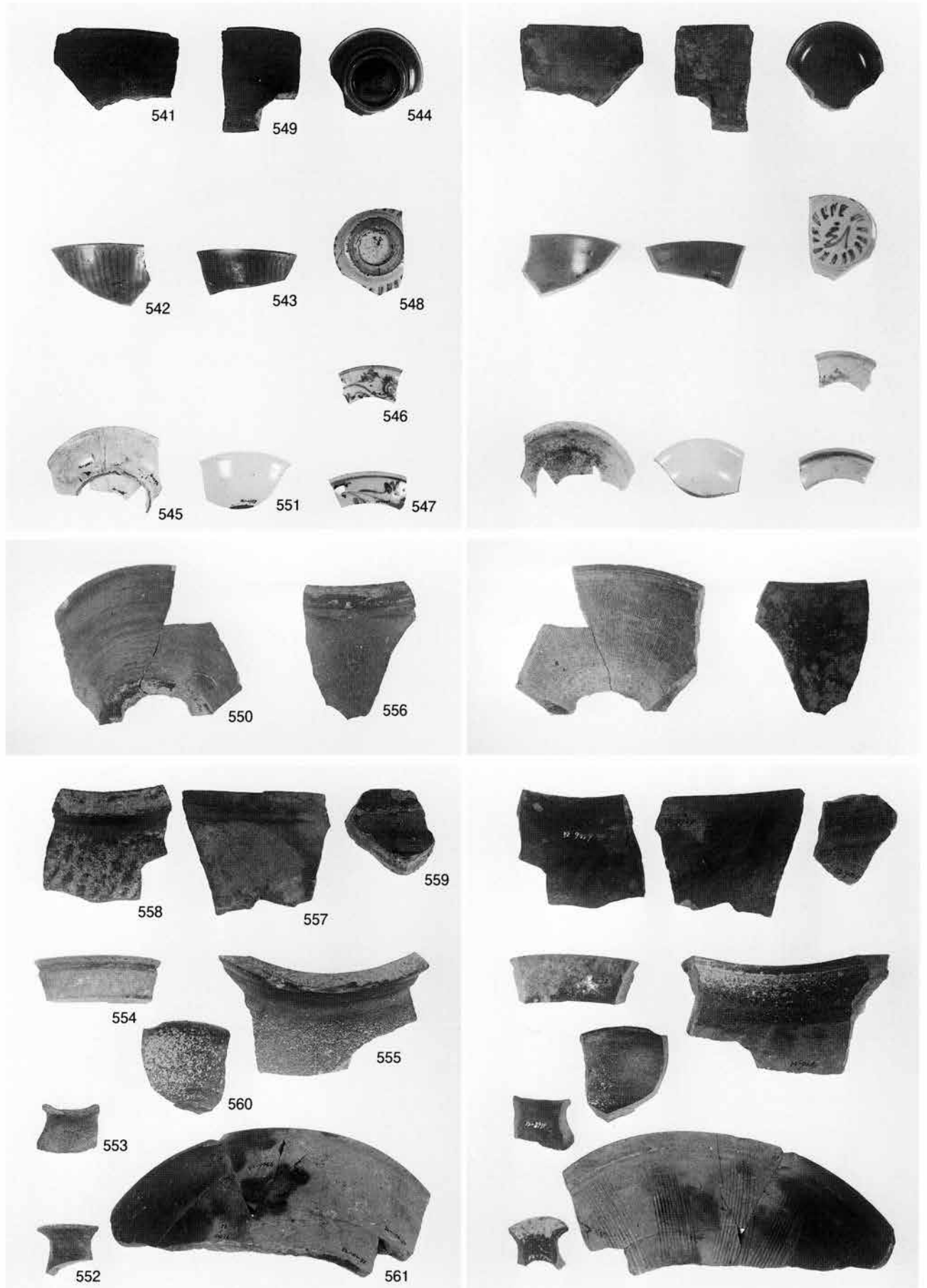
SF3194



区画52-7



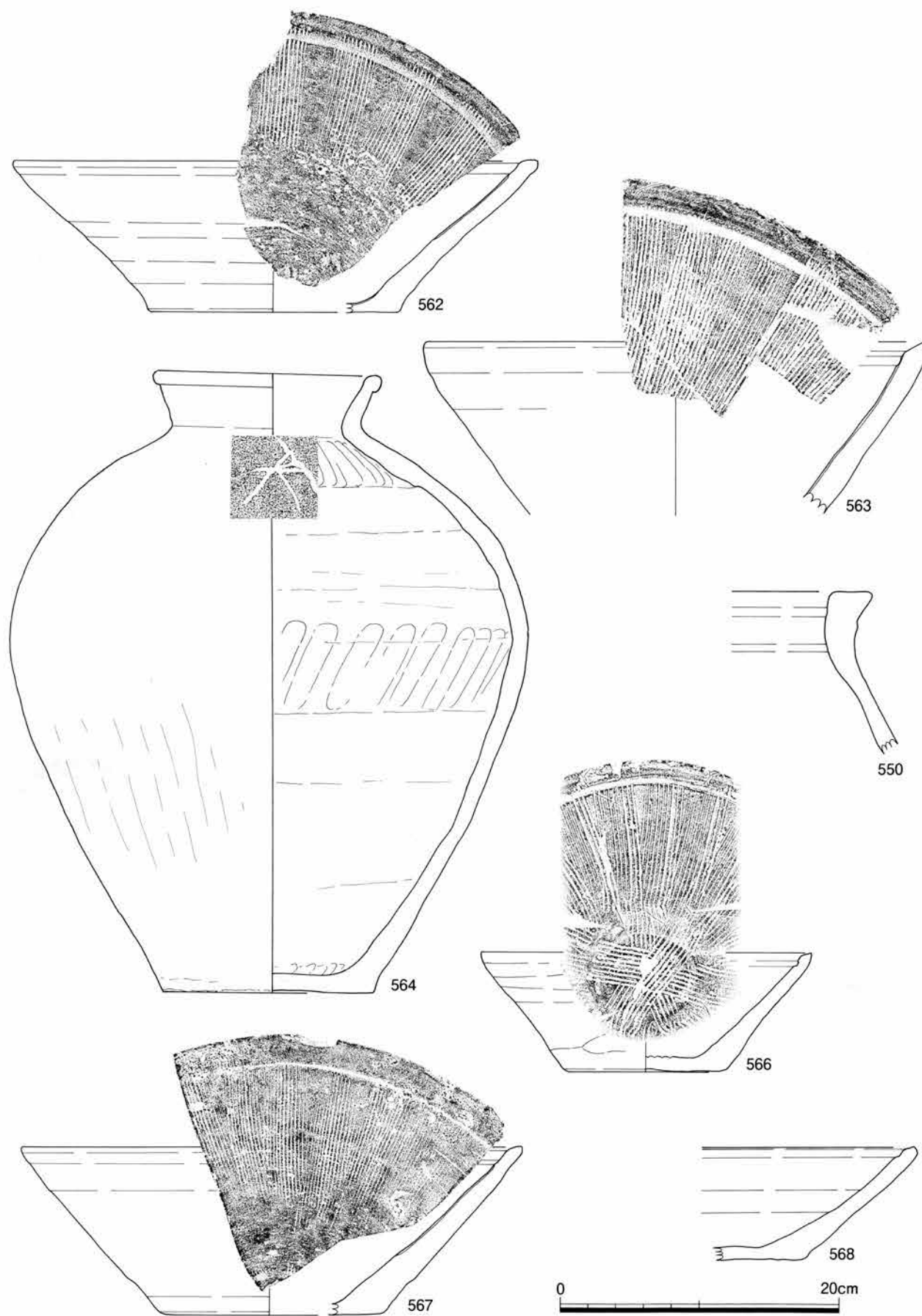
越前焼甕555~557・559 壺552~554・558 播鉢561 鉢541・549・560 播鉢550 青磁碗542・543 皿544
白磁皿545・551 染付皿546~548



SE3191 越前焼鉢541 青磁碗542・543 SE3196 青磁皿544 白磁皿545 SE3139 染付皿546～548
 SF3194 越前焼鉢549 搦鉢550 白磁皿551 区画52-7 越前焼甕555～557・559 壺552～554・558 鉢560 搦鉢561

第49図 第52次調査出土遺物 (11)

区画52-7



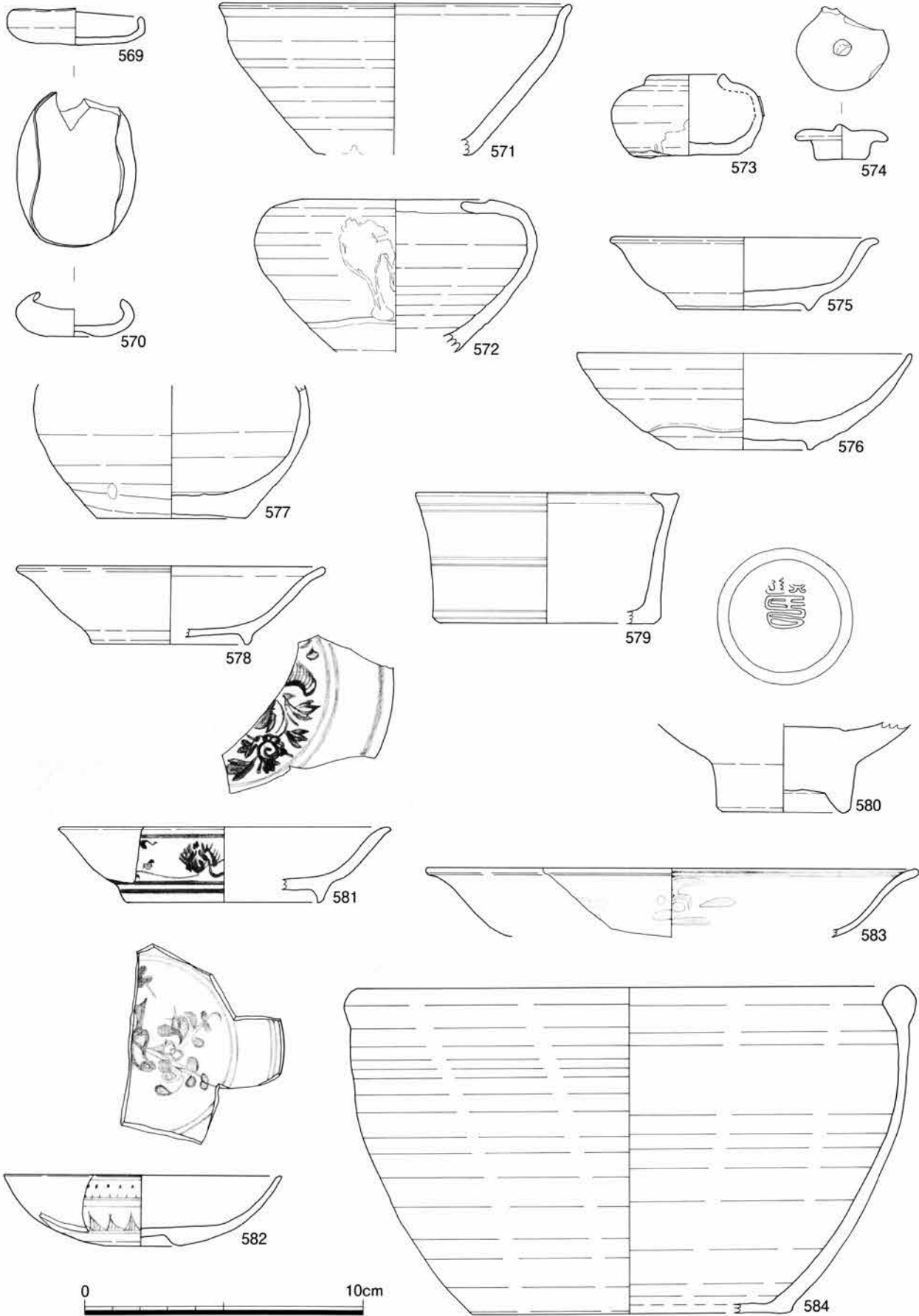
越前焼甕565 壺564 搦鉢562~563·566·567 鉢568



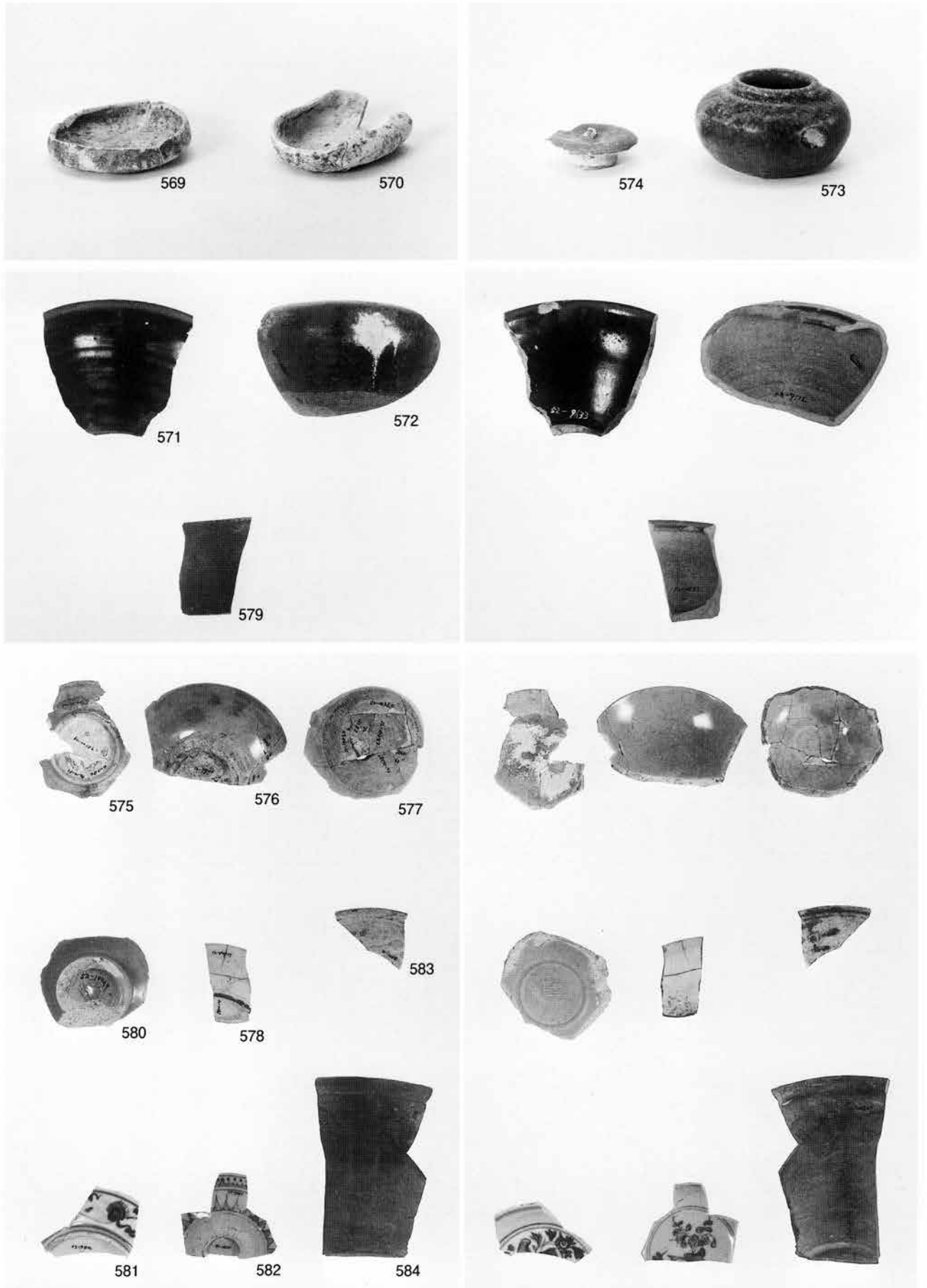
区画52-7 越前焼甕565 壺564 播鉢562~563・566・567 鉢568

第50図 第52次調査出土遺物 (12)

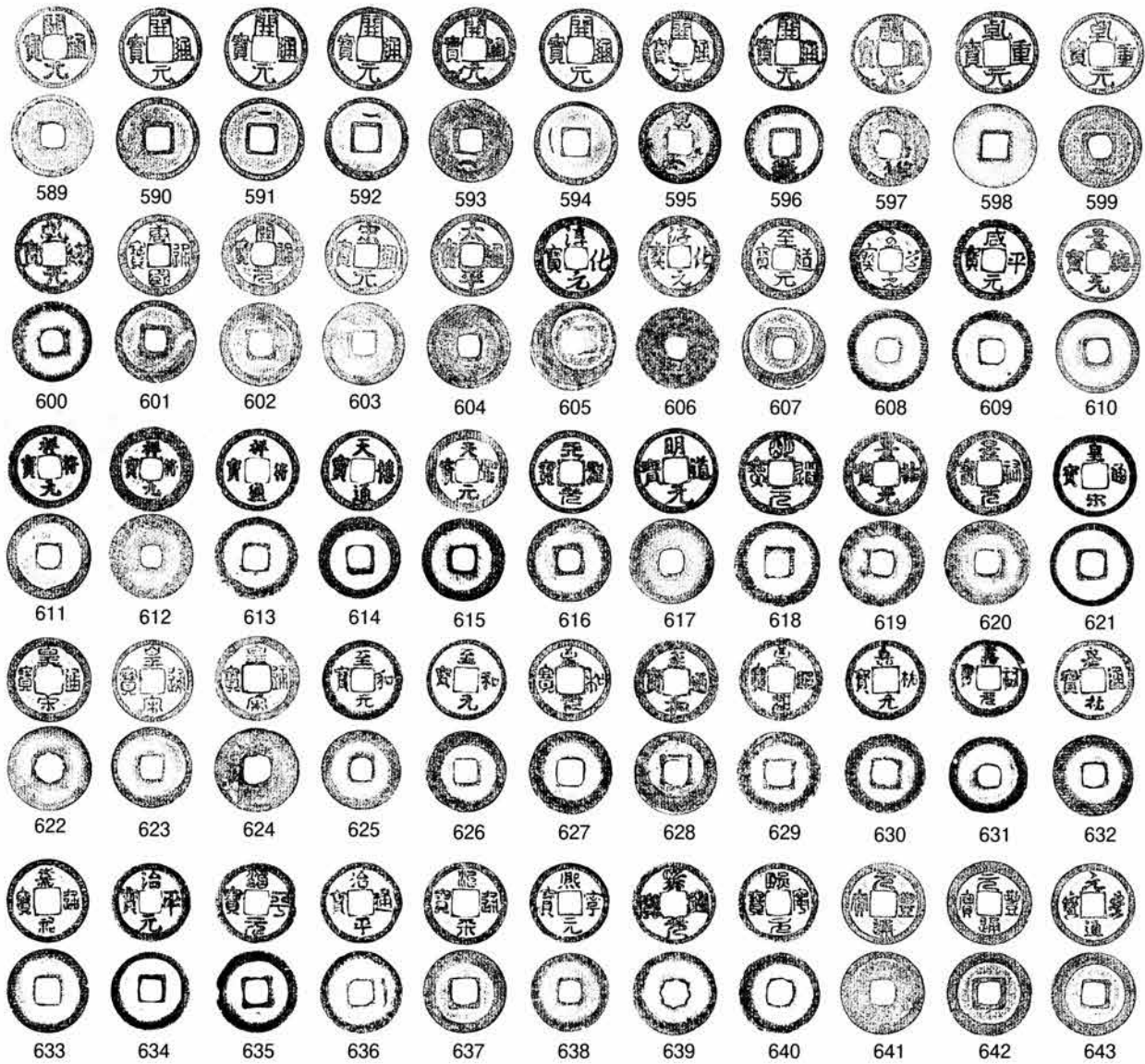
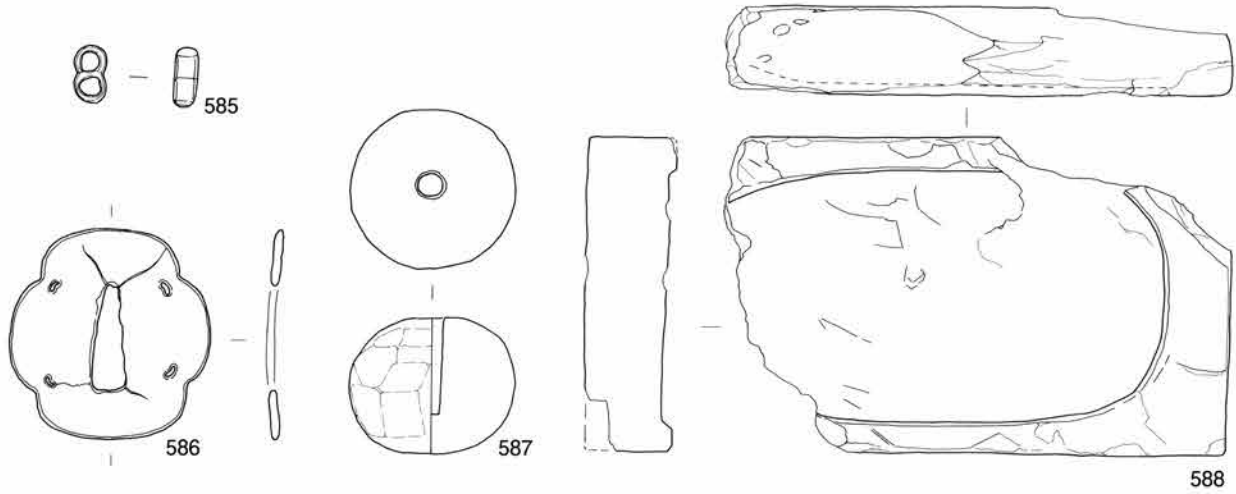
区画52-7



土師質土器皿569・570 鉄釉碗571 壺572 小壺573 蓋574 灰釉香炉579 青磁皿575・576 碗580 壺577 白磁皿578
 染付皿581・582 赤絵皿583 朝鮮製陶磁器鉢584

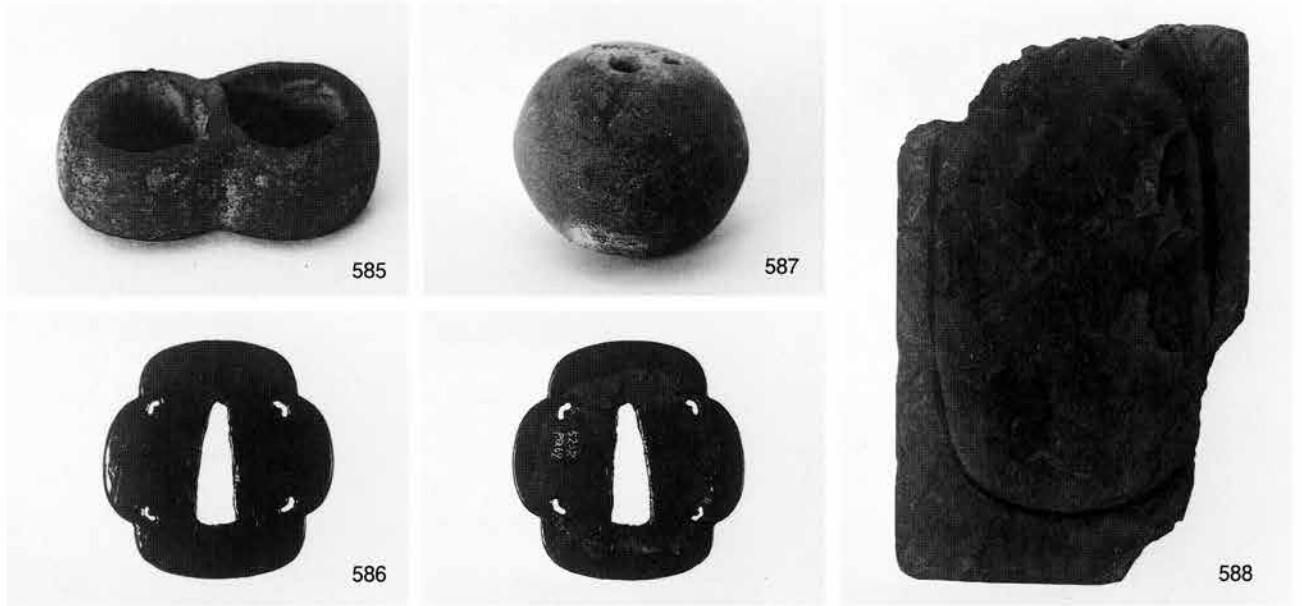


区画52-7 土師質土器Ⅲ569・570 鉄釉碗571 壺572 小壺573 蓋574 灰釉香炉579 青磁Ⅲ575・576 碗580 壺577
 白磁Ⅲ578 染付Ⅲ581・582 赤絵Ⅲ583 朝鮮製陶磁器鉢584



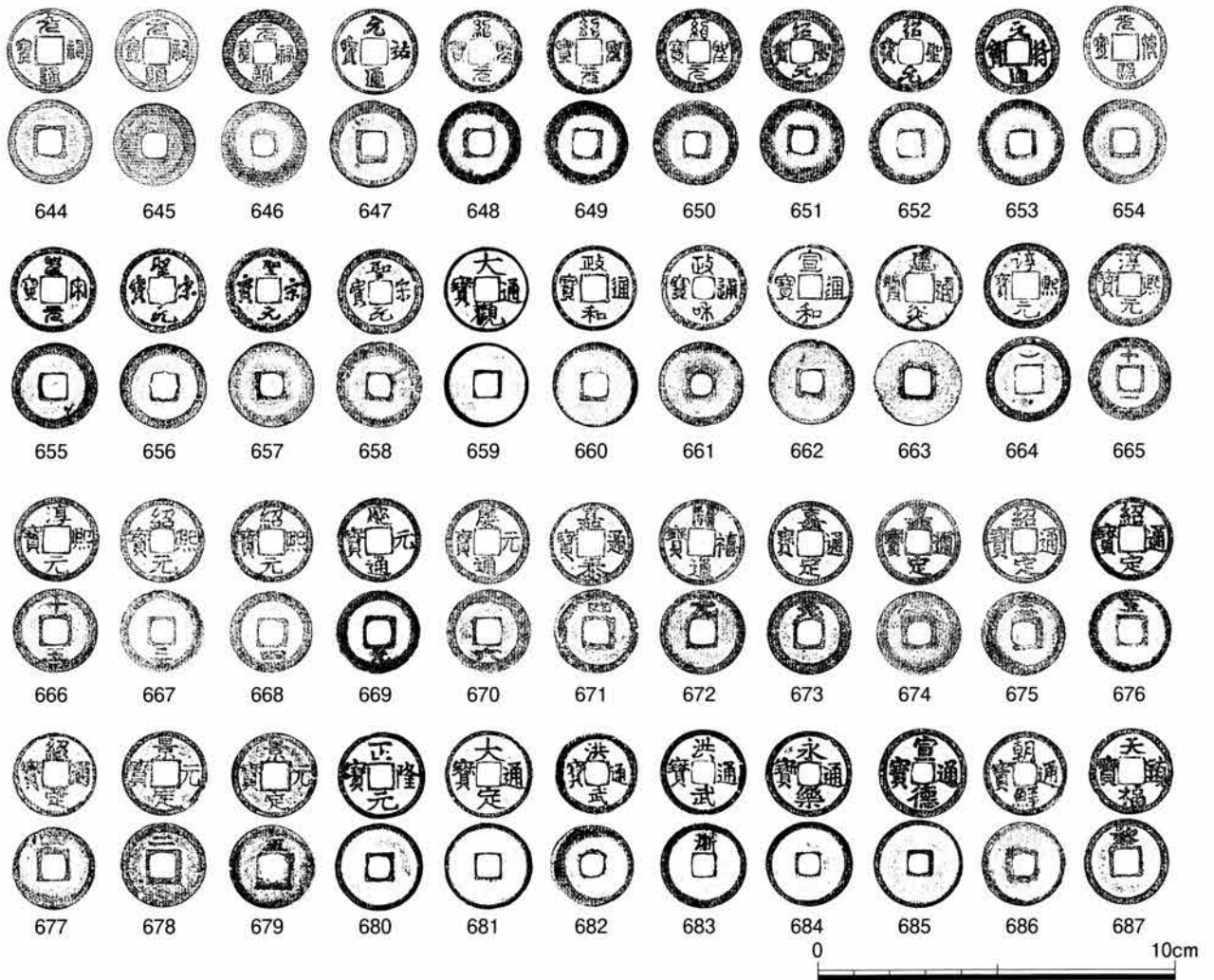
0 10cm

金屬製品 責鞞585 切羽586 錢貨589~643 石製品 球狀石製品587 硯588



区画52-7 金属製品 責鞆585 切羽586 銭貨589~687 石製品 球状石製品587 硯588

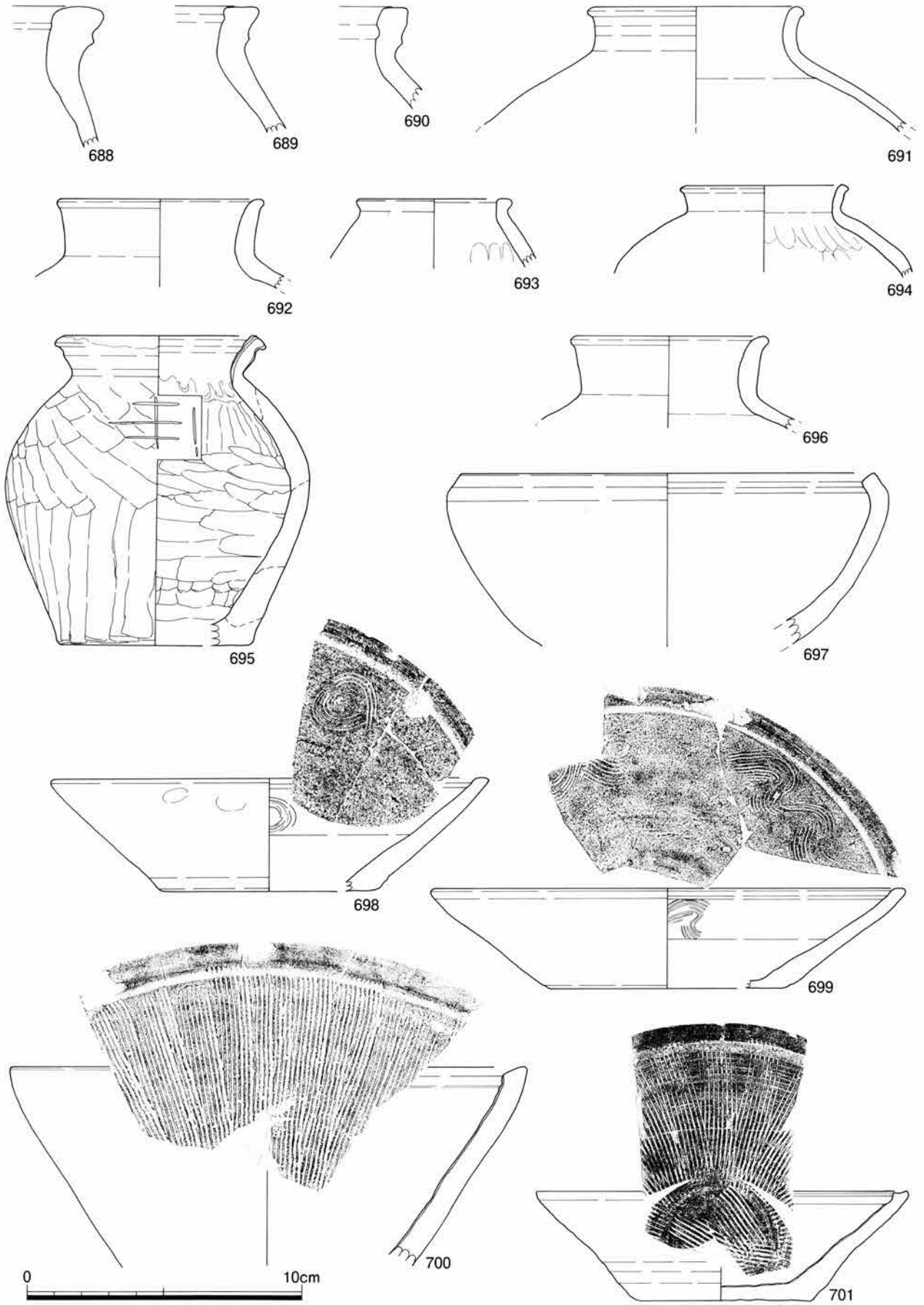
第51図-2 第52次調査出土遺物 (13)



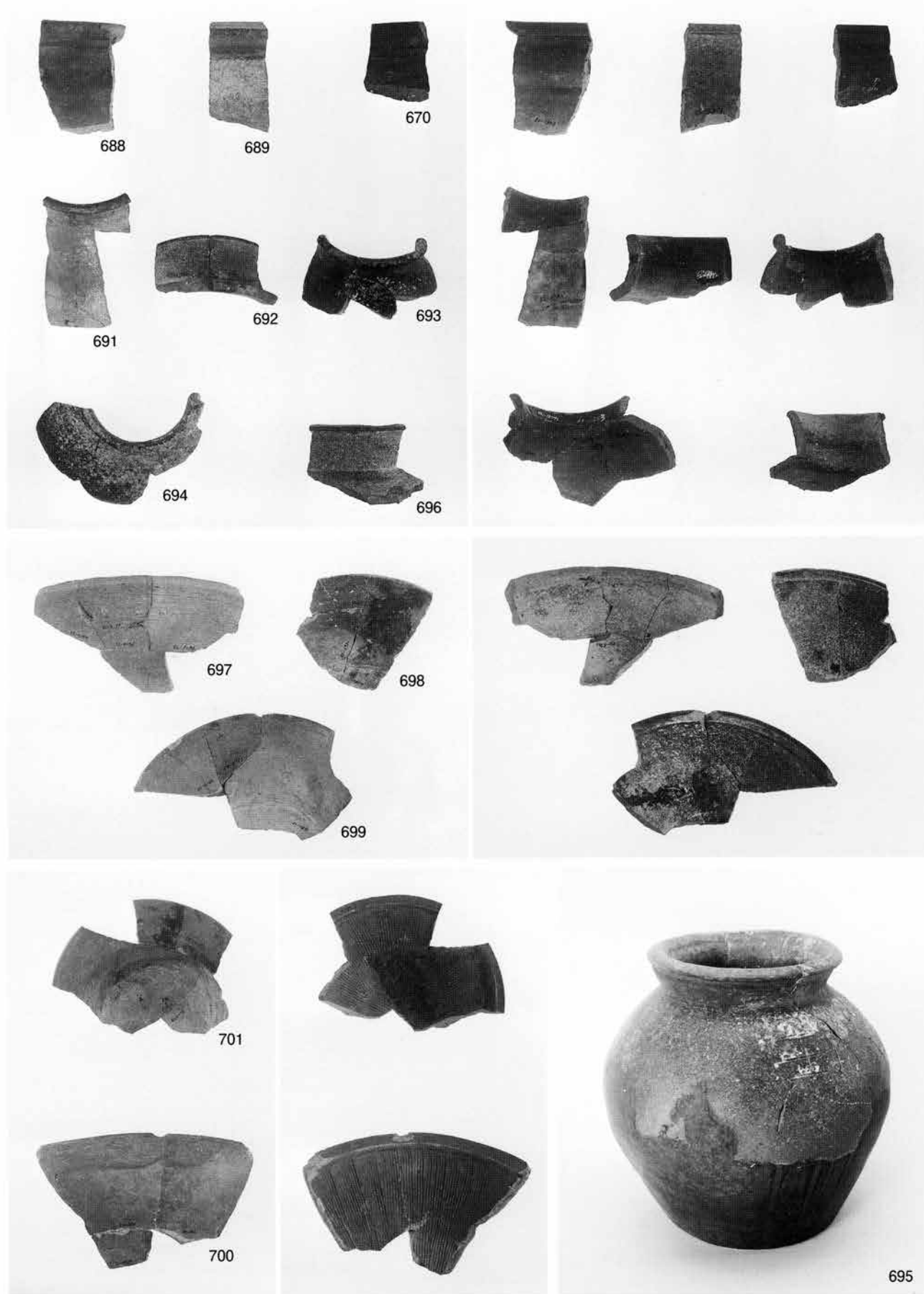
金属製品 銭貨644~687

第52図 第52次調査出土遺物 (14)

区画52-8



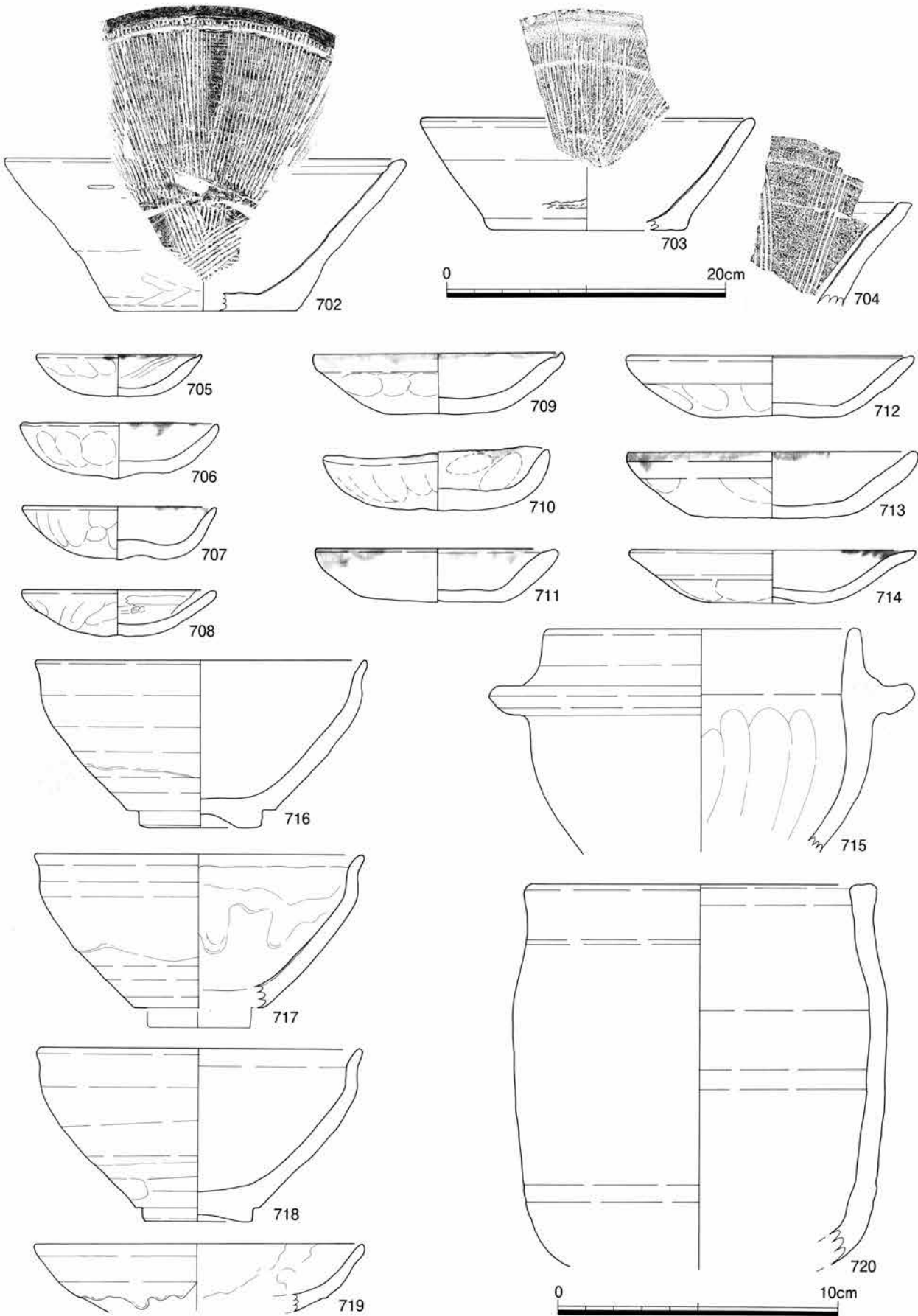
越前焼甕688~690 壺691~696 鉢697~699 播鉢700・701



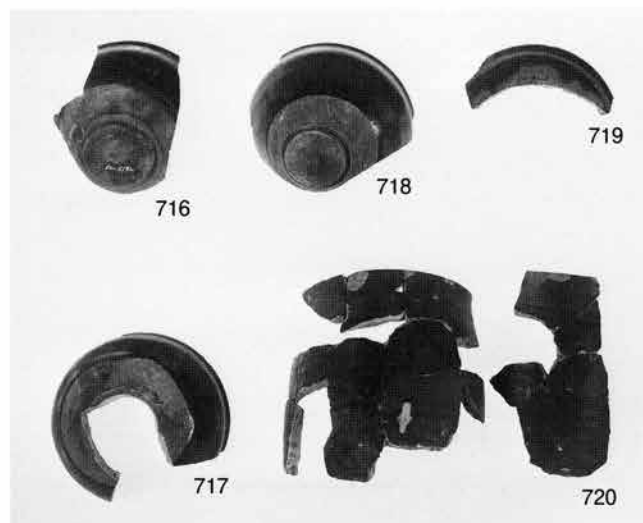
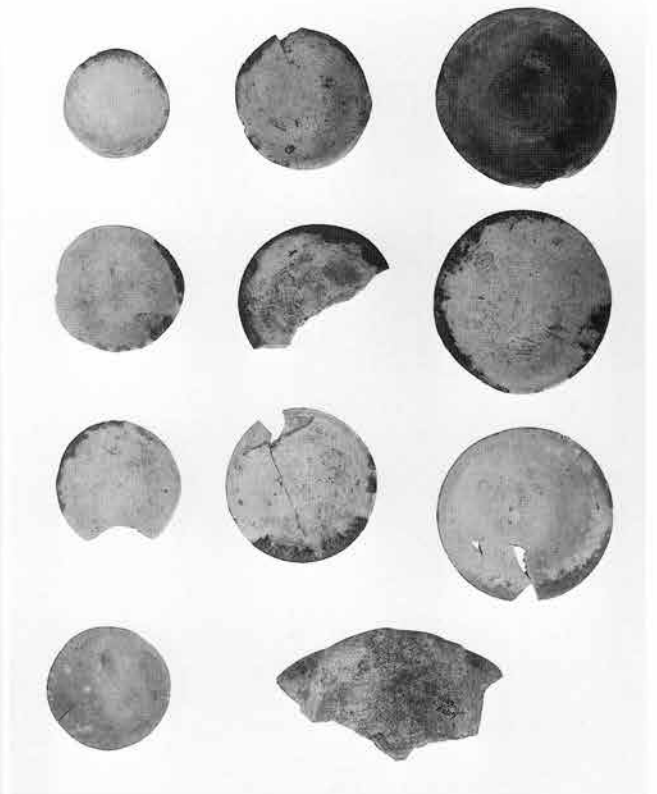
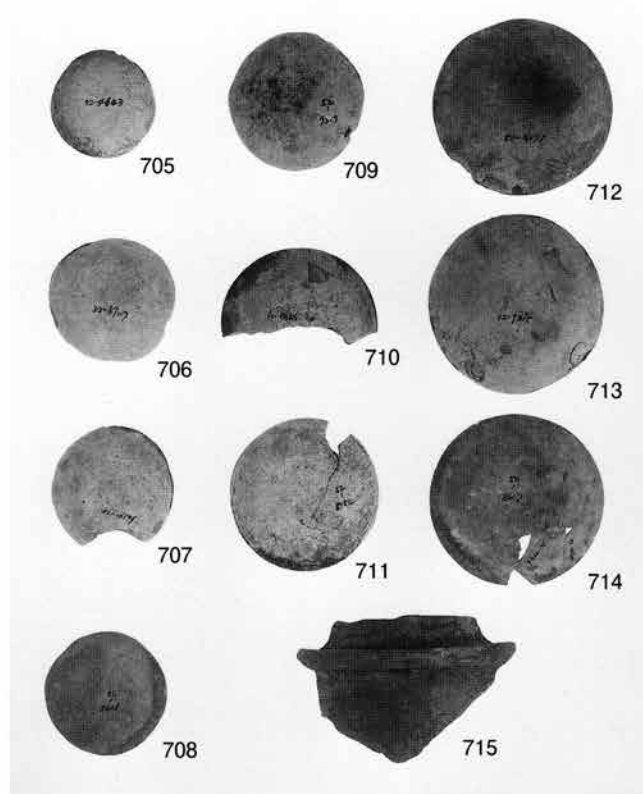
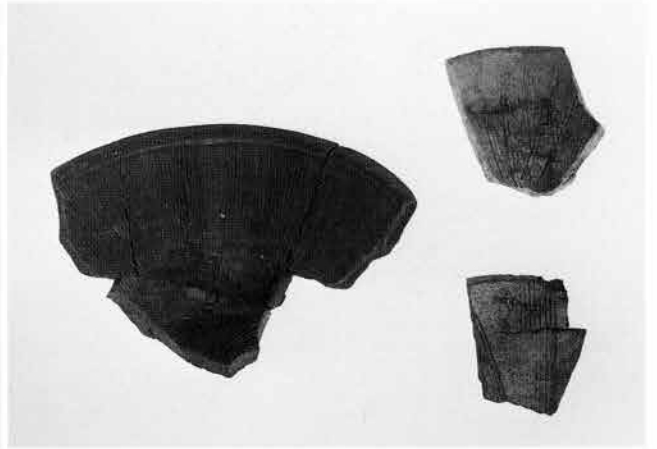
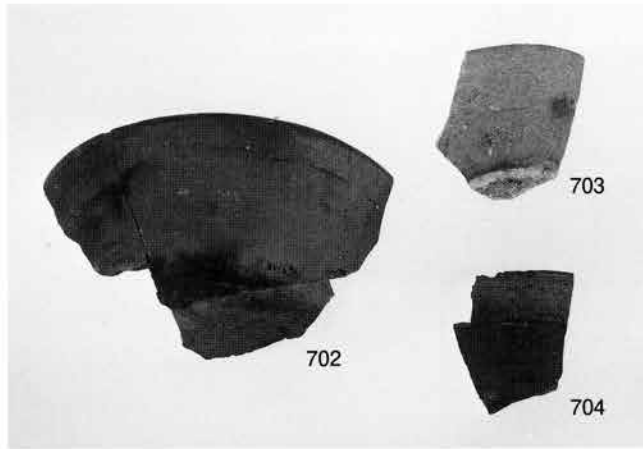
区画52-8 越前焼甕688~690 壺691~696 鉢697~699 播鉢700・701

第53図 第52次調査出土遺物 (15)

区画52-8



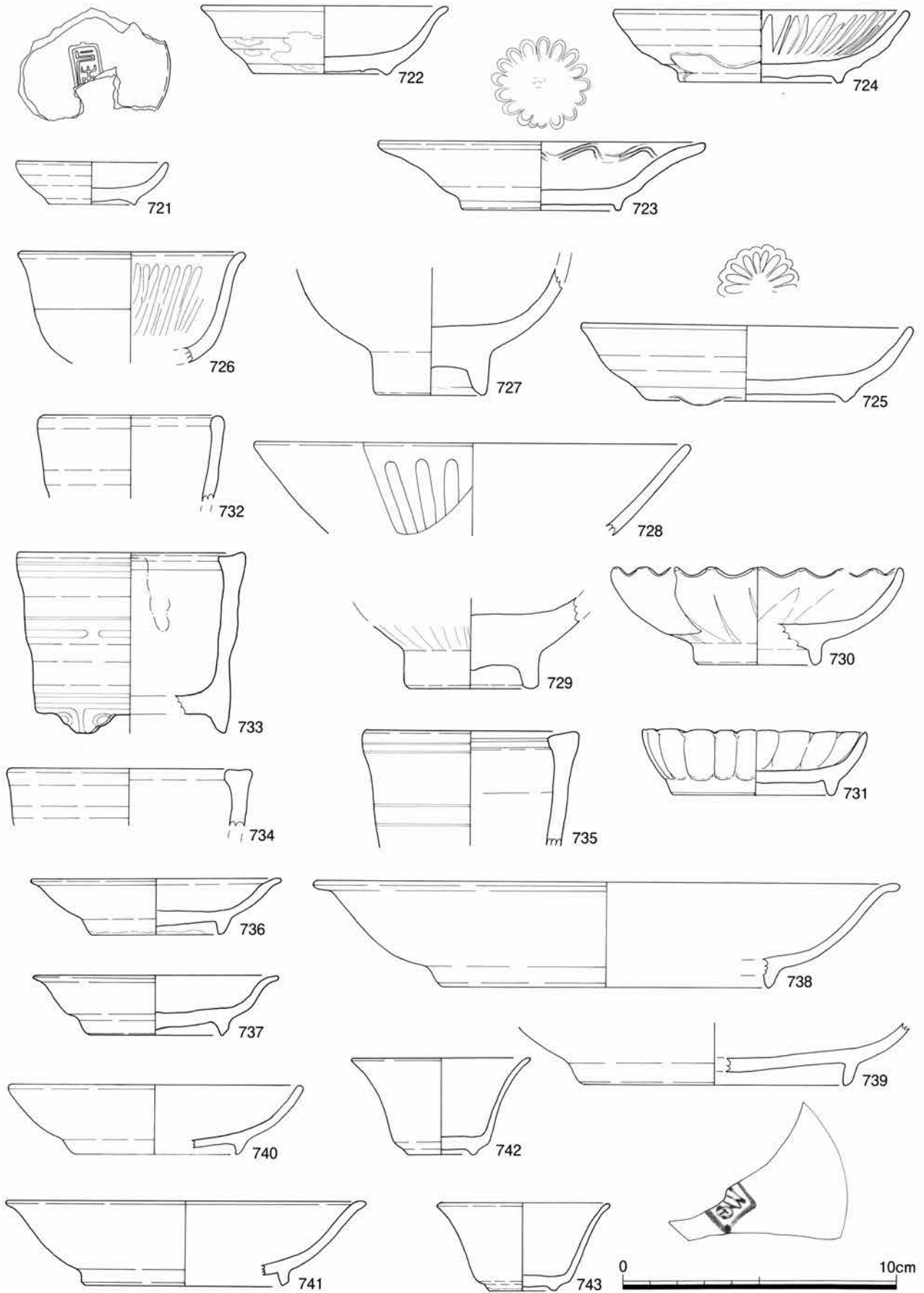
越前焼播鉢702~704 土師質土器皿705~714 羽釜715 鉄釉碗716~718 鉄釉皿719 壺720



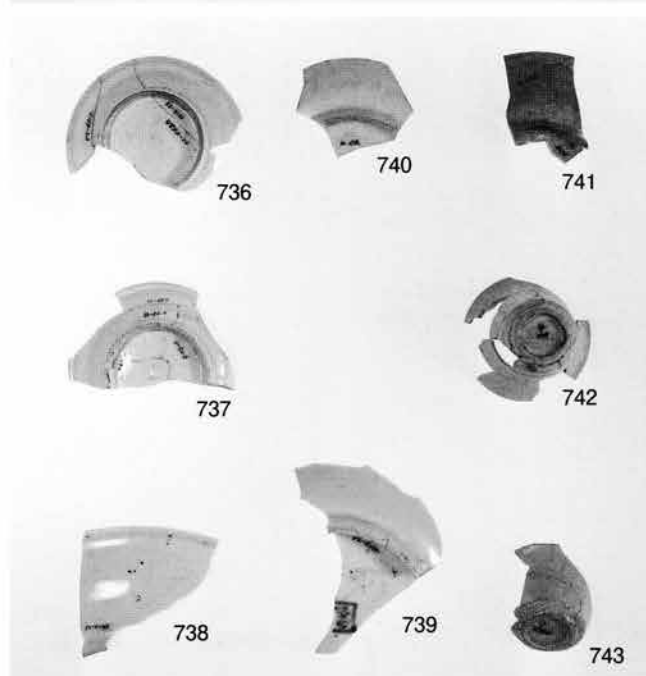
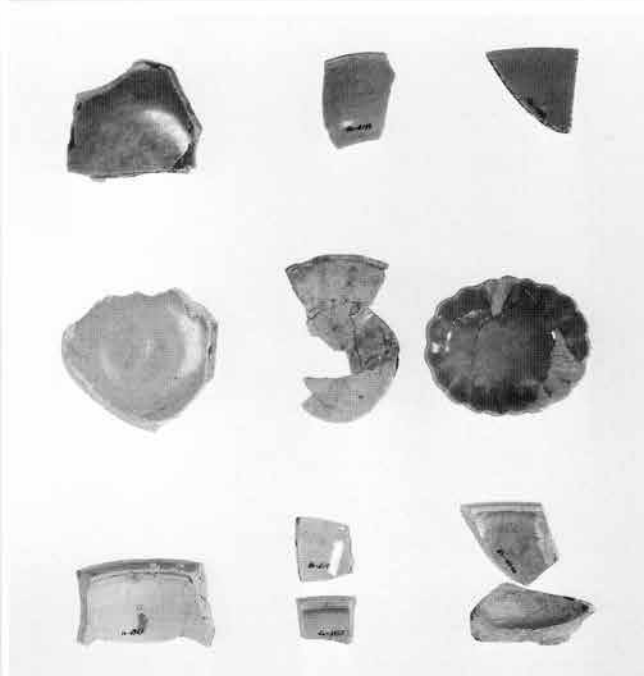
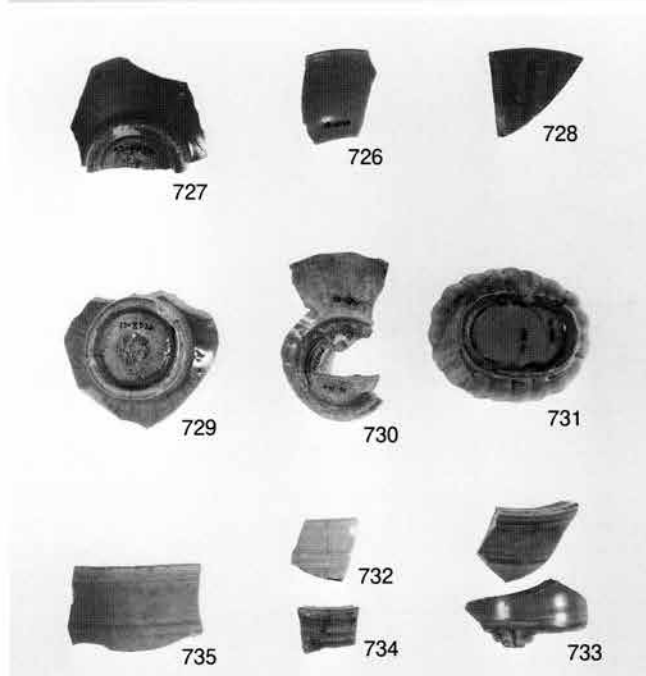
区画52-8 播鉢702~704 土師質土器皿705~714 羽釜715 鉄釉碗716~718 鉄釉皿719 壺720

第54図 第52次調査出土遺物 (16)

区画52-8

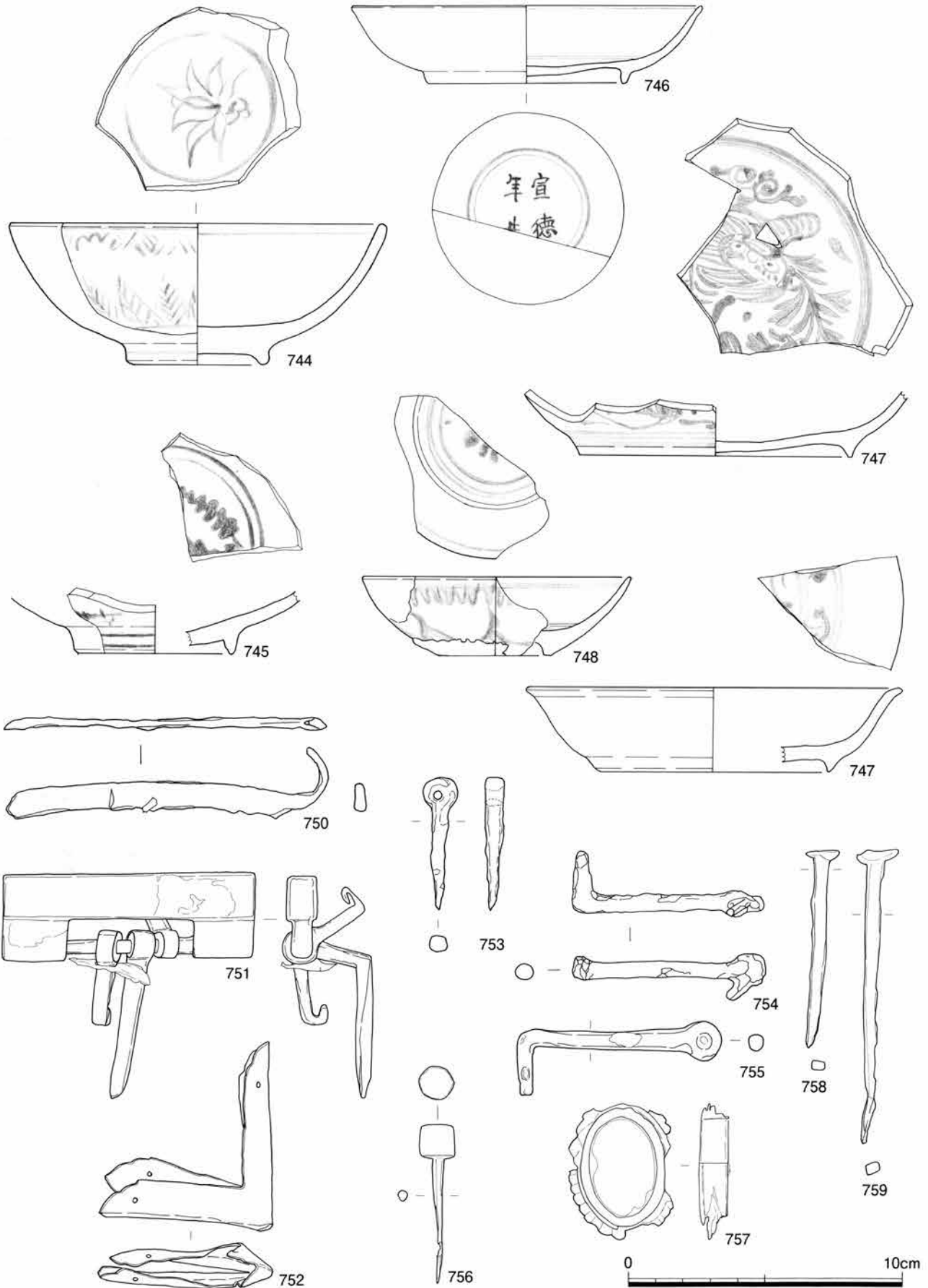


灰釉皿721~725 青磁碗726~729 菊皿730-731 香炉732~735 白磁皿736~741 坏742・743

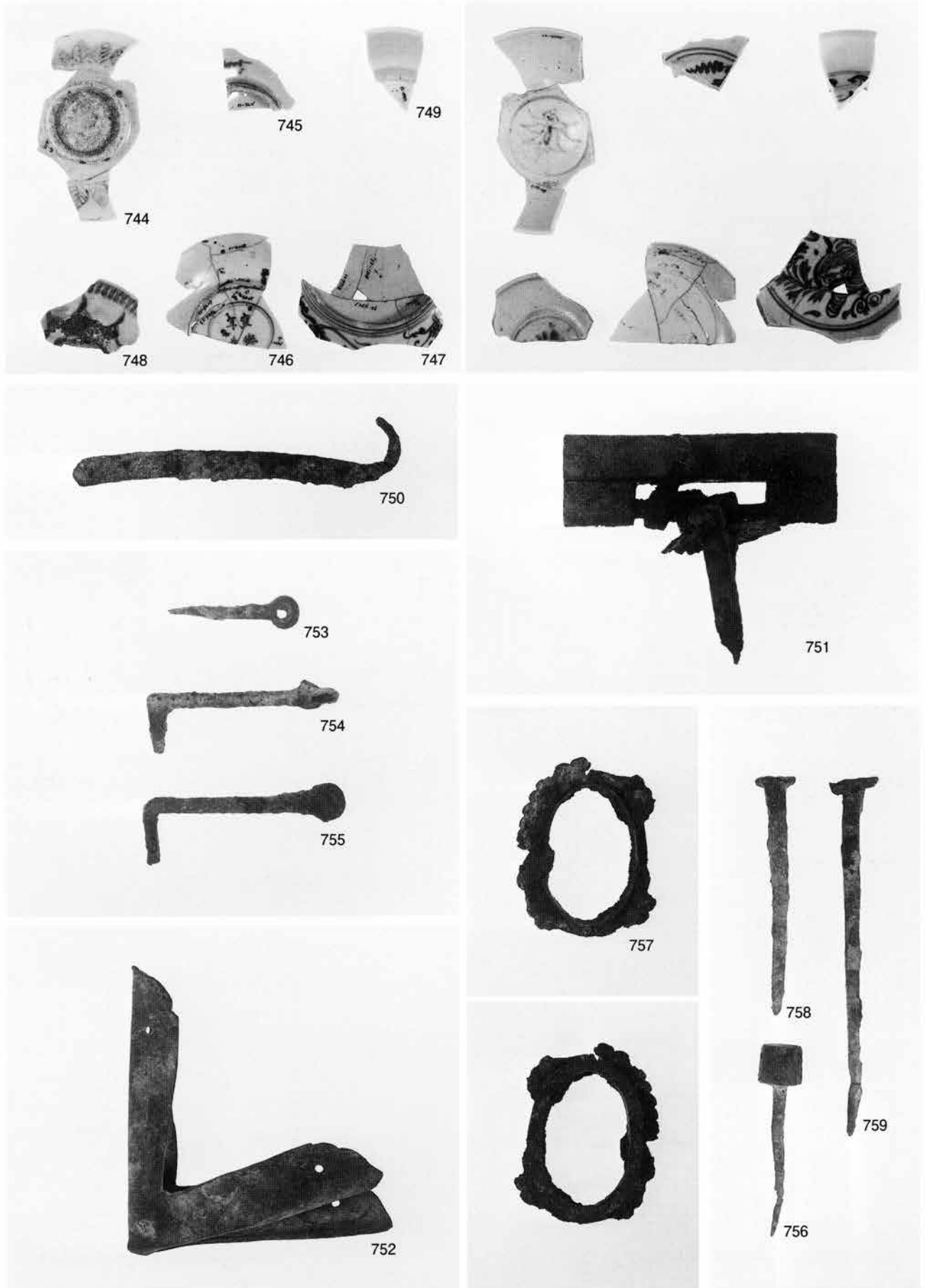


区画52-8 灰釉皿721~725 青磁碗726~729 菊皿730・731 香炉732~735 白磁皿736~741 坏742・743

区画52-8



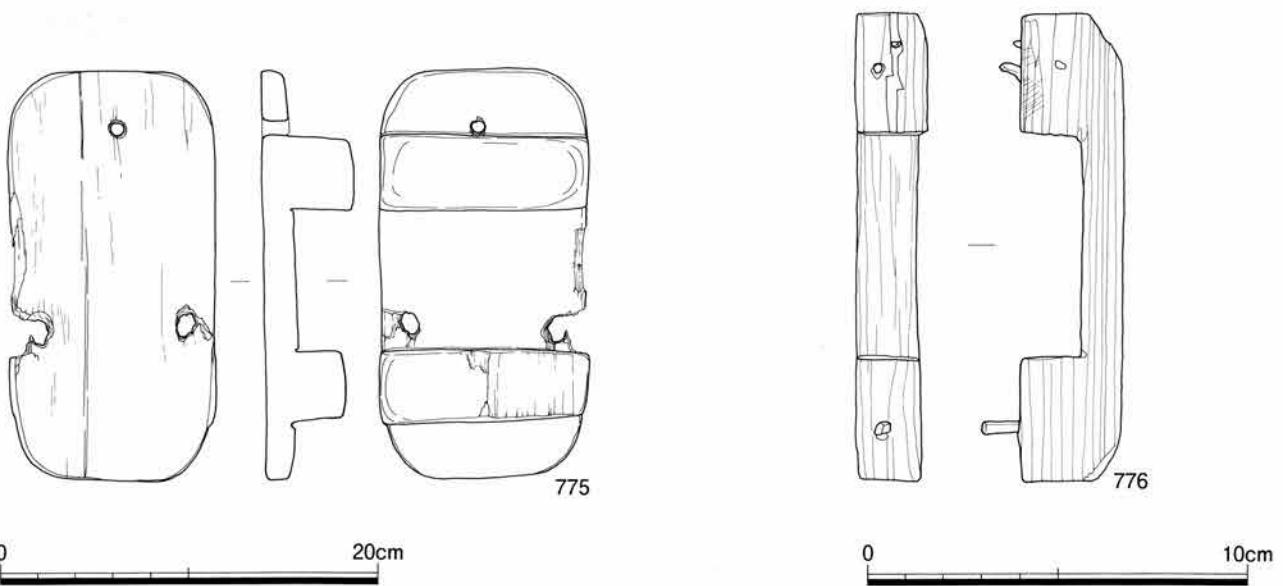
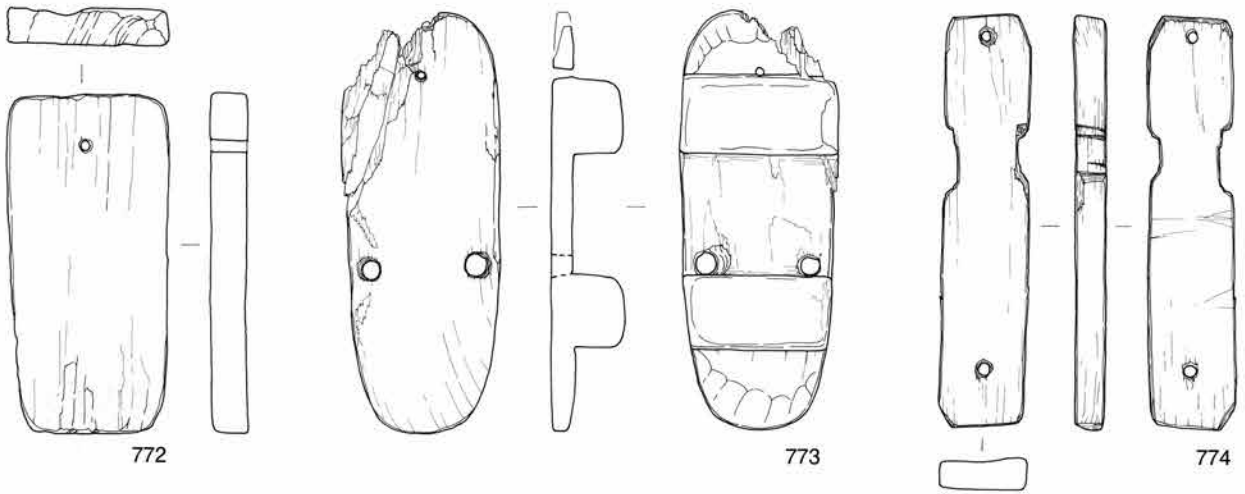
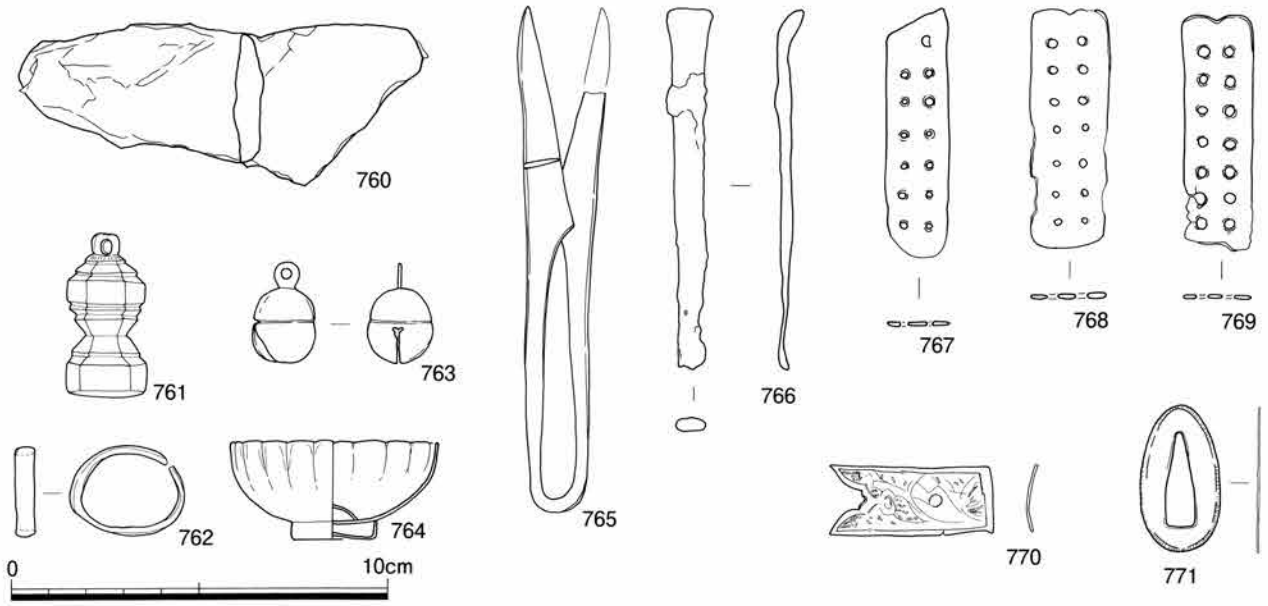
染付碗744・745 皿746～749 金属製品鉤状金属製品750 錠前751 隅金具752 壺金753 猿繫754・755
釘状鉄製品756 引手金具757 釘758・759



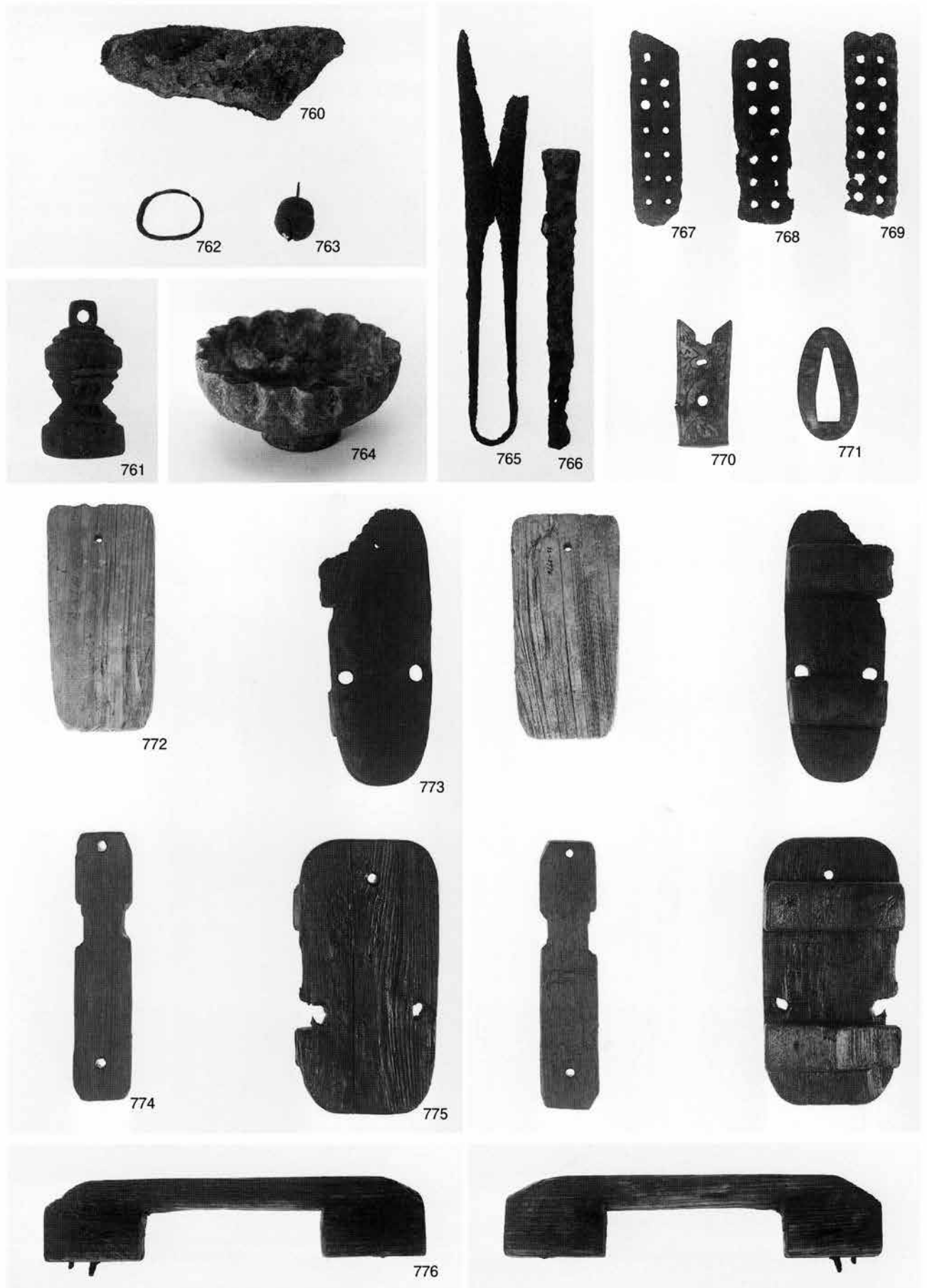
区画52-8 染付碗744・745 皿746～749 金属製品鉤状金属製品750 錠前751 隅金具752 壺金753 猿繫754・755
 釘状鉄製品756 引手金具757 釘758・759

第56図 第52次調査出土遺物 (18)

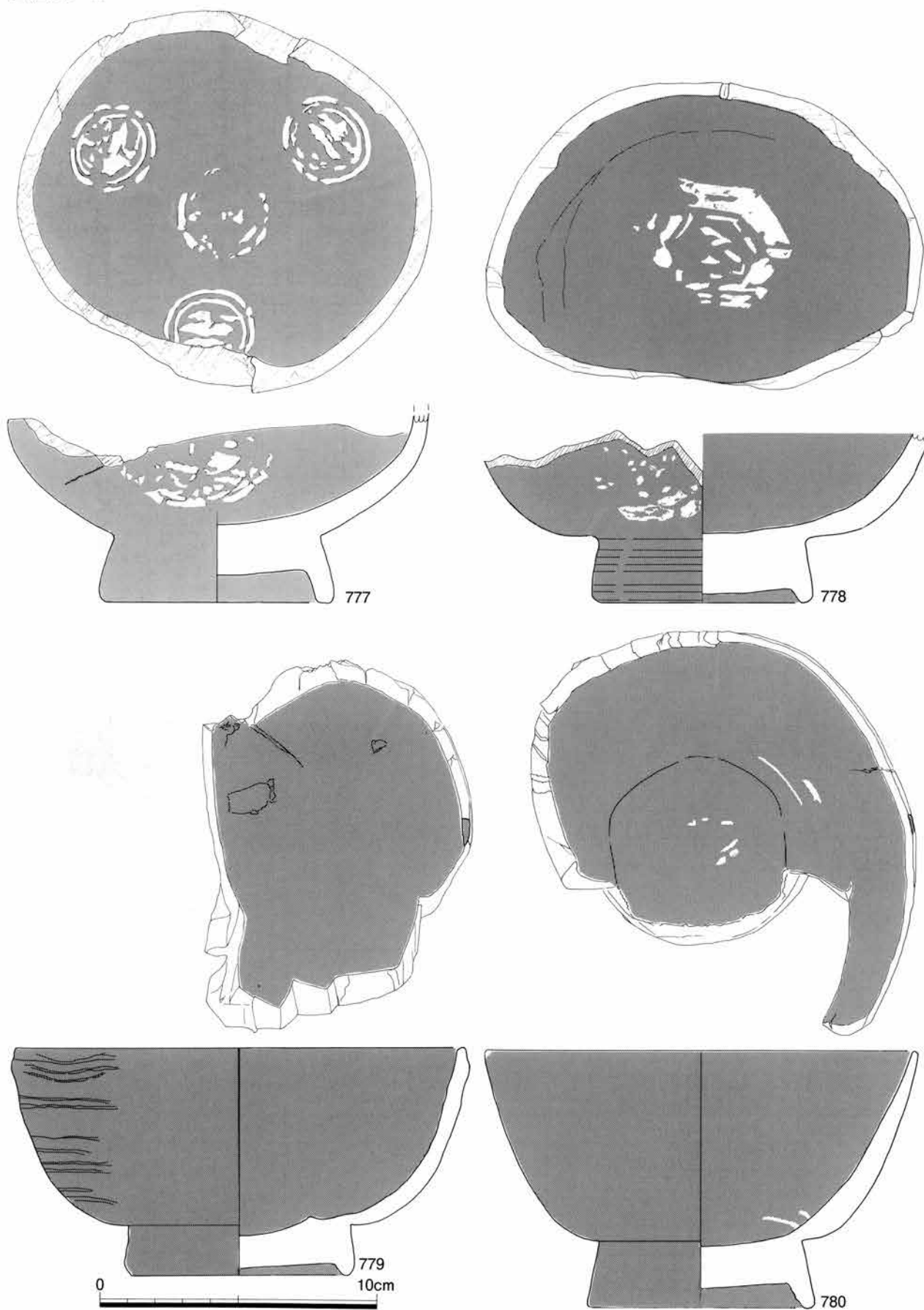
区画52-8



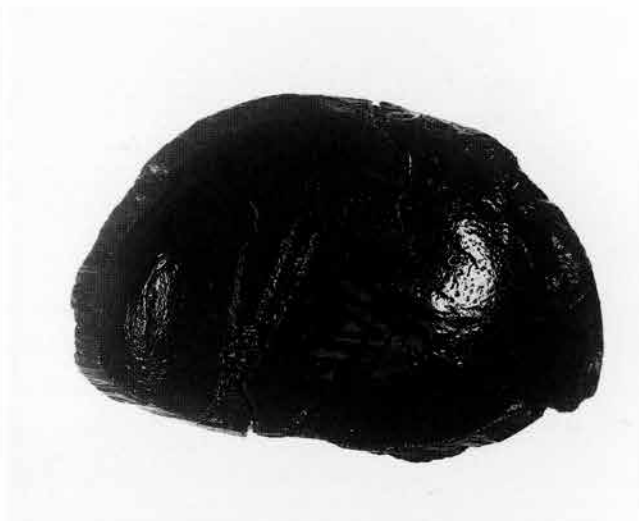
金属製品火打金760 錘761 責金具762 鈴763 菊皿764 鋏765 毛抜766 小札767~769 飾金具770 切羽771
木製品雪下駄772 連歯下駄773・775 草履下駄774 取手776



区画52-8 金属製品火打金760 錘761 賣金具762 鈴763 菊皿764 鋏765 毛抜766 小札767~769 飾金具770 切羽771
木製品雪下駄772 連歯下駄773・775 草履下駄774 取手776

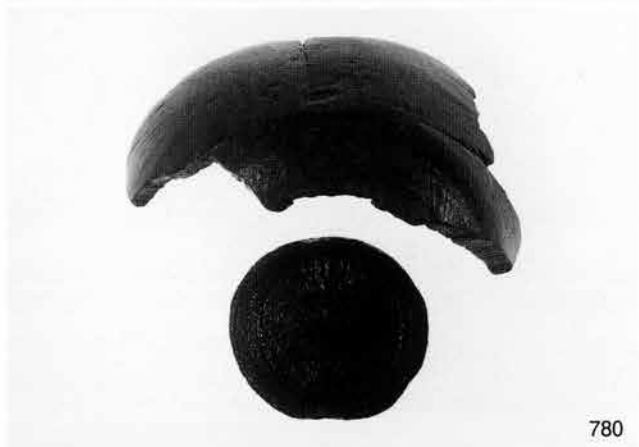
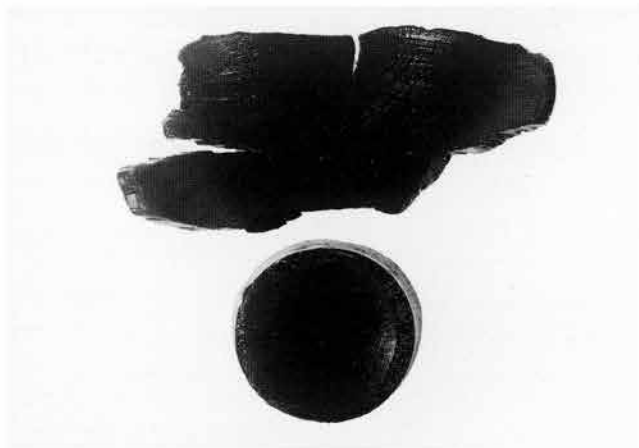


木製品黒漆椀777~780



777

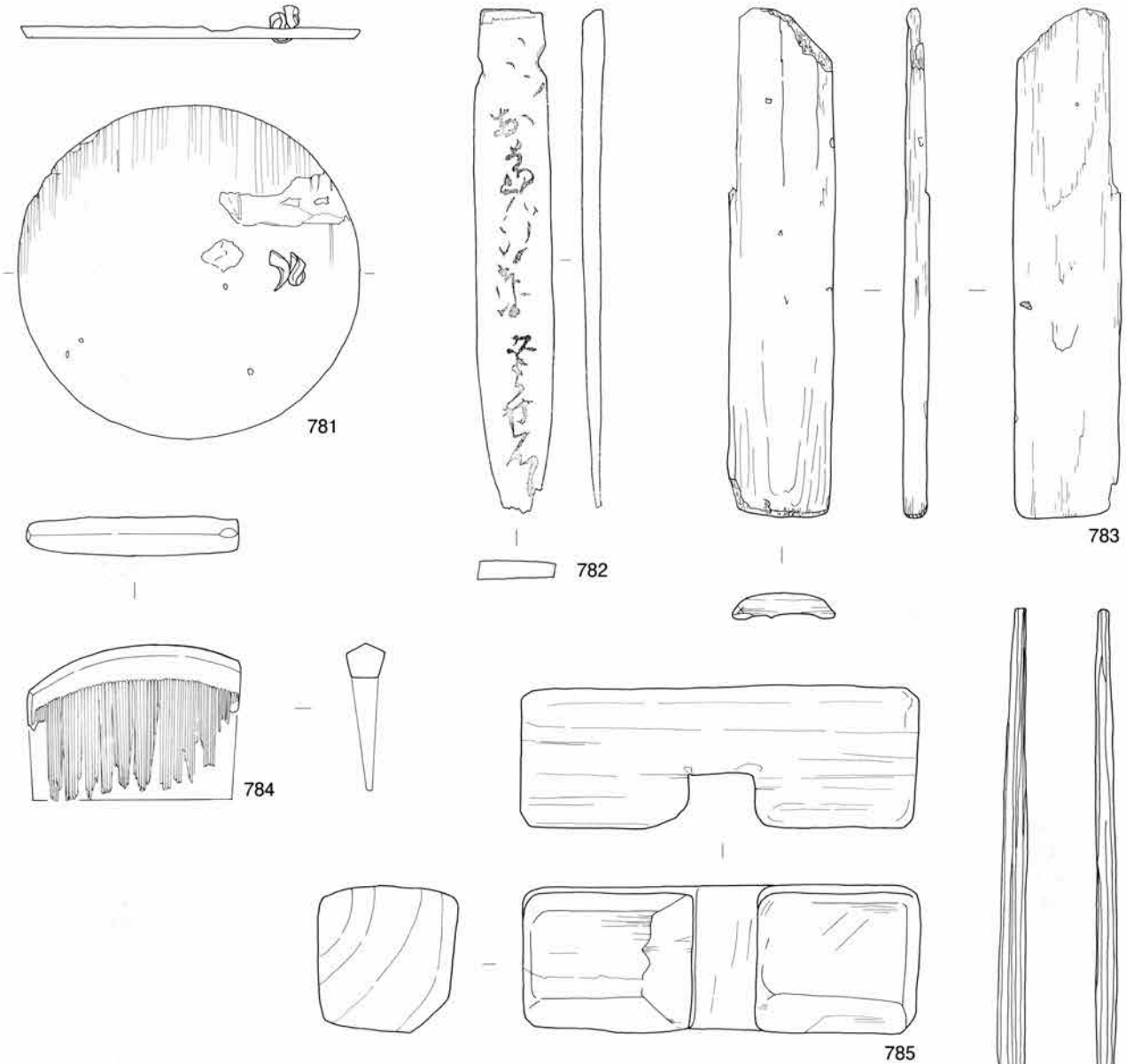
778



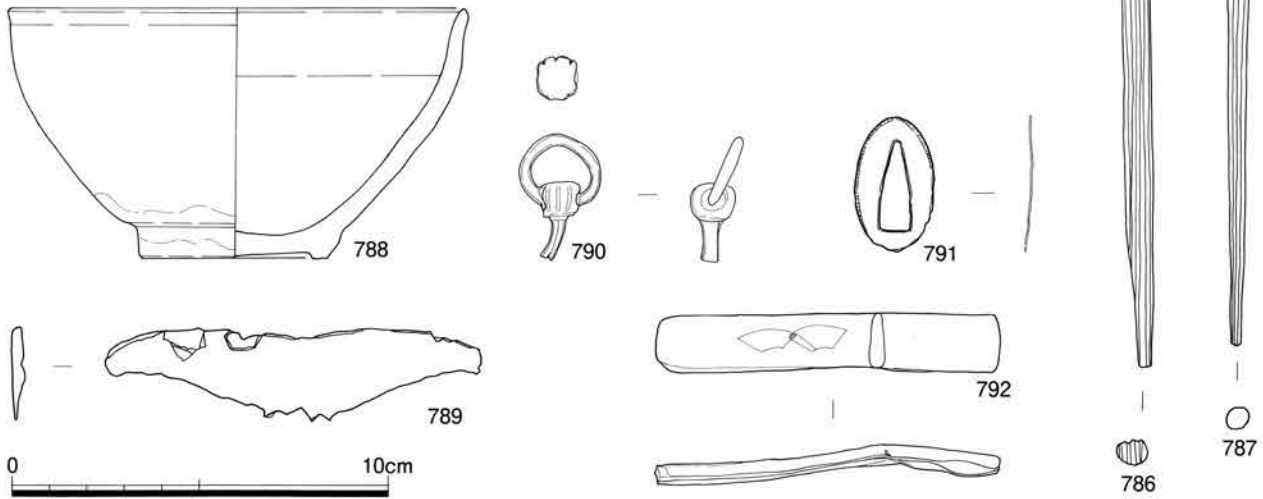
779

780

区画52-8



その他出土地の遺物



0 10cm

木製品曲物蓋781 木筒782 鞘783 櫛784 用途不明785 箸786・787
鉄釉碗788 金属製品火打金789 釧付金具790 切羽791 小柄792



区画52-8 木製品曲物蓋781 木筒782 鞘783 櫛784 用途不明785 箸786・787

その他出土の遺物 鉄釉碗788 金属製品火打金789 釧付金具790 切羽791 小柄792

IV 小 結

IV 小 結

第51・52次調査区の町割り

両調査区は吉野本地係りにある。東に一乗谷川が流れ、西は御茸山の麓で、「一乗谷古絵図」によれば「法万寺」があったとされる。北は奥間野地係・赤淵地係とつながり、これまでに発掘調査が終了している地区である。

赤淵地区から吉野本地区にかけての基本的な町割りは以下のようにになっている（挿図14）。

一乗谷川に沿うように、幅8mの南北方向の幹線道路がある。これに対して東西方向の道路が3本ほぼ直角に交わる。これら3本の東西道路の間隔は約106mで、35丈とみられる。なお、この幹線道路の通称は不明であるが、北の東西道路は足利義昭が朝倉館を訪問したときの辻固めの記録から「上殿の橋の通り」と称されていたと推定されている。

南北方向の大通りに面して幅0.3m程の溝で区画された地口6m～9m、奥行12m～15mの小区画の屋敷地が並ぶ。これらの小区画には間口3間×奥行4間程の家が建つ。家の中には井戸があり裏には24m²～40m²の裏庭があって、ここには便所が設置されている。これら家々の中には炬があってトリベや鉾漳が出土した家、越前焼の大甕が8～16個体2列に並べて設置されている家のほか、水晶の破片や数珠玉、桜の皮や薄いへぎ板が出土した家がある。このことからこれらの小区画の家々は職人や商人の家と推定している。すなわち、南北方向の幹線道路に沿って小区画の職人や商人の家々が、軒を連ねて建っていた都市的景観が想定される。また、井戸や便所があることや、となり屋敷とは溝ではっきり区画されていることから、ある武士の被官のような関係を有しているかどうかは別にして、ある程度独立した職人や商人だったと推定される。



挿図14 赤淵・奥間野・吉野本地区概念図

また、幹線道路に沿った小区画は町割が出来たときから3回程度の建て替えが認められるが、基本的には区画を変更することなく、嵩上げによって建て替えている。町割当初から商工業者の地区として造られたことがわかる。

これに対して第40次調査区においては、大通りに面した町屋の裏手にある小区画は、井戸や便所が共同になっていたり、屋敷を区画する溝が浅く最終時期だけだったりするなど、武家屋敷が分割されたと考えられる地区がある。同様に第51次調査区の51-3-12なども井戸や便所がない家もあり、後に小区画に分割された地区であろう。この場合は、溝がやや深いところから、やや早くに分割され、一乗谷が滅亡する間に建て替えられた家もある。

南北方向の幹線道路に面して立ち並ぶ町屋の背後に、これらの町屋を数軒合わせた程の500m²前後の屋敷地が並ぶ。これらの中には以前報告した第49次・50次調査で見られたように通りから見える表側や両脇は土堀で囲んでいるが、裏側はそうした施設がない。区画51-15の「医師の家」、52-7・8のように両脇のとなり屋敷との境界も溝があるだけで土堀を築いていない場合もある。こうした屋敷地は中級武家屋敷か有力職人・商人の家と推定されている。

赤淵・奥間野・吉野本地区の山裾には「サイゴ寺」をはじめ40次地区の寺院が存在する。一乗谷古絵図では「遊楽寺」や「西光寺」、「法万寺」などの寺院名も見え、さらに八地谷には「雲正寺」もあったとされ、この地区の山裾が近世における寺町的な所だったといえよう。

このように赤淵から吉野本地区にかけては、南北方向の幹線道路に沿って職人・商人の住む町屋地区、それと直交する東西方向の道路に面しては中級武家屋敷・「医師の家」か有力職人・商人の家、さらに山裾には寺院群と区割りされていたことがわかる。

医師の家

第51次調査区に『湯液本草』という医学書が出土したことから「医師の家」とされている区画がある。規模は地口14m×奥行33mあり、後に地口が4m広がって面積は500m²程である。東西方向の大通りに面したところに薬医門と土堀を設け、西側も大通りから10m分だけ土堀を設けている。内部は大きく3つに別れる。表通り側には東西4間×南北5間の建物が建つ。この建物と土堀との間には井戸と小さな石組を組み合わせた2m×8m程の小庭園が設けられていることから、診察室を含めた表向きの空間と考えられる。中ほどは石積遺構や越前焼大甕を設置した遺構があることから、この家の生活を支える日常雑舎が建つ空間である。奥にあたる南の空間には3間×4間ほどの建物があり、離れの建物であろうか。このように表向きの建物と内向きの建物あり、表向きの建物には庭園を設けるなど基本的には朝倉館の構成を踏襲しているといえよう。ただ屋敷の面積が狭く建てられる建物も限られているので、朝倉館では機能別に建てられていた建物が一つにまとまっている。また「医師の家」からは青白磁の梅瓶や鏝で修理した青磁花生など武士としてのステータスシンボリックな陶磁器類が出土している。

こうした屋敷の規模と屋敷内の構成から、医師の家を含めて800m²～400m²の屋敷について考えてみたい。平井～河合殿地区にかけては1,200m²を越える敷地を有し、幅が広くしっかりとした土堀で屋敷を囲む有力な武家屋敷が多く、ひとクラス小さい規模の屋敷は平井～河合殿地区には少ない。これに対し赤淵～吉野本地区では寺院を除き大規模な武家屋敷はなく医師の家のような面積にして500m²ほどの屋敷が多く見られる。例えばまた、区画44-1や区画44-2のように屋敷地はほぼ同じ面積ながら土堀を持たない家もある（以下区画という記載を省略する）。49-1や50-1の場合、それぞれ地口20m×

20m・面積400m²、地口30m×奥行20m・面積600m²で、表通りに面して土塀を有し、その中ほどに薬医門形式の門を開いている。49-1は東側が路地となっているが、こちらには土塀をめぐらせていない。西側は50-1と土塀を共有しているが、49-1側に溝があって、土塀は50-1が築いたものである。50-1も表通りと両側の3方に土塀を巡らせているが、裏の屋敷の境には土塀はない。49-1の屋敷は6間×3間半の主屋と3間×2間の蔵のほか、小規模な日常雑舎からなるようである。50-1は削平されていて不明な点が多いが、主屋の他に2間半×2間半の蔵がある。52-8も通りに面して土塀と門を設け、敷地面積も660m²とこれらの中では大きい。主屋は不明ながら2間四方の蔵を有する。これらの屋敷は面積が800m²～400m²と大規模な武家屋敷と比較するとかなり小規模ではあるが、前面に土塀と門があり、内部構成は主屋と蔵に雑舎からなる屋敷は、中級の武士の屋敷と見てよいだろう。とすれば、医師は身分的に中級武士と同格とみなされていたことがわかる。朝倉氏に関連した医師では三段崎氏や大月氏が知られるが、いずれも武士の出自である。

これに対して52-7は通りに面して土塀と門を設けてはいるが、面積が360m²と狭い。また、51-4は面積が550m²と中級武家屋敷と変わらないが、大通りに面せず、町屋1軒分奥に下がっており土塀や門を持たない。内部の建物構成は不明な点が多いが、かなりしっかりした建物があり、日常雑舎も別に建っている。ただ蔵と思われる建物は見当たらない。このような屋敷地はどのように位置づければよいのだろうか。

同じく、門と土塀を持たないがこれらとほぼ同面積の屋敷が44次調査で2軒見つかっている。両屋敷は赤淵地区の南北道路に面して立ち並ぶ町屋群の裏手に位置し、山裾の寺院へ行くための路地に面している。44-10は面積530m²あり、4間半×3間半の建物ともう1棟建っていたようである。44-11は480m²あり、9間×4間の建物が建っていたとされる。ただ、両屋敷とも土塀と門を持たず、蔵が見当たらない点が、49～52次調査で見られた同規模の屋敷群と異なる。やや時代は下がるが、堺では蔵のある商家がみつかり、一乗谷でも蔵を持つ商家があっても不思議ではない。しかし土塀については少なくとも前面には不要であろう。44-10からは未使用の砥石と墨壺の滑車が出土したことから大工の棟梁的な人物の屋敷と想定され、また、44-11からは火縄銃の部品と鉛の弾丸、鉛の地金1貫目分が出土したことから、鉄砲に関連した職人の家ではないかと想定する向きもある。いずれにしても武家屋敷ではないと考えられている。こうしたことから二つの屋敷は有力商人か職人頭的な屋敷であろう。

医師の家出土の遺物群

医師の家から青白磁梅瓶をはじめ青磁盤、青磁片口、白磁印花文皿などが出土している。その屋敷から出土しているからといって必ずしもその屋敷のものだったとは限らないが、『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XVII』で分析しているように、医師の家から北に広がる焼土層からその大半が出土していることから、医師の家のものだったと考えてまず間違いのないといえる。

青白磁梅瓶は13世紀の製品であり、青磁片口や青磁鉢も13世紀の製品で、朝倉時代より300年前の片口青磁鉢と青磁下蕪花生には鏝で修理した痕がある。青磁碗「馬蝗絆」の例を引くまでもなく優品と意識された品々である。51次調査出土の製品はやや質が劣るかもしれないが、朝倉館で出土したそれらの破片と同じ組み合わせである。他の武家屋敷の場合は、滅亡後拡散されて遺物がまとまって出土することは少ないが、やはり古い時代の青磁鉢や青磁花生などが出土する。そこには共通した意識が隠されているようである。こうした品々は威信財とされ、遠く鎌倉時代から、室町幕府の『君台観左右帳記』を経て引き継がれてきた価値観である¹⁾。そしてそれは、中級武家屋敷と同等と考えられる医者に

も浸透していることがわかる。ただ身分が下がれば威信財というよりも、「福富草子」の裕福になった場面に描かれている青磁盤や天目茶碗をはじめとする茶道具のように、裕福になったとき持つべき品々という意識に近づいているのではないだろうか。

52次調査出土の銅銭

第52次調査の52-7の区画から3,784枚の銅銭が出土した。小児大の石を貼り付けた直径0.5m、深さ0.4mほどの穴から出土し、穴の上には底を抜いた笏谷石の鉢を被せてあった。さらに越前焼の播鉢で蓋がしてあった。この施設のすぐ脇に礎石があったことから、床下に隠してあったものと考えられ、転用した笏谷製の鉢を通して出し入れできるようになっていた。この施設は一乗谷最終時期まで存続したと考えられ、やや想像を加えるならば一乗谷滅亡時の混乱の中で忘れ去られたのではないだろうか。

銭種は表4~7のとおりで、北宋銭が多い点は一乗谷の出土銭傾向と一致する。しかし第52次調査埋蔵銭の中に永楽通寶が169枚あり、永楽通寶の割合が高い点が少し異なっている。1989年の時点での計数ではあるが、永楽通寶の割合は一乗谷出土銭全体で1.56%なのに対して4.47%ある。また一乗谷全体で出土した永楽通寶は420枚なので、第52次調査出土のそれは40.2%を占める。また、第57次調査で井戸底16,594枚の銅銭が出土している。この場合も一乗谷滅亡時に井戸に投げ込まれたと推測しているが、永楽通寶は48枚しかない。このように第52次調査出土の永楽通寶は特殊な存在であることがわかる。なお、当初永楽通寶は西日本では価値の低い銭とされ大内氏の撰銭令のように撰銭の対象となり、逆に東国では価値の高い銭とされた。

なお永井久美男氏の調査によれば、第57次調査出土の銅銭の中には340枚の本邦模鑄銭が含まれているが、この埋蔵銭の中には模鑄銭を含んでいないとのことである⁽²⁾。

他にまとめて出土したものとしては、安養寺跡の境内から280枚、「サイゴ寺」境内の溝の中から194枚、第29次調査でSS975道路上の焼土の中から531枚、いずれも差銭状態かそれに近い状態で出土したものである。他に第35次調査で町屋の井戸の中から410枚がまとめて出土した。合計は21,792枚である。他に、各調査地区からバラバラに出土したものは5,106枚ある⁽³⁾。まとめて出土したものとバラバラに出土したものの各銅銭の種類別の割合はほぼ同じである。大きく違うのは判読不明のもので、まとめて出土したものは21,792枚の内45枚(0.2%)なのに対して、バラバラに出土したものは5045枚の内1,154枚(22.9%)ある。こうした違いは、まとまった銅銭の場合良銭を意識して集めていたことの結果であろうか。それともバラ銭の場合は、錆びやすい環境に置かれていたために、傷みが激しく判読不明の銅銭が多くなったのであろうか。また、まとまった出土銭、特に第52次と第57次の埋蔵銭は洪武通寶、永楽通寶など明銭の割合が高い。この点も撰銭と関係あるのだろうか。

越前の場合、真珠庵文書によれば永禄8年(1565)から永禄12年(1569)のわずか4年の間にコメの値段が3倍に上がっている。同じく永禄12年の真珠庵文書には悪銭という言葉が見え、それは(良銭)の1/3の価値であった⁽⁴⁾。こうしたことが銅銭の出土状況にも表れているのだろうか。

註

- (1) 小野正敏『戦国城下町の考古学』講談社1997年発行
- (2) 永井久美男「16世紀後半における流通銭の変化」『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要2000』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館2001年発行
- (3) 月輪 泰「朝倉氏遺跡出土の銅銭について」『朝倉氏遺跡資料館紀要1989』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館1990年発行
- (4) 「真珠庵文書」『福井市史』資料編2 福井市1989年発行

報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせきはくつちようさほうこく
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 発掘調査報告X
副書名	第51・52次調査
シリーズ番	10
編集者名	佐藤 圭
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL.0776-41-2301
発行年月日	平成22年3月26日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° / ′ ″	° / ′ ″		
第51次調査	福井市城戸ノ内町 字吉野本	18210	史-31	35° 59′ 56″	136° 17′ 53″	1,720㎡	環境整備 に伴う発 掘調査
第52次調査	福井市城戸ノ内町 字吉野本	18210	史-31	35° 59′ 57″	136° 17′ 52″	1,930㎡	同上

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第51次調査	武家屋敷 町屋	15・16世紀	道路、溝、土塁、礎石 建物、門、井戸、石積 施設、大甕設置遺構	越前焼、土師質皿、鉄釉碗、 灰釉碗、青磁碗皿、白磁皿、 染付碗皿、金属製品、石製品、 木製品	屋敷跡から中国陶 磁の優品や匙等と 共に『湯液本草』 の写本断簡が出土
第52次調査	武家屋敷 町屋	15・16世紀	道路、土塁、石垣、溝、 礎石建物、井戸、石積 施設、門	越前焼甕・壺・播鉢、土師質 皿、鉄釉、灰釉、瓦質、青磁・ 白磁・染付、金属製品、石製品、 木製品	遺構に伴って銅銭 が一括出土。墨書 杓子、神像など特 異な木製品の出土

平成22年3月10日 印刷

平成22年3月26日 発行

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告X

第51・52次調査

編 集 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

発 行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
福 井 市 安 波 賀 町 4 - 10

印 刷 白 崎 印 刷 株 式 会 社